

筑波大学博士(国際日本研究)学位請求論文

日本語とアラビア語の断り発話を正当化するメ

カニズムについて

—異文化間語用論と配慮表現の観点から—

LINA ABDELHAMEED IBRAHIM ALI

2015 年度

目次

第1章 研究背景と目的	1
1.1 本研究の位置づけと研究目的.....	1
1.2 問題の所在と先行研究の問題点	5
1.2.1 先行研究の問題点①	6
1.2.2 先行研究の問題点②	8
1.2.3 先行研究の問題点③	10
1.3 本研究の理論的枠組み.....	11
1.3.1 Grice (1975)	12
1.3.2 Lakoff (1973)	19
1.3.3 Leech (1983)	20
1.3.3.1 Maxim of Tact (気配りの原則)	21
1.3.3.2 Maxim of Generosity (寛大性の原則)	22
1.3.3.3 Maxim of Approbation (是認の原則)	23
1.3.3.4 Maxim of Modesty (謙遜の原則)	23
1.3.3.5 Maxim of Agreement (一致の原則)	24
1.3.3.6 Maxim of Sympathy (共感の原則)	25
1.3.4 Brown and Levinson (1987).....	26
1.3.4.1 FTA 行為.....	26
1.3.4.2 ポライトネス・ストラテジー	29
1.3.5 山岡・牧原・小野 (2010)	32
1.3.6 異文化間コミュニケーションについて.....	33
1.3.6.1 Hall (1976)	34
1.3.6.2 コミュニケーション様式について	36
1.4 本論文の構成.....	39

第2章 研究方法	41
2.1 本研究の考え方	41
2.1.1 本研究における「断り」とは	41
2.1.2 本研究における正当化のメカニズムとは	42
2.1.3 本研究におけるポライトネスの捉え方	43
2.1.4 本研究のオリジナリティ	46
2.2 研究課題	47
2.3 研究方法	48
2.4 本研究の意義	51
第3章 異文化間語用論の観点から見た断り発話	53
3.1 本章の目的	53
3.2 文化とコンテキストについて	54
3.3 高コンテキスト文化と低コンテキスト文化の違い	54
3.4 本研究における高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の違い	56
3.5 日本語とアラビア語のコミュニケーション様式の差異について	60
3.6 コミュニケーション様式の種類	64
3.7 コミュニケーション様式と断り発話との関連	65
3.7.1 八島・久保 (2012)	65
3.7.1.1 自己開示のコミュニケーション	65
3.7.1.2 高文脈型と低文脈型コミュニケーション・スタイル	67
3.7.1.3 直接的と間接的コミュニケーション・スタイル	68
3.7.2 八代・町・小池・吉田 (2009)	70
3.7.2.1 ①螺旋的-直線的	70
3.7.2.2 ②飛び石的-石畳的	72
3.7.2.3 ③人間関係重視-情報重視	74

3.8 コミュニケーション様式に見られる断り談話の特徴.....	76
3.9 人間関係を考慮したコミュニケーション様式の異なり	77
3.10 コミュニケーション様式の差異とポライトネスとの関連について	82
3.11 本章のまとめ.....	84
第4章 配慮表現の観点から見た断り発話.....	86
4.1 本章の目的	86
4.2 副詞の定義と分類.....	87
4.3 調査概要	89
4.3.1 調査方法及び調査対象者	89
4.3.2 意識調査ⅠとⅡの内容.....	89
4.3.3 フォローアップインタビュー調査.....	90
4.4 調査結果と考察.....	91
4.4.1 意識調査Ⅰの結果.....	91
4.4.2 意識調査Ⅱの結果.....	92
4.4.3 表現選択の判断要因	93
4.4.3.1 場面の異なり	94
4.4.3.1.1 アラビア語における勧誘場面の異なり.....	94
4.4.3.1.2 アラビア語における依頼場面の異なり.....	95
4.4.3.1.3 日本語における勧誘場面の異なり.....	96
4.4.3.1.4 日本語における依頼場面の異なり.....	97
4.4.3.2 断りにくさの異なり.....	99
4.4.3.3 性差による異なり	102
4.4.3.3.1 アラビア語に見られる性差.....	102
4.4.3.3.2 日本語に見られる性差.....	104
4.5 フォローアップインタビュー調査結果	106
4.6 日本語母語話者の選択肢の理由について.....	107

4.7 調査結果の考察	108
4.8 日本語の「ちょっと」とアラビア語の「shwya」について	113
4.9 助動詞「lazem」について	119
4.9.1 義務的モダリティ	120
4.9.2 意識調査Ⅲの内容	121
4.9.3 フォローアップインタビュー調査	121
4.9.4 意識調査Ⅲの結果	122
4.9.5 フォローアップインタビュー調査結果	123
4.10 本章のまとめ	123
第5章 断り発話に見られる配慮表現の原則について	125
5.1 本章の目的	125
5.2 意味公式について	126
5.3 ポライトネスと配慮表現について	132
5.3.1 Leech のポライトネス原則	132
5.3.2 山岡・牧原・小野（2010）の配慮表現の原理	133
5.4 日本語のポライトネスと配慮表現の原則について	133
5.4.1 「謝罪」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	133
5.4.2 「直接的断り」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	134
5.4.3 「理由」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	135
5.4.4 「代案提示」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	138
5.4.5 「共感」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	141
5.4.6 「関係維持」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	144
5.4.7 「非難」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	146
5.5 アラビア語のポライトネスと配慮表現の原則について	149
5.5.1 「謝罪」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	149
5.5.2 「直接的断り」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	150

5.5.3 「理由」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	151
5.5.4 「代案提示」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	155
5.5.5 「共感」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	158
5.5.6 「関係維持」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	162
5.5.7 「非難」におけるポライトネスと配慮表現の原則について	164
5.6 本章のまとめ	168
第6章 中間言語語用論の観点から見た断り発話	170
6.1 本章の目的	170
6.2 語用論的転移とは	171
6.3 第2言語学習者の断り発話に見られる転移について	172
6.4 アラビア語母語とする日本語学習者の断り発話	173
6.5 学習者の断り発話に見られるコミュニケーション様式	178
6.6 インタビュー調査	186
6.7 日本語教材における断り発話の問題点	187
6.8 日本語学習者が用いる配慮表現の原理について	193
6.8.1 意識調査IV	193
6.8.2 調査対象者情報	194
6.8.3 意識調査IVの結果と考察	194
6.9 本章のまとめ	199
第7章 本論文のまとめと今後の課題	201
7.1 本論文のまとめ	201
7.2 今後の課題	204

参考文献	209
資料Ⅰ 談話完成テスト（日本語）	218
資料Ⅱ 談話完成テスト（アラビア語）	224
資料Ⅲ 意識調査ⅠとⅡ	229
資料Ⅳ 意識調査Ⅲ	233
資料Ⅴ ロールプレイカード	237
資料Ⅵ 意識調査Ⅳ	241
資料Ⅶ (BTSJ)の文字化記号	243
資料Ⅷ 意識調査Ⅰの結果（アラビア語）	244
資料Ⅸ 意識調査Ⅱの結果（日本語）	244
資料Ⅹ 意識調査Ⅲの結果（アラビア語）	244
資料Ⅺ アラビア語文字表記	245
資料Ⅻ 既刊論文及び学会発表との関連	246

第1章 研究背景と目的

1.1 本研究の位置づけと研究目的

第2言語を学習する過程で、目標言語を用いて、良好な人間関係を築けるよう、適切な表現形式や適切な発話を行うことは、文法や文型と同様に重要だが、習得上難しい問題である。特に、学習者と母語話者との会話では、学習者が文法的に誤用を犯しても、伝達情報には支障がない限り、ある程度許容されるが、語用論¹における人間関係上不適切な表現の選択が誤用とは言えなくても、コミュニケーション上では誤解や摩擦をもたらす原因の1つ、そして相手への偏見にもつながる場合もある。学習者にとって、語用論におけるポライトネスに関わる現象は習得しにくいいため、学習者の問題点を減らし、解決法を見つ出すことの重要性は言うまでもない。そこで、本研究では、ポライトネスと密接な関係にある「断り」の言語行動を取り上げる。

「断り」とは、「聞き手によって、提案された行為を拒否する発話行為」であり、相手に不快な思いをさせないためには、高度なコミュニケーション能力（近藤 2009:79）や、高度な語用論的能力を必要とする（堀田・堀江 2012:1）。また、断りの発話行為は、「他の発話行為より人間関係が強く絡んでおり、断る側は相手との諸関係である「親疎関係」、「年齢層の差」、「発話内容」などをより慎重に考慮し断らなければならない」（権 2007:343）。

同じ文化背景を持つ会話参与者同士の場合には、聞き手は話し手の発話を容易に読み取ることができるが、異なる文化背景を持つ会話参与者同士の場合、話し手の意図が聞き手に正しく伝わらないことが多く見られる。そこで、第2言語学習者にとって、目標言語そのものだけでなく、言語背景にある異文化も理解する能力、すなわち語用論的能力における発語内能力²と社会言語学的能力³を身につけることが重要である。特に、代表的な高コンテキスト文化⁴である日本人の会話では、明示化された言語表現より、コンテキストに埋められた発話意図を互いに読み取ることの方が重視されるため、聞き手の推測力が必要で

¹ 語用論とは、「言語学の諸部門のなかで、発話の効力が発生するメカニズムを探求する部門である」（山岡・牧原・小野 2010:11）

² 言葉の表面的意味の背後にある言語使用者の意図を理解し、謝罪、依頼、断りなど様々な行為を適切に遂行する能力である（近藤 2009:74）。

³ 言葉の持つ社会文化的意味や機能を理解し、状況や聞き手に合わせた適切な話し方ができる能力のことである（近藤 2009:74）。

⁴ 高コンテキスト文化・言語とは、状況に埋められた情報や、人々が前提として共有している知識への依存度が高いものであり、言葉が使われる割合が少ない（八島・久保 2012、石井・北山 2004）。

あるが、それは異文化背景を持つ日本語学習者にとって、日本語母語話者との会話で負担が大きく感じられる原因の1つで、聞き手が話し手の意図を予測しなければ、発話が理解できないということである。日本人は「はっきりしていない」、「曖昧だ」と言ったステレオタイプ⁵をよく耳にする。実際は、日本語のコミュニケーションの中では、話し手はできる限り明確かつ直接的に意図を伝達することを避ける傾向があり、特に相手のフェイスを侵害する危険性のある断り発話⁶において、以下のような発話⁶が見られる。

- (1) ごめん、今日はちょっと…。
- (2) すみません、用事があるので…。

上記のような間接的な断り発話または、文が最後まで完成していない談話「言いさし文」などは、母語話者同士であれば、聞き手が話し手の意図する断りを読み取れるのに対し、日本語学習者の場合は、「ちょっと…何??⁷」と疑問を感じたり、「用事があるので…。」と言われれば、「結論は…??」のように間接的な断りが理解しにくく、誤解が生じる可能性が高い。このような発話の種類が学習者にとって「理解しにくい」「曖昧だ」「はっきりしていない」と指摘した研究（朴 2012、金 2011）は数多くある。特に、学習者の母語が目標言語と大きく異なる場合、さらに習得の困難度が増すことが予想される。

例として、間接的な断りの発話（山岡・牧原・小野 2010 より借用）と、エジプト方言アラビア語⁸（以下、アラビア語）母語話者及び、アラビア語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）の断り発話を比較する。

⁵ ステレオタイプとは、先入観を反映した固定概念である（谷口 2006:21）。

⁶ 筆者が断りに関する談話完成テストで得られた日本語母語話者の発話例である。

⁷ ここで使う「?」とは、聞き手が話し手の発話に対して疑問を感じて、発話意図を読み取れないことを意味する。

⁸ アラビア語はアラブ諸国 21 か国、約 1 億 5 千万人の母国語であり、世界の主要言語の 1 つである。また、アラビア語は、言語学的にはセム語族の 1 つで、北アラビアにおいて西暦 4 世紀ごろに出来上がった（本田 1993:14）。また、アラビア語は、フスハーとアーンミーヤに大別される。フスハーは、しっかりとした文法体系に基づいた読み書きの正則アラビア語であり、アーンミーヤは人々が私的な生活空間で用いる民衆言語で、文法的にきちんと説明することが困難な場合がある。アーンミーヤは、大別すれば、北アフリカ方言、エジプト方言、アラビア半島方言、シリア方言、イラク方言などとなる（新妻 2009:11）。本研究では扱うアラビア語は、エジプト方言アラビア語であり、エジプトにおいて日常生活で使われている口語のアーンミーヤである。

- (3) A ラーメン食べに行かない。
B さっぱりしたものがいいんだ。
A じゃあ、うどんにしようか。

(山岡・牧原・小野 2010:54)

上記の例文では、聞き手の認知には「ラーメンはさっぱりしていない」という情報または、前提推意⁹がなければ、Aの応答はできないはずである。言い換えると、帰結推意¹⁰が達成できないと言える。つまり、日本語学習者が上記のような発話が理解できない原因には、目標言語の文化背景に関する知識不足があると考えられる。

「話者と聴者の意識上にあるものが、同一の物、あるいは、想起しやすいものであれば、指示対象が明示的でなくてもコミュニケーションはスムーズになる」(山岡・牧原・小野 2010:56) ため、日本語では省略、不完全な情報であっても、話者の意図を、推論によってくんでいる。その推論を支えるものとして社会通念が挙げられる。学習者がこのような発話を理解できないとき、学習者の推論が働いていないわけではなく、関連性の度合いが低い場合、認知効果が得られない発話となる。上記と同様の状況での日本語学習者とアラビア語母語話者¹¹の応答を比較したい。

日本語学習者同士の会話 (ロールプレイ調査から¹²)

- (4) A 授業が終わったらみんなで寿司を食べに行くけど、一緒に行かない？
B いいえ、寿司全然好きじゃない。
A あ、そうですか。

⁹ 前提推意とは、話者の経験や、記憶によって構築された想定であり、聴者がそれを補って推意を解釈する (山岡・牧原・小野 2010:60)。

¹⁰ 帰結推意とは、前提推意を考慮した文脈から構築された想定であり、聴者がそれを補って、推意を解釈する (山岡・牧原・小野 2010:60)。

¹¹ アラビア語の文字表記は、先行研究によって、latin や IPA、ローマ字など様々であるため、同じ意味を示す言葉でも異なる表記が使われていることがよくある。本研究では、資料XIの表①中に示す latin 表記を用いるが、読みやすくするため、その中でいくつかの文字を資料XIの表②のように変更する。

¹² 筆者が学習者を対象に行ったロールプレイの詳細は、資料Vを参照されたい。

アラビア語母語話者の会話¹³（談話完成テスト調査から）

(5) A : Bād elmohadra matekhlās hanroh kolna nakol koshary, tygy māāna?

（授業が終わったらみんなでコシャリを食べに行くけど、一緒に行かない。）

B : ana msh āayz akol koshary. law pizza mashy.

（私はコシャリ食べたくない。ピザならいいけど。）

上記のようにアラビア語母語話者である日本語学習者の日本語でも、母語話者のアラビア語でも、断り手は直接的に自分の意図を表明していることが分かる。つまり、聴者の推論に頼らずに、むしろ自分自身から「断り」ということを理解してもらえるように完全な情報を与えることが分かる。このように、学習者の母語が、目標言語と大きく異なる場合、ポライトネスと関わる項目の習得が困難であると予測できる。

エジプトの日本語学習者、また日本語教師になっても、アラビア語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者、及び在エジプト日本企業に勤めている両言語母語話者の間では、断り場面での誤解や摩擦は頻繁に生じている。従って、学習者の問題点を解明して効率的な指導法を提案するため、まず、アラビア語と日本語両言語にはどのような異なりがあるのか、相手と良好な人間関係を維持するには、異なるストラテジーが使用されるのか、もしくは同一なのか、学習者の問題点が母語干渉によるものなのか、他に起因しているものがあるかなど様々な疑問に答えることが重要である。従って、本研究では日本語とアラビア語及びアラビア語を母語とする日本語学習者の断り発話について対照研究を行う。

リナ（2013a）は、断りの談話¹⁴構造に着目して日本語とアラビア語の断り発話を構成する要素に焦点を当てて比較した結果、両言語には大きな違いがあることを指摘している。しかし、人間関係上で誤解や摩擦を引き起こすのは、談話構造の違いのみではなく、表現形式の選択の問題や配慮表現のメカニズムの異なりも重要な要因であろう。つまり、ポライトネスを決定するのは談話構造に加え、表現形式の双方が相互作用な関係にあると思われる。具体的には、両言語母語話者の断り発話には、表現選択に違いがあることが観察され、そのうち事情を説明する際の「理由」の意味公式には「程度副詞」の選択の違いが見られる¹⁵。それらの表現の違いは、文化¹⁶の違い及び、それが反映する配慮のメカニズムの

¹³ 筆者訳

¹⁴ ここで言う談話とは、「相手に伝えたい内容を表す1つの言語単位で、文または発話より大きいまとまり。書かれたもの、話されたものの両者を含む」（近藤・小森 2012:145）。

¹⁵ 詳しくは、1.2.1 節で論じる。

違いによるものであろう。しかし、従来の先行研究では異文化間語用論及び、配慮表現¹⁷の観点から断り発話を分析した研究が非常に少なく、アラビア語については管見の限りない。また、日本語の断り発話について行われた先行研究はほぼ、Brown and Levinson (1987) (以下、B&L) のポライトネス理論の観点から分析が行われてきたが、表現方法に関わる配慮表現の観点からの分析は未だ不十分である。よって、これまでに提示されてきたポライトネスと配慮の原則では両言語の断り表現や配慮の在り方の違いなどについて解釈しきれないという問題がある。そこで、本研究では、両言語の背景にある文化的差異によるコミュニケーション様式の違いや、ポライトネスと配慮表現の観点から断り発話を取り上げ、「談話レベル」と「表現レベル」の双方における両言語の異なりを明らかにする。そして、アラビア語を母語とする日本語学習者及び日本語教材の問題点を探り、学習者の断り発話の問題を明らかにすることを最終目的とする。

談話レベルの分析において、断り発話全体的に見られる文化的差異とポライトネスと配慮表現の原則について論じる。一方、表現レベルの観点から、特に断り発話における様々な言語現象の中から、話し手(断り手)の事情説明に当たる「理由」の意味公式に着目し、分析を行う。その理由は、断り発話の中で、特に事情説明に当たる「理由」の意味公式が、発話者の断りを正当化するメカニズム¹⁸と強く関連すると思われ、両言語において大きな違いがあるからである。

1.2 問題の所在と先行研究の問題点

どの言語でも相手に不利益をもたらす行為を行わざるを得ないときには、対人関係を良好に保つため、相手に何らかの配慮を示す必要がある。特に、断りの言語行動は、Leech (1983) のポライトネスの原理の中で、「他者の利益を最大限にせよ」の原則に違反するものであるため、配慮表現の使用が不可欠となる。しかし、断り発話について、談話レベル(施 2005) や、スピーチレベル(村井 2009)、意味公式分類(伊藤 2005、権 2007、Nelson・ElBakary・AlBatal 2002、Nelson・Carson・ElBakary・Al Batal 2002)、など様々な観点から多くの研究がなされてきたが、先に述べたとおり配慮表現の立場から断

¹⁶ 文化とは、「あるコミュニティに属する人々が共有することば、行動様式、ものの感じ方やその表現の方法、考え方、価値観などをさす」(八島・久保 2012:12)。

¹⁷ 配慮表現とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現」(山岡・牧原・小野 2010:143) であるとする。

¹⁸ 本研究における正当化のメカニズムとは、第 2 章 2.1.2 節で詳しく論じる。

り発話を分析した研究は管見の限りまだ十分でなく、日本語とアラビア語の断り発話において未分類の配慮表現形式及び配慮表現の原則などがあると思われる。

以下で先行研究における断り発話の問題点について詳しく論じる。

1.2.1 先行研究の問題点①

1つ目の問題点は、Hall (1976) により、日本語とアラビア語は同様の高コンテクスト言語と指摘され、その後 Hall の主張に従い、同じことを指摘した研究が多い (アル・オマリ 2008、岡田 2006、Zahrana 1995)。しかし、先行研究 (Nelson・ElBakary・Al Batal 2002、Ghawi 1993、蒙 2010、Beebe et al.1990、リナ 2013a) では、アラビア語の断りの具体性と日本語の断りの曖昧性についての指摘が多く見られる。従って、両言語が果たして同様の高コンテクスト言語なのかを明らかにすることが重要である。また、アラビア語で見られる理由の具体性と日本語で見られる理由の曖昧性の原因について考察が不十分であり、両言語における「理由説明」で用いられる配慮表現の特徴の違いも不明である。

以下問題点①を詳しく論じる。

筆者が、日本語とアラビア語の断り発話を対照した結果、両言語において相手への配慮の示し方、また断りを正当化するメカニズムが異なることが明らかになった。アラビア語では理由の意味公式における、情報の具体性、程度性の高い表現、義務性を表す助動詞「lazem」など話し手の説明力が求められる表現方法が多用されるのに対し、日本語では内容的に曖昧な理由、程度性の低い副詞「ちょっと」、蓋然性を持つ表現形式、言いさし表現など聞き手の推測力が求められることが観察された。それらの表現形式が本来持つ機能に加え、聞き手に何らかの配慮を表す派生的機能も有するのではないかと考えられる。

例えば、以下談話完成テスト (以下、DCT) で得られた例文が挙げられる。例(6)~(8)は日本語母語話者、例(9)~(12)¹⁹は、アラビア語母語話者の断り発話である²⁰。

(6) (食事の誘い)

親しい友人：ごめん。ちょっと用事があるから行けないんだ。

¹⁹ アラビア語の例の日本語文は筆者による訳である。

²⁰ 例文中の「学生」は、「学生」から「先生」に対する断りで、「親しい友人」は、「親しい友人」に、「知り合い」は「知り合い」に対する断りである。ここでいう「知り合い」は親しくない知り合いのことを指す。

(7) (飲み物の購入依頼)

知り合い：ごめんなさい。今ちょっと手が離せなくて...

(8) (教材のコピー依頼)

学生：来週の水曜日ですか。ちょっと時間が取れないかもしれないんですが。

(9) (誕生パーティーの誘い)

知り合い：yom elgomăa ändy hagat ktyr gdan fa msh ha`dar.

(金曜日はとてもたくさんの用事があるので、できません。)

(10) (誕生パーティーの誘い)

親しい友人：yom elgomăa ändy măad mohm gdan fa msh ha`dar.

(金曜日は、とても大事な用事があるので、できません。)

(11) (飲み物の購入依頼)

親しい友人：el moshkla msh fy elflos bs feālan msh ha`dar laen fy haga lazem
aāmelha delwa`ty.

(お金の問題じゃないけど、本当にできません、今やらなければならない
ことがありますから)

(12) (食事の誘い)

学生：maālsh ya doctor lazem arawah badry .

(すみません 先生、早めに帰らなければなりません。)

上記から分かるように、日本語母語話者は、断りの理由である話者の事情を小さく述べること、つまり、山岡・牧原・小野（2010）が提案した（寛大性の原則②）(b)「自己の負担が小さいと述べよ」の配慮の原則に沿った発話が多いということである。一方、アラビア語話者は事情を大きく述べる特徴があるのではないかと考えられる。つまり、「自己の負担が小さいと述べよ」の原則がアラビア語の断りを正当化するのに、有効でないと考えられる。従って、アラビア語においても、配慮表現の原則を提示することが重要であり、

それが今後のアラビア語における配慮表現研究の第一歩となることも期待される。

話し手の事情に当たる「理由」の意味公式に関して指摘した先行研究としては、次のような研究が挙げられる。

Ghawi(1993)は、アラブ人英語学習者とアメリカ人を対象に、謝罪の発話行為に関するロールプレイ調査を行った結果、アラブ人英語学習者が母語から影響を受け、語用論的転移が生じていることを示唆した。具体的には、謝罪する際、理由説明を行うことが挙げられている。また、Beebe et al.(1990)では、日本人とアメリカ人母語話者及び、日本人英語学習者を対象に断りについて調査を行った結果、学習者が母語である日本語の断りのように具体的でない理由が英語に転移している点が述べられている。

また、Nelson・Carson・ElBakary・Al Batal(2002)は、エジプト人は断りにくい場面ではより多くの「理由説明」を行うことにより、自分の断りを正当化しようとする²¹と指摘している。しかし、実際にどのようなメカニズムで正当化するのか、どの理由でも自分の断りを正当化できるのかに関する考察は不十分である。このように、先行研究において日本語では具体的な理由があまり述べられていないことと、アラビア語では異なる発話行為でも理由説明が重要であることが指摘されてきたが、その原因についての考察は未だ不十分である。本研究では、これらの違いが両言語の背景にある文化的差異によって生じたものだと予想するが、先行研究では文化的差異に触れずに、個別言語におけるポライトネスの特徴を明らかにしようとしているため、特定のポライトネス・ストラテジーを生み出した原因について徹底的な言及がされていない。

1.2.2 先行研究の問題点②

2つ目の問題点は、先行研究では(堀田・堀江 2012、カノックワン 1997、山川 2011)断り発話を構成する要素の中で特に、「直接的断り」と「理由」の意味公式に見られる配慮表現に限定され、断り発話に見られる各要素の中ではどのような配慮表現の原理が有効であるかに関する考察が不十分である。

以下問題点②を詳しく論じる。

日本語の「断り」発話における配慮表現の働きを果たすヘッジ表現、断りを緩和する表現形式に関する先行研究として、堀田・堀江(2012)、カノックワン(1997)、山川(2011)

²¹ 「Egyptian may have used the strategy of giving reasons in situations that they found difficult to refuse as away of trying to fully justify their refusals.」(本文は筆者訳)

などが挙げられる。しかし、堀田・堀江（2012）、カノックワン（1997）の研究では分析対象として、断りの中心構造をなす不可表明（直接的断り）と理由に前節及び、後節する形式に限定されている。しかしながら、筆者が Beebe et al.(1990)と施（2005）の意味公式の分類に従って断り発話を機能別に分類した結果、「理由」と「直接的断り」以外に、「共感」や「関係維持」、「代案提示」などといった意味公式が対人関係において重要な役割を果たすものであり、日本語ではよく用いられることが明らかとなった。しかし、これまでにこれらの意味公式について、十分に言及されてはこなかったことが現実である。それらの意味公式の中で使用される談話において、どのようなポライトネスと配慮の原則が働くのか、どのような表現形式が使用されるのか、未だ十分には考察されていない。

例えば、筆者が収集したデータには、日本語の特徴である恩恵を表す授受補助動詞が断り発話の中でも「代案提示」²²に後続することが観察された。授受補助動詞が、山岡・牧原・小野（2010）と牧原（2012）では、依頼発話の中では配慮表現として認定され、依頼における配慮表現について詳しく論じられているが、断りにおける授受補助動詞の使用について取り上げた先行研究は管見の限りない。本研究では、断り発話でも用いられる授受補助動詞が FTA²³を軽減する働きを持ち、配慮表現として認定できると考えられる。しかし、先行研究で指摘された依頼発話における授受補助動詞とは、異なるメカニズムで配慮表現として機能すると思われる。

例として、本研究で集めた DCT データから以下の例文が挙げられる。

(13) ごめん、忙しいので、他の人に頼んでくれる？

(14) ちょっとコピーする時間ないからごめん。他の人にお願いしてもらっていい？

上記の例文から分かるように、日本語では話者に直接的利益がないにもかかわらず、利益があるかのように授受補助動詞が使用される。それは、話者に直接的に利益があるとき、授受補助動詞が使用されるのは恩恵を明示的に表すためであり、また、日本語は代表的な高コンテキスト文化であるため、「話し手は自分自身がコンテキストの一部であるのでコンテキストに埋もれた視点で場の情報を読み取る」からである（井出 2006:30）。しかしな

²² 代案提示は相手と一緒に解決案を模索しあって、相手に解決策を教える戦略である（権 2008:235）。

²³ FTA（Face-Threatening Act）とは、人間の基本的な欲求であるフェイスを脅かす行為である。

がら、利益がないときに、一体なぜ授受補助動詞が断り発話で使用されるのか、どのような配慮のメカニズムが働くのか、そしてどのようなポライトネスと配慮の原則が有効なのかについては、十分に言及されていない。そこで、本研究では談話レベルの観点から、意味公式とポライトネスと配慮表現の原則との関連について、明らかにしていく。そして、既に先行研究で提案された配慮の原則に加えて、これまでに指摘されてこなかった原則も新たに提案する。

1.2.3 先行研究の問題点③

3つ目の問題点は、アラビア語を母語とする日本語学習者の断りにおける語用論的能力や、日本語学習及び日本語教材に見られる断り発話の問題点が十分に言及されていない。

リナ (2013a) では、特に初級レベルの日本語学習者が教材に頼る度合いが、中級レベルの学習者に比べて高いことが分かった。具体的には、カイロ大学の1年生の学習者がカイロ大学日本語学科で使用されている日本語教材 (『みんなの日本語』) に提示される断り発話に沿った発話を使いがちであった。

学習者が教材に沿った断り発話を使うことが、なぜ問題だと捉えられているのかについて述べると、次のようなことである。

日本語教材で提示される断り発話のほとんどが「間接的断り」であり、さらに「間接的断り」の中では特に「ちょっと+理由」の組み合わせ、と「金曜日はちょっと」などのような発話に限られている。問題①で述べたように、確かに日本語母語話者のデータでは、「ちょっと」という副詞が多用されるが、「ちょっと」だけでは、解決できない場合もあることが分かった。例えば、先行研究の問題②で述べたように、断りのFTAを軽減する働きを持つ、「共感」、「関係維持」、「代案提示」なども使用される。特に、目上の相手である「先生」に対する断り場面ではより長い談話が使用され、「ちょっと」が使われても、「金曜日はちょっと」のような短い発話ではなく、より情報量が多い発話も見られた。また、恩恵を受けてない発話者による授受補助動詞、蓋然性を持つ表現形式、いいさし表現など学習者にとって使用が困難な項目もよく用いられる。

このように、日本語母語話者が実際に用いる断り発話のバリエーションが日本語教材では見られないことが現実的な問題である。しかし、学習者のレベルが高くなるにつれ、初級レベルの学習者に比べ、教科書に頼る度合いが低くなるとともに、言いたいことが発話

できるようになるものの、不適切な発話をしてしまう問題も見られる。従って、日本語学習者や日本語教材の問題点を探り、有効な指導法を提案することが重要である。

以上、論じた先行研究の問題点を解決するに当たって、本研究では以下の理論的枠組みを用いる。

1.3 本研究の理論的枠組み

本節では、ポライトネスと配慮表現に関わる主な先行研究を概観しながら、それらの有効性や問題点を論じる。さらに、文化的差異や異文化間語用論におけるコミュニケーション様式に関する先行研究も概観し、文化の違いにより、生じる発話行為の違いを観察する。先行研究を概観した上で、本論文における理論的枠組みを紹介する。

どの言語でも、日常生活において、他人との人間関係を良好に保つため、様々なストラテジーや適切な言語表現が用いられる。それらのストラテジーや言語表現がポライトネスと記述されることが多い。ポライトネスとは、「会話において、話者と相手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮して円滑なコミュニケーションをはかろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念」である（山岡・牧原・小野 2010:67）。ここで言う円滑的なコミュニケーションとは、「話し手が聞き手に自分の言うことを気持ちよく受け取ってもらえるように、言い方についてストラテジーを使うことである」（井出 2006:79）。

つまり、これらの定義から考えると、ポライトネスの概念がどの言語でも普遍的に存在することが分かる。しかし、その概念をどう表すかというストラテジーの面から考えると、社会的言語行動であれば、各々の言語背景にある文化や社会的通念などによって、異なるはずである。

従来の先行研究で記述されてきたポライトネスの概念がすべての言語に当てはまるものなのか、ポライトネス・ストラテジーには普遍性があるのか、言語によって個別性が見られるのかなど様々な疑問を解くため、本研究ではまず、ポライトネスと配慮表現及び、異文化間語用論に関わる主な先行研究(Grice 1975、Lakoff 1973、Leech 1983、B&L 1987、山岡・牧原・小野 2010、Hall 1976、八代・町・小池・吉田 2009)を概観し、ポライトネスと配慮表現の定義や記述を論じた上で、本研究で扱う理論的枠組みを紹介する。

1.3.1 Grice (1975)

言語哲学者 Grice (1975)は、日常生活において、人は適切な会話ができるように、無意識的に何らかのルールに従い、会話を行っていると言う。それらのルールに違反したとき、会話がうまく行かず、情報伝達や発話の目的、人間関係などが損なわれるはずである。つまり、会話参加者は何かの目的を持って発話するはずだが、その発話の中で発話者は聴者が要求する情報を出来るだけ伝えようとするが、どのような情報を伝えるべきなのか、情報をどのように伝えるのか、などといった疑問について Grice (1975)が提案したのは会話の協調の公理 (Cooperative Principle) である。それは、情報を伝える際に、話者は、聴者の目的を実現させるため、様々なルールに従わなければならないというものである。Grice は、要求されたことを与えたり、無駄な時間を避けたり、真実でないと思っていることを伝えなかったり、当該話題と無関係な話をしなかったり、など様々なルールが存在していることに気づき、会話の協調の公理の下位分類として、4つの公理を挙げ (Maxim of Quantity、Maxim of Quality、Maxim of Relation、Maxim of Manner)、それらの公理は全ての言語に共通しているものだと主張した。以下では、各公理が目指すところを詳しく見ていく。

Conversational maxims

a. Maxim of Quantity (量の公理)

量の公理は、以下の2つの原則に分かれ、要求された情報を与えることと、要求された内容以上に情報を与えないことである。

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

Griceによると、量の公理には、話し手がもし、聞き手に4つのねじが欲しいと頼んだとすると、聞き手から6つではなく、2つでもなく、4つもらえることを期待するはずだと説明している。つまり、話し手が要求した内容に対し、それ以上もしくは、それ以下の情報は聞きたくないはずであり、会話が長過ぎると時間の無駄となり、話題の伝達に障害

が起こる可能性があるということである。例えば、以下の例を見てみよう。

(1) A: 今日の会議は何時からだっけ？

B: 場所は 5 階の会議室で、前の会議が午後 3 時からあるので、その一時間後だったと思います。あ、専務も出席されるようですよ。

(山岡・牧原・小野 2010:39)

上記のような発話例は、量の公理に違反しているとされる。それは、A の質問に対し、本来なら「会議は～時から」という情報のみが与えられるべきであるが、B が A に要求されていない情報まで提供しているために、誤解や時間の無駄が発生することが予想されるからである。つまり、A にとっては、別の会議の時間や会議の場所、専務が出席するということなどは、余計な情報となる。

次に、質の公理を見て見てみよう。

b. Maxim of Quality (質の公理)

質の公理の目指すところは、伝達される情報の質に関わる問題であり、2つの原則に分かれている。1つ目は、真実でないと思っていること、または嘘だと思いを言うてはならないというものであり、2つ目は、証拠に欠けることを言うてはならないというものである。

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

Grice が質の公理では、ケーキを作るとき、手伝ってくれる相手に砂糖を頼んだとすると、塩をくれることを期待しないはずであると述べている。つまり、砂糖をくれることを期待するわけである。要するに、話し手が要求した内容に対して、聞き手がそれに応えるとき、自分が正しくないと分かっている情報を与えてはならない。例えば、以下の例を見て見よう。

(2) A: 昨日はちょっと飲み過ぎてしまって、実は今朝は二日酔い気味だったんです。

B: 新入社員がそんなことじゃ困るなあ。午前中なんだかぼーっとしているみたいだから体調でも悪いのかなって思ってたんだけど……。で、昨日はどれぐらい飲んだの？

A: え？飲みませんでしたけど……。

B: さっき飲み過ぎたって言ったじゃないか。

A: そんなこと言いましたっけ？

(山岡・牧原・小野 2010:40)

上記の発話には、A が最後に自分で言ったはずのことを、否定して、嘘を付いてしまったように見えるので、質の公理に違反していると思なされる。また、以下は Grice が言う証拠の欠けている発話例である。

(3) A: C さんが、D さんと付き合うことになったって聞いたんだけど、D さんのこと知っているの。

B: うん、知っているよ。やっぱりやめた方がいいんだよね。

A: えー！何でそんなこと言うの？

B: あんまり、いいやつじゃないって聞いたからさ。

(筆者による作例)

上記の発話例では、B が噂話だけで D がいい人じゃないと判断してしまったため、十分な証拠がないことを発話しており、質の公理に違反していると言える。

次に、3 つ目の公理（関連性）を見て見よう。

c. Maxim of Relation (関連性の公理)

Grice が関連性の公理には、以下の 1 つの原則を挙げている。

1. 'Be relevant'.

関連性の原則は、当該会話の内容と無関係な話を言ってはならないということである。つまり、発話者が提供した話題に沿って、適切な会話をするということである。例えば、

以下に、当該会話に対し、無関係な発話がなされた結果、関連性の原則に違反した例文を東（1995）から引用する。

(4) B: What's the problem?

A: I'm out of gas.

B: What year is your car?

ガソリンが無くなったことで困っている A の発話に対して、通常「手伝いましょうか」や「ガソリンスタンドまで連れて行きましょうか」などの発話が行われることが当然であろう。しかし、B が全く関連性のない応答をしていることで、関連性の原則に違反している。このような例は、英語だけでなく、どの言語でも同じ場面では、発話者は自らの発話に対して、「何年のモデルの車ですか」という応答を期待しないと考えられる。Grice は関連性の原則に欠けているものとして、以下の例文を提示した。

(5) A: I am out of petrol.

B: There is a garage round the corner.

(Grice 1975:51)

Grice によると、上記の B の発話が関連性の原則に違反しているが、B がもしかすると、駐車場があるという発話をしたのは、駐車場でガソリンが見つかる可能性があると考えて、発話した可能性も考えられるため、全く関連がないとは言えない。

d. Maxim of Manner 「様態の公理」

様態の公理では、上記の原則とは違い、何を述べるかより、どのように述べるかということに注目している。発話自体を明確にせよというところを目指す原則であり、情報をどのように伝達するかに関わる問題である。つまり、発話者ができるだけ、相手のことを思いやって、戸惑わせない会話をし、不明瞭や曖昧な言い方を避けて、分かりやすく、明瞭に述べることである。Grice は様態の公理として、以下の一つの原則を挙げた。

'Be perspicuous'

例として、以下の例文がある。

(6) A: ここにあったおまんじゅうは君が食べたのか。

B: そうだったのかもしれないなあ。

(7) A: コンタクト、どこで買ったの

B: 駅ビルの大きいデパートの向かいのカラオケ屋の隣のビルの5階にあるアイタウンっていうお店。

(山岡・牧原・小野 2010:47)

上記の例(6)では、Bの応答が曖昧であり、食べたか食べなかったのかははっきりしていないため、不明瞭な発話であり、例(7)では、Bの応答は回りくどい言い方になり、不必要な情報もあることで、様態の公理に違反していることとなる。

さらに、上記の原則以外にも考えられるものがあると述べ、次の原則が追加されている。

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (avoid unnecessary prolixity).
4. Be orderly.

以上 Grice の会話の協調の公理を見てきたが、Grice がそれらの公理は全ての言語に共通して、普遍的なものであると主張した。どの言語でも共通して当てはまる例文として、(2),(3),(4),(6),などが存在するが、どの公理が優先されるかが文化によって異なる。それは、Grice (1975) は、会話成立を目的とした公理を提案したが、人間関係を維持する目的から考えると、別の原則が働くことも予想される。

本研究で取り扱う「断り」の発話行為においては、Grice の会話の協調の公理に違反することが多いことが分かった。例えば、異文化間語用論におけるコミュニケーション・スタイルの中で、日本語は「螺旋的」スタイルと位置づけられている。つまり、言葉を用いる際に、相手に対して必要最低限の言葉で発話を済ませて、結論を聞き手に委ねるスタイル

ルである。そのため、日本人の「断り発話」の中では、あえて人間関係を良好に保つために、むしろ質の公理と様態の公理に違反することが多い。例えば、筆者が日本語母語話者とアラビア語母語話者を対象に行った談話完成テストでは、「最後まで断ってください」という指示があったにも関わらず、日本語では例(8)・(9)のような例文が多く見られた。

(8) 金曜日はちょっと.....。

(9) 水曜日は忙しいかもしれないんですが...

上記のような発話は日本語の中で頻繁に使用され、断りの機能を持つ「ちょっと」で会話が済むことが多く、発話者が断ったつもりで、蓋然性を持つ「かもしれない」を用いることが多く見られる。このような発話は、明確に答えが出ていないことで、様態の公理に違反していると言える。また、アラビア語では、誕生パーティーの誘いに対して、以下のような、具体的な発話例がよく使われる。

(10) 学生 : asfa msh ha`dar aroh āshan kharga maā babaya we hanzor had arebna.

(すみません。行くことができません。お父さんと一緒に出かけます。そして親戚を尋ねて行きます。)

例(10)は、断り手は明確に断っていることで Grice の言う様態の公理が守られた発話と言えると同時に、量の公理に違反していることも言える。それは、誘った側に対し、相手が来るか来ないかという情報のみ知りたいのだが、その理由については具体的に知りたくない可能性もあるからだと考えられる。

以上のことから、会話の協調の公理は情報伝達のプロセスを解明しようとしたものだが、そのプロセスの中では通常人間関係が維持されるように、異なる原則が働くことが分かる。

「日本語においては、《勧誘》、《依頼》、《断り》、《自賛》など、何らかの意味で相手に心理的負担をかけるような発話において、多義性や不明瞭さを含んだ表現で発話しても、聴者はそれを多義性や不明瞭さと解釈せず、聴者への配慮と解釈する」(山岡・牧原・小野 2010:52)。よって、日本人の断り発話の中では、あえて人間関係を良好に保つため、様態の公理に違反して、不明瞭な発話をしたほうが丁寧であるとよく言われる。一方、アラビ

ア語では、様態の公理が優先され、具体的に理由説明を行うことも相手に対する配慮の示し方の1つである。このように、異なる文化・言語においては、あえてそれらの原則に違反することにより、よりポライトな発話となることがある。また、どの言語でも「褒め」の発話行為を行う際に、「質の公理」に違反することで、相手を喜ばせることが多く見られる。例えば、筆者が直面した場面に以下のようなものがある。

ある日、一人の知人女性が髪を切って、髪型を変えたのだが、偶然会ったとき、「えー髪切ったんだ」と言うと、「どう？」と聞かれたことがある。そのとき、正直に言えば、似合っていないと思ったのだが、「かわいい」と告げた。この場面では質の公理に違反することで相手を喜ばせようと思ったからである。しかし、質の公理である「本当でないと分かっていることを言うてはならない」ということを守れば、「似合っていないね」と言うべきだが、そうすることで相手を傷つけてしまい、人間関係が崩れることも予想される。

このように、特に「褒め」の発話行為では、非常に親しい友人か、家族でなければ、正直に気持ちを伝えられないのが一般的ではないだろうか。

また、実際の会話の中で会話の協調の公理のどれが優先されるべきなのか、どれをいつ使えば良いのかについて不明な場合がある。例えば、以下の例文を見て見よう。

(11) A: Where does C live?

B: Some where in the south of France. (Grice 1975:51)

上記の例文では、Bの発話には、Aが要求する情報がないため、量の公理に違反している。しかし、BはAの知りたい情報がはっきりと分からないため、質の公理を優先し、このように発話をした可能性もある。

このように、Grice (1975) は、自然な会話が成立するプロセスに焦点を当て、協調の公理を提案した。

1.3.2 Lakoff (1973)

Lakoff(1973)は、Grice(1975)の会話の協調の原理を基にして、Rules of Pragmatic Competence (語用論的能力の原則)として、以下の2つの原則を提示している。

Rules of Pragmatic Competence

- 1.Be clear (明確に述べよ)
- 2.Be polite (ポライトに述べよ)

Lakoffによると、1は、話し手がメッセージを直接的に伝達することを主な目的とする場合、誤解が生じないように明確に伝達することが重視される。一方、2は、話し手の主な目的が、会話の参加者同士の人間関係に焦点を置くことであるため、明確に述べるよりポライトに述べることが重視される。さらに、明確さとポライトネスが衝突する場合には、ポライトネスが優先される場合が多いと指摘している。しかし、文化や言語によって明確に述べることはポライトネスである場合もあると考えられる。研究背景で述べたとおりアラビア語では、「断り」の発話行為は、理由を明確にすればするほど、相手の誤解を避け、相手を戸惑わせない目的で、よりポライトである。つまり、誤解を避ける目的で理由を明確に述べることは、ポライトネスの現れだと捉えるべき場合もあるのである。

Lakoff(1973)は、上記の語用論的能力の原則以外、補足として以下のポライトネスの原則を挙げている。

Rules of Politeness

- 1.Don't impose (押し付けるな)
- 2.Give options (選択肢を与えよ)
- 3.Make a feel good-be friendly (気持ちよくしよう、友好的になれ)

(Lakoff 1973:298)

Rule 1は、押し付けがましくならないことであり、相手にとって望ましくないと分かっていることをせず、相手の気持ちを常に考えることである。Rule 2は、相手に選択の余地を与えることである。例えば、何かを依頼するとき、一方的に考えて「... てください」より、断る余地を与える「... てくれない」表現を用いることである。Rule 3は、相手と

良い人間関係を築くことに着目し、気持ちよくコミュニケーションしようということである。

1.3.3 Leech (1983)

Leech(1983)は、Grice(1975)が提示した会話の協調の公理だけでは、ポライトネスを記述するには不十分であると主張し、良好な対人関係を築くため必要な言語行動として、6つのポライトネスの原理 (Politeness Principle) を提案した。それらの原則は自分に焦点を置くか、相手に焦点を置くかによって、2分類されている。以下、Leech が主張したポライトネスの原理の6つのカテゴリーを提示し、詳しく見ていく。

Politeness Principle

a. Maxim of Tact

.Minimize cost to other.

.Maximize benefit to other.

b. Maxim of generosity

.Minimize benefit to self.

.Maximize cost to self.

c. Maxim of Approbation

.Minimize dispraise of other.

.Maximize praise of other.

d. Maxim of Modesty

.Minimize praise of self.

.Maximize dispraise of self.

e. Maxim of Agreement

.Minimize disagreement between self and other.

.Maximize agreement between self and other.

f. Maxim of Sympathy.

.Minimize antipathy between self and other.

.Maximize sympathy between self and other.

(Leech 1983:132)

以下では、Leech (1983) と、山岡・牧原・小野 (2010) の解説を基に、各原理を詳しく見ていく。

1.3.3.1 Maxim of Tact (気配りの原則)

(a) 他者の負担を最小限にせよ

(b) 他者の利益を最大限にせよ

気配りの原則は、主に聞き手を中心に設定され、できる限り他者の負担を減らし、他者の利益を大きくしようと言うものである。つまり、発話内容を述べる際に、同じ発話でも基本的に2つの原則を守るための言語表現を用いるべきである。例えば、以下の例文が挙げられる。

(12)

a. Answer the phone.

b. Will you answer the phone?

c. Could you possibly answer the phone? (Leech 1983:108)

上記の例文から分かるように、3つの例文全ては、「電話に出て」という同じ発話内容が含まれているが、aは命令形で、bは疑問形、cは疑問形と許可も含まれるため、3つの中でcが最もポライトネスの度合いが高い表現となっている。それらの違いを見てみると、aでは、聞き手に決定権がなく、むしろ命令形になっているが、b~cにかけて、聞き手に断れる余地が保たれているため、聞き手のことを思いやった発話である。このように、表現の選択で、聞き手に最終判断を委ねる発話をすることによって、聞き手の負担を小さくできる。

また、聞き手の利益を大きくするという点について、以下の例文が提示されている。

(13)

- a. Peel these potatoes.
- b. Sit down.
- c. Have another sandwich. (Leech 1983:107)

以上の例文の発話内容が異なるものであるが、聞き手の利益が大きい面から考えると、「ジャガイモの皮をむいてください」の例 a は、話し手の利益になると同時に聞き手への負担とつながり、例 b は「座ってください」という聞き手の利益になり得るが、「サンドイッチもう一つ取ってください」の例 c と比較すれば、c が最も聞き手の利益が大きいものとなる。つまり、命令形が使用されたにも関わらず、この行為の結果が聞き手の利益になることで、ポライトとなっている。そして、c では言語形式は命令形だが、勧めまたは、誘いの発話機能を果たしていることが分かる。このことから、表現の選択に関わるポライトネスの問題を探る際に、「利益」と「負担」の2つの概念が重要であることが分かる。

1.3.3.2 Maxim of Generosity (寛大性の原則)

- (a) 自己の利益を最小限にせよ
- (b) 自己の負担を最大限にせよ

寛大性の原則は、聞き手ではなく、話し手自身（自分）に焦点が当てられている点で、気配りの原則とは異なる。基本的に、自分の負担を大きくして、自分の利益を小さくすることである。しかし、これらの原則は人間関係を良好に保つためにあるものという点から考えると、自分の負担を大きくすることで相手の負担が小さくなり、自分の利益を小さくすることで相手の利益が大きくなるはずである。このことで、寛大性の原則は、気配りの原則と密接な関係にあると言える。

(14)

- a. Could I borrow this electric drill?
- d. Could you lend me this electric drill? (Leech 1983:107)

例 a は、例 b よりポライトな表現とされている。それは、依頼の中で、話し手が話題の主体となっているほうが、ポライトであると見なされるからである。つまり、依頼行為を行う際に、自分を主語として立てて明示したほうが聞き手の負担を少し減らすことができるということである。

通常は、「人は個としては自己の利益を求めようとするものだが、他者との関係の中では逆に自己の利益を押さえようとする」（山岡・牧原・小野 2010:70）。アラブ人は寛大であると、アラブ社会でよく言われる。筆者もエジプト人の一人として日常生活においてよく目にする場面がある。それは、ご飯やお菓子などを食べるときに、もし誰かが話しに来てくれたら、必ず「どうぞ、食べてください」と誘うのがごく普通のこととして行われる。そうしないと、自分が悪く見られ、非常識な人だと思われてしまう。つまり、話し手が自己の利益を抑えて、他者の利益を優先することで他者との人間関係を維持すると同時に自分の面子を守ろうとするのである。

1.3.3.3 Maxim of Approbation (是認の原則)

- (a) 他者への非難を最小限にせよ
- (b) 他者への賞賛を最大限にせよ

是認の原則は、他者中心の原則であり、人はできる限り、他者への非難を最小限にすることで、他者への賞賛が最大になるとも言える。山岡・牧原・小野（2010）によると、是認の原則は、Grice の質の公理に違反する。つまり、他者への賞賛を最大限にするには、質の公理に違反し、場合によっては本当でないと言っていることを言わざるを得ないことになる。それは、1.3.1 節でも述べたとおり、「褒め」の発話行為でも、相手を喜ばせようとするだけで質の公理に違反し、「他者への賞賛を最大限にせよ」の原則が有効に働くことと同様である。つまり、Leech のポライトネスの原則は、Grice の会話の協調の公理より、対人関係に重きを置いていると言える。

1.3.3.4 Maxim of Modesty (謙遜の原則)

- (a) 自己への賞賛を最小限にせよ
- (b) 自己への非難を最大限にせよ

謙遜の原則は、自分への賞賛を最小限にして、自分への非難を最大限にすることである。基本的に謙遜の概念を中心とした原則である。例えば、プレゼントやお土産を渡すときの「つまらないんですけど…」という日本語の決まり文句がこれに相当する。実際は、非常に高くても「どうぞ高いものです」とは言わない。アラビア語でも自宅に知り合いを食事に誘ったとき、実際苦勞して朝から準備して、自らの最大限の負担をしたにも関わらず、お客さんにあえて「あなたに相応しいものではない…」や「ごめんなさい、シンプルなものですが」、「本当に、とても恥ずかしい…」などのように自分を非難することで謙遜の心をアピールする。

1.3.3.5 Maxim of Agreement (一致の原則)

- (a) 自己と他者との意見相違を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ

一致の原則は、上記の原則とは異なり、話し手が聞き手のみが中心なのではなく、会話参加者である話し手と聞き手の双方が中心になっている。相手との対立を最小にして、相手との意見一致を最大にすることに着目した原則である。例えば以下の例文が挙げられる。

(15)

- a. 今日の演説は非常に軽薄で中味のないものでしたね。
- b. いや、とても中味のある充実したいい演説でしたよ。

(山岡・牧原・小野 2010:71)

上記の発話では、会話参加者 a と b の間に意見一致ではなく、意見相違が生じている発話内容なので、「(b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ」に違反している。山岡・牧原・小野 (2010) では、上記のような発話は、選挙の中で用いられることがむしろ当然であるが、それは政治家が選挙では人間関係維持の目的より、選挙に勝つことを目的にしているからと指摘している。従って、Grice の会話の協調の原理から見れば、「質の公理」が守られている発話であることが分かる。

1.3.3.6 Maxim of Sympathy (共感の原則)

- (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との共感を最大限にせよ

共感の原則は、感情に関わるもの（山岡・牧原・小野 2010:72）であり、他者との共感を最大にして、反感を最小にすることである。例えば、以下の例文を見て見よう。

(16)

- a. I am terribly sorry to hear that your cat died. (Leech 1983:139)

上記の例では、発話者が相手の気持ちをくんで、同情を表しているため、相手との共感を最大にしているとされている。このように、Leech がポライトネスの原則を挙げて、会話内容よりも、より良い人間関係を築くことを目的としたことで、Grice より優れていると考えられる。しかし、同じ場面でも文化によって、どの原則が優先されるか、または好まれるのが異なると Leech は述べている。Leech の Politeness Principle における問題点として、それが行動に関わるものであるため、場合によっては、実際その言語行動を守らなくても、言葉や表現でポライトネスを表すことができると思われる。つまり、ポライトネスは言語行動の選択以外、表現方法の選択と密接な関係にあるため、実際の発話では、Leech が挙げたポライトネスの言語行動に従わなくても、表現方法で補うことがよくある。また、日常生活において言語行動だけでは記述しきれない言語現象が豊富にあり、表現方法に着目した方がより明確に各々の言語におけるポライトネスの個別性を見出すことができると考えられる。

また、Leech の Politeness Principle は主に自己より他者向けのものであるため、自分の利益を考えたとしても、他者との人間関係を維持するのに、どのような原則に従うかは不明である。これに対して、B&L (1987) は、自己と他者の双方に焦点を当て、ポライトネス理論を提示した。以下、B&L (1987) のポライトネス理論について詳しく論じる。

1.3.4 Brown and Levinson (1987)

B&L は、Goffman(1967)のフェイスの概念を引用し、ポライトネス理論を以下のように提示している²⁴。

人間には、他人とのコミュニケーションにおいて2つの基本的欲求があり、その欲求がフェイスに例えられ、人間誰もが2つのフェイスを持っているとされている。ここで言うフェイスは、人の面子やプライドを表している。それらの2つの欲求は、他者に受け入れられたい、好かれたい、評価されたいという欲求が「ポジティブ・フェイス」、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求が「ネガティブ・フェイス」とされている。この2種類のフェイスを脅かさないように配慮する戦略を「ポライトネス」と捉える。そして、「ポジティブ・フェイス」に働きかける戦略を「ポジティブ・ポライトネス・戦略」(以下、PPS)、「ネガティブ・フェイス」に働きかける戦略を「ネガティブ・ポライトネス・戦略」(以下、NPS)と呼んでいる。

それぞれのフェイスを脅かす行為は「Face Threateing Act. (以下 FTA とする)」とされている。人は本来他人と良好な人間関係を築こうとするが、FTA を全く行わないと、人間と接することができないということになってしまう。通常、話し手と聞き手の間に行われるコミュニケーションには、FTA が生じる場合が多くある。どうしても相手の欲求に応えられないときの「断り」の発話行為、相手の希望が自分にとって望ましくない内容であるときの「意見相違」、またはその望ましくないことを表明する「不満表明」の発話行為、相手から助けを求める状況に置かれたときの「依頼発話」など多く挙げられる。以下、B&L が提示した4つのフェイス侵害行為 FTA 及び、5つのポライトネス・戦略を詳しく見ていく。山岡・牧原・小野 (2010) では、PPS を「積極的ポライトネス」、NPS を「消極的ポライトネス」と呼んでいる。

1.3.4.1 FTA 行為

I. 聴者の消極的フェイスを脅かす FTA

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ①聴者に何らかの行為をさせようとする行為 | 例：命令、依頼、提案、助言など |
| ②聴者に利益を与える話者の未来の行為 | 例：提供、約束など |

²⁴ 本節では、山岡・牧原・小野 (2010)、宇佐美 (2003) の解説を基に、B&L が提示したポライトネス理論を詳しく論じる。

③話者が聴者や聴者の所有物に対する欲求を表す行為 例：聴者への賞賛、怒り、肉欲などの表出

II. 聴者の積極的フェイスを脅かす FTA

①話者が聴者に対して否定的な評価を示す行為 例：不賛成、批判、不満表明、反論など

②話者が聴者の積極的フェイスに配慮しないことを示す行為 例：厳しい感情表出、聴者に関する悪いお知らせ、話者に関する良い話題、対立を招く話題など

III. 話者の消極的フェイスを脅かす FTA

①感謝表明

②聴者側の感謝の受け入れ

③弁解

④聴者からの提供の受け入れ

⑤聴者が犯した無礼の反応

⑥不本意な約束や提供

IV. 話者の積極的フェイスを脅かす FTA

①謝罪

②賞賛の受け入れ

③身体の一部が利かなくなること

④ごまかし、自己矛盾、とぼけなど

⑤罪や責任を認めること、感情の抑えが利かなくなること

以上、B&L が指摘した FTA 行為を見てきたが、FTA がいつでも、どの発話内容でも同様なわけではない。発話の中で様々な要因により、その FTA の度合いの大きさが異なる。

以下は、B&L が提示した FTA 度計算式 (Computing the Weightiness of an FTA) である。

FTA 度計算式 (Computing the Weightiness of an FTA)

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

D (S, H) : 話者 S と相手 H の社会的距離 (social distance)

P (H, S) : 相手 H の話者 S に対する相対的力 (power)

R_x : 特定の文化で、行為 x が相手にかかる負荷度 (ranking of imposition)

相手が目上の人か目下の人か、相手が親しいか親しくないか、そして、地位が高い相手かそうでないかにより、相手にかかる負荷度が異なる。目上の相手や地位の高い相手の場合、負荷度が高くなることはどの言語でも共通する要因だと考えられる。また、同じ言語行動でも、文化や社会的通念が異なることにより、その言語行動の負荷度や、解釈も異なってくる。B&Lでは、文化的差異を R_x で表している。つまり、行為 x が、「誘い」の場合、アラブ社会では、ある程度親しい相手でなければ誘いをすぐに受け入れることは望ましくないとされるため、断られても誘う側は何回も誘い続けるからである。何回も誘い続けることが好意的に捉えられる。なぜなら、遠慮して負担をかけたくないと思った断り手のことを思いやって、「本気で誘っているよ」「負担がないよ」ということを信じてくれるように、何回も誘い続ける訳である。しかし、筆者が日本に初めて来たとき、バス停でバスを待っていたとき、車を持っている日本人の友達から「送らしましょうか」と言われたとき、「大丈夫です。ありがとうございます」と返事したら、友達が「じゃ、またね」と言って、すぐ行ってしまった。そのとき、私はとても驚いた。後から、日本の文化や社会では、断った相手を誘い続けると押し付けがましいと捉えられることが分かった。このように、ポライトネスをどう伝えるかが文化によって異なることに注目した点で B&L は優れている。

Leech の相手と一致の意見、相手の利益、相手への共感を最大にすることは、B&L の他者に受け入れられたい、好かれたい、評価されたいという PPS に当たる。つまり、B&L

のポライトネス理論と Leech のポライトネスの原理とは、共通の現象を異なる角度から理論化したものであるが、B&L のオリジナリティは、フェイスに配慮した言語行動の体系をポライトネス・ストラテジーとして定式化していることにある（山岡・牧原・小野 2010:75）。次に、それらのストラテジーを詳しく見ていく。

1.3.4.2 ポライトネス・ストラテジー

以下は、B&L の 5 つのポライトネス・ストラテジーを表す図である。

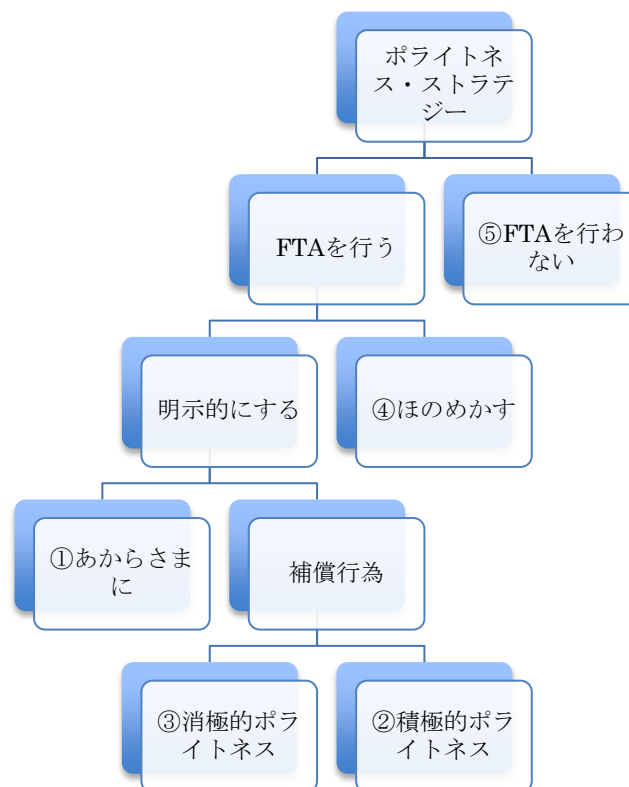


図 1-1 B&L のポライトネス・ストラテジー

① あからさまに FTA を行う

「聴者からの報復の恐れがない場合に用いられる」（山岡・牧原・小野 2010:77）。例えば、地震があったとき、周りの人に「逃げろ」と発話したとしても、後で彼らとの人間関係が損なわれることはないだろう。命令形を用いたのは、周りの人の安全のためだからである。

そして、緊急事態があったとき「助けて」と発話したとしても、周囲から「下品な人だ」と思われることがないはずである。また、力関係のある大学の先生と学生、または会社の中で社長と部下とのコミュニケーションの中では、教授が学生に、または社長が部下に命令形などを使うことがよくある。つまり、危険な状態や、発話者が相手より地位が高いとき、相手のフェイスを保持せず、あからさまに発話しても相手のフェイスを侵害する危険性が少ないと言える。

② 積極的ポライトネス

図 1-1 から分かるように、補償行為として、FTA を行う際には、積極的ポライトネスと、消極的ポライトネスに分かれる。つまり、積極的ポライトネスを示そうとしても、それは FTA を行っていないわけではなく、むしろ FTA を行いながらも、相手にかかる負担度を減らし、良好な人間関係を維持する戦略となる。そのため、「相手に好かれたい、評価されたい」という積極的フェイスに働きかける戦略であると言える。例えば、基本的に「断り」は典型的な FTA の 1 つとされるが、断らざるを得ない状況に置かれた際に、相手の積極的フェイス及び、自分のフェイスを守るため、自分が本来断りたくないが、やむを得ず断らざるを得ないことをアピールするための言語表現や戦略を用いることによって、相手にかかる負担度を減らすことができる。

③ 消極的ポライトネス

補償行為として、FTA を行う際に、消極的フェイスに働きかけるのは、消極的ポライトネスである。つまり、消極的フェイスを満たすための戦略を用いて、他人にかかる負担度を最小にする戦略である。例えば、山岡・牧原・小野（2010）では、B&L が挙げた例文の中で日本語にも共通しているものとして、以下の 4 つを挙げている。

1. 聴者の欲求を妨げないようにする

例：使っていないペンがあったら貸してくれない？

2. FTA に対して謝罪することで補償する

例：すみません。恐縮ですが、ペンを貸していただけませんか。

3.直接的表現を避ける 例：ペンを貸してくれたら嬉しいな。

4.慣習化された婉曲的表現を用いる 例：ペンを貸してほしいんだけど。

④ ほのめかし

ほのめかしは、B&L の言うオフ・レコードである。つまり、明確に述べないで、ほのめかしたり、省略したり、相手に結論を委ねるストラテジーのことである。しかし、自分の意図が相手に正しく伝わらないか、全く伝わらないリスクがあるため、話し手は自分の目的を達成するより、相手との人間関係の方を重視していると指摘されている（山岡・牧原・小野 2010:78）。

⑤ FTA を行わない

FTA を行わないというストラテジーを用いるのは、相手のフェイスを脅かす危険性が非常に高いとき、FTA の度合いを減らすよりも、むしろ FTA を全く行わないと決断することである。例えば、学生が教授から依頼を受けたとする。その場合、学生が非常に忙しい状況に置かれても、教授の依頼を断る FTA の度合いが非常に高いと感じたとき、断らないことにするという FTA そのものを行わないことである。

以上、B&L のポライトネス・ストラテジーをまとめると以下のようになる。

まず、FTA を行うか行わないかを選択する。FTA を行うことになったら、それを明示的にするか、ほのめかすかを選択する。明示的に FTA を行うとすれば、それをあからさまにするか、補償行為として行うかを選択する。補償行為として行うのであれば、それを積極的ポライトネスとして示すか、あるいは消極的ポライトネスで示すかを選択する。

1.3.5 山岡・牧原・小野（2010）

山岡・牧原・小野（2010）では、「ポライトネス理論は個別言語を超えた普遍性を有し」、文化的差異については、B&Lが提示した変数 R_x のパラメーターしか存在しないが、そのパラメーターには個別言語ではどのような違いが見られるのかは不明であると述べている。配慮表現は、日本語の現象に対する説明から始まった個別言語の問題であるとも指摘している。つまり、配慮表現が、異なる言語や文化、社会において共通の概念であると考ええることは妥当ではない。

さらに、山岡・牧原・小野（2010:139）は、ポライトネスと配慮表現の違いについて次のように述べている。「ポライトネスは言語行動の選択を巡る方略についての理論であるのに対して、配慮表現は固定された言語行動に対応する表現の選択を巡る理論である」。つまり、言語行動自体に関わるポライトネスの面から考えると、相手に不利益をもたらす「断り」や「依頼」などの発話行為よりも、相手の利益になる「誘い」「提案」「助言」の方が選択されることが望ましいと言える。しかし、実際には相手の不利益になる行為を行わざるを得ない状況に置かれるのが現実である。従って、この問題点を解決するのが、「配慮表現」の立場である。言い換えると、相手の不利益になる「断り」などの発話行為を行わなければならないときには、どのような表現を選択すれば、相手にかかる負担及び、断り手自身が抱える心的負担を和らげることができるかの問題である。

山岡・牧原・小野（2010）は、主に Leech (1983) のポライトネスの原則を基に、日本語の原則として「配慮表現の原理」を立てた。しかし、山岡・牧原・小野（2010:140）によると、「配慮表現の原理」が「ポライトネスの原理とは反比例的な原則である」と述べている。

表 1-1 配慮表現の原理

	① ポライトネスの原理	② 配慮表現の原理
(I) 気配りの原則	(a) 他者の負担を最小限にせよ	(a) 他者の負担が大きいと述べよ
	(b) 他者の利益を最大限にせよ	(b) 他者の利益が小さいと述べよ
(II) 寛大性の原則	(a) 自己の利益を最小限にせよ	(a) 自己の利益が大きいと述べよ
	(b) 自己の負担を最大限にせよ	(b) 自己の負担が小さいと述べよ

Leech のポライトネス原則は、行動に関するものであったのに対して、山岡・牧原・小野（2010）は、主に表現に関する原則を挙げている。他者に対する思いやりをどのようにすれば伝わるのかではなく、どのように表現するのかに関わる問題としている。そのため前節で挙げた Leech のポライトネス原則の問題点として、聞き手中心に提示され、実際人は自分の利益を考える場合もあり、自分への非難も最大にすることも望ましくない場合もある。しかし、そのようなときでも言葉で相手に対する配慮を示すことができるわけである。例えば、日本語では、「つまらないものですが」とプレゼントを渡すとき、述べるのは（山岡・牧原・小野 2010）（寛大性の原則）②の b「自己の負担が小さいと述べよ」に当たる。実際には話し手の負担が小さいわけではなく、相手のことを思いやって発言した表現となる。一方、Leech のポライトネスの「自己の負担を最大限にせよ」とは言っても、自己の負担を最大限にしなくても、それを言葉で表すことが可能である。従って、山岡・牧原・小野（2010）が挙げた配慮表現の原理の特徴は、相手への配慮や思いやりをどう表現するかという点で優れている。

山岡・牧原・小野（2010）は、様々な発話行為の中で、特に依頼発話における配慮表現に着目し、依頼について非常に細かく、重要な分類がなされてきたが、「断り」発話における配慮表現については十分に言及されておらず、日本語の「断り」発話に見られる配慮表現や配慮の原理など、未だ未分類の言語現象があると思われる。断り発話における配慮表現の原理について、詳しく研究する必要性及び意義があると考えられる。

1.3.6 異文化間コミュニケーションについて

文化・言語の違いによって、コミュニケーション・パターンが異なることについて、Kaplan(1966)は、初めて論理展開パターンの観点から議論した。世界各言語の論理構造パターンを以下の図 1-2 のようにモデル化した。

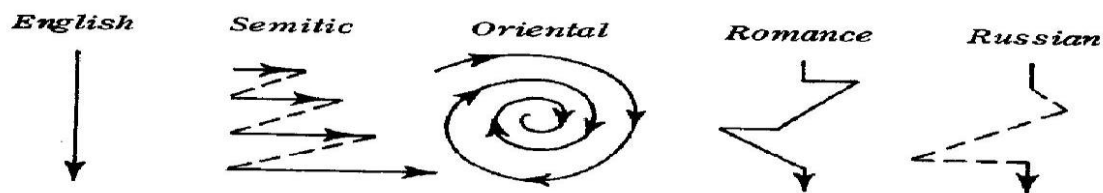


図 1-2 Kaplan (1966) の世界各言語の論理展開パターン

これらのパターンは、各言語の特徴によって、思考や語順の順序が異なることを示すものである。しかし、Kaplan(1966)の論理構造パターンには、オリエンタルの中で中国や韓国が含まれているが、日本は含まれていないため、同様の特徴を持つかどうかは明確にされていない。また、英語中心主義的であるという多くの批判にさらされた。

これに対して、Hall(1976)は、文化によってコンテクストの特性が異なることを指摘し、世界各国を分類した。その中で、日本は代表的な高コンテクスト文化であるとされ、アメリカは代表的な低コンテクストとされている。また、Hallの分類において、アラビア語も日本と同様に高コンテクストとされている。以下で、Hall(1976)を詳しく論じる。

1.3.6.1 Hall(1976)

アメリカの文化人類学者であるHall(1976)は「高コンテクスト文化」(文脈依存)と「低コンテクスト文化」(文脈独立)の概念を提唱した。Hallの理論は、国や地域のコミュニケーション様式の特徴が理解しやすいと評価されることが多く、異文化コミュニケーション²⁵に関する先行研究において、大きく取り入れられてきた。

Hallは、文化によってコンテクスト²⁶の高低が異なることを指摘し、「高コンテクスト文化」と「低コンテクスト文化」の概念を通して、地域や国などにおける文化的差異が記述され、以下のようにそれぞれの国を分けている。

日本を含む多くのアジア文化(中国、韓国など)また、アラブ人が高コンテクスト文化であり、ドイツ、アメリカ、スイスなどは低コンテクスト文化としている。

高コンテクスト文化とは、言葉や言語に依存するのではなく、文脈的情報に依存する文化であるのに対して、低コンテクスト文化とは、言葉や言語に依存し、言葉に対し、積極的姿勢を示す文化のことである。また、コンテクストの高低によってコミュニケーション・スタイルも、高コンテクストスタイルと低コンテクストスタイルに分けられている。高コンテクストスタイルとは、「コンテクストに依存する度合いが高いということで、「何を言ったかよりも、どのようにどのような状況で言ったか」が重視される。一方、低コンテクストスタイルとは、コンテクストに依存する度合いが低いということで、「どのよう

²⁵ 異文化コミュニケーションとは、「自分と相手の共生共栄と相互尊重のために行う情報交換、情報共有、共通の意味形成行為である(八代・小池・吉田・町 2009:30)

²⁶ コンテクストとは、文脈と訳されるが、具体的に状況や背景情報を指す(八代・荒木・樋口・山本・コミサロフ 2001:40)。

にどのような状況で言ったかよりも、何を言ったか」が重視される」(八代・荒木・樋口・山本・コミサロフ 2001:40)。

Hall (1976) は、異文化間コミュニケーションや異文化間語用論の研究で広く取り上げられてきたが、東洋と西洋の国々を分けたことに対して、批判した研究も多く見られる(八島・久保 2012、石井・北山 2004、八代・町・小池・吉田 2009)。

石井・北山 (2004) は、Hall (1976) の文化とコンテキストの高低が有効な概念であると指摘したが、コンテキストの概念の曖昧さ、いわゆる言葉の定義自体が明確になっていないことを批判した。具体的に、次のように述べている。Hall によるコンテキストとは、受け手の背景にあらかじめプログラミングされた反応と場面からなっている。よって、コンテキストは非言語情報そのものを意味していない。このことは、言語情報を重視しないことが、即ち、非言語情報を重視することを意味するとは限らないと言う。また、八島・久保 (2012) では、Hall (1976) の理論は異なる言語・文化の特徴を相対的な傾向の違いを探るには妥当だが、それぞれの国を分けることには問題があると述べている。また、八代・町・小池・吉田 (2009) も同様の批判をし、低コンテキストとされる同じアメリカ文化などでも、家庭文化と社会文化では家庭文化の方が一般に高コンテキストだと指摘している。つまり、同じ国や、地域の中でも高コンテキストと低コンテキスト両方の特徴が見られる可能性があり、Hall が提案した分類は絶対的なものではないということである。

先行研究の問題点①から分かるように、日本語とアラビア語の断り発話には大きな違いがあることを示した。それらの違いは文化の違いによるものと思われる。しかし、Hall によれば、アラブ人は日本人と同様に高コンテキスト文化である。しかし、発話行為が文化とかけ離れたものではなく、文化から生まれるものだと考える。従って、アラブ人は日本人と同様に高コンテキスト文化にすることには問題があると考えられる。また、アラブ人が共通の言語を母語としても、必ずしも同じ文化背景を持つとは限らない。従って、本研究では、Hall の理論を引用しながら、日本語とアラビア語は同様の高コンテキスト言語であることに対して、批判的な立場を取る。そして、言語によるコミュニケーションに着目し、日本語とアラビア語の文化的背景の違いが、2 言語で使用されるコミュニケーション様式にどう反映されるかを明らかにする。

1.3.6.2 コミュニケーション様式について

八代・町・小池・吉田(2009)は、コミュニケーションは常にコンテキスト（文脈）と称される、物理的、社会的、人間関係上の具体的な状況や場で起こり、文化によって、規範とされるコミュニケーション・スタイルが異なると指摘している。また、言語使用に現れるコミュニケーション・スタイルとして、6つの様式を対にして、以下の3つのグループに分類している。表1-2は、これらの様式をまとめたものである。

表 1-2 コミュニケーション・スタイル

I	1.螺旋的スタイル
	2.直線的スタイル
II	1.石畳的スタイル
	2.飛び石的スタイル
III	1.人間関係重視
	2.情報重視

I. 螺旋的-直線的

螺旋的とは、自分の意見や主張を明確に言語化しないで、相手に状況を説明し気持ちを伝えながら、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法であり、最後まで結論を言わないスタイルである。

直線的とは、自分の主張や意見を簡潔に表現し、次に主張や意見の背後にある理由を論理的に説明し、相手の理解と同調を求める表現方法である。まず、結論を言ってから、裏付けを加えるスタイルである。

従って、直線的なコミュニケーション・スタイルを用いる人だと、螺旋的な答えに対しては、納得できない。また、八代・町・小池・吉田(2009:86)によると、日本は螺旋的スタイルで、日本人同士であれば、このスタイルが良いが、相手が文化背景の異なる人である場合は、螺旋的スタイルでは真意がなかなか伝わらないと述べている。

II. 飛び石的-石畳的

飛び石的スタイルでは、伝達される情報の内で言葉にしなければならない部分だけが言葉で表明され、状況で理解される部分は言語化されない。話し手が分かりあえるための必要最低限の言葉で済ませ、聞き手は、話し手の本意を察しなければならない。一方、石畳的なスタイルでは、言葉を端折らないで、むしろ言葉をつくして正確に情報を伝達する。これらの事柄は、話し手の責任においてなされる。これは、正確に言葉で説明しないと誤解を招きかねないと思われるために用いるスタイルである。

上記のコミュニケーション様式について、Hall は、両者の違いは、高コンテクスト文化か低コンテクスト文化の違いによって生じると述べている。

III. 人間関係重視-情報重視

八代・町・小池・吉田（2009）は、日本語では、言葉自体の中に人間関係が含まれてしまっていることが多いと述べ、仕事が終わった後に、「ご苦労様でした」と「お疲れさまでした」と社長が言うことに対して、部下は「ありがとうございました」などと言うべきとしている。つまり、目上の相手と目下の相手に対して、同様の言葉扱いができないのが日本語の特徴である。そのために、部下が社長に「ご苦労様でした」と発話したら、人間関係が脅かされるのに対して、英語では、人間関係が異なってもこのような場面では、「Thank you」だけで問題が済むと指摘されている。従って、日本語は人間関係重視のコミュニケーション・スタイルが用いられる。挨拶以外にも、授受動詞では、「あげる」「差し上げる」「やる」と、「もらう」の意味では「いただく」「くれる」「くださる」などのように、話し手と聞き手の人間関係（上下関係、親疎関係など）が表現の選択を決定する大きな要因として働く。従って、日本語では言葉遣いによって話し手が目上なのか、目下なのか、親しい相手なのか、そうでないのかが予測できる。一方、アラビア語では、英語のように「あげる」の意味で上下関係や親疎関係を問わず「yoāty」という動詞が使用され、「もらう」も「akhaza」という動詞が使用される。つまり、日本語のように言葉が大きく変わる様子が見られない。つまり、情報が重視される方が自然であるので、誰が誰に行きを行ったかということより、動詞自体の情報に関わる言葉が重視される。しかし、それは、英語やアラビア語などでは、相手に対する敬意を表さないわけではないが、アラビア語では目上の相手に対し「呼称」が用いられることは、ポライトネスとして位置づけられる。

以上見てきたコミュニケーション・スタイルの中では、どのようなスタイルが用いられ

るかは、各々の文化の価値観²⁷や、思想などで決まると指摘されている。しかし、それらの6つのコミュニケーション・スタイルがマクロ的なものであり、ミクロ的な側面を決定するのは、「話し手と聞き手の人間関係」や、「場面の内容」、「個人の性格」などが挙げられる。このことから、特別な発話行為を取り上げ、ミクロ的要因の観点から分析すると、言語にはそれらの6つのコミュニケーション・スタイルのみではなく、異なるコミュニケーション・スタイルも存在することが予想できる。

また、久保・八島（2012）は、コミュニケーション学や社会言語学で類型化してきたコミュニケーション様式の中で最も代表的なものとして以下の3つの様式をまとめている。

- ① 自己開示コミュニケーション
- ② 高文脈型と低文脈型
- ③ 直接的と間接的コミュニケーション

上記の3つの様式が、八代・町・小池・吉田（2009）がまとめた様式と共通している点が見られる。具体的に以下で詳しく論じる。

自己開示コミュニケーションは、どれだけ自ら自発的に自分の状況や気持ちなどに関する情報を具体的に人に説明するかに関わるものである。つまり、自己開示の度合いが高いことは、「情報重視」コミュニケーション様式を用いることに当たると考えられる。また、高文脈型と低文脈型は、1.3.6.1節で論じたHallの高コンテクストと低コンテクストに相当するものである。そして、直接的と間接的コミュニケーション様式は、「直線的」「螺旋的」コミュニケーション様式に相当し、直接的に命題内を述べるか、間接的に命題内容を述べるかの使い分けであると言える。

本研究では、これらのコミュニケーション様式を用いて、日本語とアラビア語の断り発話を分析し、新たな分類方法を提案することも試みる。

以上、本研究で扱うコンテクスト重視と表現ストラテジー重視に関する理論的枠組みを紹介した。

²⁷ 価値観とは、何が正しく何が間違っているか、何が美しく、何が醜いと思うのかなど、何にどのような価値を置くのかという評価の基準となるものであると同時に、行動の指針となる（八島・久保 2012:70）。

1.4 本論文の構成

本論文における各章の概要は以下のとおりとなる。

第1章「研究背景と目的」では、まず本研究の位置づけ、研究背景及び研究目的について論じる。具体的には、先行研究に残された課題を紹介しながら、解決法を検討する。さらに、本論文における問題の所在として、研究対象とする「断り」の発話行為に関する先行研究の問題点や、未だ十分に言及されていない言語現象について詳しく論じる。また、語用論においてポライトネスと関わる諸理論や、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の差異に関わる主な先行研究を概観し、それらの問題点と有効性を詳しく検討した上で、本研究の理論的枠組みを紹介する。

第2章「研究方法」では、本研究におけるポライトネスの捉え方及び、研究対象とする「断り」発話の定義について詳しく論じる。そして、第1章でまとめた先行研究の問題点をどう解決していくか、詳しく記述した上で、研究課題と研究方法を述べる。

第3章「異文化間語用論の観点から見た断り発話」では、文化的差異や、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の差異に関して先行研究の理論を引用し、日本語とアラビア語の断り発話に見られる文化の違いや、それが反映するコミュニケーション・スタイルの違いについて検討した上で、両言語の異なりを明らかにする。また、文化的差異とコミュニケーション様式の差異が、どのようにポライトネスと関わっているのかを考察する。

第4章「配慮表現の観点から見た断り発話」では、表現レベルの観点から、第3章で明らかになった日本語とアラビア語の文化の違いやコミュニケーション様式の違いが、表現形式にどう反映されるかを検討する。つまり、大きい単位である談話から小さい単位である表現形式へという方法で研究を行う。第4章では主に、断り発話の中で、発話者の事情に当たる「理由説明」の意味公式に着目し、日本語とアラビア語の断りを正当化するメカニズムの違いを明らかにする。

また、配慮表現と思われる表現形式を提示し、それらが配慮表現として機能するメカニズムを明らかにする。特に、本研究では程度副詞に注目して、どのように対人的機能を果たすのか、日本語とアラビア語の断り発話に見られる程度副詞の違いを、意識調査を通して、ポライトネスと異文化間語用論の観点から解明する。具体的には、文化的差異と配慮表現の原理の観点から、新たな調査方法を作成し、配慮表現と思われる表現形式を客観的に明らかにする。第4章では、主に日本語母語話者とアラビア語母語話者を対象に選択式

の意識調査を行う。客観性を高めるため、意識調査を行った上でフォローアップインタビュー調査も行う。

第5章「断り発話に見られる配慮表現の原則について」では、Beebe et al.(1990)の意味公式と、B&L(1987)のポライトネス理論、Leech(1983)のポライトネス原則、山岡・牧原・小野(2010)の配慮表現の原理を引用し、各意味公式に見られる配慮表現の原理を明らかにする。つまり、「理由」の意味公式に限定せずに、日本語とアラビア語の断り発話に見られる配慮表現の原理を明らかにする。そして、最後に断り発話における新たな分類単位として、意味公式と配慮表現の原理の関連性について論じた上で、分類表を作成する。

第6章「中間言語語用論の観点から見た断り発話」では、日本語学習者の日本語の断り発話に見られるコミュニケーション様式の特徴を探り、学習者の問題点を明らかにする。具体的に学習者が日本語の断りにおいて適切なコミュニケーション様式や適切な表現を選択するのか、目標言語母語話者と良好な人間関係を築くための能力を持つのかについて、初中級レベルの学習者を対象に調査を行う。そして、談話完成テストや、ロールプレイ調査、意識調査など様々な調査方法を通して、学習者と母語話者の違いを明らかにする。

第7章「本論文のまとめと今後の課題」では、第3、4、5、6章で論じた問題をまとめ、今後の課題を述べる。

第2章 研究方法

2.1 本研究の考え方

2.1.1 本研究における「断り」とは

本研究では、断りとは「聞き手によって、提案された行為を拒否する発話行為」であり、「典型的な FTA の 1 つである」（山岡・牧原・小野 2010:164）とする。断り発話の目的と語用論的条件は以下のとおりである。

目的：参与者 A の発話内容を参与者 B が受け入れないこと。

語用論的条件：

- ① 当該行為が参与者 B の意志によってなし得る行為であること。
- ② 参与者 B が当該発話を行うことを参与者 A は欲していないこと

用例：「駅まで迎えに来てくれないか」「今、取り込んでるんだよ」

(山岡・牧原・小野 2010:130)

第1章で論じたポライトネス理論や配慮表現の観点から、研究対象となる「断り発話」とは何かについて考えると、以下のようにまとめることができる。

Grice (1975) の会話の協調の公理では、「量の公理」(Maxim of Quantity) は、要求された情報を与えることであり、要求された内容以上に、情報を与えないことである。それを「断り」発話に当てはめると、話し手(依頼者、勧誘者など)が知りたい情報は、聞き手が答えてくれるかどうかによるが、聞き手が(断り手)「お断りします」や、「いいえ、行きません」などのように遂行動詞を用いて、答えることは通常しないだろう。要するに相手との人間関係を維持するには、「共感」「関係維持」「具体的な理由説明」などが提供される。従って、実際の断り発話では次のような例が見られる。

(1) 学生：asfa msh ha`dar aroh ăshan kharga maă babaya we hanzor had arebna.

(すみません。行くことができません。お父さんと一緒に出かけます。そして親戚を尋ねて行きます。)

(「謝罪」+「直接的断り」+「理由」)

このように、依頼者側、勧誘者側は、なぜ相手が断るのかを知りたい可能性があり、断り手自身も、せつかく誘ってきた相手のことを思いやって、正当な理由があつて断らざるを得ないことを主張する場合もある。また、日本語では、「また今度ね」のような「関係維持」表現や、「一緒に行きたかったのに」のような「共感」表現も使用されることが多い。このような表現またはこのような情報は、相手との人間関係を良好に保つために用いられるものであり、重要な情報である。つまり、「断り」発話において「量の公理」に違反することでむしろポライトな表現ができる場合もある。

また、B&L (1987) は直接断りについて言及していないが、ポライトネス理論から考えると、「断り」発話では話し手が聞き手のポジティブ・フェイスを脅かすと同時に、話し手自身（断り手）の「相手に好かれたい、評価されたい」というポジティブ・フェイスも脅かされる言語行動と言える。そして、相手の欲求（「依頼」、「勧誘」）に応えられず、拒否する行動自体がネガティブ・ポライトネスではあるが、「断り」行為を行う際に、邪魔されたくない、立ち入られたくないという意味で相手の欲求に応えられずに断る言語行動は NPS、相手との人間関係を保つための言語行動を行うことは PPS となる。つまり、ネガティブ・ポライトネスである「断り」行為を行いつつ、PPS を用いることによって「断り」の FTA を軽減できると思われる。

本研究では、断り発話とは、断り手に行動の決定権があり、行動することを拒否することによって依頼者または勧誘者が期待していた利益を奪うものと考えられる。従って、断り手は良好な人間関係を維持するため、自分の断りを正当化するストラテジーを用いる必要がある。ただし、断り発話を正当化するメカニズムが言語・文化背景や社会的通念など様々な要因によって異なると考えられるため、日本語とアラビア語の両言語における「断り」の正当化のメカニズムには、同様な点があれば、異なる点もあろう。本研究における正当化のメカニズムとは、以下で詳細に述べる。

2.1.2 本研究における正当化のメカニズムとは

言語学における「メカニズム」には2つのアプローチがある。1つ目は、「言語の変化」、であり、「言葉の変化がいつ、どこで起こり、どのように社会に拡散していくのか、またその変化の要因としてどのような理由があるのかを、民族、性、年齢、価値観などの関連

から特定すること（三宅 2010:203）」である。2つ目のアプローチは、認知言語学や語用論の分野で広く使われており、言語情報の伝達、談話構造、認知プロセス、言葉の仕組みなどといったメカニズムを解明するものである。

本研究で考えるメカニズムは後者に含まれていると考えている。具体的に、断り発話におけるマクロ的、及びミクロ的側面の双方の観点から、断り手がどのような仕組みで自分の断りを正当化するのか、どのように自分の断りに対し、他者から納得が得られるかというメカニズムを解明する。ここで言う仕組みとは、コミュニケーション・スタイル、配慮表現の原理、談話構造を指すものである。

また、本研究で言う正当化とは、「他人の利益を奪うことにつながる断る行為によって生じる人間関係の損害を避けるための戦略のことであり、具体的に断り手はどういったメカニズムによって、自分の行為を正当し、他者と良好な人間関係を維持するのかの方法」と定義する。

2.1.3 本研究におけるポライトネスの捉え方

ポライトネスとは、「会話において、話者と相手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮して円滑なコミュニケーションをはかろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念である」（山岡・牧原・小野 2010:67）とする。

ポライトネスは、普遍的なものではなく、文化や社会的通念、コミュニケーション様式の差異によって、異なるものだと考えられる。牧原（2012:3）は、「これまで、ポライトネス理論は個別言語を超えた普遍性が強調され、個別言語の背景にある文化的差異は十分に考慮されてこなかった」と言う。

また、八島・久保（2012:94）によると、「言語によるコミュニケーションでは、言葉の意味内容だけでなく、どのように伝えるか、つまりコミュニケーション・スタイルが、メッセージを解釈する上での枠組みやヒントとなるため、異文化間のコミュニケーションでは、スタイルの違いが時に誤解やコミュニケーションの破たんを引き起こす原因となる」ことを指摘している。つまり、我々の現実が文化と切り離せないものであり、文化が引き起こすものであると言える。従って、語用論²⁸に関わるポライトネスや、配慮表現、丁寧

²⁸ 語用論とは、「言語学の諸部門のなかで、発話の効力が発生するメカニズムを探求する部門である」（山岡・牧原・小野 2010:11）

さなどが普遍的な概念ではなく、文化や価値観、コミュニケーション様式の差異に関わる異文化間語用論と密接な関係にある。

異文化間語用論とは、異なる文化的背景を持つ言語使用者によって遂行される言語行為の研究であり、文化の違いが言語コミュニケーションにどのように反映するのかを語用論の枠組みを用いて研究する分野である。また、異文化間語用論で研究されている語用論の特徴は、中間言語²⁹語用論における中心的な研究課題でもある。そのため、異文化間語用論の知見は、中間言語語用論に対して多くの有益な示唆をもたらしている(清水 2009:61)。しかし、これまでに行われて来た「断り」発話に関する対照研究では、文化的背景の異なる2つの言語が対象とするものの、主に談話展開や、意味公式の出現順序、出現率、ポライトネス・ストラテジーなどの違いに焦点が当てられて、文化的差異についてほぼ言及されてこなかった。つまり、個別言語の中でどのようなポライトネス・ストラテジーが使用されるのかを明確にすることに限定され、なぜこのように特定のストラテジーが好まれるかについての、根本的な原因は不明であった。従って、本研究では、先行研究の問題点をふまえて、異文化間語用論の観点から断り発話におけるポライトネスと配慮表現の特徴を探り、日本語とアラビア語両言語のコミュニケーション様式の差異を明らかにする。そして、それが両言語において使用される配慮表現及び、ポライトネスと配慮のメカニズムにどう反映されるのかについて考察する。いわゆる大きい単位である談話から、小さい単位である表現形式に移行することにより、各々の言語に用いられる談話様式の違いが、ポライトネスや配慮表現に与える影響も観察できると考えられる。

断り発話に関する従来の先行研究では、主にある言語現象を1つの理論に当てはめて、分析しているものが多い。特に、B&L (1987) のポライトネス理論と、Beebe et al. (1990) のいずれかの理論を用いて分析されるものが非常に多く見られる。しかし、本研究では、1つの理論のみに依存すると、言語現象を徹底的に記述しつくせないと考えられるため、両言語の断りを徹底的かつ包括的に記述できるよう、ポライトネスと配慮表現に関わる主な理論を用いて、具体的に両言語の違いを明らかにする。詳しく述べると、まず文化的差異について、Hall (1976) の文化とコンテキストの概念と、八代・町・小池・吉田 (2009) と八島・久保 (2012) がまとめたコミュニケーション・スタイルを参考にしながら、断り談話に見られる特徴を明らかにする。そして、ポライトネスと配慮表現に関わる主な先行

²⁹ Selinker (1972) が最初に提唱した概念である。中間言語体系を母語にも目標言語にも属さない中間的で流動的な言語体系であるとされている。

研究のうち、特に Lakoff(1973)、Grice(1975)、Leech (1983) のポライトネスの原則、B&L (1987) のポライトネス理論、山岡・牧原・小野 (2010) の配慮の原理を参考にしながら、アラビア語固有のポライトネスと配慮表現の原則及び、日本語の断り発話に見られるポライトネスと配慮の原則を提示する。

談話レベルの観点から、断り発話を構成する要素を意味公式の分類単位で分けた上で、各意味公式と配慮表現の原理の関連について考察し、両言語に見られるポライトネスと配慮表現の原則を比較する。特に、表現方法の問題に関わる原則を中心に提起して分析する。これは、表現の問題を明らかにすることにより、個別言語に見られる配慮表現を予想できる点で優れていると考えられるからである。そのため、山岡・牧原・小野 (2010) が提示した日本語の配慮表現の原理に倣って、表現方法に着目する。しかし、場合によって、表現方法で記述できない発話もあると考えられるため、このような場合には行動に関わる Leech (1983) のポライトネスの原則のように、行動で記述する。

以下、本研究で扱う理論的枠組みを図にまとめる。

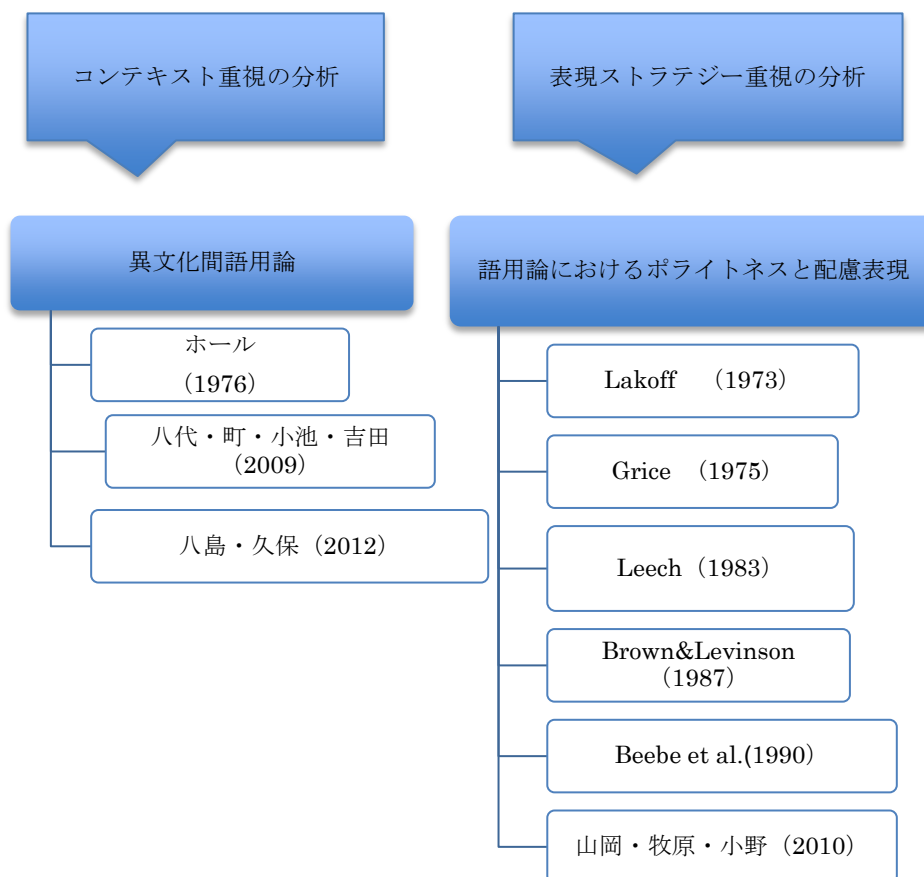


図 2-1 本研究における理論的枠組み

2.1.4 本研究のオリジナリティ

本研究では、これまでになされて来なかった新たな調査方法を作成することで、「断り」発話において新たな視点を加えることを目的とする。主に、本研究で扱う理論的枠組みの中で、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式と、文化とコンテクスト、配慮表現の原理の3つの概念の観点から、断り発話について調査を行う。以下で詳しく述べる。

八代・町・小池・吉田（2009）では、コミュニケーション様式①螺旋的-直線的について、次のように記述されている。前者は、自分の意見や主張を明確に言語化せず、相手に状況を説明し気持ちを伝えながら、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法であり、最後まで結論を言わないスタイルである。一方、後者は、自分の主張や意見を簡潔に表現し、次に主張や意見の背後にある理由を論理的に説明し、相手の理解と同調を求める表現方法である。まず、結論を言ってから、裏付けを加えるスタイルである。

本論文では、アラビア語の断りにおいて、「直接的断り」表現や、断りの理由における協調性の現象は、直線的コミュニケーション様式の特徴の1つだと考える。一方、日本語では程度性の低い副詞の使用と、間接的断り発話の多用が螺旋的コミュニケーション様式の特徴として挙げられる。従って、それぞれの言語母語話者が断られたときには、納得できる表現方法が異なるだろうと推測される。また、ポライトネスと配慮表現の原理の観点から考えると、山岡・牧原・小野（2010）が、日本語の配慮表現の原則の中では、「自己の負担が小さいと述べよ」の原理が働くと指摘したが、問題の所在で述べたように、アラビア語母語話者に事情説明を大きく述べる特徴が見られることから、日本語とは異なる配慮表現のメカニズムが働くのではないかと考えられる。従って、本調査ではアラビア語と日本語の「断り」発話は、果たして同様の高コンテクスト文化・言語なのか、断り発話の中では納得する表現形式や相手への配慮が発生するメカニズムが同様ののかをこれまでになかった新たな調査方法を異文化間コミュニケーションとポライトネスと配慮表現の原理に基づいて作成し検証する。そして、上記の疑問を客観的に検証するため、断り手のみではなく、断られた側（依頼者、勧誘者）の印象を意識調査によって、明らかにする。つまり、話し手による断り発話に対し、断られた側がどのような表現形式で納得を示すのか、どのように断られたら、気持ちよく受け止められるのか、どのように相手との人間関係を維持できるのかの判断を依頼する。なぜなら、従来の先行研究（井出 1986、元 1999）では、異なる発話行為における表現形式の丁寧さ、ポライトネス、配慮の度合いなどは発話者の判断によって決定されるとしている。しかし、発話者が意図する意味と、聞き手の

理解や解釈が必ずしも一致するわけではないと考えられるため、配慮表現やポライトネスを決定するには、聞き手の判断に従う方が妥当であると思われる。

また、八代・小池・吉田・町（2009:48）によると、コミュニケーションでは「意図しない誤解、送り手が意図したことが受け手に必ずしも同じようには伝わらないということが、異文化を引き合いに出すまでもなく、私たちの日常生活でもよく起こる」と言う。つまり、母語話者同士の会話でも誤解や当該発話の解釈のずれが生じることもある。従って、非母語話者同士の場合、伝達される情報の解釈のずれが起こる可能性がより高いと思われる。

以上の調査方法を用いることにより、本研究の疑問①コミュニケーション様式の違い②配慮表現の原理の違い③程度副詞の使用の違いの3つの疑問に答えることができると期待する。調査のキーワードは、各理論から抽出し、(納得)、(負担度)、(配慮の原理)、(程度副詞)の4つとする。

2.2 研究課題

1.2節で論じた先行研究の問題点をふまえて、本研究では以下の3つの課題を設定する。

課題Ⅰ. 問題点①を解決するために、第3章と第4章では、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の違い及び、ポライトネスと配慮表現の観点から、両言語の断り発話を比較し、文化的差異とそれが反映するポライトネスの差異を探る。また、話者の事情に当たる「理由」の特徴を探り、両言語母語話者が自分の断りを正当化するメカニズムを明らかにする。そのメカニズムを客観的に解明するため、断り手のみでなく、断られる側（聞き手）の印象も明らかにする。

課題Ⅱ. 問題点②を解決するために、第5章では、「理由」の意味公式に限定せず、断り発話を構成する各要素に見られる両言語の特徴を探り、断り発話に見られるポライトネスと配慮表現の原理が二言語でどのように異なった働きをするのかを明らかにする。

課題Ⅲ. 問題点③を解決するために、第6章では、中間言語語用論の観点から、日本語学習者の断り発話に見られるコミュニケーション様式の違いや配慮表現の特徴を探り、学習者のレベルが上がるにつれ、断り発話の使用がどのように変化していくかを明らかにする。

また、学習者が使用するコミュニケーション様式と日本語教材に見られるコミュニケーション様式の違いを検討する。

2.3 研究方法

本研究では、DCT (Discourse Completion Test) 調査³⁰によって、両言語母語話者の断り発話を大量に収集し、異文化間語用論と配慮表現の観点から分析する。DCTは「与えられた状況においてどのように言うかを筆記形式で答える手法で、統制されたコンテキストにおいて大量のデータを短時間で集めることができるという利点がある」(近藤2009:77)。しかし、本研究でDCT調査を使う主な理由は、以下のとおりである。

1. 人間の慣習的な考え方を把握し、話者の規範的な意識を言語化したものを分析できること³¹。
2. 日本語とアラビア語の「断り」に関する対照研究は、筆者が行った研究以外、管見の限りないため、大量のデータを収集することが必要であること。
3. 両言語の類似点及び相違点を客観的に解明できるため、同様の断り場面を設定することが重要であること。
4. 断り発話における正当化のメカニズムは、他者との人間関係により、左右されるため、異なる人間関係の種類を設定することが重要であること。

DCT調査では、事前に断りにくさに関する予備調査³²によって、断りやすい依頼・勧誘と断りにくい依頼・勧誘の各2場面を設定し、各場面において「先生」に対する断りと、「親しい友人」、「知り合い」の3種類を設定した。つまり、依頼と勧誘それぞれ6場面、合計12場面となる。調査場面は、以下表2-1にまとめる。

³⁰ 資料IとIIを参照されたい。

³¹ ロールプレイ調査や、自然発話例のデータでは、話し手が聞き手の反応に従い、実際に言いたいことを我慢し言えないときがあるため、断り手が実際にどのように断りたいのか、どのように相手へ配慮を示せるかと思っているのかということ把握できないわけである。

³² 調査詳細は、第4章で詳しく論じる。

表 2-1 調査場面

	依頼場面	勧誘場面
断りやすい	依頼Ⅰ：飲み物の購入依頼	勧誘Ⅰ：食事の誘い
断りにくい	依頼Ⅱ：教材のコピー依頼	勧誘Ⅱ：誕生パーティーの誘い

本研究では先に述べたように、断り手が用いた断り発話に対して意識調査を通して断られる側の印象を明らかにする。聞き手の印象を明らかにすることにより、配慮表現と思われる表現形式（程度副詞、義務を表すモダリティ）が客観的に認定できる。

本研究で扱う調査方法及び、調査対象者、調査目的を以下の表 2-2 と表 2-3 にまとめる³³。

表 2-2 両言語母語話者の調査情報

日本語とアラビア語母語話者			
	調査方法	調査対象者情報	調査目的
第 3 章 、 第 5 章	①DCT 調査データ 数：1,576 例	1.カイロ大学アラビア語学科(60名) 2.筑波大学日本語日本文化を主専攻 の日本人大学生(42名)	断り発話について、両言語母語話者から大量のデータを収集し、両言語の異なりを明らかにする。
	②意識調査(断りにくさ)	1.カイロ大学アラビア語学科(60名) 2.筑波大学の日本人大学生(42名)	各場面において、被調査者が断る際に感じる断りにくさの判断をしてもらい、調査場面を分ける。
第 4 章	③意識調査Ⅰ(選択式のアンケート)	1.カイロ大学アラビア語学科(121名) (女性102名、男性19名)	配慮表現と思われる表現形式(程度副詞)を客観的に認定できるよう、断られる側の印象を明らかにする。

³³ 本論文の調査は、アラビア語母語話者を対象にアラビア語で、日本語母語話者には、筆者がアラビア語を日本語に直訳したものをを用いて調査を行う。

		(原文アラビア語)	
④意識調査Ⅱ(選択式のアンケート)	2.筑波大学日本語日本文化を主専攻の日本人大学生(39名) (女性32名、男性7名) (原文日本語)		
⑤意識調査Ⅲ(選択式のアンケート)	1.カイロ大学アラビア語学科(121名) (原文アラビア語)	アラビア語の助動詞「lazem」、配慮表現として、客観的に認定する。	
⑥フォローアップインタビュー調査	1.カイロ大学アラビア語学科(8名) (女性5名、男性3名)	意識調査ⅠとⅢを行った上で、被調査者がなぜこのように選択したかを確認する。	
⑦現代日本語均衡コーパス(BCCWJ)	1.日本語母語話者の会話例	日本語の「ちょっと」とアラビア語の「shwya」の比較を行う。	

表 2-3 日本語学習者の調査情報

アラビア語を母語とする日本語学習者			
	調査方法	調査対象者	調査目的
第 6 章	① DCT 調査 データ数：372 例	カイロ大学日本語日本文学部初中級 レベル(36名) (女性27名、男性9名)	断り発話について、学習者から大量のデータを収集する。
	② ロールプレイ調査 データ数：288 会話	カイロ大学日本語日本文学部初中級 レベル(36名)	DCT 調査の結果を確認し、学習者の会話の特徴を明らかにする。
	③ 意識調査Ⅳ (アンケート調査)	カイロ大学日本語日本文学部初中級 レベル(36名) (女性30名、男性6名)	学習者が母語から影響されているのか、日本語母語話者とどう異なるかを確認するため、母語話者に行った意識調査Ⅱと同様の調査を行う。
	④フォローアップ	カイロ大学日本語日本文学部初中級	意識調査Ⅳを行った上で、被調査者が

インタビュー調査	レベル(36名)	なぜこのように選択したかを確認する。
インタビュー調査	カイロ大学日本語日本文学部中級レベル(5名) (女性3名、男性2名)	会話の授業を担当するカイロ大学の先生がどのような指導法を行うのか、学習者が会話の能力を育成するのに、どのようなストラテジーを用いるかを訪ねる。その理由は、初級レベルの日本語学習者がなぜ、中級レベルの学習者より、教材に沿った発話を行えるかを明らかにする。

2.4 本研究の意義

ポライトネスと配慮表現は普遍的なものではないが、文化や言語、コミュニケーション様式の差異によって異なる概念だとすれば、日本語とアラビア語は、どこがどのように異なるのか、これまでに指摘されてきたポライトネスと配慮表現の原則だけで個別言語を記述できるのかなどの様々な疑問に答えることが重要である。従って、本研究ではこれまでに考慮されてこなかった要因を念頭に置き、日本語とアラビア語両言語の背景にある文化的差異を出発点として断り発話を研究することは、新たな視点を取り入れ、オリジナリティのある結果を示すことができると考える。また、本論文では異文化間語用論とポライトネスと配慮表現を基に作成するオリジナルの調査方法を採用することにより、文化的差異に見られるコミュニケーション様式の違いとポライトネスとの関わりを明らかにすることができると、独自性の強い研究となる。

一方、日本語の「断り」について多くの先行研究があるものの、「断り」における配慮表現の原理に関する研究は未だ不十分であるため、記述しきれない現象があるという問題もある。また、アラビア語に関して述べると、語用論の分野に焦点を当てた先行研究が非常に少なく、日本語との対照も見られないのが現実である。それは、アラブ世界では日本語教育に関わっている研究者の人数が非常に限られているため、これまでに行われて来た日本語とアラビア語の対照研究がほとんど文法論、意味論、統語論、音韻論などの分野に関わるものであったことによる。語用論におけるポライトネスや配慮表現の研究が管見の

限りなく、本研究が語用論の分野における配慮表現やポライトネスの観点から、日本語とアラビア語の断り発話に着目した最初の研究であると言える。ここ数年、語用論の分野における研究が増えてきており、日本語とアラビア語の「謝罪」や「依頼」などの発話行為についての研究も見られるようになった。とはいえ、アラビア語と日本語のポライトネスと配慮表現について参考となる研究は、未だ不十分であるため、確固たるものがない。そこで、本研究で、アラビア語と日本語の背景にある文化的差異や、それによって生じるポライトネスと配慮表現の差異について研究を行うことにより、両言語に見られる異なりを明らかにし、今後の研究に貢献できる新たな情報を提供できると期待している。

さらに、本論文では異文化間語用論におけるコミュニケーション様式について考察した上で、語用論におけるポライトネスと配慮表現の観点から両言語の配慮表現や相手へ示す配慮のメカニズムの違いを明らかにすることで、新たな視点を加えることにもなる。

本研究ではアラビア語という個別言語を分析することによって、アラビア語の断り発話にはどのような配慮表現が使用されるのか、日本語の配慮表現の原則がアラビア語にも対応できるのか、そして、日本語の断り発話には、どのような配慮表現の原理が有効に働くのか、アラビア語とはどう異なるのかなどの様々な疑問に答えるものである。これらの疑問を解くことによって、アラビア語を母語とする日本語学習者の問題点を解明し、学習者と母語話者の違い、学習者にどのような転移が見られるのかも推測できるという日本語教師にとって欠かせないデータを提供することが可能となる。これによって、早い段階で学習者の問題点を解決できる可能性もあろう。また、アラビア語を母語とする日本語学習者のみではなく、アラビア語を第2言語として学習する日本語母語話者にとっても、アラビア語母語話者と良好な人間関係を築き、スムーズにコミュニケーションを行うための重要な知識も与えられる。さらに、日本語の「断り」発話に見られる配慮表現の原理を明らかにすることによって、日本語教育に貢献できる重要なデータを提供し、新たな指導法を提案することにもつながるのではないかと考える。

本研究は、これまでの先行研究では用いられたことのない調査方法で、文化的差異とポライトネスと配慮との関わりを明らかにし、今後の研究に対して配慮表現や丁寧さ、ポライトネスの度合いなど、より客観的かつ妥当的に認定できる見本を提供できることを目指す。

第3章 異文化間語用論の観点から見た断り発話

3.1 本章の目的

本章では、異文化間語用論の観点から、文化的差異に関わる諸理論を概観し、文化とコミュニケーション様式の関わりや、文化的差異とポライトネスとの関わりを探りたい。つまり、異文化間語用論と語用論の結び付きを検討して、モデル化した文化とポライトネスとの関わりを提案することを試みる。そして、日本語とアラビア語の文化的背景の違いを考察し、それらの違いを生む断り発話の違いを明らかにする。

第1章で述べたように、日本語とアラビア語の断り発話においては使用される配慮表現や断りを正当化するメカニズムが異なる。それらの異なりは、それぞれの言語の背景にある文化の違いによって生じたものだと考えられる。従って、それを検証するためには、本章では、これまでに十分に考慮されて来なかった文化的差異と発話行為との関わりからの観点から、筆者が収集したデータ及び、先行研究の断り例文に見られるコミュニケーション様式³⁴の違いを検討する。

本章では、主にアメリカの文化人類学者である Hall (1976) が提唱した「高コンテクスト文化」(文脈依存)と「低コンテクスト文化」(文脈独立)の概念に対して批判的立場を取りながら、異文化間語用論の観点から「断り」の発話行為を検討する。

まずマクロ的な側面を探るため、場面の違いや人間関係の違いを問わず、全体的に日本語とアラビア語によく見られるコミュニケーション様式を探る。理由は、ある特定の文化では規範とされるスタイルと好まれないスタイルがあり、日常的によく用いられるスタイルという傾向を明らかにすることが必要だと考えるからである。しかし、言語は非常に複雑なものであり、日本語では常に1つのコミュニケーション様式が用いられるとか、アラビア語は常に同じ様式が好まれると結論付けるのは妥当ではない。個人差や、相手との人間関係、場面内容の違いなど、様々なミクロ的な要因によって、コミュニケーション様式が異なると考えられる。

³⁴ 先行研究によっては、コミュニケーション・スタイル、コミュニケーション・様式と呼ばれるが、本研究では、コミュニケーション様式とする。

3.2 文化とコンテキストについて

Hall (1976) は、文化の大きな機能の1つとして、現実を認識する際に、文化がそのスクリーン役目を果たすと指摘している。つまり、異なる発話行為に見られる個別言語の特徴が、文化と密接な関係にあり、文化は引き起こすものであると言えるのではないかと考えられる。

初めて文化とコンテキストの関わりについて議論したのは、Hall (1976) である。Hall は、文化によってコンテキストの高低が異なることを指摘し、「高コンテキスト文化」(文脈依存) と「低コンテキスト文化」(文脈独立) の概念を提唱した。これらの概念を通して、ある地域や国などにおける文化的差異、また好まれるコミュニケーション様式が記述され、以下のようにそれぞれの国を分けている。

日本を含む多くのアジア文化(中国、韓国など)、南米、また、アラブ人が高コンテキスト文化であり、ドイツ、アメリカ、スイス、欧米などが低コンテキスト文化とされている。

3.3 高コンテキスト文化と低コンテキスト文化の違い

高コンテキスト文化または言語とは、状況に埋められた情報や、人々が前提として共有している知識への依存度が高いものであるのに対して、低コンテキスト文化・言語が明示的なシンボルによるメッセージへの依存度が高い(八島・久保 2012:96)。

また、石井・北山(2004:243) は、コミュニケーションの形態について次のように述べている。低コンテキスト言語のコミュニケーションでは、基本的に個人が所持しているものとして「情報」が位置付けられている。そこには、正確に他者に情報を伝達しない限り、それを他者と共有することはできない。つまり、発話意図の伝達は、発話者の責任であるという前提が隠されている。言い換えると、情報が重視されるコミュニケーション様式であると言える。一方、高コンテキスト言語のコミュニケーションでは、基本的に他者と共有されているものとして「情報」が位置付けられている。そこには、話者は正確に他者に情報を伝達する必要はなく、むしろコミュニケーションの受け手が文脈的な情報に注意を向け、そこから発話意図を察するべきであるという前提が隠されていることを指摘している。つまり、高コンテキスト言語では、聞き手の推測力や発話意図を読み取る責任が重いものに対し、低コンテキスト言語では、話し手が聞き手に正確に情報を伝達する説明力や、説得力、責任が重いことが分かる。

また、コンテキストの高低の違いにおいて、英語では yes は yes というように、言語が発話意図を直接的に表すことが多いが、日本語での「はい」は、文脈次第でいかようにもとれることが多い（石井・北山 2004:243）。

さらに、西田・グディカンスト（2002）は、言葉が使われる割合が少ないことを高コンテキスト、使われる割合が高いことを低コンテキストと区別している。また、低コンテキスト文化では、コンテキストに依存するのではなく、言語によりコミュニケーションを図ろうとするため、言語に対して高い価値と積極的な姿勢を示し、コミュニケーションに関する諸能力（論理的思考力、表現力、説明能力、交渉力など）が重視されると指摘している。このように、コミュニケーション様式が「コンテキスト依存型」と「言語依存型」に大別できることが分かる。

八島・久保（2012:96）によると、高文脈型スタイル³⁵とは、前提事項、暗黙の了解や、文脈などがコミュニケーションをする人たちに共有されているため、明示的で厳密な言語使用をしなくても理解し合っている状況をさす。一方、低文脈型のコミュニケーションは、その逆で、共通の認知や共有する情報が少ない相手に、正確に物事を説明する必要がある場合である。言い換えれば、関連性理論の観点から指摘されるように、「話者と聴者の意識上にあるものが、同一の物、あるいは、想起しやすいものであれば、指示対象が明示的でなくてもコミュニケーションはスムーズになる。」（山岡・牧原・小野 2010:56）ということに当てはまるものだと考えられる。つまり、断り発話を例に述べると、話し手と聞き手の意識上に共有されている情報が同一である場合には、断り手が具体的に断りの事情を説明する必要はないということである。そのために、「今日はちょっと…」や「考えておきます」などのような発話は断りであることが日本語母語話者同士の場合簡単に理解し合えるにも関わらず、日本語非母語話者の場合、解釈において戸惑うことがよくあるのであろう。

八島・久保（2012）は、典型的な「低文脈型」コミュニケーションの例として、法廷での裁判官と証人や弁護士とのやり取りを挙げている。つまり、同じ地域や国の中でも、両コミュニケーション様式が状況により、現れるということである。高コンテキスト様式のコミュニケーションを用いる言語や文化でも、法廷では、具体的な内容や詳しい状況説明が行われることはあり得るわけである。

³⁵ 高コンテキストと同様の意味を表しているが、先行研究により、高文脈型と高コンテキストと使い分けられている。

しかし、このように特定の状況ではなく、一般的にある国や地域で使われるコミュニケーション様式を探るときには、「高文脈型」と「低文脈型」の概念が重要であり、特定の言語使用者が用いるコミュニケーション様式がある程度予想できるものとなる。例えば、八島・久保（2012:97）によると、日本語の言語使用上の特徴が、人間関係のありようなどの文化的特徴と切り離せないことを考えると、同じ状況でアメリカと比較した場合、日本人のスタイルの方が相対的に文脈依存度は高いと言える。

以上のことから、文化的背景の違いを探ることにより、異なる言語・文化背景を持つ話者同士の発話に現れるコミュニケーション様式が想定できるが、その特定の文化の特徴が、絶対的なものではなく、相対的に傾向の違いを予想できるものだと言ってよいのではないかと思われる。

3.4 本研究における高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の違い

以上、先行研究における「高コンテキスト文化・言語」と「低コンテキスト文化・言語」の違いをみてきたが、本研究では高コンテキストと低コンテキスト言語の違いを、以下の図 3-1 から図 3-4 で示した上で、表 3-1 で両コンテキストの特徴や、これらの特徴から予想できる言語現象の特徴をまとめる。

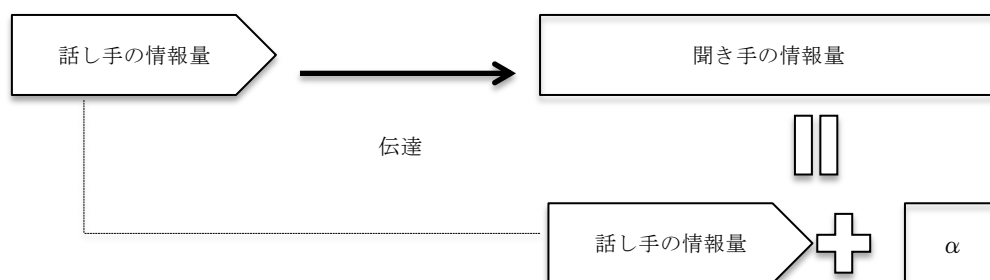


図 3-1 高コンテキスト言語における会話当事者の情報量

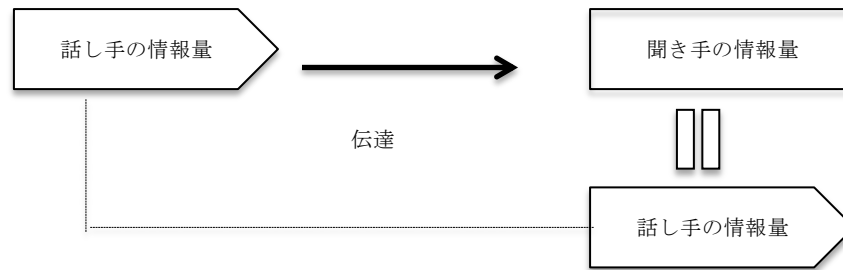


図 3-2 低コンテキスト言語における会話当事者の情報量

上記の図 3-1 と図 3-2 は、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語における会話当事者の情報量を示すものである。「高コンテキスト文化・言語」の場合、話し手（送り手）の情報量が少ない、あるいは完成していない状態でも、伝達のプロセスにおいて、聞き手（受け手）に届く情報量が多いまたは、完成した状態であることを意味している。つまり、話し手の発話に欠けている情報に当たる「結論」や「発話意図」などは、聞き手の推論や推測により完成されるという意味である。一方、「低コンテキスト文化・言語」の場合は、逆に話し手が情報の所有者であり、その情報を自分で伝達しない限り、聞き手に届かないと考えるため、情報伝達の責任が話し手にある。つまり、話し手が所有している情報量がそのまま聞き手に届くため、完成した状態で情報を送るという意味である。換言すれば、話し手の情報の中で発話意図や発話内容の結論などが明確に提示される。それを断り発話を例にとって見ると、以下のようなになる。誘いの断り場面では、次のような例が考えられる。

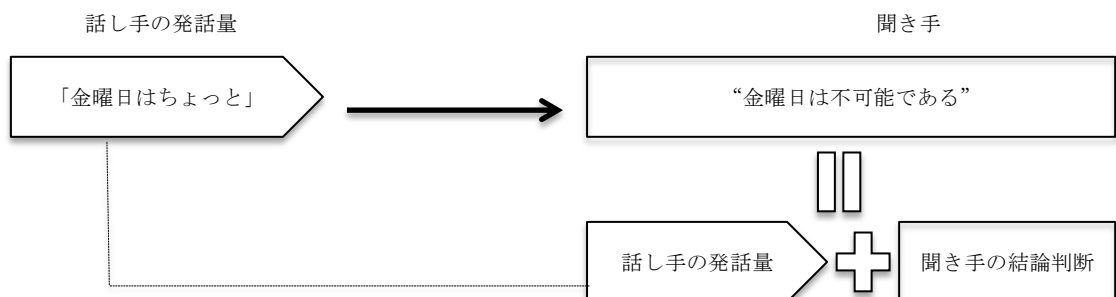


図 3-3 高コンテキスト言語における断り

上記の図³⁶では、聞き手または、情報の受け手が、「金曜日は不可能である」、「できない」、「忙しい」などの断り発話の結論を自分で察するということを表している。一方、低コンテキスト言語では、このような断り方の場合、聞き手が以下のように戸惑うことが予想できるのではないだろうか。

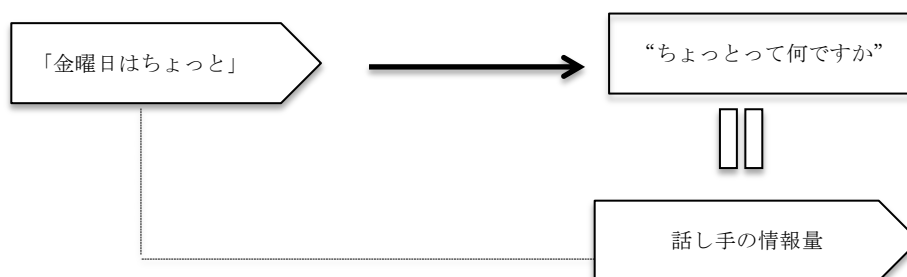


図 3-4 低コンテキスト言語における断り

図 3-4 は、話し手の発話量が、そのまま聞き手に届くため、「金曜日はちょっと」という話し手の断りに対して、聞き手が結論の判断に戸惑い、言葉が持つ本来の意味で解釈し、結論を求めることが予想される。

以下の表 3-1 は、先に述べたように、筆者が考える高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の特徴や、それらの特徴から予想される言語現象の特徴をまとめたものである。

表 3-1 高コンテキスト・低コンテキスト文化・言語の特徴

高コンテキスト文化・言語コミュニケーションの特徴
<p>聞き手の能力を期待するために下記のような傾向が見られる。</p> <p>直接的表現より、間接的表現や緩和表現を好む (モダリティの使用)</p> <p>曖昧な表現が多用される (言い差し文など)</p> <p>言語化に対して積極的ではない</p> <p>人間関係が強く重視される</p> <p>文脈依存度が高い</p>

³⁶ 図内の「 」は発話を、“ ”は心内発話を示す。

<p>情報が本来会話当事者に共有されている</p> <p>聞き手の推測力、結論を判断できる能力が求められる</p> <p>聞き手の負担度が高い</p>
<p>低コンテキスト文化・言語コミュニケーションの特徴</p>
<p><u>話し手の能力</u>を期待するために下記のような傾向が見られる。</p> <p>発話意図の伝達が話し手の責任にある</p> <p>直接的で分かりやすい表現が多用される</p> <p>言語に対し、高い価値と積極的な姿勢を示す（具体的な理由説明）</p> <p>明示的な表現を好む（直接的な断り）</p> <p>具体的な情報を伝える</p> <p>言語依存度が高い</p> <p>話し手の説得力、説明力、論理的説明力が求められる</p> <p>話し手の負担度が高い</p>

以上見てきたとおり、文化的差異が発話行為の研究との関わりが深いことが分かる。

Nader(2009)によると、異文化社会による特定の発話行為を研究対象にすることは、その言語の背景にある文化及び、その文化において好まれるコミュニケーション様式も理解することができる点で優れている。つまり、2つの異なる言語における特定の発話行為を対照することによって、両言語の文化の違いも見られるということである。それは、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の違いと、発話行為の研究がかけ離れたものではなく、常に関係し合うものであり、文化の特徴が発話行為に反映されると考えられるからである。従って、発話行為やポライトネスなどについて研究する際に、文化的差異に注意を向けることが重要であり、2つの言語がどのように異なるかということに留まるのではなく、なぜこのように異なるかも明確にすることによって、優れた研究ができると思われる。従って、本章では、日本語とアラビア語の断り発話には、どのような文化的差異が見られるのか、両言語においてどのようなコミュニケーション様式が好まれるのかについて検討した上で、それが反映する配慮表現の違いを明らかにする。

3.5 日本語とアラビア語のコミュニケーション様式の差異について

先行研究の問題点①で述べたように、Hall (1976) では、日本とアラブの国々が高コンテキスト文化であると指摘され、その後 Hall の理論を引用し同じ指摘をした先行研究として、アル・オマリ (2008)、岡田 (2006)、八島・久保 (2012)、Zahrana (1995)などが挙げられる。

確かに、アラブ人の母語はアラビア語であることが共通点として挙げられるが、文化的背景の面から考えると全てのアラブの国々を同様に見ることは問題であると考えられる。特に、言語の面で考えると、それぞれの国々では、特別な方言が存在しており、エジプトはエジプト方言アラビア語、チュニジアはチュニジア方言アラビア語、アルジェリアはアルジェリア方言アラビア語と、それぞれが日常生活において使う口語アラビア語には共通の言葉が存在しても、異なる方言を使っている。そのため、アラブ人同士でも、国によってお互いの方言が分からず、通じないことがよくある。例えば、筆者が日本で知り合ったアルジェリア人と会話したとき、アラブ人同士であるものの、全く通じなかった経験がある。

また、文化的差異について上述したように、発話行為には文化の特徴が現れるはずである。しかし、筆者が両言語の断り発話を対照した結果、第1章で指摘したように、様々な違いが観察された。例えば、両言語は断り発話において理由の使用率が高い点で共通しているものの、アラビア語では具体的な理由（何を、どこで、誰となどと言った情報）や、程度性の高い表現形式が使用されるのに対し、日本語では内容的曖昧な理由（用事があるので、予定が入っていて）が使用され、程度性の低い副詞が多用される。また、アラビア語では、談話開始において直接的断りが使用されることが多いのに対し、日本語ではすべての場面相手（上、親、疎）に対し謝罪で談話が開始される傾向があった。つまり、アラビア語では相手の推測力に頼らず、結論（直接的断り）を出し、その結論を裏付けるものとして、具体的な理由説明を行うため、断定的な言い方が好まれる。一方、日本語では、相手への配慮として、断定的な言い方をできるだけ避けるために、間接的断りや蓋然性、推量のあるモダリティ表現によって断ることが多い（かもしれない、言いさし文、と思う、ちょっと、そうにない）。例えば、発話例として、以下のような「先生」の誘いに対する断り場面で両言語母語話者の応答が挙げられる。

- (1) 学生：すみません。今忙しくて...

(2) 学生 : asfa msh ha`dar aroh āshan waldety āayana w lazem arawah bdry.

(すみません。行くことができません。お母さんが病気なので、早く帰らないといけない。)

(リナ 2013a)

また、エジプト人とアメリカ人の断りと褒めなどの発話行為について、対照した研究 (Nelson・ElBakary・Al Batal 1993、1996、2002) では、両言語母語話者が、同様のコミュニケーション・パターンにおいて、相違点より、類似点が多いことを指摘している。しかし、Hall の理論によると、アメリカは低コンテクスト文化の代表的な例として挙げられている。

上記を踏まえ考えると、アラブ人が日本人と同様に高コンテクスト文化であるにもかかわらず、日本語とアラビア語の断りの発話行為において以上のような違いがなぜ存在するのかが疑問である。本研究では、Hall の理論に対して批判的な立場を取りながら、文化とコンテクストの概念を引用し、両言語の違いを観察する。

以下では、日本語とアラビア語の発話行為に関する様々な先行研究を概観しながら、両言語が同様に高コンテクスト言語なのかを検証する。

Ishii・Bruneau(1988)は、「遠慮 - 察しコミュニケーション・パターンで、高コンテクストである日本文化では、人はコンテクストに依存するため、積極的に言語によるコミュニケーションに参加する必要はない。また、話し手が無意識的に相手(聞き手)や、状況に頼り、メッセージを詳しく説明するのではなく、むしろ簡素化する」(筆者訳)と述べている³⁷。

一方、Nelson・Carson・Al Batal・El Bakary(2002)は、異文化語用論の観点から、エジプト方言アラビア語とアメリカ英語の断りのストラテジーについて対照研究を行った結果、両言語には類似点が多く観察されたと述べているが、相違点としてエジプト人はアメリカ人より、「理由説明」を多用するのに対し、アメリカ人は「関係維持」を多用することが挙げられている。

また、Nelson・ElBakary・Al Batal(2002)では、エジプト方言のアラビア語とアメリ

³⁷ 「the speaker,unconsciously depending on the other person and the communicative situation,simplifies and economizes messages rather than elaborating on them.」(原文)。

カ英語との「断り」発話を対照として、意味公式の出現率に焦点を当てた研究を行った。その結果、エジプト人もアメリカ人も使用率の高い順に「理由説明」「直接的断り」拒否を表す「いいえ」を使用していたと報告している。また、アメリカ人は直接的コミュニケーション様式を好むのに対し、アラブ人は間接的なコミュニケーション様式を好むと多くの先行研究で指摘されているが、このように断りの発話行為を細かく分類すると、同様の意味公式の出現率を示していることが明らかであるため、従来の先行研究で示されるアラブ人の文化についての一般化には危険性があり、談話分析や、特定の発話行為の研究が重要だと指摘している。

このように、文化背景と深く関わる発話行為の先行研究では、エジプト人が直接的コミュニケーション様式を好むことが指摘され、低コンテクスト言語の特徴が多く見られることが分かる。

井出（2006）は、Hall（1976）のコンテクストの議論を深め、さらにコミュニケーション様式の差異が話者の視点の違いによるものであるとしている。つまり、日本語は高コンテクスト文化であるため、「話し手は自分自身がコンテクストの一部であるのでコンテクストに埋もれた視点で場の情報を読み取る」と述べ、高コンテクスト言語では必然的にプラグマティック・モダリティ³⁸が豊かなのに対し、低コンテクスト文化・社会で話すときには、プラグマティック・モダリティは比較的少なくて済むと指摘している（井出 2006:31）。

例えば、以下の例文はコンテクストの高低がどのように言語形式に反映されるかを示すものとして挙げられる。

日本語では、「今日は土曜」という命題内容を述べるには、以下のように様々な談話ができる。

- (3)今日は土曜日だ。
- (4)今日は土曜日です。
- (5)今日は土曜日でございます。
- (6)Today is Saturday.

(井出 2006:34)

³⁸ プラグマティック・モダリティとは、話し手の判断、物事の捉え方、気持ちなどといった心的態度を発話の場に応じて示す表現のことである（井出 2006:31）。

上記の例文をアラビア語にすると、以下のようになる。

(7) elnaharda elsabt. (作例)

今日 土曜日

例文から分かるように、日本語では、命題内容を表現するだけでは不十分であるため(井出 2006:58)、文脈的情報により、話し手が言語形式を選択し、文を指標することが義務的である。一方、アラビア語は英語と同様に、話し手が情報内容そのものを重視するため、命題内容を客観的に捉え、無標でも文が成立する。つまり、相手が先生であれ、親しい友人であれ、お客様であれ、上記の命題内容を述べる際には、1形式のみである。

以下は、筆者が収集した断り発話に見られる日本語の特徴的な言語現象が、井出(2006)が指摘したコンテキストとの関わりを示すものであると思われる例である。

(8) (食事の誘い)

学生：そうなんですか。ぜひ行きたいんですが、今日は別の用事が入ってしまっていて。
せっかく誘っていただいたのにすみません。

(9) (誕生パーティーの誘い)

親しい友人：そうなんですか。ぜひ行きたかったけどその日は用事が入っていて行けないですね。誘ってくれてありがとう。

以上のように日本語の断りでは、相手との人間関係によって、話し手の心的態度を表す言語形式が使用され、コンテキストへの指標が義務的に異なってくると言える。しかし、同様の高コンテキスト言語と指摘されるアラビア語の「断り」発話では、以下のように「先生」と「親しい友人」への断り発話が見られる。

(10) (食事の誘い)

学生：maālsh ya doctor ana asef āndy zorof msh ha`dar aroh m3ako.

(ごめんなさい先生、すみません 事情があって、一緒に行くことができません。)

(11) (食事の誘い)

親しい友人 : la msh ha`dar aroh măako āshan harawah elbet.

(いいえ、一緒に行くことができません、家に帰るので。)

アラビア語では、相手への敬意が呼称や、謝罪表現で表され、親しい友人への親しみなどが、直接的断りや、理由説明などで表明される。言い換えると、人間関係の相違や場面の改まりなどが、モダリティやスピーチレベル³⁹によって日本語ほど指標化されず、言語内容そのものがより重視されるだろう。

このように、日本語では、話者の視点がコンテキストに置かれるため、命題内容に対する話し手の心的態度や、相手との人間関係の使い分け、場面の改まりの程度などが言語形式として指標化されるのに対し、アラビア語では言語内容そのものが重視されることが分かる。

3.6 コミュニケーション様式の種類

本節では、「本章の目的」で述べたように、八島・久保 (2012) と、八代・町・小池・吉田 (2009) がまとめたコミュニケーション様式を引用し、日本語とアラビア語の断り発話に見られるコミュニケーション様式を記述する。

八島・久保 (2012) によると、コミュニケーション学や社会言語学において、様々なコミュニケーション様式を類型化してきたが、その中で最も代表的なものとして以下の3つのコミュニケーション様式を挙げている。

- ① 自己開示のコミュニケーション
- ② 高文脈型と低文脈型コミュニケーション・スタイル
- ③ 直接的と間接的コミュニケーション・スタイル

そのうち②の高文脈型と低文脈型コミュニケーション様式とは、先に説明した Hall (1976) の理論のことである。一方、八代・町・小池・吉田 (2009) は、言語に現れるコミュニケーション様式として、以下の3つの様式をまとめ、各様式の中で2つの異なっ

³⁹ スピーチレベルとは、場面や会話の相手をめぐる話者の認識が表示された言語形式のレベルのことである (三牧 2013:72)。

た傾向を表す様式を挙げている。

- ① 螺旋的—直線的
- ② 飛び石的—石畳的
- ③ 人間関係重視—情報重視

以下で、これらの様式を具体的に記述した上で、断り発話を分析する。

3.7 コミュニケーション様式と断り発話との関連

3.7.1 八島・久保（2012）

3.7.1.1 自己開示のコミュニケーション

八島・久保（2012:94）は、自己開示のコミュニケーションについて次のように述べている。

自己開示とは、「自分についての情報をどの程度人に意識的に開示するかということである」。つまり、会話の中で、自分の好みや自分が置かれている状況、悩みなどをどの程度詳しく相手に話すかの問題である。そして、当然ながら自己開示の度合いが、相手との親しさの度合いや人間関係によって異なるとも指摘されている。また、八代・荒木・樋口・山本（2001:46）は、自己開示は自分から自分のことを相手に話すと定義し、積極的に話すことがポイントだと述べている。また、「日本人には自己開示は、自己主張や自慢に聞こえるので、一般的な話題を好み、気分のことはかなり曖昧な表現で済ませようとする」（八代・荒木・樋口・山本 2001:47）

自己開示を、本研究の焦点となる断り発話の「理由」に当てはめてみると、自己開示は断り手がどの程度自分の事情を詳しく相手に説明するかの問題と関わると思われる。第1章で述べたように、アラビア語の断りでは、具体的理由説明や、「理由」を程度性の高い表現形式で修飾するなどのような現象がある。つまり、断り発話において自己開示の度合いが高いという特徴が見られる。

三牧（2013:191）によると、自己開示は自らのポジティブ・フェイス欲求を満たし、また情報要求によって相手への関心を示すことは相手のポジティブ・フェイス欲求を満たす行為ともなる。つまり、断り発話の中で断り手が自分の事情を詳しく説明することは、（他者に好かれない、評価されたい、悪く思われたくない）など自らのポジティブ・フェイス

欲求を満たす戦略であると言える。例えば、筆者が収集したデータでは以下のよ
うな例が多く観察された。

(12) 先生 : bād elmohadra matekhlās hanokhrog nakol koshary maā bād kolna eh
ra`yak matygy māana.

(授業が終わったら、みんなでコシヤリを食べに行く。一緒に来ませんか。)

学生 : maālsh msh ha`dar agy māako laeny rayha maā omy meshwar mohm khales

(ごめんなさい、一緒に行くことができません、お母さんととても大事な用事が
あり、一緒に行きます。)

(「謝罪」 + 「直接的断り」 + 「理由」)

(13) 親しい友人 : maālsh momkn atlob mnak talab .momkn tesawarly elwaraa` btaā
mohadret embareh el ghbt fyha.

(ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席した授業のプリントをコピーして
くれる。)

あなた : msh ha`dar elnaharda āshan waraya haga fy elmohadra dy lsa
mahaddartahash.

(今日できません。今の授業のためにやることがあるけど、まだ準備が終わっ
ていないから。)

(「直接的断り」 + 「理由」 + 「理由」)

例(12)と(13)から分かるように、断り手が「先生」であれ、「親しい友人」であれ、自分の置
かれている状況を具体的に説明し、相手から断りの了解を得ようとしている。つまり、アラビ
ア語では、断り手が自己開示の度合いを高くすることは、相手に同調を得る手段とも言える。

一方、八島・久保 (2012) によると、従来の先行研究において、日本人はアメリカ人と比
べ、自己開示の度合いが非常に低いと述べている。そこで、以下は筆者が収集した DCT のデ

一タから日本語母語話者が断る際に、どの程度自己開示をするか、つまり、どの程度自分の事情を詳しく話すかを見してみる。

(14) 親しい友人:今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた:そっか。めっちゃ行きたいけど、今日は別の用事が入ってるわ。ごめんね。楽しんできて。

(「共感」+「理由」+「理由」+「関係維持」)

(15) 親しい友人:来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てくれない。

あなた:ごめん。その日は用事があるんだよね。また今度誘ってね。

(「謝罪」+「理由」+「関係維持」)

例(14)と例(15)においては、親しい友人の誘いを断る際に、詳しい状況説明がなく、内容的に曖昧な理由が使われている。つまり、日本語母語話者は、アラビア語母語話者と比較すると自己開示の度合いが低いと言えよう。

3.7.1.2 高文脈型と低文脈型コミュニケーション・スタイル

Hall (1976) の理論で提唱されたように、高文脈型スタイルでは、文脈の依存度が高く、会話当事者が情報を共有しているかのように、完全な情報がなくても似た解釈ができるわけである。つまり、発話者が不完全な情報を提供しても、聞き手が意図を読み取ることで情報を完成する。よって、断る際に、間接的ストラテジーを用いることが可能になる。一方、低文脈型コミュニケーション・スタイルでは、直接的に、情報をできる限り完成した状態で聞き手に提供するものである。例えば、上記の例(12)と(13)は、情報を完成した状態を表すものであるのに対して、例(14)と(15)は、不完全な情報を提供する例でもある。

3.7.1.3 直接的と間接的コミュニケーション・スタイル

八島・久保（2012）は、直接的と間接的なコミュニケーション・スタイルについて、断り発話を例に以下のように記述している。

直接的なコミュニケーション・スタイルとは、人にものを頼まれて、断る行為を行う際には、できないということを言語的に明示して、意思を明確にするコミュニケーション・スタイルのことを指す。このようなコミュニケーション・スタイルは、低文脈的なスタイルの例でもあると述べている。それは、先に述べたように、低文脈的なスタイルでは、言語の依存度が高く、聞き手の推論に頼らないためである。一方、間接的なスタイルとは、言語化して断らず、それを態度で示したり、ヒントを与えるなどの方法で意思を表すやり方である。つまり、高文脈型コミュニケーション・スタイルと同様である。

両者のスタイルの違いは、断り場面では、「直接的断り」の意味公式があるかないかの問題であると言える。

では、以下それぞれのスタイルを表す日本語とアラビア語の断り例文を提示する⁴⁰。

直接的なスタイル（食事の誘いに対する断り）

(16) la 「直接的断り」

(No)

maālsh , 「謝罪」

(sorry)

khaliha yom tany , 「代案提示」

(make it another day.)

elsabt elgay ana mashghula khales. 「理由」

(I am very busy next Saturday.)

(Nelson・Carson・Al Batal・ElBakary 2002:173)

⁴⁰ 読者の混乱を避けるため、本研究で扱う先行研究のアラビア語の例文を筆者が用いる資料XIの表記に従い統一する。

間接的なスタイル：

(17) ana ḥases en ana taāban w moghad 「理由」

(I feel that I am tired and exhausted)

w msh ha`dar aa`om bi shoghly kwys 「理由」

(and will not be able to perform my job well.)

(Nelson・Carson・Al Batal・ElBakary 2002:175)

上記の例(16)から分かるように、断り手がはっきりと（「いいえ」）断っていることを表明している。本研究で集めたデータでも、アラビア語母語話者の断り発話には「直接的断り」が多く観察された。しかし、例(17)のような間接的なスタイルもないわけではなく、日本語ほど使用範囲が広くない。日本語でも、直接的なスタイルとして、筆者が収集したデータには「あ、今日だめなんだ…ごめんね！また行くときさそって！」という（「直接的断り」+「謝罪」+「関係維持」）の組み合わせが見られたが、以下のような間接的コミュニケーション様式の例と比べると少ない。

間接的なスタイル

（高校生が先輩からの要求に対する「断り」）

(18) お菓子と飲物適当に買ってきてくれない。

私、先生に呼ばれまして、すみません。

（「理由」+「謝罪」）

（権 2007:354）

上記の例文では、断り手が「できない」ということを述べるのを避けて、聞き手に途中まで応えるだけで、結論を委ねる表現方法を用いている。

以上、八島・久保（2012）がまとめた代表的なコミュニケーション・スタイルを見てきたが、これは断り談話を全体的に分類するのに有効である。断り発話を例にすると、主に「直接的断り」があるかないかによって、直線的なスタイルと間接的なスタイル、高文脈型スタイルと低文脈型スタイルに分けられていることが分かる。

3.7.2 八代・町・小池・吉田(2009)

八代・町・小池・吉田(2009)は、より細かくコミュニケーション様式を記述して、研究対象となる断り発話における「直接的断り」の意味公式のみではなく、本研究の焦点となる断りの「理由」の意味公式にも記述が及んでいる点で優れていると思われる。以下、八代・町・小池・吉田(2009)がまとめたコミュニケーション様式を詳しく論じる。

3.7.2.1 ①螺旋的-直線的

螺旋的スタイルとは、自分の意見や主張を明確に言語化しないで、相手に状況を説明し気持ちを伝えながら、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法であり、最後まで結論を言わないスタイルである。つまり、それを断り発話に当てはめてみると、結論に当たるのは「直接的断り」を表す表現であり、「できない」「行かない」などのようなものとなる。そのため、結論を言わないのは、間接的に断るということになる。また、相手から結論を推察してくれることを期待するというのは、「高文脈型」コミュニケーション様式の特徴である。

以下は、螺旋的な断り発話を表す日本語の断りである。

(19) (親しい友人の「お金要求」-親しい友人の「断り」)

わるい。貸してあげたいんだけど。ちょっと俺もやばくて、ごめんね。

(「謝罪」+「共感」+「理由」+「謝罪」)

(権 2008:229)

(20) (兄からの要求に対する「断り」)

お菓子と飲物適当に買ってきてくれない。

うん〜、家にある菓子食べれば。

(「代案提示」)

(権 2007:351)

例(19)から分かるように、断り手が状況を説明したが、はっきりと相手の要求に応えないことを述べずに、応えられない状況にあることだけを言語化して、相手の推察力に頼って非明示的に断っている。また、(20)では、断り手が「代案提示」のみで断り、「買いに行きたくない」という結論は聞き手の判断に委ねている。

一方、直線的スタイルとは、自分の主張や意見を簡潔に表現し、次に主張や意見の背後にある理由を論理的に説明し、相手の理解と同調を求める表現方法である。まず、結論を言ってから、裏付けを加えるスタイルである。つまり、理由を論理的に説明することは、相手から断りの了解や同調を得ようとする手段として用いられ、配慮を示すメカニズムであると言える。例えば、以下の例文が直接的スタイルの断りである。

(21) (ケーキをどうぞと勧める友人に対して断る場面)

la 「直接的断り」

(No)

bsaraħa ana āndy homoda. 「理由」

(Frankly,I suffer from some acidity.)

msh ha`dar akol cake. 「直接的断り」

(and will not be able to eat cake.)

maālsh 「謝罪」

(Sorry)

(Nelson・ElBakary・Al Batal 2002:50)

以上の例文では、断り手が「いいえ」という意思表示をはっきり示してから、なぜケーキが食べられないのかを具体的に説明することによって相手から了解や同調を得て、自分の断りを正当化しようとしている。

このように、アラビア語の断りでは、直線的スタイルがよく用いられることが分かる。「直線的なコミュニケーション・スタイルを用いる人だと、螺旋的な答えに対しては、納得できない」(八代・町・小池・吉田 2009:85) ため、高コンテクスト言語と低コンテクスト言語では、聞き手が納得できる表現方法や配慮表現が異なると考えられる。

このことから、断り発話において、アラビア語母語話者が納得できる表現は日本語とは異なり、お互いの断りに対して、誤解が起こる可能性が高いことが予想できる。

3.7.2.2 ②飛び石的-石畳的

飛び石的スタイルでは、伝達される情報の内、言葉にしなければならない部分だけが言葉で表明され、状況で理解される部分は言語化されない。話し手が分かりあうための必要最低限の発話で済ませ、聞き手は、話し手の本意を察しなければならない。例えば、以下の例文が挙げられる。

(22) (食事の誘い)

ごめん、今日はちょっと…。

(「謝罪」+「理由」)

(DCT 調査から)

(23) (弟からの要求に対する「断り」)

お兄ちゃん、5千円あれば、貸し手くれない。

わりい。

(「謝罪」)

(権 2008:229)

日本語においては、断りの機能を表す程度副詞「ちょっと」が、「飛び石的」スタイルの断りを表す代表的な例であると思われる。日本人同士であれば、相手の発話は即ち断りであることがすぐに理解できる。岡本・斉藤(2004:70)は、「(日曜日は) ちょっと…。」) などのような断りでは、言いにくい述部を聞き手に察してもらう方法をとることで、話し手の意思決定に聞き手を参加させ、共同作業の会話に引き込みながら断りの了解を得ることができると述べている。

また、例(23)は、「わりい」という「謝罪」のみで、相手から「行けない」という結論、または本意を理解してくれることを期待する表現方法である。つまり、話し手が分かりあうための必要最低限の言葉として「ちょっと」、「わりい」が断り発話を短くしていると言える。

一方、石畳的なスタイルでは、言葉を端折らないで、むしろ言葉をつくして正確に情報を伝達する。これらの事柄は、話し手の責任においてなされる。これは、正確に言葉で説明しないと誤解を招きかねないと思われるために用いられるスタイルである。つまり、石

疊的なスタイルを用いる人は、Lakoff(1973)のポライトネス原則の中では、誤解回避の目的で使用される「明確に述べよ」の原則に従っていると言えよう。例えば、以下の例文が挙げられる。

(24) (場面内容は、上司から小さな町にある会社の支店に転職すると、給料がアップされるという勧めに対して、部下が断るものである。)

ma`darsh aroh 「直接的断り」

(I cannot go)

aãod hnak lewahdy 「理由」

(and stay there by myself)

heya bãyda gdan ãan ahly 「理由」

(It`s very far from my family)

kaman,lazem akhud baly men mamty 「理由」

(Besides, I also have to take care of my mother)

w ma`darsh asafer elmasafa dy kolaha 「理由」

(and I cannot travel all this distance)

waãod lewahdy fi elwagh elebly 「理由」

(and live alone in Upper Egypt)

(Nelson・ElBakary・Al Batal 2002:50)

(「直接的断り」+「理由」+「理由」+「理由」+「理由」+「理由」)

上司と部下である力関係の中でも、以上のように断り発話が結論で始まって、その結論のFTAを軽減するために、結論を裏付ける理由が論理的に説明され、「理由」が一回のみでなく、異なる理由を重ね、自分の断りを正当化しようとしている。

また、1.2.1 節で提示した例文のように、アラビア語の断り発話で使用される形容詞「gdan」(とても)「awy」(非常に)、「ktyr」(たくさん)などが、「ちょっとだけ忙しい」と聞き手に誤解されることを回避して、正確に「とても忙しい」「やることがたくさんある」などのような発話を行うのではないかと考えられる。つまり、アラビア語では、聞き手の誤解が話し手の責任になるため、論理的説明が重要視される。

八代・町・小池・吉田（2009:88）によると、高コンテクスト文化では、「飛び石的」スタイルで十分話が通じるのに対して、低コンテクスト文化では、場面、状況よりも言葉に情報が内在しているので「石畳的」なスタイルが用いられる。

3.7.2.3 ③人間関係重視-情報重視

人間関係重視と情報重視のコミュニケーション・スタイルの違いは、誤解回避や正確さなどを重視する人が、情報を重視するのに対して、正確さよりも相手との人間関係を重視する人が、完全な情報を与えるよりも、相手に情報を気持ちよく受け取ってもらうことを重要視していることによる。つまり、情報重視のスタイルでは、「直接的断り」がなくとも、「理由説明」が必ずあると言える。

それは、石井・北山（2004）が述べるように、低コンテクスト言語のコミュニケーションでは、基本的に個人が所持しているものとして、「情報」が位置づけられ、正確に他者に情報を伝達しない限り、それを他者と共有することはできないからだと思われる。従って、断り発話では、断り手が自分から事情を強調し、説明しない限り、他者からそれを推察されるとは思っていないために情報を重視すると言える。一方、人間関係重視である日本語（八島・久保 2012）の断りでは、断り手が他者に自分の意図を読み取ってもらえると信じて、情報を短く簡素にして、他者に結論を委ねることで、配慮を示していると思われる。

例えば、アラビア語母語話者が先生の教材のコピー依頼を断る際に用いられた発話が例として挙げられる。

(25) 学生 : ya doctor ana msh hāraf asawar el waraa` w agybo māaya.laeny msafra w msh ha`dar agy el gamāa lakt hatlob mn el saāy ysawarholak.

（先生、教材をコピーして持って来ることができません。旅行に行くので、大学に来ることができません。しかし、大学の係員にコピーしてもらえるように頼みます。）

（「直接的断り」+「理由」+「理由」+「代案提示」）

例文では、学生が力関係に差がある先生の依頼を断った際に、具体的に理由説明が繰り返され、情報を重視していることが分かる。しかし、誤解されないように、正確に情

報を提供することも、相手との人間関係を維持する手段だと思われる。つまり、情報を重視するコミュニケーション・スタイルを用いる人が、人間関係を無視しているわけではなく、むしろ情報を通して、自分の断りを正当化しようとし、相手との人間関係を維持しようとしていると考えられる。それは、Lakoff(1973)が提案したポライトネス原則「明確に述べよ」と「ポライトに述べよ」の2つの原則に当てはまるものであると考えられる。要するに、両方の原則ともポライトネスを表すものである。

一方、人間関係重視スタイルとして、以下の例文が挙げられる。

(26) (研究データを集めるため、自然電話会話を録音する依頼に対する断り)

ええ私じゃないほうがー{はは}いいと思いますよ。

(「代案提示」)

(目黒 1996:115)

目黒(1996)は、日本人が何を手がかりにどのように間接的断りを理解しているのかを明らかにするため、依頼に対する応答の会話を録音し、日本人31名に聞かせた。その結果、日本人は断りと判断する手がかりとしては「代案提示」、「依頼達成に不利な情報提供」であることを示唆した。つまり、間接的断りによって、「理由」や「代案提示」を用いて、相手から断りであることを推察してくれる表現方法であると言える。

このように、アラビア語の断りでは、日本語とは異なり、相手の推測力に頼らないことが分かる。従って、話し手が聞き手により多くの情報を提供することで相手との人間関係を維持しようとするのが分かる。つまり、アラビア語では、Lakoffの「明確に述べよ」の原則が重視されるのに対して、日本語ではLakoffの「ポライトに述べよ」の原則の方が重視されると言えるだろう。

上記では、各コミュニケーション様式に見られる日本語とアラビア語の断り発話を見てきた結果、アラビア語の断りには低コンテキスト言語の特徴、日本語の断りには高コンテキスト言語の特徴が見られることが明らかとなった。このことから、コンテキストの高低とコミュニケーション様式との関わりや、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語に予想される談話の種類を以下の表3-2と表3-3にまとめることができる。

表 3-2 高コンテキストコミュニケーション様式

高コンテキストコミュニケーション に見られる様式の特徴	• 螺旋的スタイル
	• 間接的スタイル
	• 人間関係重視スタイル
	• 飛び石的スタイル
	• 高文脈型スタイル

表 3-2 では、高コンテキスト言語の特徴が見られるコミュニケーション様式として、5つの様式にまとめたが、それらの共通点は、結論を聞き手に委ねることと言えよう。つまり、聞き手に発話意図を読み取る責任があるという前提が隠されている。一方、低コンテキスト言語の特徴が見られるコミュニケーション様式をまとめてみると以下の表 3-3 ようになる。

表 3-3 低コンテキストコミュニケーション様式

低コンテキストコミュニケーション に見られる様式の特徴	• 直線的スタイル
	• 石畳的スタイル
	• 低文脈型スタイル
	• 直接的スタイル
	• 情報重視スタイル

以上の 5つのコミュニケーション様式は、話し手に発話意図の伝達の責任があるという点で共通していると考えられる。また、言語の依存度が高いコミュニケーション様式であるため、高コンテキスト言語より、発話が長い点が特徴的である。

3.8 コミュニケーション様式に見られる断り談話の特徴

本節では、各コミュニケーション様式に見られる断り発話の特徴から、新たな分類方法を提案する。要するに、それらのコミュニケーション様式にはどのような特徴が見られるかを記述できる要素として、「曖昧な理由」、「具体的な理由」、「直接的断り」の 3つを提案した。従って、言語に現れるコミュニケーション様式と断り発話との関わりを体系化し、

それらの関連性を示すと、以下の表のようになると考えられる。

表 3-4 断り談話に見られるコミュニケーション様式の特徴

	曖昧な「理由」	具体的な「理由」	直接的断り
①直線的スタイル	×	○	○
②螺旋的スタイル	○	×	×
③飛び石的スタイル	○	×	×
④石畳的スタイル	×	○	△
⑤情報重視スタイル	×	○	△
⑥人間関係重視スタイル	○	△	×
⑦自己開示コミュニケーション	×	○	△
⑧直接的コミュニケーション	△	△	○
⑨間接的コミュニケーション	△	△	×
⑩高文脈型	○	△	×
⑪低文脈型	×	○	○

表中の「○」は有効、「×」は無効、「△」は状況によることを示す。

3.9 人間関係を考慮したコミュニケーション様式の異なり

本章 3 の前半で述べたように、マクロ的側面を中心に日本語とアラビア語に見られるコミュニケーション様式を探ることが本章の目的ではあるが、ミクロ的側面から考えると、先行研究で提示されるコミュニケーション様式以外に、様々な様式が見られる可能性がある。従って、本節では、リナ (2013a) の日本語とアラビア語の断りに関する対照研究の結果を引用し、人間関係を考慮したコミュニケーション様式の違いを検討する。

リナ (2013a) では、日本語とアラビア語母語話者の断り発話について対照研究を行った。具体的に、Beebe et al.(1990) の分類単位「意味公式」を修正したものをを用いて、両言語の断りにおける、意味公式の種類、及び使用回数、出現順序などについて、使用される断りの談話構造を場面別及び、異なる人間関係別に、比較分析した。調査では、「先生」に対する断りと、「親しい友達」、「知り合い」の 3 種類の人間関係を設定した。そして、調査場面は、依頼と勧誘それぞれ 6 場面、合計 12 場面における断り構造を細かく分類し、

比較分析した。両言語母語話者の「勧誘」に対する「断り」と「依頼」に対する「断り」の比較を、以下の図 3-5 から図 3-8 で示す。

図中の JNS は日本語母語話者、CNS はアラビア語母語話者である。

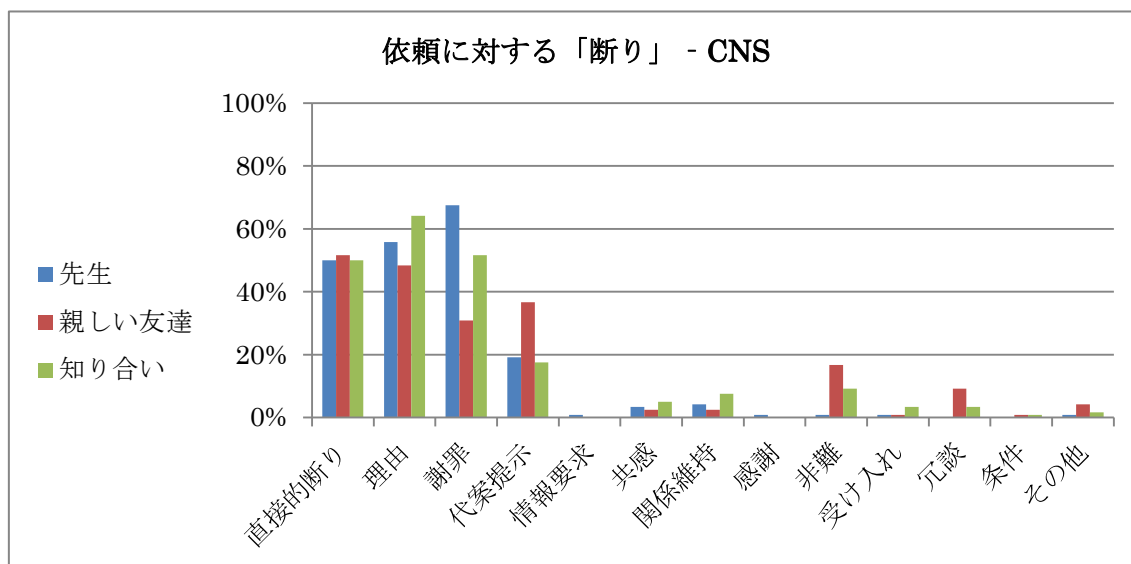


図 3-5 依頼における各関係に対する意味公式の出現率-CNS

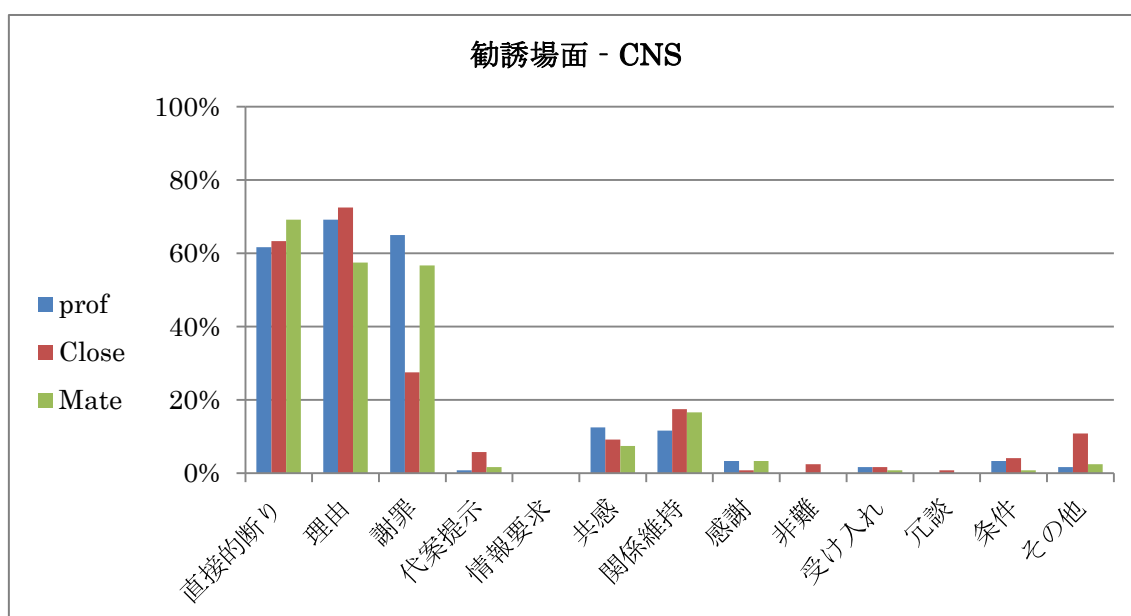


図 3-6 勧誘における各関係に対する意味公式の出現率-CNS

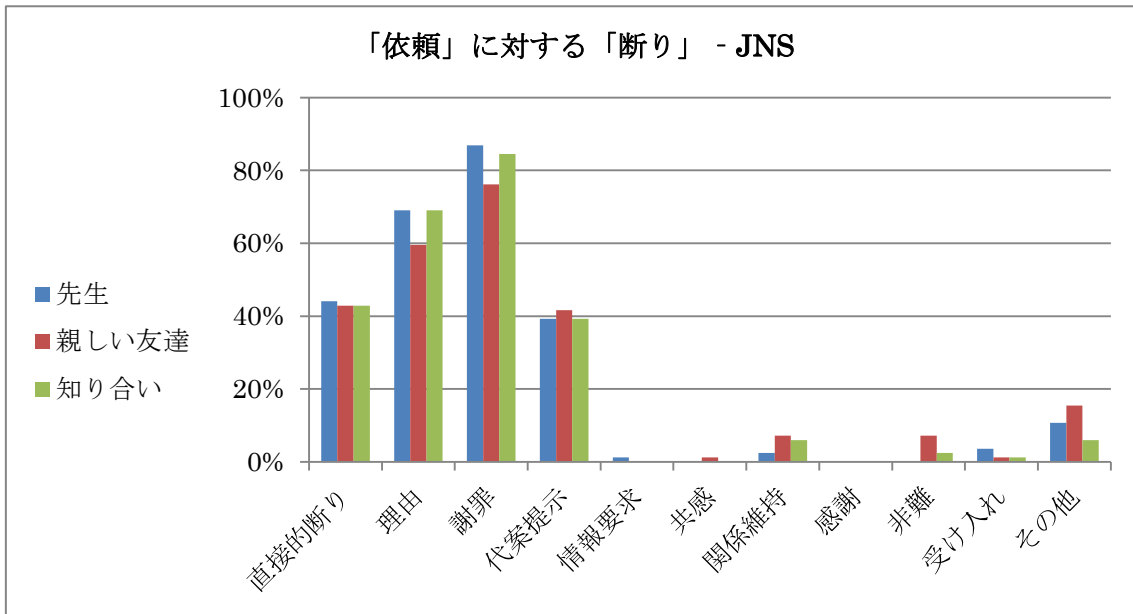


図 3-7 依頼における各関係に対する意味公式の出現率-JNS

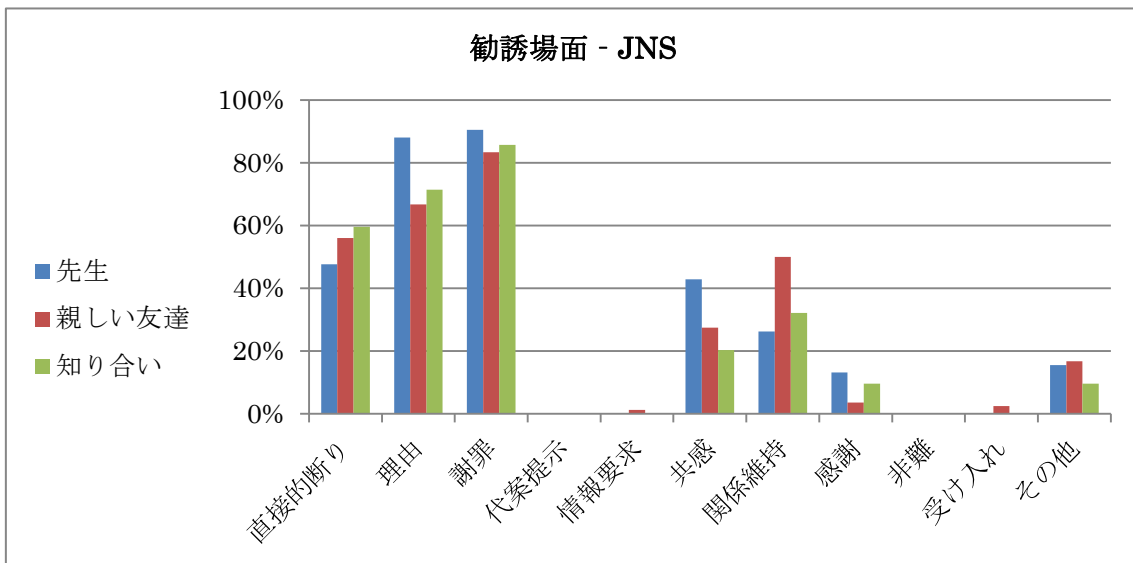


図 3-8 勧誘における各関係に対する意味公式の出現率-JNS

調査結果では、次のようなことが分かった。人間関係別に比較すると、日本語母語話者は相手との人間関係が異なっても、意味公式の使用率には、それほど大きな差はないことが明らかとなった。一方、アラビア語母語話者は、相手レベルごとに「断り」における意味公式の使用率が異なる。日本語では、3種の人間関係においても、「謝罪」の使用率に大きな差はないが、アラビア語では、「先生」に対して、使用率が高いのに対し、「親しい友

達」の場合使用率が非常に下がっている。また、意味公式の出現順序の結果でも、日本語母語話者は全ての場面相手に対し、「謝罪」+「理由」という談話の順序が多く（50%）、3場面に出現する意味公式には回答者によりかなりの異なりがあった。一方、アラビア語母語話者は「上」の相手（先生）に対し、「謝罪」+「直接的断り」+「理由」という、「親」の相手の場合（「直接的断り」+「理由」という順序を用いることが多いが、「疎」の相手の場合に、個人の特徴が現れた。つまり、日本語では全ての相手に対する談話の順序が形式化しているのに対し、アラビア語では場面相手が異なることにより、多様性を示していることが明らかとなった。

また、上記の図から分かるように、アラビア語の断りでは、どの相手に対しても、できる限り「直接的断り」で結論が提示されることが多いのに対して、日本語では結論を提示するより、「謝罪」で相手の要求に応えられないことに対する申し訳ない気持ちを表明することが優先される。従って、リナ（2013a）の上記の調査結果は、本章の前半で見てきたように、アラビア語の断りでは、「直線的」スタイルが多用され、日本語では「螺旋的」スタイルが多用されることを指示するものだと考えられる。しかし、図から分かるようにアラビア語でも、上の相手である「先生」に対して、「親しい友達」とは異なり、談話開始に「直接的断り」より、「謝罪」が使用されることが多い。例えば、以下の例文が挙げられる。

(27) (食事の誘い)

学生：maālish ya doctor ana asef āndy zorof msh ha`dar aroh māako.

(ごめんなさい先生、すみません 事情があって、一緒に行くことができません。)

(「謝罪」+「謝罪」+「理由」+「直接的断り」)

(DCT 調査から)

例(27)から分かるように、「先生」に対する「断り」であるため、結論を述べる前に、「謝罪」表現や「呼称」が用いられた。これは、人間関係を決めるミクロ的な要因であるため、結論から談話が始まっていない。一方、以下の例文と比べて見ると、親しい友人の誘いを断る場面では、結論から談話が始まっていることが分かる。

(28) 親しい友人 : bād elmoħadra hanroħ kolna nakol koshary matygy mħana.

(授業の後みんなでコシヤリを食べに行くけど、一緒に行かない)

あなた : ana msh bakol brra w belzat elkoshary msh bykon helw.

(私は外で食べない。特にコシヤリ。おいしくないから)

(「直接的断り」+「理由」+「理由」)

日本語でも「先生」である力関係になると、以下のようにある程度自己開示の度合いが高くなる例文も見られた。

(29) 先生 : 来週の水曜日の授業までに、この教材をコピーしておいて下さい。

学生 : すみません。授業の直前までちょっといないんです。

(「謝罪」+「理由」)

(30) 先生 : 来週の水曜日の授業までに、この教材をコピーしておいてください。

学生 : 申し訳ありません。来週の授業は実習のためお休みすることになりそうなんです。別の人にお願ひできますか?お役に立てなくてすみません。

(「謝罪」+「理由」+「代案提示」+「謝罪」)

このように、「先生」の依頼を断る際に感じる心的負担が「親しい友達」より高いのは当然であるため、事情を詳しく述べることよって、許さない状況にあることを述べて FTA を軽減するため、自己開示の度合いが高くなるのであろう。つまり、ミクロ的な要因の 1 つである相手との人間関係が、コミュニケーション様式に影響を与える要因の 1 つであることが分かる。3.7.1.1 節で述べたように、日本語母語話者は、アラビア語母語話者と比較すると自己開示の度合いが低い。八代・荒木・樋口・山本 (2001:47) によると、「多くの文化では、自己開示は心を開いて、相手と積極的にコミュニケーションしたいという肯定的な意志の表れとして受け止められている」。また、日本人は「日本人は形式ばっていて、なかなかうちとけない」、「閉鎖的だ」、「曖昧なことばかり言っていて、本当の顔が見えない」のような印象を与える原因の 1 つとして、自己開示があまりなされないからだ指摘している。

3.10 コミュニケーション様式の差異とポライトネスとの関連について

コミュニケーション様式そのものに文化的差異があるとすれば、ポライトネス方略においても、そのような文化的差異を反映した個別性が発生することになる（山岡 2004:19）。本章で見えてきたように、日本語とアラビア語の断り発話には、文化的差異によって生じたコミュニケーション様式の差異が見られた。このことから、ポライトネス方略においても、個別性が生じることが予想できる。

第1章で述べたように、本研究では文化的差異にふれながら、それが反映する日本語とアラビア語のポライトネスと配慮表現の違いを明らかにすることを目的としている。従って、両言語で好まれるコミュニケーション様式の違いについて考察した結果、文化とポライトネスとの関わりを以下の図 3-9 と図 3-10 でまとめることができる。

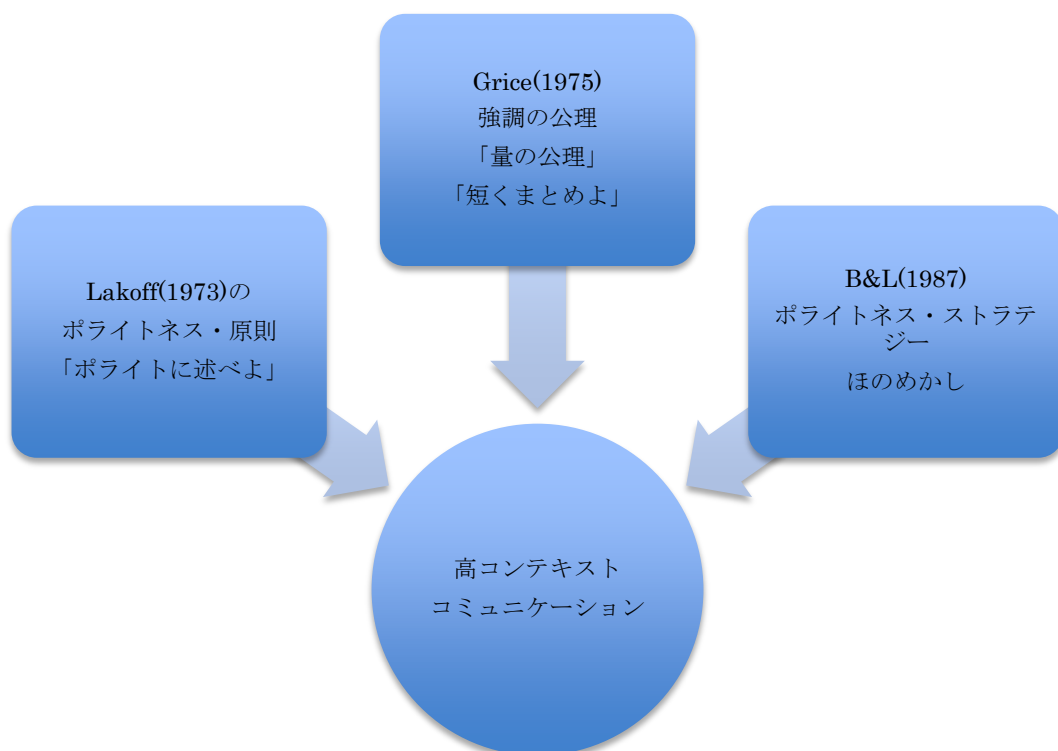


図 3-9 高コンテキスト言語とポライトネスとの関わり

高コンテキスト言語や文化の特徴を見てきたとおり、直接的スタイルより、間接的スタイルの方が好まれることが分かる。従って、特定の言語で見られるポライトネスの特徴が

文化的背景から生じたものと考えられるため、上記の図3-9のような、ポライトネス・ストラテジーが関係していると考えられる。つまり、B&L (1987)のポライトネス理論で提案された5つのストラテジーの中で「ほめかし」のストラテジーや、Lakoff (1973)が挙げたポライトネス原則では、「ポライトに述べよ」の原則が重視されるだろう。また、Grice (1975)が提案した4つの会話の協調の公理以外に、3.Be brief (avoid unnecessary prolixity)の公理も提案した。それは、「話を短くしよう」、または「短く述べよ」になるため、高コンテクスト文化・言語の1つの特徴だと考えられる。一方、低コンテクスト言語では、直接的コミュニケーション・スタイルが好まれるため、以下のようなポライトネス・ストラテジーが好まれると推測することができる。

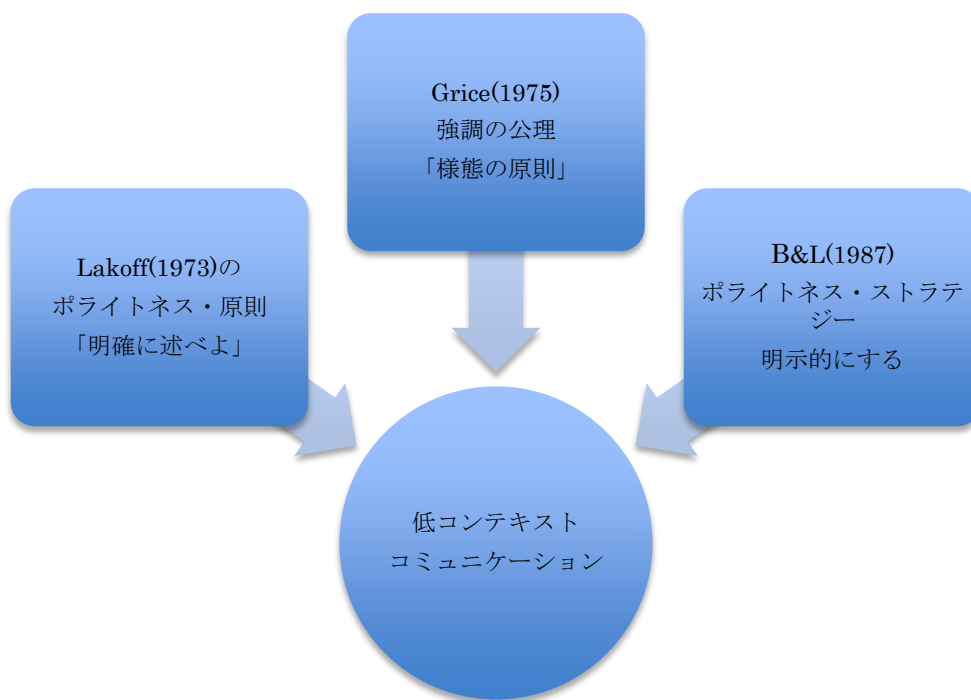


図 3-10 低コンテクスト言語とポライトネスとの関わり

低コンテクスト言語コミュニケーションでは、B&L (1987)のポライトネス・ストラテジーの中の「明示的にする」ストラテジーや、Lakoff (1973)の「明確に述べよ」の原則、Grice (1975)が提案した4つの会話の協調の公理のうちの「様態の公理」が重視されるだろう。つまり、話し手が命題内容を明瞭に述べたり、発話意図を明確に表明したりすることにより、聞き手の負担を減らすストラテジーを用いるということである。

上記図 3-9 と図 3-10 は、日本語とアラビア語のみではなく、一般的に高コンテクスト文化・言語コミュニケーションと、低コンテクスト文化・言語コミュニケーションの特徴を持つ他言語についても、コミュニケーション様式の中で用いられるポライトネス・ストラテジーを予想することが可能であると思われる。

3.11 本章のまとめ

以上、本章では、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の種類を詳しく論じてきた。その結果、断り発話において使用されるコミュニケーション様式が、文化や言語、価値観によって異なることが明らかとなった。八島・久保（2012）は、価値観の違いは人間関係にも影響すると述べている。従って、日本語とアラビア語の断り発話の中で、好まれるコミュニケーション様式の違いは、それぞれの文化背景にある価値観の違いから生じると言える。アラビア語では、相手の利益を奪う断りの言語行動によって生じる FTA を軽減するのに、「理由」を強調し、相手から同調や理解を求めるが、日本語では、理由は具体的でなくても、相手から了解を得られるだろうと期待して、その代わり「謝罪」が重要である。本章ではあくまでも断りの場面でどのような様式が好まれるのかを論じてきた。しかし、本章の目的で述べたように、言語は非常に複雑なものであり、ある言語の中で常に1つのコミュニケーション様式が見られるということではない。そのため、ミクロ的側面を考慮した分析を行うことによって、日本語でも「先生」に対する断りでは自己開示の度合いが高くなる傾向も見られた。一方、アラビア語母語話者の方が、比較的自己開示の度合いがより高いこともうかがえる。

また、筆者が収集したデータには、日本語でも負担度の高い「飲み物の購入依頼」場面では、「何で私が行かなきゃいけないの」、「自分で行け」など友人同士の断りでは「批判」が用いられることもあることが分かった。

マクロ的側面から考えると、アラビア語母語話者が用いる断り発話は、高コンテクスト文化「文脈依存型」の特徴に違反するものであり、むしろ「言語依存型」である低コンテクスト文化の特徴があると考えられる。一方、日本語では先行研究で指摘されたように高コンテクスト文化「文脈依存型」の特徴の方が好まれる傾向がある。

このように、コミュニケーション様式の違いが、特定の発話行為に使用されるストラテジーに影響を与えることが明らかとなった。言い換えると、日本語の断りでは、話し手が

聞き手に理解を求める、あるいは、期待することが前提となっているが、アラビア語では、聞き手が話し手に具体的な説明を期待することが前提となっている。従って、互いの言語母語話者の断りに対して、聞き手が納得できる配慮表現や、表現方法自体も異なると言えるだろう。

従来の断りの先行研究では、ほぼ意味公式によって、断り発話が表現レベルの単位で細かく分類されてきたが、ある断り発話を談話レベルの単位で述するのに有効ではないと思われる。権（2008:225）によると、意味公式の分類は言語形式に対する分析には適しているものの、「断り」表現そのものに対する言語使用や言語運用についての分析までには至りがたい」という指摘が多く見られる。しかし、本章では異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の違いの観点から断り発話を分類することを試みた結果、この分類が談話レベルの観点から断り発話を記述するのに有効であることが明らかとなった。

本章において、日本語とアラビア語の断り発話に見られるコミュニケーション様式を見てきたように、両言語において好まれる断りのコミュニケーション様式には違いがあるため、両言語母語話者が納得できるスタイルが異なることも予想できる。特に、直線的なコミュニケーション・スタイルを用いる話し手だと、螺旋的な答えでは、納得できず、螺旋的スタイルでは真意がなかなか伝わらないと指摘されたように（八代・町・小池・吉田 2009:83）、本研究では、高コンテキスト言語の特徴が見られる日本語では、聞き手（断られる側）が納得できる表現方法と、低コンテキスト言語の特徴が見られるアラビア語の断りでは聞き手が納得できる表現方法が異なるという仮説を検証することができた。第4章では、仮説に基づき、配慮表現の観点から調査方法を作成し、両言語の違いを明らかにする。特に、第1章で説明したように、両言語母語話者が自分の断りを正当化する「理由」の意味公式として、配慮表現と思われる「程度副詞」の使い方から、他者へ配慮を示すメカニズムが異なることを述べた。そこで、第4章では、断り発話において「程度副詞」に着目し、聞き手が納得できる配慮表現の違いを明らかにする。調査から、日本語とアラビア語で、納得する配慮表現が異なることが検証されれば、筆者が主張するように、断り発話において日本語とアラビア語が同様の高コンテキスト言語ではないと証明できたと思われる。

第4章 配慮表現の観点から見た断り発話

4.1 本章の目的

本章では、第3章の議論に基づき、日本語とアラビア語の背景にある文化的差異によって、両者が好む配慮表現や、相手への配慮の示し方のメカニズムが異なる点について考えたい。つまり、第3章で挙げた表3-2・3-3と図3-9・図3-10から考えると、高コンテキスト言語と指摘される日本語の断りでは、ほのめかしや、間接的断り、螺旋的スタイルなどの特徴を持つ配慮表現が好まれることが予想され、逆に筆者が主張するようにアラビア語の断りでは、明示的、直線的スタイルなどの低コンテキスト言語の特徴を持つ配慮表現が好まれると思われる。従って、本章では両者が納得する配慮のメカニズムが異なるという前提で表現レベルの観点から、日本語とアラビア語の断り発話に見られる配慮表現について論じる。また、両言語において未分類の配慮表現と思われる表現形式について、それがなぜ配慮表現と言えるのか、それらが配慮表現として機能するメカニズムを検討する。特に、第1章で述べたように両言語の断りにおける「理由」説明の意味公式には大きな違いがあり、対人的配慮の示し方が異なるため、本章では話者の事情に当たる「理由説明」の意味公式に焦点を当て、比較分析を行う。

牧原(2012)では、談話の中で出現する配慮表現形式を3つに分け、①前置き表現、②文末表現、③副詞的表現としている。問題の所在で論じたように、アラビア語の断りの「理由」では、程度性の高い表現形式「*gdan,awy,khales,kyr*」(とても、非常に、すごく、たくさん)や、義務性を表すモダリティに相当する助動詞「*lazem*」が多用され、日本語では蓋然性を含む表現形式が多用される。従って、本研究でも特に文末表現と副詞的表現に着目したい。具体的には、副詞的表現から、日本語の「とても、少し、ちょっと」とそれに相当するアラビア語の「*gdan,shwya*」、義務性を表す表現から日本語の「なければなりません」に相当するアラビア語の助動詞「*lazem*」に焦点を当てて、分析する。また、それらの表現形式の文法的機能に加え、実際に発話の中で果たすと思われる対人的機能について考察する。

本章では、配慮表現と思われる表現形式が持つ対人的機能を客観的に検証するため、断られる側(依頼者、勧誘者)を対象に、意識調査Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとフォローアップインタビュー調査も行う。断り手ではなく、断られる側を調査の対象にしたのは、同様の言語母語話

者でも、話し手が意図する意味と聞き手が解釈する意味が必ずしも一致しないと考えられるため、断り手が配慮を示そうと思って特定の表現形式を用いても、聞き手にとってそれが思いやりのある表現ではなく、かえって不快感を与えてしまうことがあると考えられるからである。

4.2 副詞の定義と分類

森山・仁田・工藤（2000:165）では、副詞は文法的な形態変化を基本的に持たないものであり、文中での働きは連用修飾という1つの機能にほぼ固定した語であり、①情態副詞、②程度副詞、③陳述副詞の3つのグループに下位分類されている。本研究では、その中の②程度副詞を分析対象とする。

仁田（2002:145）では、「程度副詞の働きの基本・中心は、属性（質）や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定するというものである」とされている。さらに、程度副詞は程度量の副詞と呼ばれ、次のように分けられている。

- ① 程度の副詞
- ② 量の副詞

量の副詞は、基本的に主体や対象の個体の数量限定の機能を果たし、程度限定というあり方で形容詞を修飾しない点で程度副詞とは異なる。そして、その中で程度の副詞はさらに①単純程度の副詞と②量程度の副詞の2つのグループに下位分類されている。

単純程度の副詞は、属性や状態など、有している程度性を指定し限定する。一方、量程度の副詞は、基本的に程度の副詞に属しているものの、量の副詞が果たす働きをも担っている。

本研究では、形容詞や動詞を修飾し、それらの様態を修飾したり、程度を限定したり（高く上げたり、小さく、低く下げたり）する働きを持つ語句のことを程度副詞と呼ぶ。そして、程度副詞の例と機能について、仁田（2002）を参考に、以下の表にまとめる。

表 4-1 程度副詞の分類及び、機能分担

程度量の副詞	例	例	機能	
	アラビア語	日本語	程度	数量
1 単純程度の副詞	awy,khales, gdan	非常に、とても、大変に、極めて.. など	○	×
2 量程度の副詞	shwya	少し、ちょっと、結構、ずいぶん.. など。	○	○
3 量の副詞	ktyr	たくさん、いっぱい、たっぷりなど。	×	○

表中の 1「単純程度の副詞」は、程度性の高程度に属するもの、2「量程度の副詞」は相当程度から低程度に属するもの（中・小・域）、3「量の副詞」は多領域に属するものである。

アラビア語の副詞は日本語とは異なり、「時間の副詞」と「場所の副詞」の 2 種類に分類される。例えば、以下がそれに当たる。

「時間の副詞」：sabah,dohr,ams,hyna,yawm（朝、昼、昨日、時、日）

例：(1) safart yawm aläotla.

休日の旦に旅行に行った。

「場所の副詞」：fawk,taht,amam,waraa（上、下、前、後ろ）

例：(2) galast taht alshagara.

木の下に座った。

本研究で扱うアラビア語の「gdan」（とても）、「ktyr」（たくさん）、「shwya」（少し）は、日本語のように副詞ではなく、副詞的役割を果たす形容詞とされる。

新妻 (2009:109) によると、アラビア語の副詞は日本語と比較するとその数は少ないが、その理由は名詞や形容詞が対格を取ることで副詞的役割を果たすからである。

また、アラビア語の断り発話において頻繁に使用される「gdan」（とても）について、アラビア語辞典（al moāgam alwagyz 1990）（原文はアラビア語）では次のように記述されている。

「gdan」（とても）は、「alged」（努力）という語から派生し、最も高い程度という意味を持つ、最も程度性の高い形容詞と言える。

本研究では、程度性の高い副詞または形容詞が断り発話において語用論的に果たす機能や、これらが好まれる理由について、意識調査ⅠとⅡや、フォローアップインタビュー調査を行った。

4.3 調査概要

4.3.1 調査方法及び調査対象者

意識調査ⅠとⅢでは、カイロ大学アラビア語アラビア文学部の大学生 121名（女性 102名、男性 18名）を対象にアラビア語でアンケート調査を行った。そして、意識調査Ⅱでは、調査Ⅰと同様の調査を日本語に直訳し、筑波大学の学部生 39名（女性 32名、男性 7名）を対象に行った。

以下では、意識調査ⅠとⅡ⁴¹の詳細と結果について論じる。

4.3.2 意識調査ⅠとⅡの内容

被調査者に親しい友人を誘う場面と何かを依頼する場面それぞれ 2 場面を設定した。親しい友人に断られたときには、3 つの選択肢の中から最も納得しやすい回答を選んでもらい⁴²、そして納得する理由を書くよう指示した。選択肢は、配慮表現の原理を基にして、作成した。つまり、（寛大性の原則）2 の（b）の「自己の負担が小さいと述べよ」に当たる談話として程度性の低い副詞（「shwya」・「少し」）と、筆者が提案した「自己の負担が大きいと述べよ」の原則に当たる談話として程度性の高い副詞（「gdan」・「とても」）を含む談話、そしてどちらでもない中立的な立場に当たる「副詞なし」の 3 つの談話を設定した。被調査者の立場から考えると、筆者が設定した選択肢をどれも納得できない可能性があることを想定し、事前に被調査者に選択肢の中で納得できる回答がなければ、選択せず

⁴¹ 4.10.2 節で詳しく論じる。

⁴² 調査内容は資料Ⅲを参照されたい。

に納得できない理由を書くよう指示した。調査場面は、事前に断りにくさに関する予備調査⁴³に基づいて依頼と勧誘それぞれで断りやすいものと断りにくいもの、合計 4 場面を設定した。調査場面及び、予備調査の内容は以下の表にまとめる。

表 4-2 調査場面

	依頼場面	勧誘場面
断りやすい	依頼Ⅰ：飲み物の購入依頼	勧誘Ⅰ：食事の誘い
断りにくい	依頼Ⅱ：教材のコピー依頼	勧誘Ⅱ：誕生パーティーの誘い

予備調査では、アラビア語母語話者 60 名と日本語母語話者 42 名を対象に、4 場面における断りにくさの判断をしてもらった。断りにくさの判断基準は、以下の表のように設定した。

表 4-3 断りにくさの判断基準

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

被調査者には上記の 4 つの段階の選択肢式で判断してもらった。断りにくさの数字が大きくなるほど、断りにくさの度合いが高いと判断するものである。

4.3.3 フォローアップインタビュー調査

アラビア語母語話者の中から、8 名を対象にインタビュー調査を行った。調査では、それぞれの場面において、被調査者がなぜこのように選択したかを確認し、選択しなかったものはなぜ納得できないのかについて答えてもらった。アンケート調査で、選択した理由を書くよう指示したため、被調査者全員にはフォローアップインタビュー調査を行わなかった。

⁴³ 断りにくさに関する調査結果は、4.4.3.2 節で詳しく論じる。

以下では、程度副詞に関する意識調査 I、II の結果を述べる。

4.4 調査結果と考察

4.4.1 意識調査 I の結果

以下の図 4-1 と図 4-2 では、各言語の母語話者が各場面において用いた「とても」、「少し」、「副詞なし」の選択率を示している。場面内容が異なることによって調査結果がどのように異なるかを見ていく。

図 4-1⁴⁴の Totemo は「gdan」、Sukoshi は「shwya」、fukusi nasi は「副詞なし」を表している。

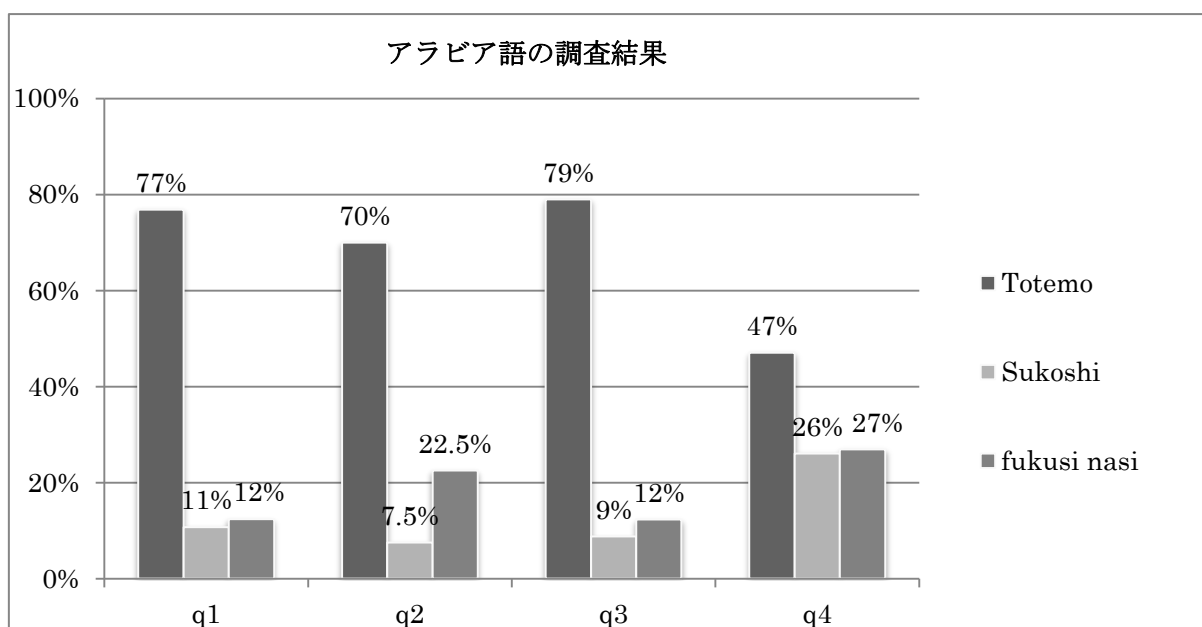


図 4-1 アラビア語における程度副詞の選択

図 4-1 から分かるように、アラビア語では 4 場面に共通して、断られた時に最も納得できる回答は、程度性の高い「gdan」（とても）表現が含まれている談話であった。一方、最も納得しにくい回答は程度性の低い「shwya」（少し）が含まれている談話であることも明らかとなった。このことから、低い程度副詞の働きを持つ「shwya」（少し）の使用は、聴者に不快な思いをさせる恐れがあると言えよう。それは、アラビア語の「shwya」（少し）が、本来持つ機能「低い程度限定」を表しているため、「少しだけ忙しい」、「少しだ

⁴⁴ 図内の q1 は表 4-2 の勧誘 I、q2 は依頼 II、q3 は勧誘 II、q4 は依頼 I に当たる。

け疲れている」などのように、断り手が現在それほど大変な状況に置かれていなくても、依頼者または勧誘者の要求に答えたくないと考えていると解釈されてしまうからだと考えられる。従って、断り手が自分の事情を修飾する際に、低い程度副詞の働きを持つ「shwya」（少し）を用いると、依頼者や勧誘者の積極的フェイスを脅かし、相手への思いやりに欠けた発話となってしまおうと考えられる。

被調査者の選択肢の理由の中でも、「せっかく相手を誘ったのに、簡単に断られると不快感を感じる」、「相手は時間の余裕があるにも関わらず、自分の依頼と誘いを受けいれてくれないと失礼だと感じる」などのように、依頼者側、勧誘者側が自分の積極的フェイスが脅かされることで感じる心理的負担が、低い程度性表現によって、さらに大きくなると推察される。

4.4.2 意識調査Ⅱの結果

本節では、日本語母語話者の調査結果を提示する。図 4-2 の Totemo は「とても」Sukoshi は「少し」、fukusi nasi は「副詞なし」を表している。

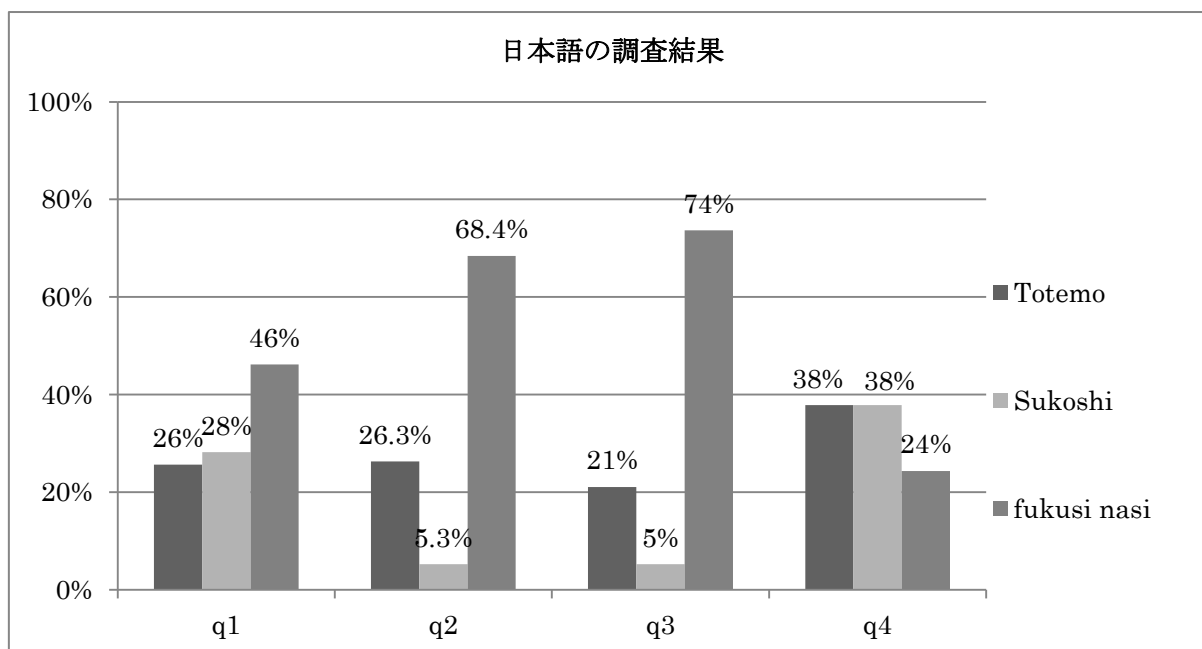


図 4-2 日本語における程度副詞の選択結果

日本語では、問 1～問 3 においては、断られたら最も納得できる回答は、中立的な立場

である程度副詞が含まれていない談話であることが明らかとなった。つまり、命題内容を副詞なしで述べる方が納得の度合いが高いと言えよう。その理由として、「副詞なし」の選択肢を選んだ多くの被調査者は、「とても」は「わざとらしい」「嘘っぽく聞こえる」などのような回答が多かった。つまり、「自己の負担が大きいと述べよ」に当たる「とても」が含まれる談話がかえって、依頼者の積極的フェイスを脅かす度合いが高くなることが分かる。そして、「少し」を選択しなかった理由として、アラビア語母語話者と同様に、「そんなに大変そうではないので、応えてくれることを期待してしまう」、「少しだけなのになぜ断るのか」などのような回答が得られた。言葉が本来持つ意味で解釈されてしまうため、相手への配慮が込められていない発話となり、依頼者などの期待に応えられないことになる。しかし、図から分かるように、問 1 と問 4 では、「少し」の選択率が高い。その理由は、「より柔らかい表現である」、「より丁寧である」などのような回答があった⁴⁵。「副詞なし」の談話が選ばれた理由として、次のような回答が得られた。「副詞なし」の談話が「シンプルで、より納得しやすい」、「程度や頻度は重要な情報ではないから」、「とても」か「少し」かの問題ではなく、忙しいか忙しくないかが問題になっている」「親しい友達が忙しいと言うなら、何も言わなくても本当に忙しいと思うから」などのような回答が見られた。

以上、日本語とアラビア語の調査結果から、一般的に選択率の高い表現を見てきたが、場面内容により、日本語母語話者の納得の度合いが高い「副詞なし」の選択率と、納得の度合いが低い「少し」の選択率には違いがあることが分かった。また、アラビア語の調査結果でも特に場面 4 では、納得の度合いが高い「gdan」（とても）の使用率が下がる傾向があった。これについては、次節において詳しく論じる。

4.4.3 表現選択の判断要因

調査結果から、被調査者が何に基づいて、このような選択を行ったのかについて、以下の 3 つの判断要因が考えられる。

- ① 場面の異なり
- ② 断りにくさの異なり

⁴⁵ これについては 4.7 節で詳しく論じる。

③ 性差による異なり

まず、選択肢の重要な判断要因の1つとして場面内容の違いが挙げられる。筆者は意識調査を計画した際に、依頼と勧誘という質の異なる発話行為について、それぞれ2場面を設定した。さらに、依頼の場合、負担度によって断りを正当化するメカニズムや納得が得られる表現が異なってくると考えられるため、それぞれの発話行為の中でも、さらに異なる場面を設定した。

また、場面内容の違いに加え、調査概要で述べたように、断りにくさの判断も選択肢の判断要因の1つだと考えられる。従って、本研究では被調査者がそれぞれの場面において、どのくらい断りにくく感じるかについて、調査を行った。この調査結果によって、表現の納得の度合いと断りにくさの判断基準との関連を明らかにすることもできると思われる。そして、3つ目の判断要因では、性差について検討する。

4.4.3.1 場面の異なり

4.4.3.1.1 アラビア語における勧誘場面の異なり

アラビア語における勧誘場面の違いを以下図4-3で示す。

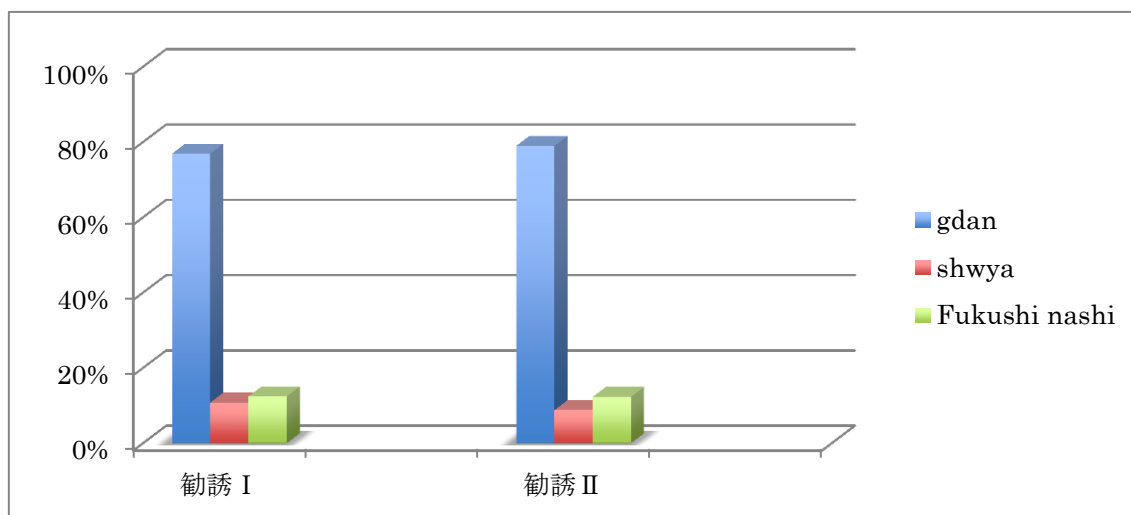


図 4-3 アラビア語の勧誘 I と勧誘 II の比較

勧誘 I (問 1) の「食事の誘い」を断られた場面では、「ごめん、水曜日はとても忙しいんだ。」の選択率は 77%程度で、最も多かった。次に「ごめん、水曜日は忙しいんだ。」が

13%程度、「ごめん、水曜日は少し忙しいんだ。」は 11%と最も少ない回答率となっている。

勧誘Ⅱ（問 3）は、「自分の誕生パーティーの誘い」を断られた場面である。図 4-3 で示しているように、勧誘Ⅰとそれほど大きな差はない。勧誘Ⅱは「ごめんなさい。金曜日はとてもたくさん勉強しなければならないから、行けないんだ」という理由で断られる方が納得の度合いが高い結果となった。つまり、断られた時に最も納得できる回答は、程度性の高い「とても」表現が含まれている談話であるのに対して、最も納得しにくい回答は、程度性の低い「少し」が含まれている談話であるという結果が得られた。

このように「shwya」（少し）によって、依頼者の期待度が高まり、結果として自分の積極的フェイスが脅かされる度合いも高まってしまうと推察される。

4.4.3.1.2 アラビア語における依頼場面の異なり

4.4.3.1.1 節で見てきたようにアラビア語は、勧誘場面では、場面内容の違いが選択の結果に大きく影響与えなかったのに対して、依頼場面においては、以下のように結果が大きく異なっている。

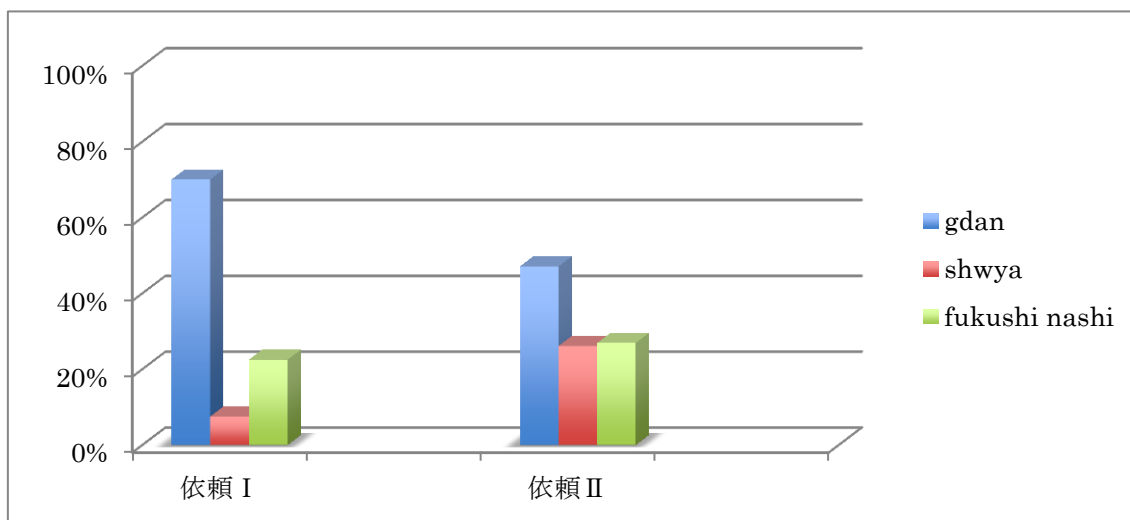


図 4-4 アラビア語の依頼Ⅰと依頼Ⅱの比較

図 4-1 を見ると、依頼Ⅱ（問 4）では、問 1～問 3 つの質問に比べ「gdan」（とても）の使用率が下がり、「shwya」（少し）と「副詞なし」の使用率が上がる傾向があった。また、同じく依頼場面である図 4-4 から分かるように、依頼Ⅱ（問 4）では、依頼Ⅰ（問 2）に比べ「gdan」（とても）の使用率が下がり、「shwya」（少し）と「副詞なし」の使用率が上

がる結果となった。これは、場面内容による結果だと考えられる。

依頼Ⅰ（問2）は「欠席したときの教材のコピー」依頼、依頼Ⅱ（問4）は、「飲み物の購入依頼」である。2つの場面を内容的に比較すると、依頼Ⅰは、依頼者が自分だけでは実行できないことを依頼しているため、断られたら困る。一方、依頼Ⅱは、断られても、自分で自分が欲しいものを購入しに行くことができるため、困らない。言い換えると、本来自分で出来ることの場合、あえて他人に迷惑をかけるほどでもないような依頼を行うことになり、配慮されるべき度合いが低くなる。

また、依頼Ⅱでは選択肢の理由として多くの被調査者から以下のような回答が得られた。

「場面内容として相手に配慮される必要があまりないため、「gdan」（とても）を選択しない」、「飲み物の購入依頼の要求内容だと断られても、自分でできるので、困らない」、「最初から、自分でやるべきことだと分かっているため、相手が断っても、自分が悪い」。つまり「とても」が最も配慮の度合いが高い選択肢であるが、「飲物を購入してくれる」場面は、他の場面内容に比べ断われても困らないため、配慮の度合いが高い選択肢が選ばれないということである。

4.4.3.1.3 日本語における勧誘場面の異なり

日本語における勧誘場面の違いを以下図4-5で示す。

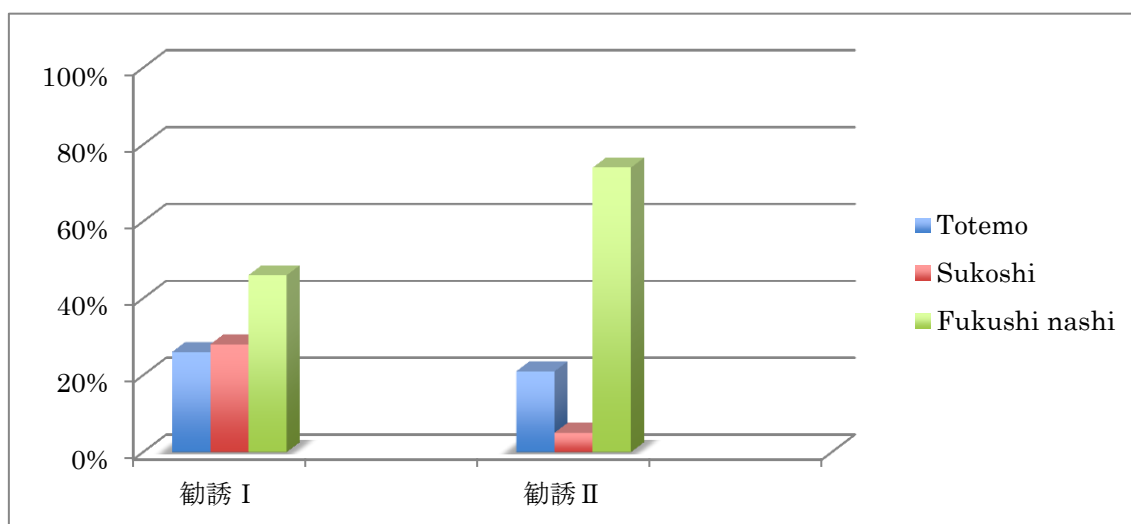


図 4-5 日本語における勧誘場面の違い

日本語では、図4-5のように、勧誘Ⅰ「食事の誘い場面」と勧誘Ⅱ「誕生パーティーの

誘い場面」における表現の選択率には違いがあった。具体的には、納得の度合いが高い「副詞なし」の選択率は、「食事の誘い場面」より「誕生パーティー」の誘い場面の方が高い割合を占めている。一方、納得の度合いが低いと判断された「少し」と「とても」の選択率は「食事の誘い場面」では比較的高い割合を占める結果となった。このことから、日本語母語話者にとっては、「食事の誘い場面」より「誕生パーティー」の誘い場面で断られた際に、期待する配慮の度合いが高くなることが明らかである。それは、表 4-2 から分かるように、日本語母語話者による断りにくさの調査結果では、「食事の誘い場面」より「誕生パーティー」の誘い場面の方が断りにくいと判断されたからだと考えられる。つまり、断り手が断りにくいと判断した場面に対しては、断られた側も配慮の度合いが高いとされる「副詞なし」の選択肢で納得する。このことから、日本語の勧誘場面では、断る側と断られる側の解釈にはずれがないことが明らかとなった。

4.4.3.1.4 日本語における依頼場面の異なり

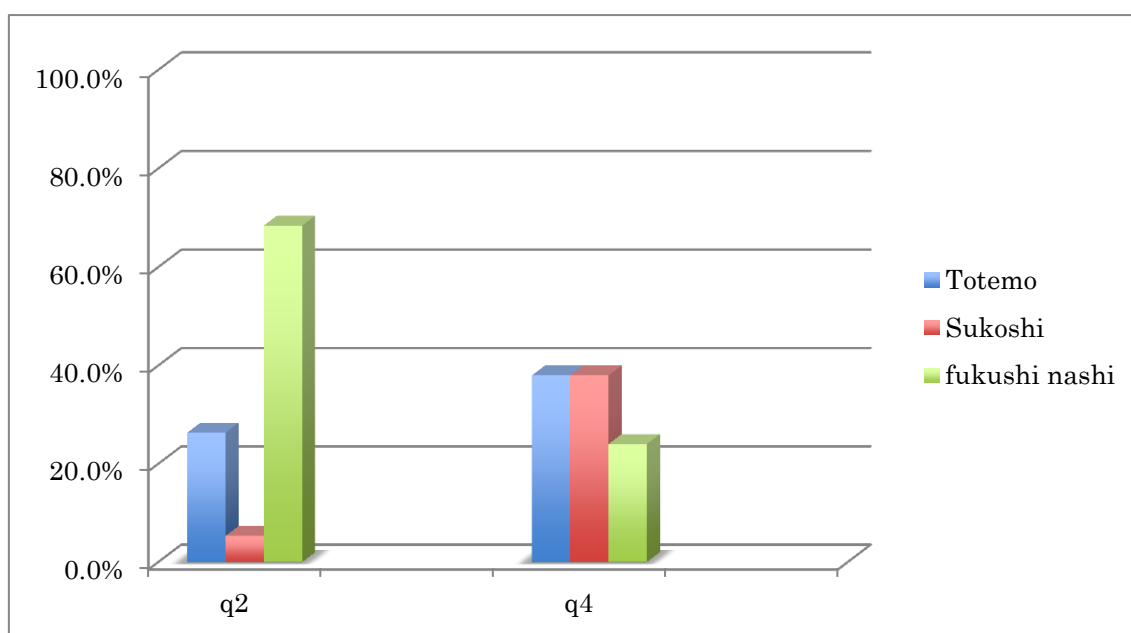


図 4-6 日本語の依頼 I と依頼 II の比較

図 4-6 で示されているように、日本語では、アラビア語と同様に依頼 II（問 4）である「飲み物の購入」場面では、異なる傾向が見られた。つまり、配慮の度合いが高いと判断された「副詞なし」の選択率が下がり、配慮の度合いが低い「とても」と「少し」の使用

率が上がるという結果が得られた。これは、「欠席したときの教材のコピー依頼」では、相手の要求に添えない結果として、依頼者が自分で必要としている教材を手に入れられなくなる可能性が高いことが含意され、不利益を与えてしまうため、配慮表現の使用が必要不可欠となる一方、「飲み物の購入」依頼場面では、依頼者が断られてもそれほど困らないため、期待する配慮の度合いが比較的低いことが関係していると考えられる。

被調査者が挙げた理由の中でも次のような回答があった。「教材のコピーは比較的大きな依頼なので、（「副詞なし」ごめん今大事な用事があるから...）2を使う方がいいと思う」。このことから、日本語でもアラビア語でも依頼場面の場合、断られたら困るか困らないかにより、期待する配慮の度合いが異なることが選択肢を選ぶ上での重要な判断要因であることが明らかとなった。

以上、両言語における依頼と勧誘の違いを見てきたが、日本語の調査結果では、場面内容の違いのみではなく、「少し」の表現の解釈により、違いが見られた。以下の図 4-7 は、4 場面における「少し」の選択率を示すものである。



図 4-7 4 場面における「少し」の比較結果

日本語では、図 4-7 から分かるように、納得の度合いが低い「少し」の選択率は、場面によって異なる傾向があった。具体的に述べると、問 1・4 と、問 2・3 を比較すると、「少し」が本来持つ意味で解釈される場合、「程度」の情報が重要でない判断され、使用頻

度が少ないのに対し、「ちょっと」のように派生的機能で解釈できる場合、使用率が上がる傾向があった。具体的に述べると、問1と4の選択肢として「ごめん、水曜日は少し忙しいんだ」と「ごめん今少し疲れているんだ」があり、両方とも「ちょっと」のように派生的機能で解釈できると思われるが、問2・3では、「ごめん、今少し大事な用事があるから帰るところなんだ」と「ごめんなさい。金曜日は少し勉強しなければならないから、行けないんだ」という2つの理由で使われた「少し」は本来の意味で解釈されやすいため、使用頻度が少ないことが分かる。

このことから、日本語の断りにおいて、「少し」も「ちょっと」のように配慮を示す二次的用法を備えており、相手がどれだけ「忙しい」「大変」かどうかは、断られた側にとって重要ではなく、むしろ相手に対する配慮をどのように示すかということが重視される。つまり、情報重視コミュニケーション様式より、人間関係重視コミュニケーション様式が好まれると考えられよう。

また、上記の結果から日本語の断りにおいて、頻繁に使用される「ちょっと」は常に低い程度の意味に限定して用いられるのではなく、対人的配慮を表す（牧原 2005）場合が多いこともうかがえる。

4.4.3.2 断りにくさの異なり

本節では、選択肢の判断要因として考えられる断りにくさの調査結果を提示し、詳しく見ていく。各場面に対して、被調査者が感じる断りにくさの調査結果と、断られたら側がそれぞれの場面で納得する表現形式の結果との関連について詳しく検討する。

図 4.8・4.9 中の勧誘 I・II、と依頼 I・II の内容は、以下の表のとおりとなる。

表 4-4 断りにくさの場面内容

勧誘 I	食事の誘い	依頼 I	教材のコピー依頼
勧誘 II	誕生パーティーの誘い	依頼 II	飲み物の購入依頼

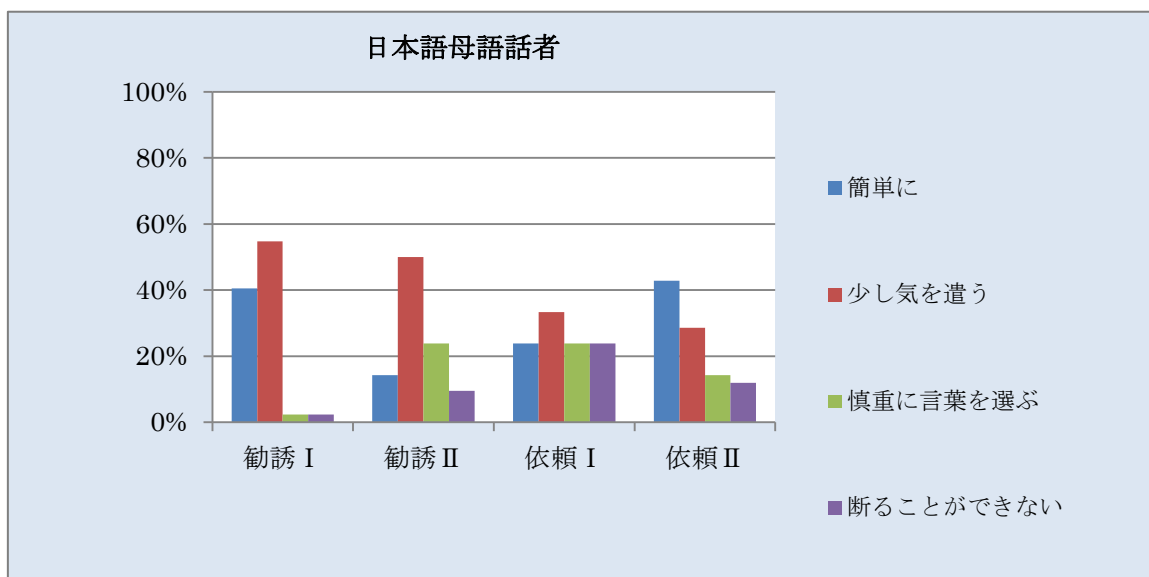


図 4-8 日本語における断りにくさの判断

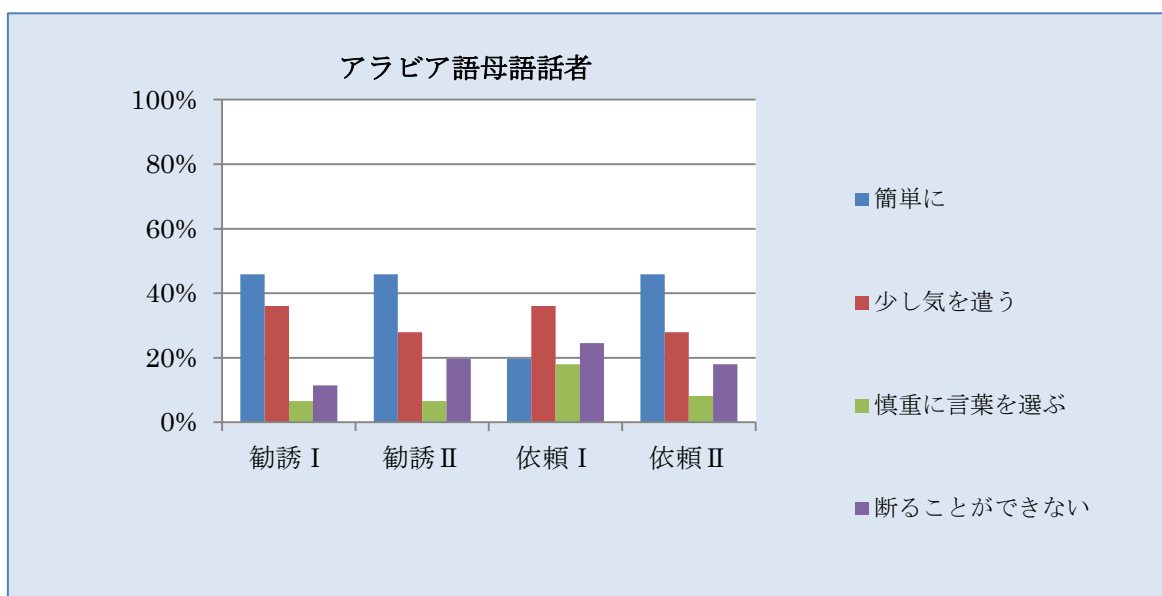


図 4-9 アラビア語における断りにくさの判断

図 4-8・4-9 から分かるように、場面内容の異なりによって、親しみのある相手からの期待が高い。そして自分が相手に損失を与えてしまうような要求内容の場合に、「断りにくさ」の度合いが高くなる。特に依頼 I では、FTA を行わない戦略に当たる「断ることができない」という選択肢 4 の割合が、比較的高いという結果が得られた。しかし、

アラビア語母語話者は、「簡単に断る」の選択率が最も高いのに対し、日本語母語話者は親の相手に対しても、気を遣う度合いが高いことが明らかとなった。具体的に述べると、日本語では、勧誘場面より、依頼Ⅰの方が断りにくく、依頼Ⅱより、勧誘場面の方が断りにくい傾向が見られた。一方、アラビア語では、依頼Ⅰ以外は、ほぼ断りやすい傾向が見られた。このことから、アラビア語においては、断ると相手が困ることが予想される要求内容の場合、断りにくさの度合いが高くなるのに対して、断っても相手が困らないだろうと推測される依頼Ⅱでは断りやすい傾向にある。しかし、表現の選択結果を示す図 4-1 から分かるように、断りやすいと判断された勧誘場面でも、最も配慮の度合いが高いとされる「gdan」の選択率が 70%程度を占めている。このことから、アラビア語では、全体的に場面内容による断りにくさに限らず、断る際に事情を大きくする「自己の負担が大きいと述べよ」の原則を用いることが望ましいことが分かる。つまり、アラビア語においては、断り手が断りやすいと判断した場面では、断られる側が期待する配慮の度合いが高いことが分かる。

一方、日本語では場面内容により、結果が異なった。場面 1~3 においては、「少し気を遣うが断ることができる」の選択率が最も高く、「程度副詞の調査結果」でもこれらの場面において納得の度合いが高いとされる「副詞なし」の選択率が最も高かった。一方、場面 4「飲み物の購入依頼」では、「簡単に断る」の選択肢が最も高い割合を占め、その結果「程度副詞の調査結果」でも、納得の度合いが低い「少し」と「とても」の使用率が上がり、「副詞なし」の選択率が下がる傾向があった。従って、DCT で集めた断りのデータの中でも、特に場面 4 では「批判」の意味公式が含まれる談話が見られた。そのため、意識調査結果ⅠとⅡでも、両言語母語話者が納得の度合いが高いと判断した表現形式より、納得の度合いが低いと判断した表現の方が高い割合を占める結果となった。

人間は本来自分の力だけではできないことに対して、他人から助けを求めるものであるが、依頼Ⅱは自分の力だけでできる要求であるため、このように、断り手が「断りやすい」と判断し、断られる側も配慮の度合いが低い表現でも納得できると考える。

以上の結果から、依頼場面より、勧誘場面の方が断りにくい場合もあることが分かる。

4.4.3.3 性差による異なり

4.4.3.3.1 アラビア語に見られる性差

アラビア語における性差の結果を、以下の図で示す。図内の Male は男性、Female は女性である。

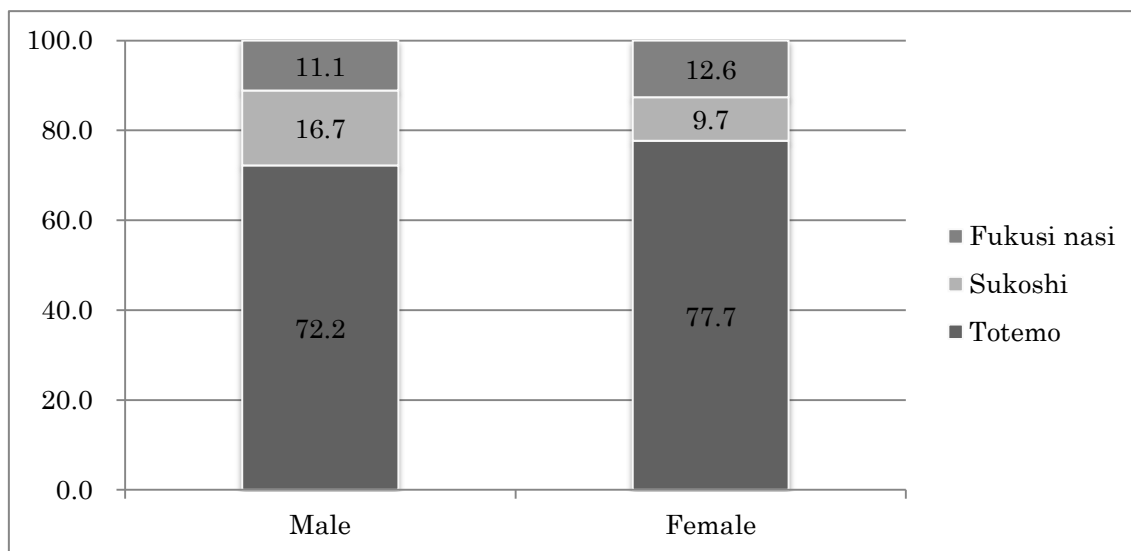


図 4-10 食事の誘い場面に見られる性差

「食事の誘い」場面では、性差による副詞選択の差はほぼなく、女性も男性も「gdan」(=Totemo) を最も多く選択していることが分かる。

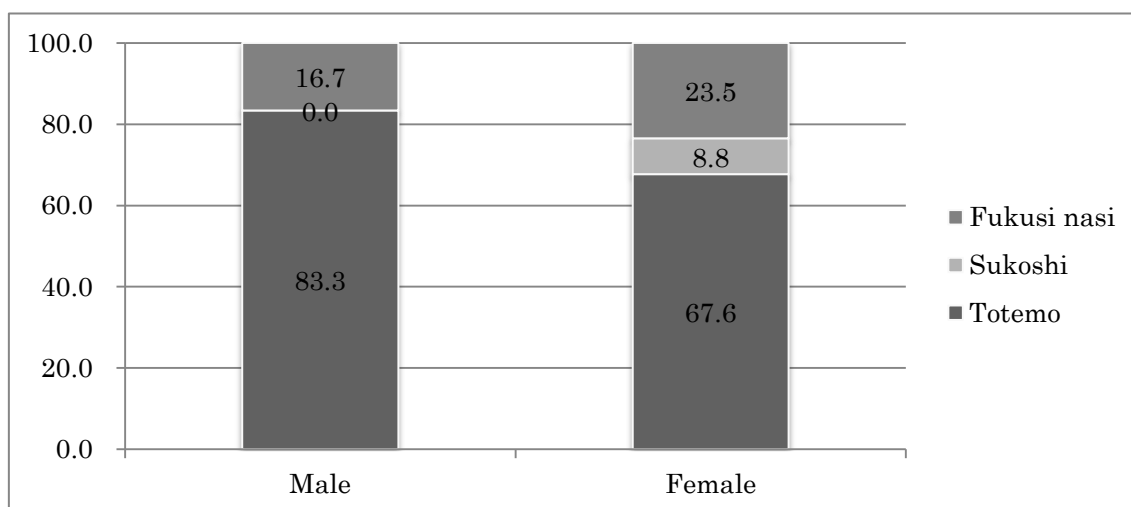


図 4-11 教材のコピー依頼場面に見られる性差

「教材のコピー」依頼場面では、男性は女性より、「gdan」の使用率が高い結果となったが、両者が一般的な用法の「gdan」を最も納得の度合いが高い表現と見なしている。

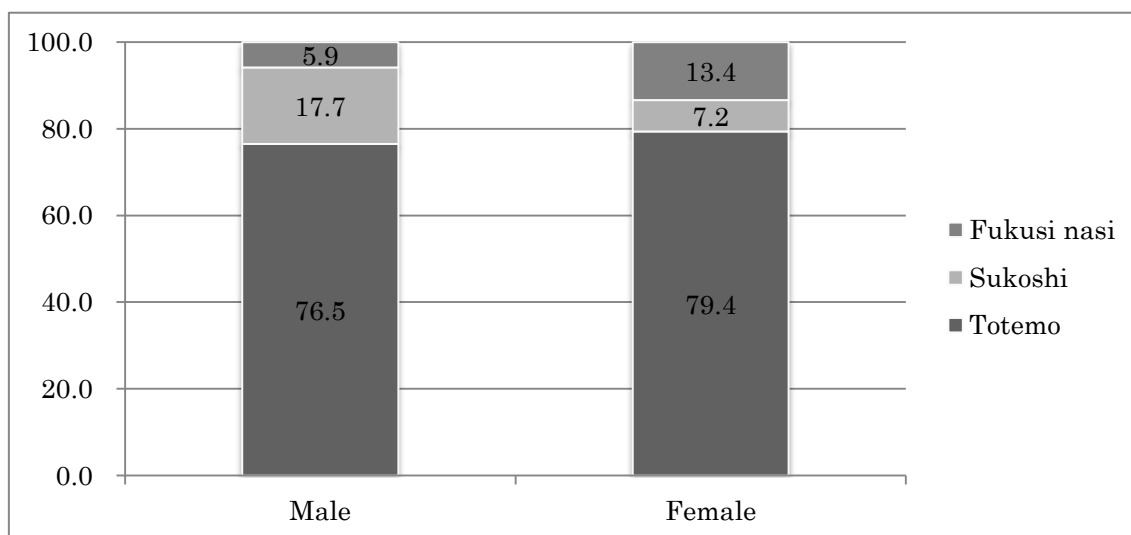


図 4-12 誕生パーティーの誘い場面に見られる性差

「誕生パーティー」の誘い場面では、性差の違いがないことが分かった。「gdan」の使用率が最も高いという結果が得られた。

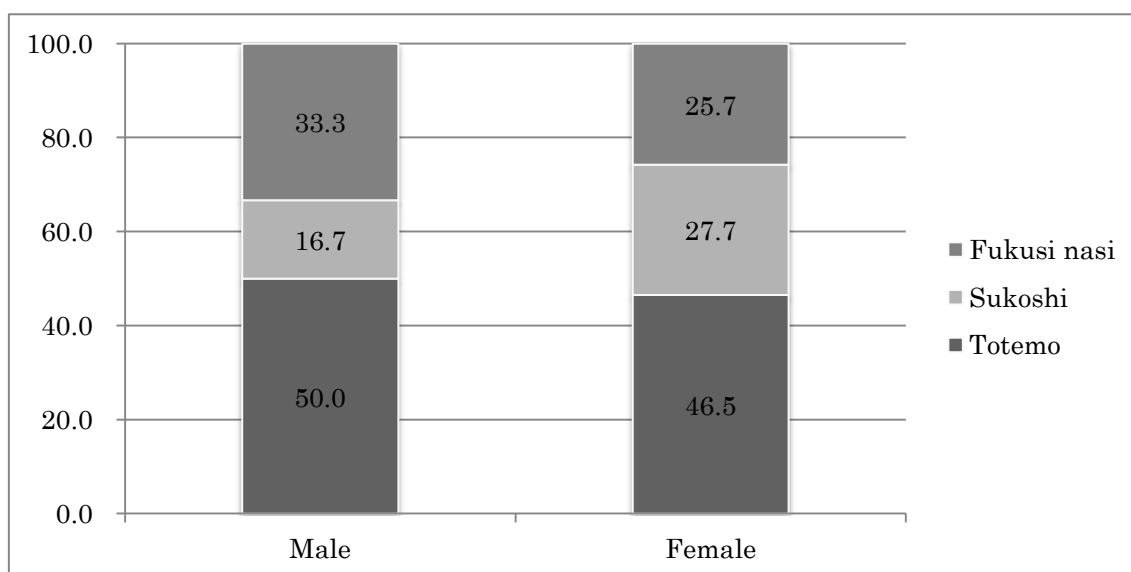


図 4-13 飲みもおの購入場面に見られる性差

「飲み物の購入」依頼場面でも上の場面のように、性差による副詞選択の違いは見られなかった。両者が、断りやすいと判断した場面4では、「gdan」（とても）の選択率が下がり、「shwya」と「副詞なし」の選択率が高くなる傾向にあった。

以上の結果から、アラビア語では性差による違いはほぼなく、男性も女性も程度性の高い「gdan」を最も納得の度合いが高いと見なしていることが明らかとなった。

4.4.3.3.2 日本語に見られる性差

日本語における性差の結果を、以下の図で示す。

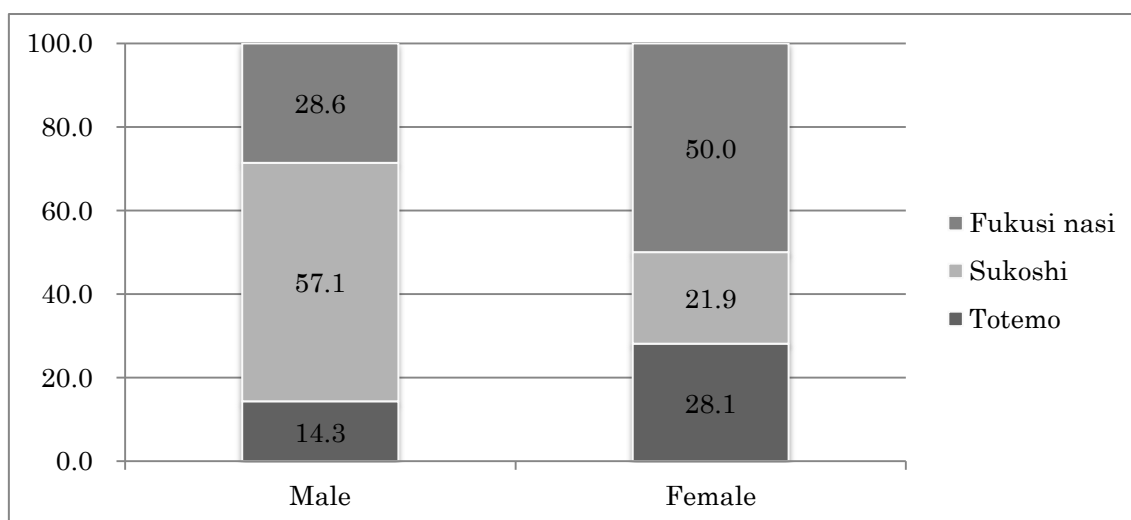


図 4-14 食事の誘い場面に見られる性差

図から分かるように、「食事の誘い」場面では、女性は「副詞なし」、男性は「少し」を多用している。そして、両者は「とても」の選択率が少ない点で共通している。

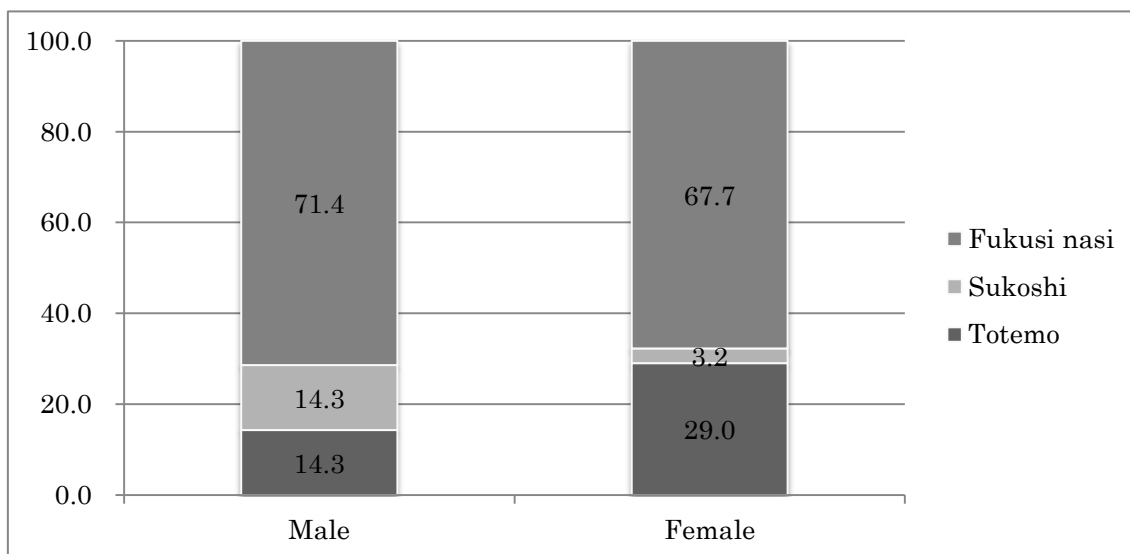


図 4-15 教材のコピー依頼場面に見られる性差

「教材のコピー」依頼場面において性差はほぼなく、両者は「副詞なし」の選択肢を最も多く使用するという高い割合を占めている結果となった。

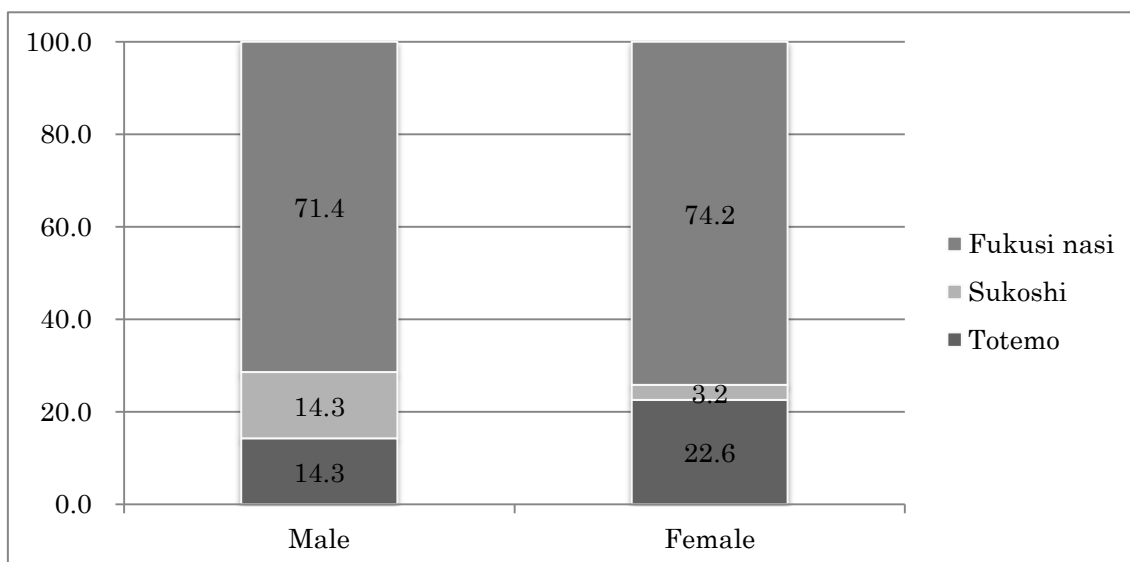


図 4-16 誕生パーティーの誘い場面に見られる性差

「誕生パーティー」の誘い場面においても、男性も女性も「副詞なし」の選択肢が多用されるという結果が得られた。断りにくいと判断された場面Ⅲは、場面Ⅱのように性差がほぼなく、「副詞なし」の選択肢が最も高い割合を占めている。

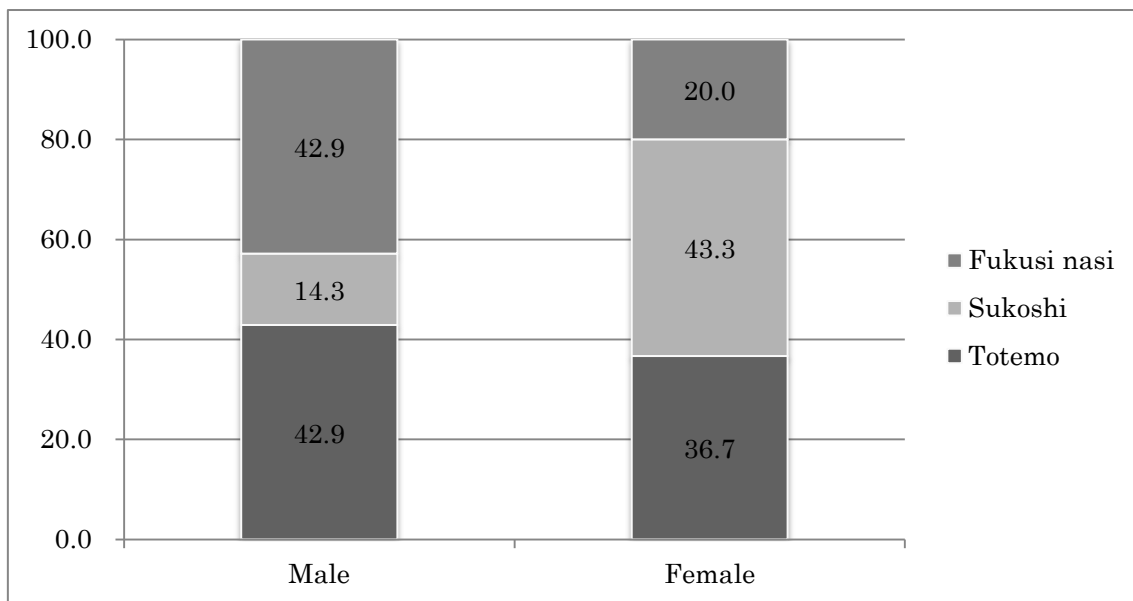


図 4-17 飲み物の購入依頼場面に見られる性差

「飲み物の購入依頼」場面では、女性は「少し」を最も多く使用し、その次に「とても」を使用するという結果だったが、男性は、「副詞なし」と「とても」の使用率は同程度であった。つまり、断りやすいと判断された場面では選択される表現に性差が見られた。

4.5 フォローアップインタビュー調査結果

インタビュー調査結果から、アラビア語において、断り手ははっきり事情を表さなければ、聴者に誤解される恐れがあり、人間関係が損なわれる可能性が高いため、程度副詞の働きを持つ形容詞の中で「gdan」が最も配慮の度合いが高いと見なされる。それは、断り手が事情を明確に説明することにより、実際相手の要求に応えたい気持ちは強いがやむを得ない事情があり、断らざるを得ない状況に置かれていることを推測可能にするからである。一方「shwya」（少し）が納得しにくい理由として、次のような回答があった。「少し忙しい」と言われると、断り手が要求に応えることができるにも関わらず、依頼者のことを大事にしていなかったため、わざと受け入れてくれないと思ってしまう」。また、「大変な事情がなさそうに見えるため、聴者への配慮が欠けている」。そして、「依頼者が断り手（「少し」しか忙しくないなら）、我慢して応えてくれると期待してしまうため、納得しにくい」、「gdan」が最も納得しやすい表現で、断り手に配慮されている感じがする」、「断

り手が私のことを思いやって、事情が許さないことをわざわざ説明してくれているため、断られても許せる」などの答えが多かった。

以上から、アラビア語の「shwya」は、本来の用法（程度を修飾・限定）以外に、聴者への配慮を示す機能を持たないことが分かる。従って、断りを正当化するメカニズムとして、日本語の配慮の原理「自己の負担が小さいと述べよ」を用いると、かえって聴者の誤解を招き、「とても忙しい」とときには、明示的に事情を述べる必要が出てくる。また、「gdan」が程度を高く上げるという本来の用法に加え、配慮表現として機能することも明らかになった。

4.6 日本語母語話者の選択肢の理由について

以上見てきたように、日本語母語話者にとっては「副詞なし」の談話が最も配慮の度合いが高い表現方法となっていることが分かる。なぜこのような傾向があるのかについて考えるために、以下で実際に被調査者が挙げた理由を提示する。

- (1) 「親しい友達が忙しいと言うなら、それは本当だろうと思うから」
- (2) 「親しい友達が「大事な用事」だと言えば、何も言わなくてもそれは本当なのだと思う」
- (3) 「「少し」と「とても」がない方が、自然に納得できる」
- (4) 「何か用事があって、水曜日はだめということさえわかれば十分だから」
- (5) 「今忙しくて帰らなければいけないことが分かれば、どれだけ忙しいか気にならないし納得できる」
- (6) 教材のコピーは比較的大切な依頼なので、2（「副詞なし」ごめん今大事な用事があるから....）を使う方がいいと思う。「ごめん今少し大事な用事があるから...」は相手が急いでいるときに使うと思う」
- (7) 「少し」か「とても」かは問題ではない。忙しいか忙しくないかが問題であるため2（「副詞なし」）を使う」
- (8) 「3は（「水曜日はとても忙しい」）は拒絶されている感じがする。1（「水曜日は少し忙しい」）は少し忙しいだけなら時間をさいてくれてもいいのではと思う」
- (9) 「「とても忙しい」と強調されると自分と食事に行きたくないのかなと感じるから」
- (10) 「勉強しなければならぬので断るということは、たくさん勉強しなければいけないんだとと伝わるから」

- (11) 「「ごめん水曜日は忙しい」という情報がシンプルに伝わるから」
- (12) 「ごめん今大事な用事があるから」の方がシンプルで納得しやすいと思う」
- (13) 「「とても忙しい」はすごく忙しいことを協調していて嫌な感じを与えそうだから」
- (14) 「「とても大事な用事があるから」は大げさな感じを与えそうだから」
- (15) 「「とてもたくさん勉強しなければいけない」は勉強熱心ぶっているように思われそうだから」
- (16) 「勉強があるだけで大事な用事だと思えるので、強調してほしくない」
- (17) 「教材のコピーという大事なことから、「少し大事な用事がある…」ならコピーしてくれてもいいじゃんって思うし、「とても」と言われると依頼したことを申し訳なく感じるから」

以上から、日本語母語話者にとっては、程度や頻度の情報は重要でなく、「とても」や、程度限定の意味を持つ「少し」より、「副詞なし」で事情説明を行うことで、より納得が得られやすくなると考える。また、断り手が強く事情を強調しなくても、断られる側から理解や同調が得られ、より良い人間関係を築くことができる。つまり、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則を用いるアラビア語母語話者は、日本語母語話者とのコミュニケーションで誤解や偏見、摩擦が起こる危険性が高いと言える。このことから、日本語母語話者とアラビア語母語話者が自分の断りを正当化するメカニズムや、相手へ示す配慮のメカニズムが異なることが明らかとなった。

4.7 調査結果の考察

意識調査ⅠとⅡの結果では、日本語では相手への配慮を表すとされる配慮の原則「自己の負担が小さいと述べよ」がアラビア語母語話者にとって、かえって人間関係を損なう恐れがあることが分かった。一方、程度性の高い「**gdan**」（とても）が含まれている談話は、80%程度を占めていることから、最も配慮の度合いが高い表現となっている。それは、配慮表現の原則から考えると、寛大性の原則②の**b**「自己の負担が小さいと述べよ」より、筆者が新たに提案するアラビア語の配慮の原則「自己の負担が大きいと述べよ」の方が断り発話において有効に働くことを意味していると思われる。

異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の違いの観点から考えると、アラビア語の断りでは、言葉を尽くして事情を論理的に説明する「とても忙しいのでできません」、「とても大事な用事があるので..」などのような「直線的」スタイル、「石畳的」スタイ

ルの方が好まれ、「理由」の中では自己開示の度合いが高いと言えよう。つまり、「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮の原則が、低コンテキスト言語の特徴である可能性が高いと考えられる。図で表すと以下のようにになると考えられる。

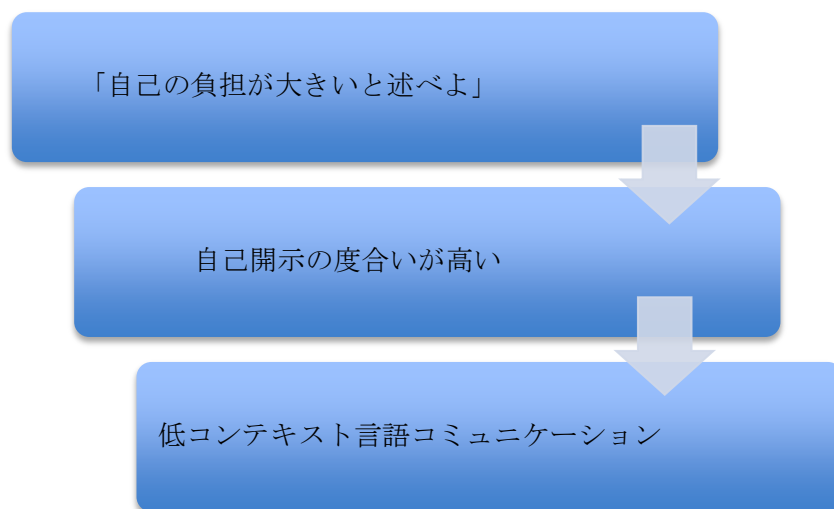


図 4-18 配慮表現の原則とコミュニケーション様式の関連

一方、日本語では「自己の負担が大きいと述べよ」の原則に当たる程度性の高い「とても」を用いると、言い訳として捉えられ、かえって人間関係を損なう恐れがあることが明らかとなった。

異文化間語用論の観点から考えると、日本語では、シンプルな発話の方が好まれ、コミュニケーション様式の中から、必要最低限の言葉で事情説明を済ませる飛び石的スタイルが優先される。従って、「とても大事な用事があるので....」より、自己開示の度合いが低い「用事があるので」、「少し忙しいので」などの談話の方が納得の度合いが高いと言える。それを図で示すと次のようになる。

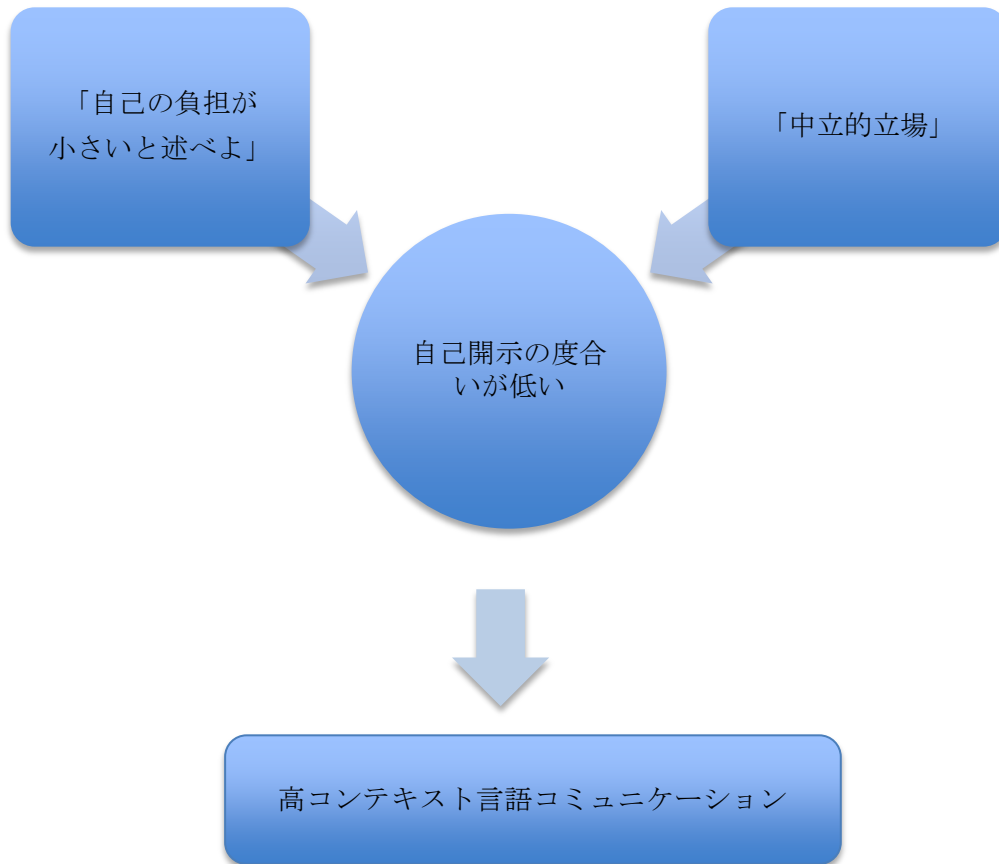


図 4-19 配慮表現の原則とコミュニケーション様式の関連

図 4-19 は、断り手が「自己の負担が小さいと述べよ」、「中立的な立場」に当たる副詞なしの談話を用いることは、自分の事情を詳しく話さないという自己開示の度合いが低い事情説明の特徴として考えられる。そのため、事情説明を詳しく行わないことは、第 3 章の表 3-1 で挙げた高コンテキスト言語コミュニケーションの特徴である「聞き手の推測力、結論を判断できる能力が求められる」、「言語化に対して積極的ではない」、「聞き手の負担度が高い」に相当するものだと考えられる。

以上から、日本語母語話者は、「ちょっと忙しい」「金曜日はちょっと…」と発話する際に、実際は非常に忙しい場合もあることが想像できる。また、「少し」にも低い程度限定の機能に加え、配慮表現として機能があることも明らかになった。

また、アラビア語母語話者が断りの言語行動を行う際には、実際は非常に忙しい状況に

置かれていない場合でも、相手への配慮として事情を明確に述べる傾向がある。このことから、Grice(1975)が提示した会話の協調の公理の中の「質の公理」に違反しても、むしろ会話がスムーズに進み、ポライトネスや配慮の効果がより発揮されることが明らかである。要するに、両言語母語話者が自分の断りを正当化して相手への配慮を示すメカニズムとして、実際にどのような状況に置かれているかにかかわらず、相手への思いやりとしてアラビア語では「自己の負担が大きいと述べよ」という原理を、日本語では、中立的な立場と、「自己の負担が小さいと述べよ」などの原理を用いる傾向が強いと言える。

また、選択肢の判断要因の分析からは、次のようなことが分かった。

場面内容の違いでは、日本語では、「食事の誘い」場面より、「誕生パーティー」の誘い場面の方が断りにくいという結果が得られた。両場面において、このような違いがあることの背景には、次のようなことが考えられる。

「食事の誘い」場面では、断った後でもいつでも食事に行けるという前提で断ることができ、「また、今度ね」、「また、誘ってね」という「関係維持」表現も使用可能な場面である。一方、親しい友人の「誕生パーティー」の誘い場面は、年に一回だけの出来事であり、親しみのある相手からの期待がより高いことが予想できる。従って、相手の期待にそわない断りの言語行動を行う際に、何らかの配慮を示す必要があると思われる。

一方依頼場面の場合、両言語において、「教材のコピー」依頼より、「飲み物の購入」依頼の方が断りやすい結果が得られたことから、次のようなことが言える。

依頼者が本来他人に負担をかける必要のない依頼を行うことで、気配りの原則 a、「他者の負担を最小限にせよ」、b「他者の利益を最大限にせよ」と、寛大性の原則 a、「自己の利益を最小限にせよ」、b「自己の負担を最大限にせよ」というポライトネスの原則に違反し、むしろ「他者の負担を最大限に」「自己の負担を最小限に」することになってしまう。

しかし、必ずしも「飲み物の購入依頼」だから、ポライトネスに違反した要求内容であるのではなく、同じ「飲み物の購入」依頼場面でも、依頼する側が足を骨折した友人だとすると、かえって断りにくさの度合いが高くなるとともに、依頼者が期待する配慮の度合いが非常に高まると思われる。従って、その要求内容が行われる状況や文脈も重要な要因であり、コミュニケーション様式を決定するミクロ的な側面の1つだと考えられる。

以上のことから、依頼内容における配慮のメカニズムを図で示すと、以下のようになると考えられる。

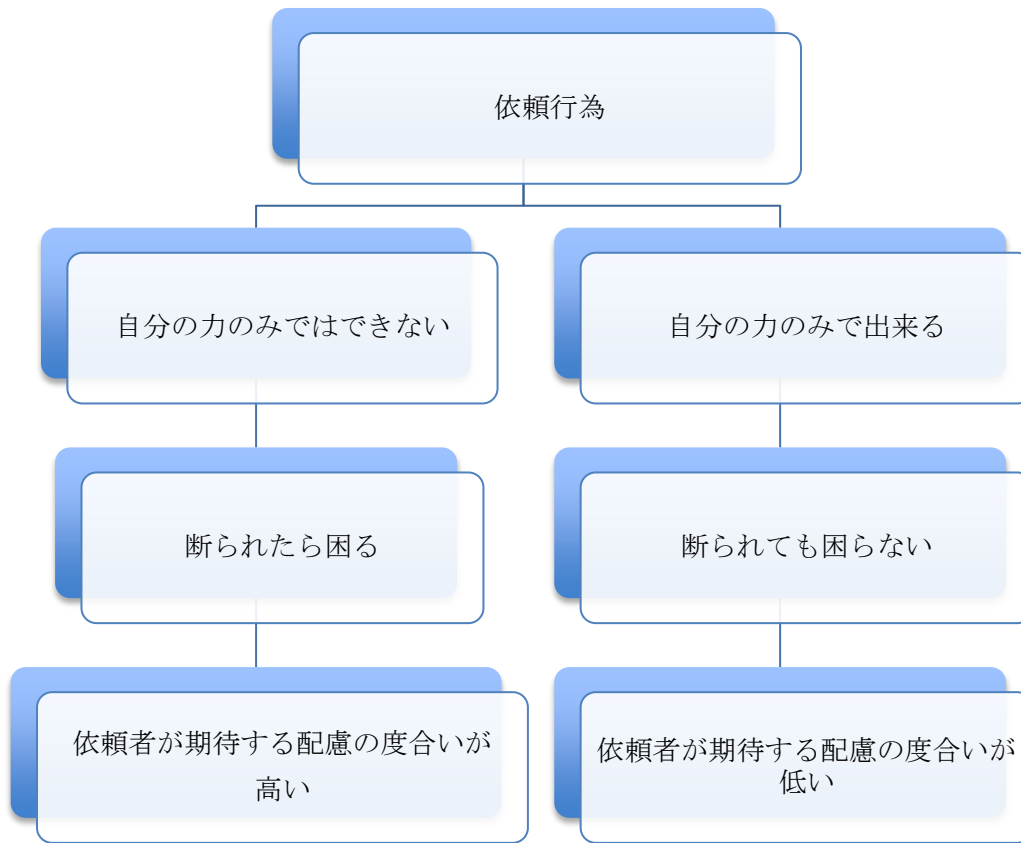


図 4-20 依頼発話における配慮のメカニズム

選択肢の判断要因から、日本語では表現「少し」自体が本来の機能に加え、対人的機能を有しているため、解釈によって選択率に違いがあったが、このような傾向がアラビア語の調査結果では見られなかったことから、アラビア語の「shwya」（少し）は、日本語の「少し」「ちょっと」のような対人的機能を備えていないということが言える。

また、被調査者がそれぞれの場面に対して感じる断りにくさの調査結果から次のようなことが分かった。

場面内容によって、依頼より勧誘の方が断りにくい場合もあり、場面内容がその断りやすさを決定する重要な要因であると言える。しかし、先行研究では、勧誘より依頼の方が断りにくいと指摘されることが多い。そこで、依頼と勧誘が成立するメカニズムには、どのような違いがあるのかについて、以下で論じる。

「勧誘」は「依頼」と比べ、利益が会話当事者の二人にあり、会話当事者は一緒に行動をするため、断る側は相手の利益だけではなく、自分の利益も奪うことになる。一方、依頼場面では、利益は依頼者のみにあり、被依頼者が依頼を引き受けるのを拒否することで、

依頼者の全ての利益を奪うことになる。つまり、他人の期待に添えない断り行為を行うことによって、他者のポジティブ・フェイスを脅かすが、相手の全ての利益を奪う依頼行為の方がフェイスを脅かす度合いが高いということである。

堀田・堀江（2012）は、勧誘場面について「勧誘は相手と自分が一緒に行動をし、相手と自分に利益がある」と述べている。一方、蒲谷他（1999）は依頼について「依頼の言語行動は、依頼者が自分で行動をし、その行動の決定権は相手にあり、そしてその行動の利益は依頼者にある。つまり、依頼者に要求された行動を行わないという断り行為によって生じる結果として、依頼者が期待していた利益を奪うことになる。従って、断り手が感じる心理的負担が自分の利益も含む勧誘より、自分に利益がない依頼の方が大きいため、断りにくくなる」と指摘している。しかし、本調査結果から、依頼場面は常に勧誘より断りにくいという指摘は妥当ではなく、利益と負担の概念のみで、勧誘と依頼を使い分けることには問題があると思われる。つまり、依頼場面の場合、断ることにより、どれだけ相手に負担をかけるかによって、断りやすさが決まることが普遍的な要因であるといえる。

4.8 日本語の「ちょっと」とアラビア語の「shwya」について

以上、調査結果からアラビア語の「shwya」は、FTA 行為を軽減する機能を持たないため、断り発話において話者の事情を説明するのに相応しくなく、程度性の高い表現形式の方が好まれることが分かる。一方、日本語の「ちょっと」には、以下の6つのコミュニケーション機能がある（岡本・斉藤 2004:69）。

- ① 依頼や、希求、指示行為の負担をやわらげる
- ② 否定的内容の前置き
- ③ 断りを受けやすくする
- ④ 呼びかけ
- ⑤ とがめ
- ⑥ 間つなぎ

本節では、なぜこのようにアラビア語の「shwya」は日本語の「ちょっと」と異なるのかについて考えたい。そこで、実際に断り発話において配慮表現として認定できない原因について、以下日本語の例文をアラビア語に直訳し、日本語の「ちょっと」と、アラビア

語の「shwya」がなぜこのように異なるのかをより詳しく検討する。

語用論の観点からアラビア語の程度副詞について考察を行った先行研究は、管見の限りない。しかし、日本語の副詞の使用と配慮表現の関係性について語用論的分析を行った研究としては、山岡・牧原・小野（2010）、福田（2011）などが挙げられる。福田（2011）は、談話における副詞「けっこう」の対人的機能に関する研究である。一方、山岡・牧原・小野（2010）は様々な副詞を分析対象とし、程度を表す副詞として、特に「ちょっと」を挙げている。山岡・牧原・小野（2010:193）によると、日本語の「ちょっと」は本来持つ低い程度の意味以外に、二次的用法として対人配慮を表す用法がある。つまり、日本語母語話者が断り発話において使用する「ちょっと」は、「少しだけ」という本来の程度限定の意味ではなく、配慮を示す方法の1つである。例えば、以下の作例 A の応答 B と C を比べて見よう。

(3)

A : コーラ入れましょうか。

B : ちょっとだけ。

C : コーラはちょっと…。

上記の作例の応答 B は、程度副詞の本来の意味を表すものであるが、応答 C は、山岡・牧原・小野（2010）が指摘した「ちょっと」の対人配慮を表す用法で用いられている。つまり、発話者は「ちょっと好きじゃない」「飲みたくない」と言うべきところで、それを明確に述べないで、「ちょっと」を用いることで自分の本意を抑え、相手を配慮し、「飛び石的」コミュニケーション様式の断り談話を用いる。では、アラビア語の「shwya」（少し）には、上記の2つの機能があるかどうか、作例の応答 B と C をアラビア語に直訳すると、以下のようになる。

(4)

B' : shwya soghayara

C' : ? elcola shwya....

応答 B' は、本来程度副詞を持つ意味で解釈されるため自然なアラビア語だが、応答 C'

は不自然さが感じられる。それは、本調査結果で明らかとなったように、アラビア語の「shwya」は断り発話において、派生的対人機能を備えていないと考えられるからである。そのため、アラビア語母語話者は、事情を説明する際に「shwya」(少し)より、「gdan・ktyr」(とても、たくさん)の副詞を好むと考えられる。つまり、フォローアップインタビュー調査結果のように、「shwya」を用いて、断りの事情を修飾してしまうと、「少しだけ忙しい」などと解釈されてしまう。従って、日本語の断りで頻繁に使用される以下の例文はアラビア語に直訳できないため、非文になる。

(5) 金曜日はちょっと..

(5') *elgomāa shwya.. (直訳)

アラビア語では「金曜日はちょっと忙しい」ならば理解できるが、「金曜日は少し...」のように修飾先の述語がなければ、「shwya」だけでは、断りの発話として成立しない。

また、上記の応答 C' を自然なアラビア語にするには、「コーラは飲みたくない」「コーラは好きじゃない」、「ダイエット中で、飲めない」などと「直線的」コミュニケーション様式に変える必要がある。しかし、それは相手のことを配慮していないわけではなく、このような場面で配慮を示すために、論理的な理由を述べ、なぜ「飲みたくないのか」に対して、納得が得られるようにしていると考えられる。つまり、応答 C' のように、「石畳的」・「螺旋的」コミュニケーション様式では、意図が伝わらない危険性があると言えよう。それは、八代・小池・吉田・町 (2009:85) で指摘されるように、「直線的」スタイルを用いる人は、螺旋的スタイルの答えを納得できず、本意が読み取れないからである。

先に挙げた例文を再度提示する。「ちょっと」を「少し」に置き換えられるかどうかを見て見よう。

(6) ?金曜日は少し.....

上記の例文で使われた「ちょっと」を「少し」に置き換えると不自然さを感じる。それは「ちょっと」から程度性の意味が失われ、相手への配慮や、申し訳ない気持ちという派生した機能を表すためである。つまり、山岡・牧原・小野 (2010) と牧原 (2005) が指

摘した対人的機能を表している発話となる。このように、断りの機能を持つ「ちょっと」は日本語の特徴だと言える。

一方、日本語でも「金曜日は少し」が言えないように、アラビア語も程度性の意味で「shwya」（少し）を解釈するため、無意味な文になり、成立しない文となる。よって、日本語では「すごく忙しい」ときでも「ちょっと忙しい」を使うことで非明示的に事情の強さをアピールすることができるが、アラビア語の「shwya」（少し）にはこのような働きがないため、「すごく忙しい」ときには明示的に忙しいことを述べる必要がある。加えて、筆者の主張を裏付けるものとして、次の先行研究の指摘が挙げられる。岡本・斎藤（2004:67）は、日本語の「ちょっと」について次のように述べている。「それはちょっと難しいなあ。／それはちょっと無理だよ。」などのような断り発話で使われる「ちょっと」は、「かなり・けっこう・普通以上」と同じように使われると指摘している。つまり、意識調査Ⅱの結果で述べたように、日本語母語話者は、相手への配慮を示すのに、Grice(1975)の「質の公理」に違反し、「とても忙しい」ときでも、程度性の高い「とても」の副詞の使用を避け、非明示的に「ちょっと忙しい」と発話する。このように、アラビア語と日本語の断り発話における程度副詞の使用と相手への配慮を示すメカニズムが異なることが分かる。

次に、コーパスやドラマで見られる程度性を表さない日本語の特徴的な「ちょっと」の例文を提示し、アラビア語との違いを見る。

(7) 私から連絡して聞いてみたところ「今 **ちょっと忙しい** からもう少し待ってね」と言っ
たっきりまた連絡がありません。

(BCCWJ Yahoo 知恵袋)

ここでは、話者は相手に対し「少し待ってね」と言ったにもかかわらず、自分の事情を修飾する際に「ちょっと忙しい」と述べている。それは、「少し忙しい」に置き換えると、アラビア語のように程度を限定してしまい、聴者に不快感を与えてしまうからなのではないかと思われる。しかし、「ちょっと」を用いることで、相手に対する申し訳ない気持ちや、思いやりをアピールすることができる。一方、他者が行動する部分では、「少し待ってね」のように、逆に程度を限定する「少し」が使われている。ここでは、疑問とするの

は、いったいなぜ「ちょっと待ってね」と言わなかったのかという点である。日本語母語話者は「ちょっと待ってね」という言い方を頻繁に用いる。日本語母語話者同士の場合、「少しだけ待って」という意味のみを表すのか、「けっこう」という意味も含意されているのか、無意識に両方の解釈が存在していることが分かるはずである。よって、上記の例文では、発話者が意図的に「少しだけ待ってね」という意味を表すために、「ちょっと」ではなく、「少し」を用いたのではないかと考えられる。

筆者自身も、日本語母語話者とのコミュニケーションで、「ちょっと待ってね」と言われて、実際は長時間待たされた経験を持つ。

(8) ほしたら、いろいろと **ちょっと忙しく** なってきて～、読めてないんだけど～。

(BCCWJ Yahoo 知恵袋)

上記では、本来論理的には矛盾するはずだが、語用論的には「ちょっと」は程度の意味で使用されていないため、「いろいろと」の副詞と共起することが可能であると考えられる。

このように、日本語では話者が程度を表したいか、配慮を示したいかによって「ちょっと」と「少し」を使い分ける場合があることが分かる。しかし、日本語でも「ちょっと」が持つ本来の意味と派生した意味が入れ替わっても、解釈上支障がない場合、話者がどちらの意味を表したいのかが判断しにくい場合もあると考えられる。次に、アラビア語の断りでも「いろいろとちょっと」という言い方が成立するかどうかについて、アラビア語母語話者3名に判断を依頼した次の例を見たい。

(8')? baādaha etshaghalt shwya be hāgat ktyr...,fa maāreftsh aa`ra.

例(8)をアラビア語に直訳すると、例(8')のように(いろいろと)なのに(ちょっとだけ忙しい)という解釈になってしまい、違和感を感じる。「いろいろと+ちょっと」という言い方は、アラビア語として成立しない文である。それは、程度性の意味で解釈するため、意味的に矛盾する例文となる。

次の例文は、2015 テレビ番組で見たアニメの中で使われた「ちょっと」で、番組名は不明である。

4名の友達のグループで、レストランへご飯を食べに行き、注文したにも関わらず、2時間経っても注文が来ないことについて、不満を抱き、以下のような発話をしている。

(9)

A: 注文来ないなー。

B: そうだね。2時間も経ったのに。

C: ちょっと、遅いね。

上記の B の発話例から分かるように、「2 時間」はレストランで注文を待つ時間として非常に長い。そのため「が格」ではなく「も格」が使われている。これに対して、C は「ちょっと、遅いね」と発話をしている。ここでは、「ちょっとだけ遅い」と解釈することが論理的に矛盾するはずであり、文脈から形容詞「遅い」を修飾しようとする「非常に遅い」「すごく遅い」と発話した方が適切である。従って、C が用いた「ちょっと」は不満を軽減する機能を持つものであり、程度を限定する意味ではないことが明らかである。従って、上記の例文をアラビア語にすると、「ちょっと遅い」は「少しだけ遅い」という意味を表してしまうため、文脈的に不適切な発話となる。そのため、それを文脈的に適切な発話にするには、程度性の高い表現「gdan」「awy」「khales」(とても、非常に、すごく)を用いて、「すごく遅い」などと明示的に言語化する必要がある。

一方、本来の意味を保つ「ちょっと」が含まれる発話として、以下テレビドラマから抽出した会話を提示する。

状況は、警察官同士の発話で、地位の高い警察官が部下の警察官に以下のように述べるシーンである。

(10)

A: 目の前で犯罪があったのに、気づかないなんて。お前は恥ずかしくないのか。

B: ちょっと恥ずかしいと思う。

A: えー、ちょっと！ちょっとだけなら、警察やめろ。

(「こちら本池上署」)

上記の発話では、警察官 A が「ちょっと」を本来持つ意味で解釈しているため、部下で

ある警察官 B を批判している。つまり、部下が用いた「ちょっと」は配慮を示すものとして解釈されていない。では、一体なぜ日本語母語話者同士の場合、「配慮を示すちょっと」と「程度を低く限定するちょっと」を使い分けられるのだろうか。

基本的には、配慮を示す「ちょっと」が使われるのは、他人の様子を修飾したり、他人に配慮を示すときである。また、他人への批判などのように、FTA になる行為を行う際に、その FTA を軽減するのに使うわけであるが、上記の場面では、発話者が自分自身の様子または、自分の気持ちを修飾するのに「ちょっと」を使用したため、自分へ配慮を示すという事態になっている。つまり、配慮は他人との人間関係を良好に保つために用いられるものであり、自分について発話する際に、自分へ配慮を示すのは適切ではない。この例では、警察官 A が部下の用いた「ちょっと」は「自分がちょっとだけ恥ずかしい」という意味であると解釈したため、怒って「ちょっとだけなら警察やめろ」と発話したということになる。

このように、アラビア語の例文に使われる程度副詞は、本来持つ意味を表しているため、対人配慮という拡張した機能も果たすかどうかについて客観的に検証するため、本調査では意識調査も行うことを考えた。そこで、本研究では量的分析を行ったわけだが、これによって、日本語とアラビア語の程度副詞の異なりと、それらが断り発話の中で果たす対人的機能を明らかにすることができたと思われる。

4.9 助動詞「lazem」について

問題の所在で述べたように、アラビア語母語話者の断り発話においては、日本語の「なければなりません」に相当する助動詞「lazem」が好まれる傾向があった。よって、断り発話において、「lazem」は配慮表現として認定できるのではないかと考えられる。

本章で論じてきた断り発話における「程度副詞」について、「自己の負担が大きいと述べよ」というアラビア語の特徴を付ける配慮表現の原則が「程度副詞」以外の、他の表現選択にも見られると仮定して助動詞「lazem」について調査を行った。

本節では、まずモダリティとは何か、義務性を表す助動詞「lazem」は、どのように配慮表現として機能するかについて、論じる。

4.9.1 義務的モダリティ

「lazem」は、日本語の「～なければならない」に相当する助動詞である。早川 (2012:286) では、モダリティは大きく分けて、情報の確かさに関わる①モダライゼーションと、行為を要求する程度に関わる②モジュレーションの2つに分類されている。さらに、モダライゼーションには、蓋然性と頻度が含まれ、モジュレーションには、義務性と、意思性、能力の3つが含まれている。モジュレーションの中では「～なければならない」は最も高い義務性を持つ表現であるとされている。

アラビア語の断り発話の中では、特に行為を要求する程度に関わる②モジュレーションが多く見られる。従って、頻度や程度を表す程度副詞以外にも、義務性を表す助動詞「lazem」(なければならない)が多用される傾向があった。これは、情報重視コミュニケーション様式の特徴と考えられる。

井出 (2006:35) では、英語のモダリティ⁴⁶は、「認識」に関する「epistemic」、と「義務」に関する「deontic」の2つに分けられ、「義務」に関する「deontic」モダリティは、人間の道徳性に関する話し手の心的態度を表すものであるとされている。アラビア語でもモダリティに当たる助動詞は上記の2つに分けられるが、断り発話の中では、英語の must に相当する助動詞「lazem」が好まれる。この義務性の高い表現は断り発話において、どういった語用論的機能を果たすのだろうか。

Lakoff (1972:910) では、問題とされたお客さんにケーキを勧める言い方として、(may,should,must)の3つの助動詞が含まれる例文のうち、最も強制力を持つ(must)がより丁寧な言い方で、ポライトであることが指摘されている。それは、「相手が遠慮する心を持っていることを想定して、相手にとって良いことを進めるには、強い勧めが相手に対しての思いやり、つまりポライトな配慮となる」(井出 2006:67)からである。

本研究では、断り発話においても、助動詞「lazem」は、対人関係を良好に保つという本来持つ高い義務性に加えて、配慮表現として機能する二次的用法を備えているのではないかと考えられる。それは、断り発話の中でも、自分の断りを正当化するのに、助動詞「lazem」を使用することにより、せつかく誘ってくれた相手のことを思いやって、今現在断らざるを得ない状況に置かれていることを想定させながら、相手から断りの了解や同

⁴⁶ モダリティは、話し手が話をするとき、命題をコンテキストと結びつける接着剤のような存在である(井出 2006:35)

調を得ようとする事ができるからだと考えられる。そのため、「ごめん、今から帰るんだ」より、「ごめん今から帰らなければならないんだ」の方が必然性が含意され、話し手は本来聞き手の要求に応えたいが、やむを得ずどうしても帰らなければならない事情に置かれているために断ってしまうことが相手も推測できるため、より丁寧になる。そこで、本章では、助動詞「lazem」は配慮表現として認定できることを意識調査や、フォローアップインタビュー調査によって実証したい。

4.9.2 意識調査Ⅲの内容

本節では、義務性を表す助動詞「lazem」（なければなりません）が、実際に好まれるかどうかについて、3つの質問項目の結果を通して、見ていきたい。

まず、アラビア語で選択式のアンケート調査⁴⁷を行った。被調査者に親しい友人を誘う場面と、何か依頼する場面を3つ設定し、被調査者が親しい友人に断られたとする場合には、3つの選択肢の中から最も納得できる回答を選んでもらった。そして納得する理由を書くよう指示した。

問1～3は義務性を表す助動詞「lazem」に関するもので、選択肢は、「lazem」（～なければならぬ）と、願望を表す助動詞「āayez」（～たい）、と「断定的」の3つを設定した。そして、事前に被調査者に選択肢の中で納得できる回答がなければ、選択せずに納得できない理由を書くよう指示した。

4.9.3 フォローアップインタビュー調査

次に、被調査者のうち8名を対象にフォローアップインタビュー調査を行った。調査では、なぜこのように選択したかを確認し、選択しなかったものがなぜ納得できないかについて答えてもらった。

⁴⁷ 資料IVを参照されたい。

4.9.4 意識調査Ⅲの結果

以下、3つの質問項目の結果を図4-21で示す。

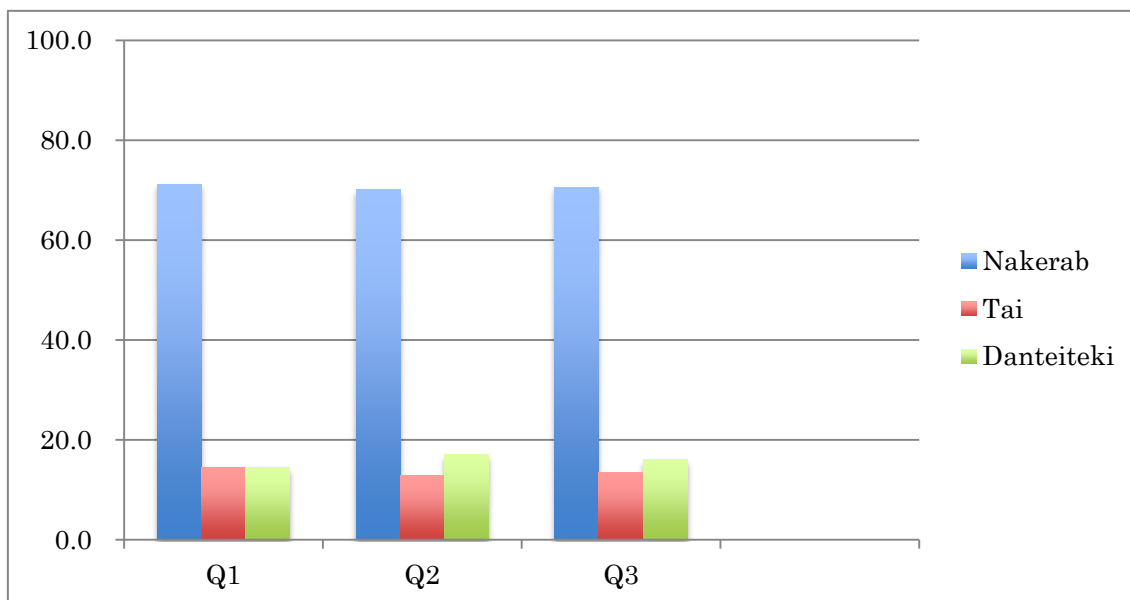


図 4-21 意識調査Ⅲの結果

上記の図から分かるように、場面内容にかかわらず、断られたら最も納得しやすい応答は、「lazem」（なければならない）が含まれている談話（70%程度）であることが明らかとなった。このことから、「lazem」は本来表す義務性以外にも、断りを受けやすくする二次的機能も持つと考えられる。これは、聞き手の依頼や誘いを断る際に、現時点では非常に大変な状態にあることを表明することにより、断りの了解を得ることができると考えられるからである。一方、「āayez」（～たい）は、15%と低い割合を占めている。それは、断り発話において、話者の断りの事情を説明するのに、相応しくなく、やむを得ず事情があるために断るより、自分がそうしたいから断るという本来言葉が持つ意味で解釈されてしまうからである。言い換えると、希望を表す助動詞「āayez」（～たい）は、通常話し手自身（一人称）が希望することを表すため、話し手が聞き手より、自分の希望を優先することが明確になっていることが問題になるということである。

また、調査結果から分かるように、アラビア語では、命題内容を断定的に述べるより、助動詞「lazem」（なければならない）を用いることによって、事情を大きくするまたは、大げさにするというストラテジーが好まれることがわかる。

4.9.5 フォローアップインタビュー調査結果

義務性を表す助動詞「lazem」は、強制という意味が含意され、最も説得力がある表現であることが分かった。それは、「lazem」は、程度性の高い副詞のように、聞き手が、断り手は現在非常に大変な状況にあることが、聞き手にも推測できるからである。

被調査者が意識調査Ⅲにおいて行った選択の理由として、「せっかく誘ったのに、断るなら、大事な理由があることをアピールしてほしい」などのような回答が挙げられる。さらに、「lazem」が用いられることにより、断り手が自分の意志で断っていないことが推測される」などの回答も多かった。このことから、4.9.1 節で述べたように、「lazem」を使用することにより、せっかく誘ってくれた相手のことを思いやって、今現在断らざるを得ない状況に置かれていることを想定させながら、相手から断りの了解を得ようとすることができるということをフォローアップインタビュー調査結果からも確認できた。

以上のことから、発話者がアラビア語の助動詞「lazem」を使用する意図として、自分が義務を抱えているからではなく、相手に対する配慮を示すためであることが分かる。

4.10 本章のまとめ

以上の調査と考察から、本研究で立てた仮説を検証することができた。日本語の断りでは、第3章で論じたように、「螺旋的」スタイルや「飛び石的」スタイルが好まれるのに対して、アラビア語では、言葉を省略しないで、むしろ言葉を尽くして論理的に状況を説明する「石畳的」スタイルと「直線的」スタイルが好まれる。また、本調査の結果から、両言語母語話者が納得する表現形式や、納得できるメカニズムが異なることが明らかとなった。アラビア語では、程度性の高い表現形式によって、「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮の原則に従い、自分の断りを正当化することができ、相手への配慮も示すのに最も有効であることが示唆された。一方、日本語では「副詞なし」の談話の方がシンプルで納得の度合いが高いため、「石畳的」スタイルのように、必要最低限の言葉で済ませ、自己開示の度合いが低い断り発話の方が、納得が得られやすいという結果が得られた。つまり、日本語母語話者は、事情がどの程度重要なのかという情報を必要とせず、むしろ相手との人間関係を重視する。従って、「とても」を用いると、かえって断られる側に不快感を与えてしまう。一方、アラビア語では、断りの理由の中では、事情がどの程度で重要なのかに関する程度の情報が重要視され、その情報を通して、相手との人間関係を維持しようとする。つまり、両言語母語話者とも、相手への配慮が込められている表現をなるべく用い

ようとするが、対人配慮が発生するメカニズムには大きな違いが存在する。日本語母語話者は、第3章の図3-9で提示したコンテキストとポライトネスとの関わりのように、コミュニケーション様式としては、人間関係を重視し言葉を短くまとめ、Lakoff(1973)のポライトネス・原則からは「ポライトに述べよ」の原則によって配慮を示すのに対して、アラビア語母語話者は、正確かつ論理的に考え、相手の推察力に頼らずに、言葉で人間関係を維持しようとする。つまり、第3章の図3-10で示したように、Lakoff(1973)のポライトネスの原則の中でも「明確に述べよ」の原則が優先される。

このように、個別言語の中ではコミュニケーション様式の差異が、その言語や文化で好まれる配慮表現に大きな影響を与えることが明らかとなった。また、日本語とアラビア語の両言語母語話者が関わるコミュニケーションの中では、お互いに配慮を示しているように思えるところで、かえって人間関係を損なう恐れがあり、相手を傷つけてしまう可能性がある。さらに、日本語学習者の母語であるアラビア語におけるポライトネスと配慮表現のメカニズムが、目標言語である日本語と大きく異なるため、学習者と日本語母語話者のやり取りでは、誤解や摩擦が起こる可能性が高いと言える。

以上を踏まえて考えると、これまでに日本語教育における日本語教材⁴⁸の中で提示されてきた断りの談話構造として、「ちょっと…」または、「金曜日はちょっと…」というような構造がステレオタイプになると、実際のコミュニケーションではトラブルが起こる危険性があると推測される。調査結果からは、現代日本語母語話者が断られる際に、「副詞なし」の談話の方が明瞭で、納得する度合いが高いことが示唆されており、日本語教育の現場で提示されてきた、日本語の断り＝「ちょっと…」は、実際場面では常に通用するとは限らない。従って、このような提示情報は、学習者の中で化石化してしまう恐れもあるため、今後は日本語教育の現場で、「ちょっと」の用法に関する本研究の調査結果が生かされることを期待したい。

また、表現選択の結果をまとめると、判断要因のうち、「断りにくさ」の調査結果から日本語母語話者が断りにくいと感じる時には、納得の度合いが高い「副詞なし」の選択肢を好むのに対し、断りやすいと感じるときには、納得の度合いが低い表現でも納得が得られることが明らかになった。一方、アラビア語では、依頼Ⅱを除き、断りやすいときでも、断りにくいときでも、双方の場合、納得の度合いが高い表現「gdan」で断られる方が丁寧であることも示唆された。

⁴⁸ それについて、第6章の6.7節で詳しく論じる。

第5章 断り発話に見られる配慮表現の原則について

5.1 本章の目的

第4章では、特に「理由」の意味公式に着目し、両言語母語話者がどのように自分の断りを正当化するのか、どのように相手への配慮を示すのか、配慮表現としての機能を果たす程度副詞に焦点を当て考察を行った。特に、両言語においてコミュニケーション様式の差異が、どのように配慮表現の原則や配慮表現の選択に影響を与えるのかを論じてきた。その結果、両言語の断りにおける「理由」の意味公式の選択には違いがあった。しかし、第1章で述べたように、「理由」の意味公式だけでなく、断り発話全体に見られる意味公式についてはこれまでの研究では十分に言及されて来なかった。従って、本章では課題Ⅱを達成するために、談話レベルの観点から、断り発話に見られる意味公式を取り上げて、それらの意味公式の中で用いられるポライトネスと配慮表現の原則を明らかにする。特に、筆者が日本語とアラビア語の断り発話を対照した結果をふまえながら、各断り発話を構成する要素及び両言語母語話者が用いる意味公式に焦点を当て、分析する。

言語は非常に複雑なメカニズムの中で働き、1つの理論のみに頼るだけでは、全ての言語現象は説明しきれないと考えられる。そこで、本章では断り発話におけるポライトネス及び配慮の原則を細かく分析すべく、Beebe et al. (1990) と、施 (2005) が断り発話を機能別に分類した意味公式をさらに筆者が修正した⁴⁹分類表に従い、各意味公式に見られるポライトネスと配慮表現の原則について分析する。具体的には、Leech (1983) のポライトネス原則と、山岡・牧原・小野 (2010) の日本語の配慮表現の原理、B&L (1987) のポライトネス理論の観点から、2言語でポライトネスがどのように異なった働きをするのかを検討する。しかし、第2章で述べたように、これらの先行研究で提示されたポライトネス原則のみでは、両言語の断り発話を記述しきれないことから、新たな原則を提案することも試みる。

本章では、上下関係や親疎関係に触れることはあるが、主に人間関係の使い分けを問わ

⁴⁹ 先行研究の表に該当しない「意味公式」があり、筆者が修正を加え、「受け入れ」の意味公式を追加した。「受け入れ」は、相手の要求を断るにもかかわらず、談話開始に「いいよ」「わかりました」などのような表現を用いてから、「でも、～がある」「自分でやった方がいいよね」などの表現を用いて断ることである。

ず、全体的に両言語にはどのようなポライトネスと配慮の原則があるのかをマクロ的に見る。

5.2 意味公式について

以下では、分析で用いる意味公式分類表と、ポライトネス原則と配慮表現の原理を改めて提示する。Beebe et al.(1990)と、施(2005)を修正した筆者の意味公式表は以下のとおりとなる。

表 5-1 本研究で用いる意味公式の分析内容

意味公式の分類	意味公式の内容及び例
「直接的断り」	単刀直入な断り 例) お断りする 例) いやだ/無理です/できない
「理由」	断らざるを得ない状況説明 例) お金がないから
「謝罪」	断ることに対するお詫び 例) ごめんね
「受け入れ」	相手の要求を受け入れるもの 例) はい、わかりました 例) いいよ
「非難」	相手や要求内容についての責め 例) いやだって言っているでしょう 例) えー、何で自分でやらないの
「代案提示」	別の解決案の示す 例) **にあたってください
「情報要求」	相手に情報を聞くもの。相手の発話内容を確認

	例) どこに使うの?/今からですか/何時から?/明日まで?/
「共感」	相手の意向に添いたい心情の表明 例) 行きたいけど/残念ですが/したくないことはないけど
「関係維持」	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ。 例) 次回は行きます/また今度ね/次は出席します
「感謝」	相手の行為により恩恵を受けたことの表明 例) ありがとうございます/ありがたいんですが
その他	上記に該当しないもの 例) そうか... /あのう... /えーと

筆者が意味公式分類表に従い、両言語母語話者が使用する意味公式とその使用率を分析した結果を以下の図で示す。

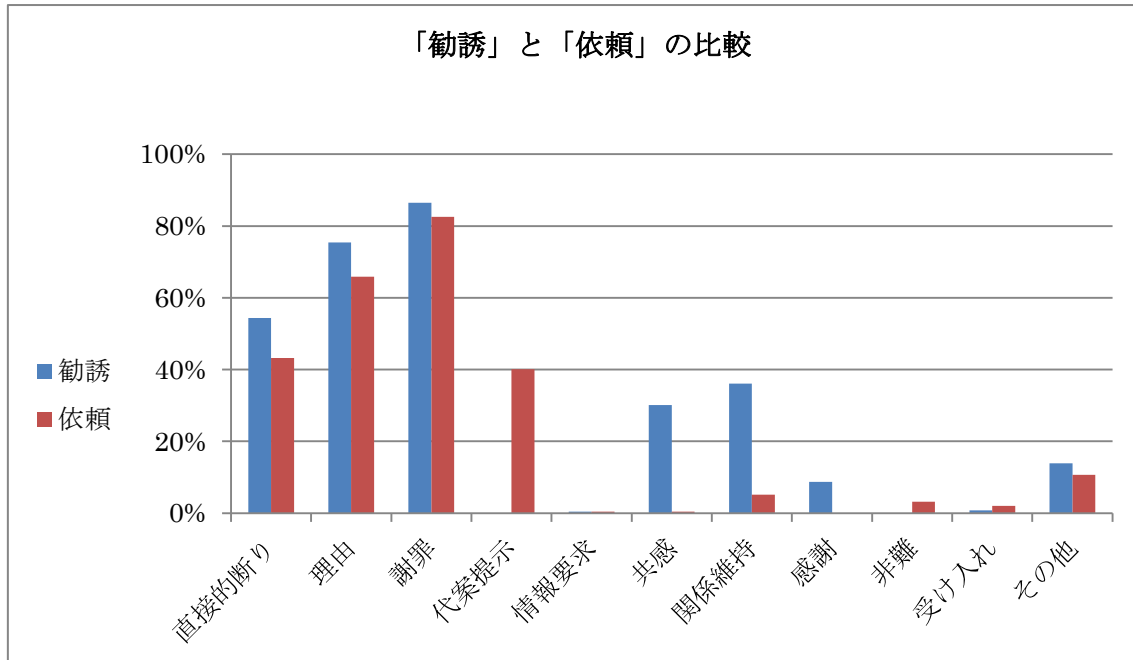


図 5-1 日本語の依頼と勧誘に対する断りの比較

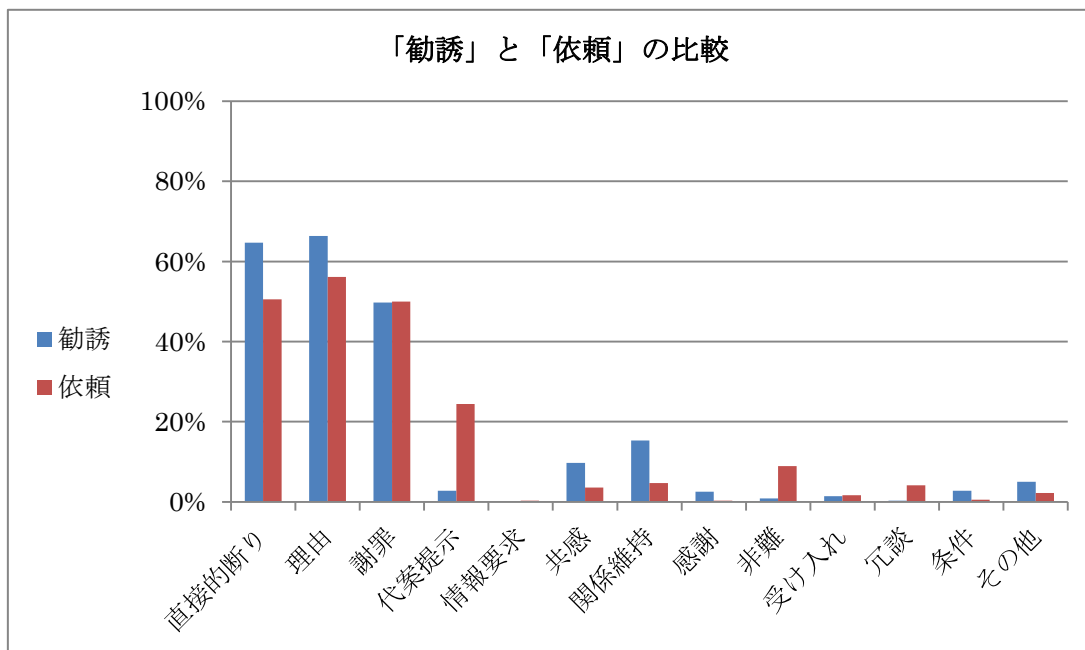


図 5-2 アラビア語の依頼と勧誘に対する断りの比較

図から分かるように、両言語母語話者の断りを構成する主要素として、「謝罪」、「理由」、「直接的断り」、「代案提示」、「共感」、「関係維持」、「非難」などが挙げられる。それらの意味公式がどのようなものなのかについて、次に詳しく論じる。

本章では、主に談話レベルの観点から意味公式内容に見られるポライトネスと配慮の原則を分析対象とする。しかし、「謝罪」と「直接的断り」など、1つの表現形式からなる表現レベルのものが、Leech(1983)と、山岡・牧原・小野(2010)の観点からのみでは記述しきれない。つまり、「謝罪」は「すみません」「申し訳ありません」、「直接的断り」は「できません」「行きません」などのように、1つの表現形式からなるため、それらの意味公式をB&L(1978)のポライトネス理論の観点から分析する。

以下の表 5-2 は、両言語母語話者が各意味公式において使用する表現形式をまとめたものである。

表 5-2 各意味公式で用いられる表現形式及び、それらの例文

意味公式 分類	表現形式 (J)	発話例 (J)	表現形式 (A)	発話例 (A)
「直接的 断り」	◆と思う ◆～そうに ない ◆可能形+ そうにない ◆可能形+ のだ文 可能形+かも しれない	例) 行けないんだ 例) 無理だと思う 例) 行けそうにない 例) できそうにない 例) 行けないかもし れない	◆断定型 ◆V+ことが できない	例) msh ha`dar (できませ ん) 例) la msh ha`dar (いいえ、 できません。) 例) msh hayenfaã (無理) 例) msh ha`dar~ (～こと ができません) 例)
「理由」	◆接続詞 (の で) (て形) ◆程度副詞 (ちょっと)	例) 用事があるの で...。 例) 予定が入ってい て、 例) 手が離せなくて 例) 水曜日はちょっ と...。 例) 都合が悪く て...。	◆能動文 ◆程度性表 現 (少し、と ても) ◆義務性を 表す助動詞 lazem (モダ リティのな ければなら ない) ◆修飾	例) lazem azaker... (私は 勉強しなければなりません) 例) ändy hagat ktyr gdan (やることがとてもたくさ んあるので...) 例) mashghola gdan (とても忙しい..) 例) lazem arawah... (帰らなければなりません) 例) ändy haga mohma gdan (大事な用事があるの で...)
「謝罪」	◆ごめん類 ◆すみませ	例) ごめんね/ごめん なさい、ごめん	◆maälsh ◆ana asef	例) maälsh (ごめんなさい) 例) ana asef (ごめんなさい)

	ん ◆申し訳ない類	例) すみませんが/ 例) 申し訳ありませんが	類	/すみません) 例) motaa`sef (すみません)
「提案提示」	◆授受表現 ◆命令形 ◆て型+許可	例) ○○さんに頼んでいただけませんか 例) 他の人に頼んでくれない 例) 他の人に頼んでもらっていい 例) 他の人に頼んでよー	◆命令形 ◆許可形	例) khally had tany yroh (他の人に行かせて) 例) momkn wa`t tany (別の時間でもいい?!) 例) matkhalliha bokra (明日にして)
「情報要求」	◆～かな ◆疑問形	例) 何時までにやってくれるかな 例) 夜遅くなっても大丈夫?	◆疑問形	例) eh,yom elgomäa?! (えー、金曜日?!)
「共感」	◆願望表現(助動詞たい+ノだ文) ◆(たい+のに) ◆残念類	例) 行きたいんですけど 例) 行きたかったのに.. 例) 残念ですが/残念ながら	◆願望表現 ◆残念類 ◆条件節(もし、なら)	例) kan nefsy agy bs、 (どうしても行きたかったけど...) 例) lelasaf (残念) 例) ya ret knt aa`dar (できればよかったのに) 例) law adra knt roht (できるなら行った)

「関係維持」	<p>◆また今度類</p> <p>◆て型+ください</p>	<p>例) また今度ね。</p> <p>例) また今度機会があれば..。</p> <p>例) またぜひ誘ってください</p>	<p>◆また今度類</p>	<p>例) ma`darsh arfodlak talab bs (あなたの依頼を断ることができないけど...)</p> <p>例) marra tanya (また今度)</p> <p>例) forsa tanya (またの機会に)</p> <p>例) wa`t tany .. (別の時間に)</p>
「感謝」	<p>◆ありがとう類</p> <p>◆ノダ文</p>	<p>例) ありがとうございます</p> <p>例) ありがたいんですが</p>	<p>◆shokran類</p>	<p>例) shokran (ありがとう)</p> <p>例) motashakera...</p>
「非難」	<p>◆命令形</p> <p>◆疑問形</p>	<p>例) 自分で行け</p> <p>例) ええ、何で一あたし。</p>	<p>◆命令形</p> <p>◆皮肉</p>	<p>例) matroh enta tgyeb le nafsak (自分で買いに行け)</p> <p>例) enty ezay totloby talab zay da (あなたは、どうやってこんな頼みごとをするの)</p> <p>例) enty betharagy wla eh. (あなたふざけているでしょう)</p> <p>例) enta msh ändak reglen troh tgeb wla eh!! (買いに行くのに、あなたは両足がないんじゃない!!)</p>
その他	<p>◆上記に該</p>	<p>例) あのう... /えー</p>		<p>例) āshan (ので)</p>

	当しないも の	っと		例) in sha allah (インシャ ーアッラー「神様」が望めば)
--	------------	----	--	---

表中の J は日本語母、A はアラビア語を指す。

5.3 ポライトネスと配慮表現について

第 1 章では、Leech (1983) と、山岡・牧原・小野 (2010) の双方について詳しく論じたが、本節で実際にこれらを用いて分析するに当たって、改めて以下に提示する。

5.3.1 Leech のポライトネス原則

Maxim of Tact (気配りの原則)

- (a) 他者の負担を最小限にせよ
- (b) 他者の利益を最大限にせよ

Maxim of Generosity (寛大性の原則)

- (a) 自己の利益を最小限にせよ
- (b) 自己の負担を最大限にせよ

Maxim of Approbation (是認の原則)

- (a) 他者への非難を最小限にせよ
- (b) 他者への賞賛を最大限にせよ

Maxim of Modesty (謙遜の原則)

- (a) 自己への賞賛を最小限にせよ
- (b) 自己への非難を最大限にせよ

Maxim of Agreement (一致の原則)

- (a) 自己と他者との意見相違を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ

Maxim of Sympathy (共感の原則)

- (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との共感を最大限にせよ

5.3.2 山岡・牧原・小野(2010)の配慮表現の原理

Maxim of Tact (気配りの原則)

- (a) 他者の負担が大きいと述べよ。
- (b) 他者の利益が小さいと述べよ。

Maxim of Generosity (寛大性の原則)

- (a) 自己の利益が大きいと述べよ。
- (b) 自己の負担が小さいと述べよ。

5.4 日本語のポライトネスと配慮表現の原則について

本節では、談話構造の観点から意味公式に着目して、日本語におけるポライトネスと配慮の原則について論じる。日本語、アラビア語の順で、データを分析し、最終的に両言語の断り談話に見られるポライトネスと配慮表現の原則を比較し、違いを明らかにする。

5.4.1 「謝罪」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「謝罪」を用いることは、相手の要求に沿えないことに対するお詫びや申し訳ない気持ちを伝えることである。例えば、「ごめんね」「申し訳ないんですが」「すみません」「悪いけど」などのような表現である。伊藤(2005)では、「謝罪」は相手に「邪魔されたくない、それ以上立入られたくない」意思を伝える表現であり、どちらかと言えば NPS とされている。一方、権(2007)は、「(理由) + 「謝罪」」や、「(理由) + 「理由」 + 「謝罪」」のまともりは、PPS としているが、「(直接的断り) + 「謝罪」」は NPS としている。つまり、断り談話を細かく、1つ1つの表現を分析する研究もあれば、一連の談話を一まとまりとして分析する研究もある。筆者も、意味公式の分析では、最初から各意味公式が PPS であるか、NPS であるかと決めつけるのはだと妥当ではないと考えるため、実際に断り発話

の中で各意味公式が果たす機能に従い、母語話者 3 名の判断に基づき分類した。これによって、謝罪は PPS である場合もあり、NPS である場合もあることが確認できた。

日本語の「謝罪」の意味公式は、B&L(1987)から考えると、誘いや依頼を断ることによって、相手のポジティブ・フェイスを脅かし、そのことが相手に不利益をもたらす。従って、断り手が「他者に好かれない、よく思われたい」という自分のポジティブ・フェイスを守るのに「謝罪」ということは、不利益をもたらしたことを認め、申し訳ない気持ちを表明することになる。このような意味では、「謝罪」は常に NPS として扱うべきではなく、場合によっては PPS と解釈できることがあると思われる。

例えば、「ごめん。無理」は NPS であり、「ごめんなさい、用事があるので、また今度」の「謝罪」は PPS である。要するに、PPS である意味公式と組み合わせて使われる「謝罪」表現は PPS となり、NPS である意味公式と共起する「謝罪」は NPS となる。

5.4.2 「直接的断り」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「直接的断り」とは、断りの意思を相手である「要求者」に直接的に表明したり、要求内容に対するやる気を否定したり、「直接的断り」表現を用いることである。例えば、「無理」「できません」「いけません」「結構です」「今日はいい」などのような表現を用いることである。「直接的断り」は相手の依頼や勧誘である相手の「ポジティブ・フェイス」に対して、自分の「ネガティブ・フェイス」（相手に邪魔されたくない、入られたくない）を優先し「断り」を行うので NPS と言える。

日本語で最も多く使われる「直接的断り」は、可能表現の否定「行けない」である。山岡・牧原・小野（2010:164）は、断り発話における可能表現の使用について次のように述べている。「断り」は典型的な FTA の 1 つであり、それが自分の意思に基づくものであることを表明することは、相手と自分の協調性を損なう恐れがあり、積極的フェイスを脅かす。そこで、可能表現の否定を用いることによって、自分の意思とは無関係に状況が許さないことを含意し、相手との強調性なるべく損なわないように配慮している。

例えば、以下の例文が挙げられる。

(1) (食事の誘い)

親しい友人：ごめん。ちょっと用事があるから行けないんだ。

しかし、日本語では、相手への配慮や、状況が許さないことを表明する際に、可能表現のみではなく、以下のように蓋然性を持つ（「かもしれない」、「そうにない」、「と思う」）表現形式も、和らげ効果があると考えられる。

(2) (教材のコピー依頼)

学生：ごめんなさい。ちょっと用事があるので、できそうにないです。

(3) (教材のコピー依頼)

知り合い：いろいろ忙しいから無理だと思う。

上記の例は、断り手が断定的に断ることを回避し、蓋然性を持つ表現形式を使用することによって、断りの FTA を緩和し、相手に結論を委ねるストラテジーで配慮していると思われる。これらの表現形式が「直接的断り」に後続することは、コミュニケーション様式で考えると、断定型より、相手に結論を察してもらう「螺旋的」コミュニケーション様式が重要視される結果だと考えられる。

5.4.3 「理由」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「理由」の意味公式では、相手の欲求に応えられない、または拒否する「理由」を説明することである。「理由」は、曖昧である場合もあり、具体的である場合もある。例えば、「用事があるので…」 「予定が入っているので」 などのような曖昧な表現や、詳しく理由を明示する表現「バイトがあるので…」 「試験があるから」、「今家に帰らないといけない」などである。

「理由」の意味公式は、伊藤（2005）では NPS とされているが、本研究においては、「理由」は解釈により NPS か PPS かを判断すべきものとする。第 4 章で見てきたように、アラビア語では「理由」の意味公式が対人配慮において大きな役割を果たすものであることが調査結果から明らかとなった。それは、断り手が「理由」を用いることによって、

自分の意思に基づくものではなく、事情が許さないからこそ、断らざるを得ないことを表明でき、相手から断りの了解を得ようとする場合は、PPS となる。しかし「邪魔されたくない、自分の自由を脅かされたくない」ことが含意される「理由」が用いられる場合は NPS となる。例えば、「ごめん、時間ないから」、「ana msh fady」（私は暇じゃない）などのような「理由」は NPS である。また、野田・高山・小林（2014:234）は、「相手からの依頼に対し断りを述べる場合、依頼に応じられない理由を述べることが多い。それを述べないこととの対比で、理由説明は相手への配慮として機能している」と述べている。

以下では、話者の事情説明に当たる「理由」の意味公式において、どのような配慮の原則が使用されるかを再確認する。第4章で行った調査結果から、日本語母語話者は断りの理由である話者の事情をひかえめに述べる、または、「中立的な立場」によって事情をシンプルに述べた方が納得しやすいのに対し、アラビア語母語話者は事情を大きく述べる特徴があることが分かった。しかし、どの言語でも、文化的背景や好まれるコミュニケーション様式によらず、個人差の要因も存在する。そこで、本節では日本語母語話者が使用することの多い「理由」に限定せずに、様々な断り発話を提示して、「理由」におけるポライトネスと配慮の原則を改めて検討する。

- (4) 知り合い: 来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てくれない。

あなた: すみません。 金曜日はちょっと...

(「謝罪」+「間接的断り」)

- (5) 親しい友人: なんでもいいから、飲み物買ってきてくれない。お金渡すから。

あなた: ごめんなさい。今 ちょっと手が離せなくて...

(「謝罪」+「理由」)

- (6) 親しい友人: 今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた: ごめん。 ちょっと用事があるから行けないんだ。

(「謝罪」+「理由」+「直接的断り」)

例(4)と例(5)では、間接的断り発話が使用され、断りの「理由」は不明だが程度副詞「ちょっと」で話し手が自分の断りを正当化しようとし、それによって断る行為によるFTAを軽減することで、「自己の負担が小さいと述べよ」の原則に相当すると考えられる。「ちょっと」は、本来程度限定・修飾の基本的な働きを持つものだが、上記の例文は、本来の用法から派生した対人的機能を表している。それが、配慮表現の原理から考えると断り手が自分の事情を強調せずに、むしろ言い訳に聞こえないように聞き手に結論を委ねるまたは、最終判断を任せることによって、自分の負担を小さくしていると考えられる。従って、「理由」の意味公式に前節する「ちょっと..」のような断り発話では「自己の負担が小さいと述べよ」の原則が働いていると思われる。

以下の例文では断り手が上記の例文とは異なるメカニズムで自分の断りを正当化している。つまり、上記の例文のように（寛大性の原則）(b)「自己の負担が小さいと述べよ」が有効に働いていないものと思われる。

(7)（飲み物の購入依頼）

知り合い：ごめんなさい、これからすぐに用事があるのでできません。

（「謝罪」＋「理由」＋「直接的断り」）

(8)（飲み物の購入依頼）

親しい友人：ごめん。今から行くところあるんだ。

（「謝罪」＋「理由」）

上記の例(7)と(8)では、「自己の負担が大きいと述べよ」に当たる事情説明が行われたことが分かる。しかし、第4章で見てきたように、日本語では程度性の高い副詞の使用が好まれず、納得の度合いが高い「中立的な立場」か「自己の負担が小さいと述べよ」の方が比較的配慮の度合いが高いことが分かった。また、第4章では、特に「飲み物の購入依頼」場面では、「簡単に断る」という選択肢が最も多かったことに加え、納得の度合いが高い「副詞なし」の使用率が下がっていた。このことから考えると、上記例(7)と例(8)で使われた「自己の負担が大きいと述べよ」の原則が聞き手に配慮を示すためのものではなく、むしろ断り手が自分のネガティブ・フェイスのみ守り、現在非常に大変な状況に置かれていることをはっきりと言語化し、表明していると見られる。つまり、本来日本語で好

まれるシンプルな発話のように「用事があるので」だけでは断ることも可能であるものの、あえて意図的に「今から」、「これから」「すぐに」を付加することで、自己の負担を大きくしている。このように、どの言語でも、場面内容も個人差も表現の選択を決定する要因になると言える。

5.4.4 「代案提示」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「代案提示」は相手の要求に応えられない場面に置かれた際、断ってから相手との人間関係を維持するのに、相手と一緒に解決方法を見つけ出すために、使用される意味公式である。このような意味で使われる「代案提示」は PPS とされる。例えば、以下の例文が挙げられる。

(9) 親しい友人：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。

あなた：ごめん。忙しいから他の人に頼んでくれる？

(「謝罪」+「理由」+「代案提示」)

(10) 親しい友人：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。

あなた：ちょっとコピーする時間ないからごめん…。他の人にお願いしてもらってもいい？

(「理由」+「謝罪」+「代案提示」)

(11) 知り合い：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。

あなた：あ、わたし。あれなくしちゃったんだよね。ごめん。ほかの人に頼んでもらってもいい？

(「理由」+「謝罪」+「代案提示」)

上記の例文では、「代案提示」として「他の人に頼んでくれる」と「他の人にお願いしてもらってもいい」などのように断り手が自分に直接的に恩恵がないにも関わらず、授受

補助動詞を用いて、恩恵があるかのように、他者との距離を最小限にし、人間関係を維持しようとしている。

山岡・牧原・小野（2010）では、依頼発話における配慮表現として「てくれないかな」の表現形式が配慮表現とされている。例えば、以下のような例文が挙げられる。

(12) 図々しいお願いだけど、もしよかったら、司会をやってくれないかな。

(山岡・牧原・小野 2010:146)

この例によると、このような要求文を用いること自体が配慮となり、相手に選択の余地を与えることで、相手に決定権を委ねることになる。従って、配慮表現として働く主張されている。しかし、依頼発話の中では依頼者は自分に直接的に利益があるため、それを「てくれる」や「てもらう」など授受補助動詞で言語化し、明示することによって、恩恵を表し、他者への配慮を示すことができると思われる。ただし、本研究の対象となる断り発話における依頼場面の場合、利益が依頼者にあり、断り手に全く利益がないため、授受補助動詞が使用される場合は、依頼発話と異なるメカニズムで配慮が示されるのではないかと思われる。

例(9)から(11)のように断り発話において、恩恵がないにも関わらず、恩恵を表す授受補助動詞を使うことは、ポライトネスと配慮表現の観点から考えると、行動に関わる原則として記述する際に「他者との距離を最小限にせよ」に当たる。それは、他者との距離を縮めることで、「他者との距離を最小限にせよ」という筆者が新たに提案した原則で、断りのFTAを軽減し、人間関係を良好に保とうとしているからだと思われる。言い換えると、話し手である断り手が、依頼者の利益は自分の利益であるかのように、依頼者の視点から利益を解釈していることで、依頼者との距離を縮めている。他者との距離感を縮めることで、断りのFTAを緩和できるのではないかと思われる。

「代案提示」における授受補助動詞を表現に関わる原則として記述すると、「他者の利益が自己の利益とも述べよ」などのような新たな原則が働いていると考えられる。つまり、依頼者の利益を奪った断り手が恩恵を表す授受補助動詞を用いることによって、依頼者の利益が達成されることは、自分の利益が達成されるかのように思っていることが含意される発話となり、それが依頼者に伝わることで、了解や同調が得られる。このことから、Leechの寛大性の原則 (b) 「自己の負担を最大限にせよ」のポライトネス原則に違反しても、表

現選択で、他者に配慮を伝えることができると言える。

次に、異なる「代案提示」表現を以下で提示する。

(13) 知り合い：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。

あなた：ごめん！ちょっと昨日破っちゃってさ...コピー難しいんだよね...誰か他もっている人いたら聞いてみるね。

(「謝罪」+「理由」+「理由」+「代案提示」)

上記では、「代案提示」表現として断り手が依頼者に働きかけのある表現「..てくれる」で代案を提示しているのではなく、むしろ断り手自身が解決方法を見つけ、自分で行動をする「誰か他もっている人いたら聞いてみるね。」表現を用いている。つまり、積極的に「他者に思われたい、評価されたい」という自分のポジティブ・フェイスを満たすと同時に、依頼をして来た相手のポジティブ・フェイスも満たしている発話だと考えられる。このような意味では、上記の例文は寛大性の原則 (b)「自己の負担を最大限にせよ」と、気配りの原則 (a) と (b)「他者の負担を最小限にせよ」、「他者の利益を最大限にせよ」の3つの原則を満たした発話となる。

(14) (飲み物の購入依頼)

親しい友人：今ちょっとむり！！ごめんね。ほかの人に頼んで見て！

(「直接的断り」+「謝罪」+「代案提示」)

上記の例文では、以上見てきた例文と比べ、配慮の度合いが低いと思われる。「代案提示」として、依頼の機能を果たす(..て形)「ほかの人に頼んで見て」など、断り手が自分のネガティブ・フェイス「邪魔されたくない」を守り、「自分がやりたくないから、他の人にやらせる」という意味で「代案提示」が使われているため、PPSではなく、NPSとなる。つまり、「代案提示」が必ずしも常に相手の利益のためになるものではなく、自分の利益になる場合もあることが分かる。それを図で記述すると以下のようなになる。

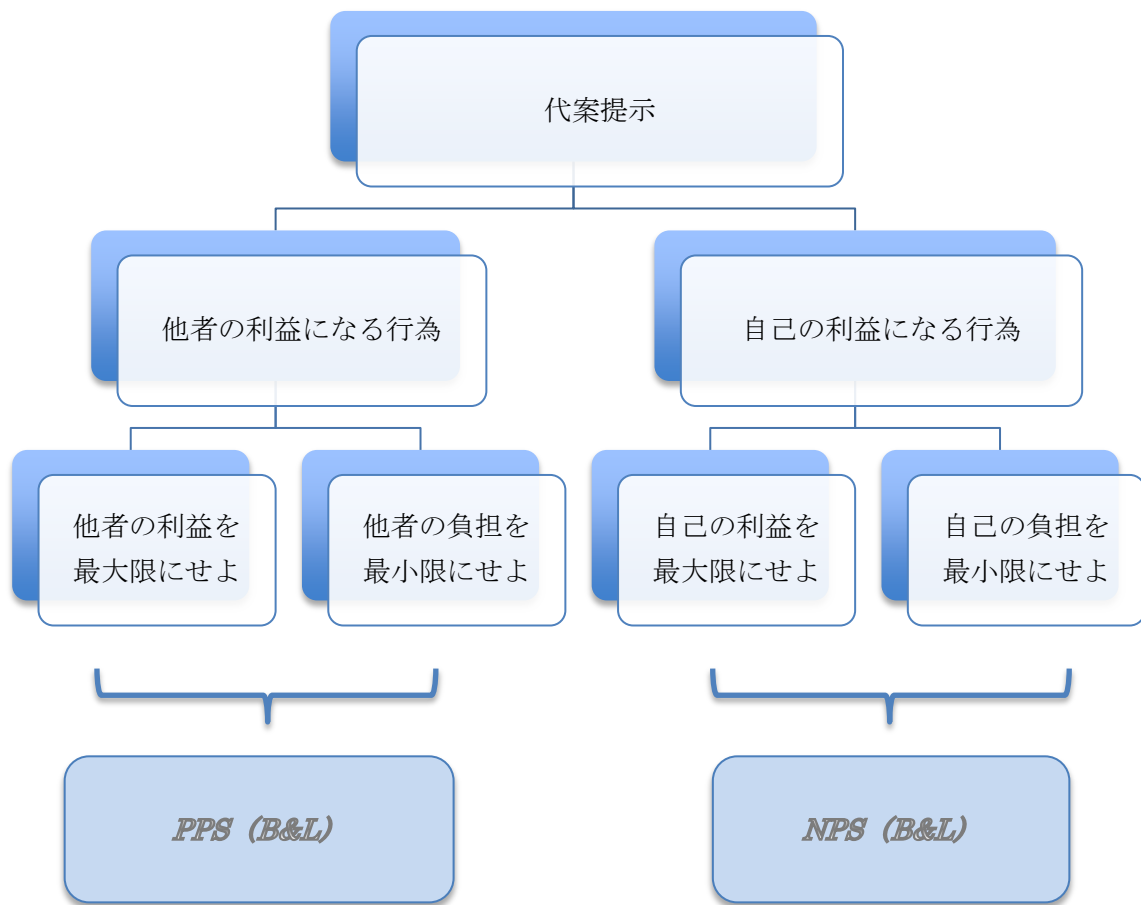


図 5-3 提案提示における配慮表現の原則とメカニズム

5.4.5 「共感」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「共感」とは、相手の意に添いたい気持ちを表明することであり、実際は相手の要求を受け入れたい気持ちはあるが、やむを得ず断らざるを得ない状況に置かれているということアピールするために用いられるものである。例えば、「行きたいんだけど」、「残念だ」「行きたいのは山々なんだけど」などのような表現である。

「共感」の意味公式は B&L(1987)から考えると、断り手は「他者に好かれたい、評価されたい」という気持ちを表すものであるため、PPS であると言える。通常は相手との人間関係を維持するために、相手の要求への共感を示す必要があり、誘ってきた相手のポジティブ・フェイスを守りながら、それを拒否する断り手自身のポジティブ・フェイスも守る

ために「共感」が用いられる。つまり、「共感」は FTA を軽減し、ポライトネス効果をより発揮するものであると言える。従って、本研究では「共感」は PPS として扱う。

以下では、断り談話に用いられた「共感」表現と思われるものを下線部分で示し、どのようなポライトネスと配慮の原則が有効に働くかを見ていく。

(15) 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒にきませんか。

あなた：すみません。一緒に行きたいのですが、あいにく授業後に用事があって行けません。とても残念ですが、また次誘ってください。

(「謝罪」+「共感」+「理由」+「直接的断り」+「共感」+「関係維持」)

(16) 親しい友人：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた：そっか。めっちゃ行きたいけど今日は別の用事が入ってるわ。ごめんね。楽しんできて。

(「共感」+「理由」+「謝罪」+「関係維持」)

(17) 先生：来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てください。

あなた：せっかくのお祝いなのでぜひお伺いしたいのですが、用事が入ってしまっています。すみません。

(「共感」+「理由」+「謝罪」)

例(15)から(17)では、使われた共感表現として、「一緒に行きたいのですが」と「とても残念です」、「めっちゃ行きたいけど」、「ぜひ伺いしたいのですが」などが挙げられる。これらは相手の気持ちを思いやって、「現時点ではあなたの誘いを受け入れられないが、実際は受け入れたい気持ちが強い」ということが含意されるものであり、断る行為の FTA を緩和する働きを持つと考えられる。

例(15)は「先生」に対する断り、例(16)は、「親しい友人」に対する断りであるため、

スピーチ・レベルの違いが見られる。例文から分かるように、日本語では、上位の相手「先生」に対する断り発話では「共感」表現が一連の談話で2回以上出現することが分かる。それは、力関係が上の相手の依頼を断る際に、比較的断り手が抱える心理的負担が高いと感じられるからであろう。つまり、上の相手に対して「共感」が2回出現することは、第3章で見たように、日本語母語話者は、断り発話において通常自己開示の度合いが低いのにに対して、「先生」に対する断りになると、自己開示の度合いが高くなることと関連していると考えられる。

では、これらの「共感」表現において、どのような配慮のメカニズムが働くのだろうか。「一緒に行きたいのですが」と「とても残念です」の双方が（共感の原則）の原理（b）「自己と他者との共感を最大限にせよ」を満たしている発話だと見られるが、表現方法の観点から考えると、この事例の説明としては、「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」という新たな原則がより適切なのではないかと思われる。つまり、実際は断り手が本気でとても残念だと思っているかどうかは不明であるが、実際に行動により他者との共感を最大限にしなくても、このように表現し発話することによって、「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」という原則が働いて、相手に配慮が伝わるのではないかと考えられる。また、「共感」表現に見られる異なるポライトネスと配慮の原則として、以下の例文を見ていきたい。

(18) 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行きませんか。

あなた：そうなんですか。ぜひ行きたいんですが、今日は別の用事が入ってしまっていて。せっかく誘っていただいたのにすみません。

（「共感」＋「理由」＋「共感」＋「謝罪」）

(19) 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒にきませんか。

あなた：いいですね。とても行きたいんですが、今日は外せない用事があるんです。せっかく誘っていただいたのにすみません。また、機会があれば、よろしくお願ひします。

（「共感」＋「理由」＋「共感」＋「謝罪」＋「関係維持」）

例(18)と(19)で使われている「共感」表現は、例(16)から(17)のように、願望を表す助動詞（..たい）の表現（「ぜひ行きたいんですが」）を用いることによって、（共感の原則）の原理（b）「自己と他者との共感を最大限にせよ」を満たしているものである。また例(19)では、「とても」の程度副詞が付け加わったことで、「共感」の度合いがより高くなっていることが分かる。しかし、「せっかく誘っていただいたのに」という「共感」表現では（気配りの原則）（a）「他者の負担が大きいと述べよ」の原則が働いていると思われる。つまり、相手がわざわざ誘ってきたと言及し、負担がかかったことを表明して、さらに「せっかく」の副詞で相手にとって大変な行為だったと述べることで、よりポライトな発話となる。

以上から、断り発話の中で使われる日本語の「共感」表現で用いられるポライトネスと配慮の原理としては、（共感の原則）（b）「自己と他者との共感を最大限にせよ」、（気配りの原則）（a）「他者の負担が大きいと述べよ」と、「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」などがあることが分かった。

5.4.6 「関係維持」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「関係維持」は、相手の要求を断った後に、相手との人間関係を維持するために用いられる言語表現であり、PPSとして扱われる。例としては、「また今度ね」「ぜひまた誘ってください」「またの機会に誘ってください」などの表現である。以下に例文を提示する。

(20) 親しい友人：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた：ごめん。この後用事があるって行けないんだ。また次誘って。

（「謝罪」＋「理由」＋「直接的断り」＋「関係維持」）

(21) 知り合い：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた：ありがとう。でも授業の後用事があるって……。 また今度行きましょう。

（「感謝」＋「理由」＋「関係維持」）

(22) 親しい友人：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた：ああ、まじかー...行きたいけどさあ、このあとバイトがあつてさあ。ごめんね、まじ。今度また行こうよ⁵⁰。

(「共感」+「理由」+「謝罪」+「関係維持」)

例(20)～(22)では「関係維持」表現として「また次誘って」や「また今度行きましょう」、「今度また行こうよ」などのように、未来のことに言及する表現が使われている。断り手が「関係維持」表現を用いることによって、今後の相手(勧誘者、依頼者)との人間関係を維持するために、「今回は事情が許さないからあなたの要求に応えられないが、それはあなたの要求が私にとって望ましくないからではなく、将来またこのような機会があれば、嬉しい」という気持ちを伝えることができる。このことから、上記の表現を「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」という原則で説明できると考えられる。

(23) 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒にきませんか。

あなた：いいですね。とても行きたいのですが、今日は外せない用事があるんです。せっかく誘っていただいたのにすみません。また、機会があれば、よろしく
お願いします。

(「共感」+「理由」+「謝罪」+「関係維持」)

(24) 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒にきませんか。

あなた：あ、本当ですか。すみません、今日はちょっと、このあとアルバイトに行かなければいけなくて...また今度、すみません。ぜひご一緒させてください。

(「謝罪」+「理由」+「関係維持」+「謝罪」+「関係維持」)

⁵⁰ 本論文で扱うDCTのデータは、全て原文のとおりである。

(25) 親しい友人：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。

あなた：あ、今日だめなんだ…ごめんね！また行くときさそって！

(「直接的断り」+「謝罪」+「関係維持」)

例(23)～(25)では、「機会があれば、よろしく願います」と「ぜひご一緒させてください」、「また、行くときさそって」などのように、山岡・牧原・小野(2010:147)の言う命令系依頼表現と願望表出系依頼表現が用いられ、相手の要求を拒否した後、それを緩和するため、自分から同じ要求を返すことで、自分にとっても望ましいことであると表明している。つまり、先に述べたように「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」の原則を満たしている発話であると言える。

5.4.7 「非難」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「非難」とは、相手や相手の要求内容に対して不満を抱き、それを「非難」の意味公式で表すことである。例えば、「えー、何で私が…」「自分でやってよ」「いい加減にして」などのような表現である。「非難」の意味公式は相手の要求内容を受け入れたくない気持ちを表すものであり、断り手が「邪魔されたくない、自分の自由を脅かされたくない」という自分のネガティブ・フェイスを守ろうとするため、NPSとなる。

ポライトネスと配慮表現は本来他人とより良い人間関係を築くためのものではあるが、人間は日常のコミュニケーションの中で「非難」や「不満」「不同意」などの気持ちを抱くことがあり、他人にそれを何らかの方法で伝えることがある。しかし、このような発話を行うことは、相手への思いやりが全く込められていないわけではなく、直接的に伝えるか、間接的に伝えるかという表現方法に関係してくる。よって、「非難」の意味公式も、配慮が込められているか否かを表現方法から判断できると考えられる。

「非難」を直接的に表すことは、行動の観点から考えると、ポライトネスと配慮に違反することになるが、相手への非難行為によって生じるFTAを軽減する働きを持つ配慮表現の使用は、配慮の示し方の1つだと思われる。従って、本節では「非難」の中では、どのようなメカニズムが働くか、ポライトネスに違反した発話にはどのような特徴が見られる

か考察していく。

(26) 親しい友人：なんでもいいから、飲み物買ってきてくれない。お金渡すから。

あなた：自分で行け

(NPS) (「非難」)

「非難」の意味公式は、直接的に表されると、他者より自己の方が尊重され、共感の原則 (a)「自己と他者の反感を最小限にせよ」に違反する。さらに、行動に関わる Leech の (寛大性の原則) (b)「自己の負担を最大限にせよ」と、表現に関わる山岡・牧原・小野 (2010) の寛大性の原則 (b)「自己の負担が小さいと述べよ」に違反し、断り手が「自己の負担を最小限にせよ」、「自己の負担が大きいと述べよ」のように、ポライトネスに違反していることが上記の例から明らかである。

本来人間は相手と良好な人間関係を築こうとするが、自分のネガティブ・フェイスを優先することもある。特に、場面4「飲み物の購入依頼」の場合、第4章で見てきたとおり、依頼者が本来他人に負担をかける必要のない依頼行為を行うことによって配慮される度合いが低くなる結果として、「非難」の意味公式が使われる。従って、断り手が他者のフェイスより、自分のフェイスを優先し守っていると言える。このことから、依頼者が本来自分でできるものの、あえて依頼行為を行うということは、他人にとって望ましくない行為であるため、その依頼を受けた断り手が共感の原則 (b)「自己と他者との反感を最小限にせよ」に違反し、むしろ「他者への非難を最大限にする」ことが結果として現れると考えられる。しかし、先に述べたように、間接的に「非難」を行うことは、何らかの配慮が込められているとも予想できる。そこで、上記の「批判」と異なるものとして、以下の例文を挙げる。

(27) (飲み物の購入依頼)

親しい友人：えー、自分で行けないのー？うーん、行ってあげられたら良かったけど。

ちょっと都合悪いしな。別の人に頼んでよ。ごめんね。

(「非難」+「共感」+「理由」+「代案提示」+「謝罪」)

例(26)とは異なり、例(27)では疑問形による「えー、自分で行けないのー？」と、「消極的代案提示」（「別の人に頼んでよー」）のように、断り手が相手の依頼に対して不満を持っているが、「非難」を間接的に表すのと同時に、それを軽減する働きを持つ「共感」表現（「行ってあげられたら良かったけど」）を使用している。つまり、断り手が「自分で行け」のように命令形より、「自分で行けないの」のように可能の否定疑問形によって、間接的に「批判」のFTAを和らげようとしていると見られる。このような意味では、（共感の原則）(a)「自己と他者との反感を最小限にせよ」、(b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」の双方の原則が働いている発話と思われる。

このように「非難」を表すとき、完全に断り手が自分のネガティブ・フェイスを守り、直接的に「非難」を表す場合と、自分のネガティブ・フェイスを守りながらも、相手のポジティブ・フェイスを守るため、間接的に「非難」を表したり、「非難」のFTAを軽減しようとする場合もあることが分かる。

以上、日本語の断り発話における意味公式とそれらの中で見られるポライトネスと配慮表現の原則をまとめてみると、以下の表のようになると考えられる。

表 5-3 日本語の断り発話における意味公式とポライトネス原則の関連性

意味公式の分類	ポライトネスと配慮表現の原則
「謝罪」	(B&L 1987) NPS と PPS
「直接的断り」	(B&L 1987) NPS
「理由」	表現レベル：(気配りの原則) (b)「自己の負担が小さいと述べよ」 「中立的な表現」
「代案提示」	(B&L 1987) NPS と PPS 新：行動レベル：「他者との距離を最小限にせよ」 新：表現レベル：「他者の利益が自己の利益とも述べよ」
「共感」	(B&L 1987) PPS 行動レベル：(共感の原則) (b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」 表現レベル：(気配りの原則) (a)「他者の負担が大きいと述べよ」 新：表現レベル「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」

「関係維持」	(B&L 1987) PPS 新：表現レベル：「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」
「非難」	直接的非難：以下の原則に違反する。 行動レベル：(寛大性の原則)「自己の負担を最大限にせよ」 「自己と他者との反感を最小限にせよ」 間接的非難：(共感の原則) 行動レベル：(a)「自己と他者との反感を最小限にせよ」 行動レベル：(b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」

表中の「新」は、筆者が新たに提案した原則を指す。

5.5 アラビア語のポライトネスと配慮表現の原則について

本節では、談話構造の観点から意味公式に着目して、アラビア語におけるポライトネスと配慮の原則について論じる。

5.5.1 「謝罪」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

第4章で論じたように、アラビア語の断りの「理由」では「gdan」、「ktyr」、「khales」などのような程度性の高い表現形式が「理由」に後続することが多いが、本データではその中で特に「gdan」が「理由」の意味公式以外にも、「謝罪」の意味公式にも後続する様子が多く観察された。特に、上の相手である「先生」に対し、不利益をもたらすことに対する申し訳ない気持ちを明確に表現して、程度性の高い表現が使用される例もあった。例えば、以下の例文が挙げられる。

(28) (教材のコピー依頼)

親しい友人：ana asfa gdan maālsh ,ana msh fadya delwa`ty.

(とてもすみません、ごめんなさい。私は今暇じゃない。)

(「謝罪」 + 「謝罪」 + 「理由」)

(29) (食事の誘い場面)

学生 : ana asfa awy ya doctor,bs maālsh msh ha`dar aroh.

(とてもすみません先生、ごめんなさい行くことができません。)

(「謝罪」 + 「謝罪」 + 「直接的断り」)

(30) (食事の誘い場面)

学生 : ana asfa gdan gdan ya doctor.bgad kan nefsy ahdar,bs llasaf msh ha`dar.ya ret
elmawdoā da yetkarar fy wa`t tany. (食事の誘い場面)

(とても、とてもすみません先生。本当にすごく参加したかったけど、残念ながら
できません。でも、ぜひまた今度同じ機会があればと思っています。)

(「謝罪」 + 「共感」 + 「共感」 + 「直接的断り」 + 「関係維持」)

このように、程度性の高い副詞的役割を果たす形容詞を謝罪に付加することで、申し訳
ない気持ちの程度を高く上げることにより、配慮を示す度合いも高まると思われる。つま
り、用いられた形容詞が本来の用法で解釈され、「申し訳ない気持ちの程度がとても高い」
という意味が含意されると言える。よってこの用法は「自己の申し訳ない気持ちが大き
いと述べよ」の原則で記述できるのではないかと考えられる。

5.5.2 「直接的断り」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

日本語では、「直接的断り」において可能表現が使用され、「行けない」、「行けそうにな
い」と、「行けないかもしれない」などの不可表明が用いられる。しかし、アラビア語で
は、第3章で論じたように、直線的コミュニケーション様式が好まれる傾向にあるため、
「できません」、「行きません」「無理」などのような断定的直接表現が多用される。つま
り、日本語のように、直接的断り表現に蓋然性を持つ表現など和らげ効果のある成分が付
加されない。

(31) 親しい友人 : la msh hayenfaā lsa wakel hālan.

(いいえ、無理。今食べたばかり)

(「直接的断り」 + 「直接的断り」 + 「理由」)

(32) 学生 : asfa gdan ya doctor msh ha`dar aroh. ändy emtähan w lazem azaker.

(とてもすみません先生、行くことができません。試験があって、勉強しなければなりません)

(「謝罪」 + 「直接的断り」 + 「理由」 + 「理由」)

アラビア語の「直接的断り」では、例(31)のように、談話開始で不可を表す「la」(いいえ)が使用される事例が多く観察され、アラビア語を母語とする日本語学習者の日本語の断り会話の中でも多用されることが観察された。しかし、例(32)では、相手が「先生」である場合、「... ことができない」で不可が表される例も多かった。つまり、「la」(いいえ)と「msh hayenfaã」(無理)、「msh ha`dar」(できない)より、「msh ha`dar...」(... ことができない)の方が丁寧であると考えられる。

しかし、アラビア語でも「ehtmal ma`darsh aroh」(行けないかもしれない)のような蓋然性を持つ表現形式を「直接的断り」表現に付加することが可能であるものの、断り発話においてはほぼ使用されないことが分かった。つまり、アラビア語では、確実性を持つ表現で「直線的」コミュニケーション様式が用いられるため、相手の想像力に頼るよりも、話し手が結論を出す方が望ましいと思われる。

5.5.3 「理由」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

本節では、先にも述べたように程度副詞の選択に限定せずに、より詳しく話者の事情説明に当たる「理由」の意味公式について考察する。

アラビア語母語話者は特に断り発話の中では、特に理由説明で他者との人間関係を維持しようとする。従って、第3章で論じたように、アラビア語の断りでは、「石畳的」コミュニケーション様式や、「情報重視」コミュニケーション様式などが好まれ、断りの理由では「自己開示」の度合いが高いという特徴があると言える。

本節では「理由」に見られる様々な特徴の分析を試みる。まず程度性の高い副詞的役割を果たす形容詞が含まれる断り発話を見ていく。

(33) (飲み物の購入依頼)

知り合い : maālsh wallahy ana tābana awy msh a`dra,law a`dra kont nezelt .matezāalysh.

(ごめんワッラーヒ (誓い) 私はとても疲れているのでできません、行けるなら行ったけど。怒らないで。)

(「謝罪」 + 「理由」 + 「直接的断り」 + 「共感」 + 「関係維持」)

(34) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : asfa wallahy ana mestaāgela gdan.

(すみませんワッラーヒ (誓い) 私はとても急いでいる。)

(「謝罪」 + 「理由」)

(35) (食事の誘い場面)

親しい友人 : maālsh āndy hagat ktyr āayez aāmelha.

(ごめん、やりたいことがたくさんあるから。)

(「謝罪」 + 「理由」)

(36) (教材のコピー依頼)

学生 : maālsh ya doctor.māaya kotob w hagat ktyr.w msh haāraf ashyel.

(ごめんなさい先生、本と色々他の物もたくさん持っているので、運ぶことができません。)

(「謝罪」 + 「理由」 + 「理由」)

例(33)～例(36)のように、アラビア語のデータでは程度性の高い副詞的役割を果たす形容詞「ktyr」「awy」「gdan」で理由を修飾する例が多く見られる。また、相手との人間関係を問わず多用されるという特徴も挙げられる。

森山・仁田・工藤 (2000) は、副詞は文法的な形態変化を基本的に持たないものであり、文中での働きは連用修飾という1つの機能にほぼ固定した語であると指摘している。これらの定義に従えば、断り手が「少し忙しい」や「とても忙しい」と述べることは、自分がどの程度忙しいのかを表明するために、程度副詞を使ったことになる。しかし、日本語の

「いろいろとちょっと」という論理的に矛盾するはずの副詞の共起について考えると、程度を限定・修飾する機能を果たさない「ちょっと」もあることが分かる。また、アラビア語でも、「ana mashghol shwya」(私は少し忙しい)と言えるにも関わらず、実際の断り発話では、特に程度性の高い副詞的役割を果たす形容詞が多用されるのは、程度限定以外にも何らかの意図があるからだと考えられる。言い変えると、実際は断り手が非常に忙しい状況に置かれていないときでも、程度性の高い表現を用いることにより、他者への思いやりが示され、程度を限定する他、対人的機能も持つと言える。

断り発話で、断り手が本来「疲れている」、「忙しい」など程度や頻度を表すものを付加せずとも、断りの「理由」が成立するにも関わらず、あえて「ktyr」「awy」「gdan」を付加することは、何か特別な意図があるためだと考えられる。このことから、森山・仁田・工藤(2000)が指摘した副詞の機能の論述では説明しきれない現象もあることが分かる。

第4章で明らかになったように、これらの形容詞は本来持つ機能に加え、聞き手へ何らかの配慮を示す機能も有する。それは、せつかく誘ってきた相手、または依頼してき相手の利益や、相手との人間関係を維持するために、何か正当な理由で断る方が許されるだろうと考えるために形容詞が用いられているからである。つまり、「少しでも忙しいならなぜ応えてくれないのか」という他者の誤解を避けるために、相手の要求に応えられない状況に置かれていることを言語化し、明示化することにより、相手から断りの了解を得られる。このように、断り手が自分の断りを正当化するメカニズムを記述するには、第4章で述べたように、「自己の負担が大きいと述べよ」のポライトネスの原則が有効である。

(37) (教材のコピー依頼)

知り合い : maālsh ana āndy māad delwa`ty halan.

(ごめん、ちょうど今約束があります。)

(「謝罪」+「理由」)

上の例文は、程度性表現ではないが、「ちょうど今約束がある」と発話することで、命題内容に当たる事情説明を具体的に行う例として挙げられる。

アラビア語母語話者がよく、事情に当たる「理由」の意味公式として程度性の高い表現

を使うことは、「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮表現の原則に従っていると思われる。しかし、程度性の高い表現以外、理由を述べる様々な現象でも同様の原則が働くと考えられる。例えば、以下のように「石畳的」コミュニケーション様式に当たる具体的な事情説明によって、断り手がなぜ断らなければいけないのかを詳しい情報が提供される例もあった。

(38) (誕生パーティーの誘い)

知り合い： *asfa asly metāweda azor yom elgomāa belzat geddy.*

(すみません、特に金曜日にいつもお爺さんのところに行っているから。)

(「謝罪」 + 「理由」)

(39) (誕生パーティーの誘い)

親しい友人： *ana kharga yom el gomāa maā baba w mama*

(金曜日お父さんとお母さんと一緒に出かけます。)

(「理由」)

例(38)と(39)では、断り手が自分の断りを正当化する手段として、具体的な内容の「理由」を挙げ、断らなければいけない状況にあることを表明している。つまり、「石畳的」コミュニケーション様式が用いられている。また、義務性を表す助動詞「*lazem*」も断り発話の「理由」で用いられ、配慮表現として認定できる例も見られた。以下例(40)がそれである。

(40) (食事の誘い)

学生： *maālsh ya doctor lazem arawaḥ badry.*

(ごめんなさい先生、早めに帰らなければなりません。)

(「謝罪」 + 「理由」)

このような発話例では、断り手が相手との協調関係を損なわないように、義務を表す表現で自分がそうせざるを得ない状況にあるせいで、相手の依頼を断らなければ行けないことを表明しようとしている。つまり、義務を表す表現を使わず、「早めに帰ります」のよ

うに述べると、断り手は自分の「邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを優先し、帰りたいから先生の依頼に応えないと相手に解釈される恐れがあるが、義務の表現を付け加えることで、自分の意思ではなく、状況が許さないことが含意される発話となる。従って、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則がポライトネスと配慮を表すのに有効に働くと言える。以上から、アラビア語母語話者による断りの「理由」に当たる事情説明においては、日本語とは異なるポライトネスと配慮表現の原則が働くことが明らかとなった。

5.5.4 「代案提示」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

「代案提示」は、5.4.4 節で述べたように、相手の要求に応えられない場面に置かれた際、断ってから、相手との人間関係を維持するために相手と一緒に解決方法を見つけ出すようとして使用される意味公式である。そのため、先行研究では PPS とされている。しかし、図 5-3 で見てきたように、「代案提示」は常に PPS になるわけではなく、相手の利益になるのか、自己の利益になるのかにより、PPS と NPS に分けられると考えられる。よって、言葉が持つ二重性の働きに注意を向ける必要があり、本来の意味に加え、実際の言語使用の際には異なる機能が果たされることに注目したい。例えば、「忙しいので他の人に頼んで」などのような応答は、積極的な「代案提示」ではなく、「やりたくない、いやだ」と断り手が思っているために、「他の人にやらせて」と「代案提示」を用いていると考えられる。このような「代案提示」を PPS とするのは妥当ではないと思われる。

そこで、以下でアラビア語母語話者が用いる「代案提示」の例を提示し、ポライトネスと配慮の示し方に見られる配慮の原則を明らかにする。

(41) (教材のコピー依頼)

知り合い : maālsh ana asfa otlob mn had tany āshan mohadraty msh kamla,aw
ahawel adawarлак āleha maā had wa agybhalak.

(ごめんなさい。すみません、私のプリントが完成していないので別の人に頼んで、または他持っている人を探して持って来てあげるようにする。)

(「謝罪」+「謝罪」+「代案提示」+「理由」+「代案提示」)

上の発話例では、「代案提示」が 2 回出現している。一回目は、「otlob mn had tany」(他の人に頼んで) のように、断り手がまず消極的な「代案提示」を用いている。その後積極

的に「aw ahawel adawarlak aleha maã had wa agybbhalak」（または他持っている人を探して持って来てあげるようにする。）のように自分自身から、依頼者の問題を解決するように努力することを示すため、寛大性の原則 (b) 「自己の負担を最大限にせよ」に従って「持って来てあげるようにする」と述べている。また、断り手は他者の利益が損なわれないように努力する姿勢を見せることで、気配りの原則 (b) （「他者の利益を最大限にせよ」も満たしていることになると言える。

(42) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : maãlsh elmohadra msh kamla bas haahawel agybbhalak mn had tany.

(ごめん、私のプリントが完成していませんが、他の人から持って来てあげるようにする。)

(「謝罪」 + 「理由」 + 「代案提示」)

例(42)でも例(41)のように、断り手が自分のプリントが完成していないという理由で自分の断りを正当化しようとし、積極的な「代案提示」を用いて、「自分で探してみる」と発話している。つまり、寛大性の原則 (b) 「自己の負担を最大限にせよ」、気配りの原則 (b) 「他者の利益を最大限にせよ」という2つのポライトネスの原則を満たしている発話となる。このことから、アラビア語では「haahawel+動詞」(動詞+ようにする)が「代案提示」として使用されることで相手への配慮を示し、相手の利益が損なわれないように努力するということが含意される表現となる。

(43) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : wallahy ana mashghola khales ,bs khalyha yom tany w hasawarhalek.

(ワッラーヒ (誓い) 私はすごく忙しいけど、コピーしてあげるから別の日にして。)

(「理由」 + 「代案提示」)

(44) (教材のコピー依頼)

知り合い : la wallahy ana mashghola gdan,lkn mona hadaret elmohadra dy momkn takhdyha mnha, aw takhdyha mny fy yom tany.

(いいえ、ワッラーヒ (誓い) 私はとても忙しいけど、モナさんが授業に出席したので、彼女からもらえと思う。または、別の日に私からもらってもいい。)

(「直接的断り」+「理由」+「代案提示」+「代案提示」)

例(43)と例(44)では、断り手が「自己の負担が大きいと述べよ」の原則に従い、現時点では「とても忙しい」という理由から、依頼者の欲求に今すぐ応えることはできないが、「別の日にしたらコピーしてあげる」のように条件を付けて依頼者の欲求に応えようとする例もあった。このような例では、断り手が自分のネガティブ・フェイスを守りながら、依頼者のポジティブ・フェイスも守るようにしていると言える。このような意味でこの発話は、気配りの原則 (a)「他者の負担を最小限にせよ」と (b)「他者の利益を最大限せよ」を満たしている発話だと言える。

このように例(41)から(44)で使われた「代案提示」は積極的ポライトネス・ストラテジーであり、他者の欲求が満たされるように、断り手が努力する姿勢を表明しようとしている。しかし、先に述べたように、「代案提示」が常に依頼者の利益になるものではなく、断り手が自分のネガティブ・フェイスのみ守るために使われる場合もある。例として、以下の文が挙げられる。

(45) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : ana taāban delwa`ty,khod enta elwara` w sawaro.

(私は今疲れている。プリント持って、自分でコピーして。)

(「理由」+「代案提示」)

(46) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : maālsh ana msh fady ,khally had yesawarhalak.

(ごめん、私は暇じゃない。他の人にコピーさせて。)

(「謝罪」+「理由」+「代案提示」)

例(45)と(46)では、断り手が用いた「代案提示」が依頼者のための利益になるものではなく、断り手のネガティブ・フェイスである「自分がやりたくない、邪魔されたくない」という欲求を守り、依頼者の欲求が達成されるかどうかは問題にせず、自分の自由が脅かされないことを優先している。このように、「代案提示」は依頼者の利益になる「積極的代案提示」と、断り手の利益になる「消極的代案提示」に大別できる。このことから、上記の例のように自己（断り手）の利益になる「代案提示」は、(気配りの原則) (a)「他者の負担を最小限にせよ」、(b)「他者の利益を最大限にせよ」と、(寛大性の原則) (b)「自己の負担を最大限にせよ」に違反する発話となる。つまり、例(45)の「プリントあげるから自分でコピーして」、例(46)の「私は暇じゃないから、他の人にコピーやらせて」などの「代案提示」では、断り手が依頼者の利益より、自己のネガティブ・フェイス（邪魔されたくない欲求）を守ろうとしていると言える。

5.5.5 「共感」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

5.4.5節で述べたように、日本語の断り発話の中で使われる「共感」表現で用いられるポライトネスと配慮表現の原理として①共感の原則 (b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」、②山岡・牧原・小野 (2010) の気配りの原則 (b)「他者の負担が大きいと述べよ」、③筆者が新たに提案した「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」の3つの原理が挙げられる。では、アラビア語の断り発話における「共感」の意味公式では、どのような原則が有効に働くのだろうか。以下の発話例を見ていきたい。

(47) (食事の誘い)

知り合い : knt atmanna akol määky,marra tanya by eznellah.

(一緒に食べるのを願っていたのに、また今度ビエズネッラー。)

(「共感」+「関係維持」)

(48) (誕生パーティーの誘い)

知り合い : dy forsa hayla wallahy bs lelasaf haroḥ azor had maryd mn ahly fa msh

ha`dar aghayar elmäad,law lyna naseb mrra tanya.

(本当にすごい機会ですよ。でも残念だけど、親戚を見舞いに行くので、予定を変更することができません。機会があればまた今度。)

(「共感」 + 「理由」 + 「理由」 + 「関係維持」)

(49) (誕生パーティーの誘い)

親しい友人 : ya khosara kan nefsy aroh bas, ana maāzoma elyom da w ma`darsh aātazer lohom.

(残念ですね、すごく行きたかったけど、その日に誘いを受けていて、断れないんだ。)

(「共感」 + 「理由」 + 「理由」)

例(47)で使われた「共感」表現は「knt atmanna akol māaky」(一緒に食べるのを願っていた)であり、「一緒に食べたかったのに」という意味を表すが、アラビア語においては、願望を表す助動詞 (āyeyz) 「～たい」より、(atmanna) 「願う」の方が希望の度合いがより強い表現となっている。つまり、断り手は、実際このような機会を非常に楽しみに待っていたという意味が含意される (atmanna) 「願う」の表現を用いて、断りの FTA を軽減しようとしている。また、例(48)では「dy forsa hayla wallahy」(本当にすごい機会ですよ)では、「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」の配慮の原則が働き、他者の行為が自分にとっても望ましいことを表明している。また、利益の観点から考えると、断り手にとって「すごい機会」というのは、自分に利益があるということを言語化することで、山岡・牧原・小野 (2010) の寛大性の原則 (a) 「自己の利益が大きいと述べよ」も満たしている発話となる。また、アラビア語でも日本語のように、「共感」表現として「bs lelasaf」(残念だけど) が用いられる。これは、(共感の原則) の原理 (b) 「自己と他者との共感を最大限にせよ」の原則に従っているものと考えられる。

例(49)では、「ya khosara」(残念ですね)や「kan nefsy aroh」(すごく行きたかった)などの表現が使われている。「kan nefsy aroh」(すごく行きたかった)の「kan nefsy」は(すごく)の意味を表し、希望を表す程度の高い表現である。3つの例で使われた表現は一般的に(共感の原則)の原理 (b) 「自己と他者との共感を最大限にせよ」に当たるが、どのように表現されているかを観察してみると、「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」の原則で記述できると思われる。また、先に述べたように断り手が他者の誘いから自分にも利益が及ぶと思い、残念な気持ちを表明して断っていることから「自己の利益が大きいと述べよ」の原則も満たしている発話だと考えられる。次に上記の発話例と

異なる「共感」表現を示す。

(50) (食事の誘い)

親しい友人 : ah yakhosara ändy meshwar mohm fy el yom da.mota`sefa.w enta äaref eny ma`darsh arfodlak talab bs bgad asfa.

(ああ、残念。その日に大事な用事があります。ごめんなさい。あなたの依頼を断れないと知っているよね。でも本当にごめんなさい。)

(「共感」+「理由」+「謝罪」+「共感」+「謝罪」)

(51) (飲み物の購入依頼)

知り合い : maälsh wallahy ana täbana awy msh adra,law adra kont nezelt .matezälysh.

(ごめんワッラーヒ (誓い) 私はとても疲れていてできません、できるなら行った。怒らないで。)

(「謝罪」+「理由」+「直接的断り」+「共感」+「関係維持」)

上記の2つの発話例では、今まで見てきた「共感」表現と異なるポライトネスのメカニズムが働いていると思われる。例(50)は食事の誘い場面であり、使われた「共感」表現は2つある。1つ目は「yakhosara」(残念)、2つ目は「enta äaref eny ma`darsh arfodlak talab bs」(あなたの依頼を断れないと知っているよね)であるが、本節では特に2つ目の表現に注目したい。

断り手が、通常は聞き手の依頼を断れないという前提推意で「あなたの依頼を断れないと知っているよね」と発話することで、以前あなたの依頼に応えてあげていたという聞き手の推論を導き、「今回は許してください」または「許されるべきだ」のような含意が生まれている。つまり、関連性理論から考えると、関連性の度合いが高い「共感」表現を用いると、発話者(断り手)と聴者の意識に同一の情報があることによって聴者の推論が働き、発話者が意図する意味が明示的でなくても、聴者に十分に伝わるのが期待される。山岡・牧原・小野(2010)によると、「話者と聴者の意識上にあるものが、同一の物、あるいは、想起しやすいものであれば、指示対象が明示的でなくてもコミュニケーションはスムーズになる」とされている。従って、断り手が「あなたの依頼を断れないと知ってい

るよね」と発話する前提として、聞き手の意識上には「以前何度もあなたの要求に応じてあげたのだから、今回は許してもらいたい」と、依頼者の同情を引き出そうという考えがあることが分かる。このような発話は、アラビア語の断りでよく用いられる。例えば、同じ意味で「ana āomry ma rafadtelak talab bs...」（私はこれまでの人生でああなたの依頼を一度も断ったことがないが....）という意味を表すが、これを断り手が断る前または、断ってから述べることによって、他者との人間関係を維持しようとする手段となり、「今回だけ許してください」と他者の推論を働かせ、断りの了解をスムーズに得ることができる。このような「共感」表現では、「他者の利益が大きいと述べよ」という新たな原則が有効に働くのではないかと考えられる。このような原則も、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則のように、アラビア語の配慮表現の独自の原則として提案したい。つまり、断り手がそれまで依頼者の利益を損なわないようにし、依頼を断ったことがないということを表示し、他者に与えてきた利益が大きいことを明示的に言語化することで、依頼者から同情が得られ、断りの FTA を軽減しようとしているのである。

また、例(51)では、飲み物の購入依頼場面に使われた「共感」表現は、「law adra kont nezelt」（できるなら行ったけど）である。断り手がこのように表現することは、依頼者の意に添えたい気持ちが強いが、やむを得ず「とても疲れているので」という理由で行ってあげられないことを表明している。本来「できるなら行ってあげるけど、とても疲れているので全然できない」ということが含意される発話である。従って、このような発話でも、筆者が提示した「自己の負担が大きいと述べよ」の原則が有効に働いていると思われる。本来は、山岡・牧原・小野（2010）が提示した日本語の配慮表現の原理（気配りの原則）(b)「他者の利益が小さいと述べよ」、(寛大性の原則) (b)「自己の負担が小さいと述べよ」が依頼発話などでポライトネスを表す。例えば、高級品をプレゼントとして渡すときでも日本語では「つまらないものですが」、「ほんの気持ちです」などのような慣習化された表現が用いられる。

アラビア語でも、日本語と同様にプレゼントを渡すとき「maālsh haga sohayara」（ごめんなさい、小さいものですが）、お客さんに豪華な食事を出しても「maālsh haga basyta」（ごめんなさい、シンプルなものですが）、「haga matle`sh byk」（あなたに相応しいものではないんですが）などのように、(気配りの原則) (b)「他者の利益が小さいと述べよ」（寛大性の原則) (b)「自己の負担が小さいと述べよ」を用いることが分かる。しかし、ポライトネスは普遍的な概念ではないため、同じ言語の中でも発話行為が異なることによ

て、ポライトネスの現れ方も異なる。従って、上記の「共感」表現のように、アラビア語の断りでは（気配りの原則）(b)「他者の利益が小さいと述べよ」に違反して、むしろ「他者の利益が大きいと述べよ」の原則で相手に対する配慮を伝えることができる。

以上をまとめると、アラビア語の断りにおける「共感」の意味公式で使われるポライトネスと配慮表現の原則は、次のようになる。日本語と異なる原則として、「他者の利益が大きいと述べよ」があり、日本語と同様の原則として、「自己と他者との共感を最大限にせよ」、「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」が挙げられる。つまり、日本語で用いられる「他者の負担が大きいと述べよ」、アラビア語で用いられる「他者の利益が大きいと述べよ」が両言語の違いとなる。両者が用いる原則には、大きな違いがあればあるほど、コミュニケーション様式が異なることを証明し、コミュニケーション上の誤解や摩擦を引き起こす原因ともなる。

5.5.6 「関係維持」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

アラビア語の断りで使われる「関係維持」表現は日本語と比べ少ない。例として、以下の例が挙げられる。

(52) （食事の誘い場面）

知り合い：ana asfa,ana taābana gdan.mrra tanya in sha allah.

（すみません。とても疲れているので、また今度インシャーアッラー。）

（「謝罪」+「理由」+「関係維持」）

(53) （食事の誘い場面）

知り合い：kont atmanna akol mäaky,marra tanya by eznellah.

（一緒に食べるのを願っていたのに、また今度ビエズネラー。）

（「共感」+「関係維持」）

これらの例文から分かるように、アラビア語の断りで使用される「関係維持」表現は、ほとんど「mrra tanya in sha allah.」（また今度インシャーアッラー）である。「インシャーアッラー」は（アッラーが望めば）という意味で、宗教上よく用いられる表現だが、相

手への配慮の機能も持つものだと考えられる。つまり、アラビア語も日本語のように、「関係維持」のために「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」という原則が働いていると考えられる。しかし、日本語では上下関係や親疎関係が表現選択において重要な要因となるため、表現にバリエーションが見られる。つまり、上の相手「先生」に対しては、「また今度、すみません。ぜひ一緒させてください。」、「また、ぜひ機会があれば、よろしく願います」などを、親しい友人に対しては「また、今度ね」、「また行くとき、誘って..」などを用いるように、表現の使い分けが明確になっている。しかし、アラビア語では、上下関係や親疎関係による表現選択には、日本語ほど大きな違いが見られない。とはいえ、アラビア語でも上の相手「先生」に対する発話では、「呼称」や「人称代名詞」の使い分けの現象も見られる。先生に対する発話では際に「先生」と呼びかけ、必ず「呼称」が使ったり、「あなた」に当たる「hadretak」という尊敬表現が使われたりする。つまり、上限関係、親疎関係による使い分けが全くないとは言えないが、日本語ほど大きな差は見られない。

次に、アラビア語特有の「関係維持」表現を提示する。

(54) (飲み物の購入依頼)

知り合い : maāsh wallahy ana taābana awy msh adra,law adra kont nezelt .matezālysh.

(ごめん本当に私はとても疲れているのでできません、できるなら行ったけど。怒らないで。)

(「謝罪」+「理由」+「理由」+「共感」+「関係維持」)

(55) (食事の誘い)

親しい友人: asfa wallahy matezālysh.ana msh bakol el koshary.eldocter maneāny mno.

(本当にごめんなさい、怒らないで。私はコシヤリを食べない。お医者さんに食べるのが禁じられている。)

(「謝罪」+「関係維持」+「理由」+「理由」)

(56) (教材のコピー依頼)

親しい友人 : ana asfa ana mashghola gdan wallahy, matezälysh.

(ごめんなさい、本当に私はとても忙しい。怒らないで。)

(「謝罪」 + 「理由」 + 「関係維持」)

上記の3つの例では、断り手が断る行為で相手の利益を奪ったことに対し、依頼者側が怒るだろうと推測した結果、「怒らないでください」という表現で相手との関係を維持しようとしていると考えられる。つまり、要求に応えないことで相手が今怒っているだろうと考え、「怒らないでね」と相手のことを思いやるのである。このような「関係維持」表現では、Lakoff(1973:298)が提案したポライトネスの原則の中でも、原則③「3.Make a feel good-be friendly (気持ちよくしよう、友好的になれ)」の原則が働くと考えられる。つまり、怒っているだろうと思う相手の気持ちを思いやるために生まれる、「他者を気持ちよくさせよ」という原則が提案できるのではないかと考えられる。

5.5.7 「非難」におけるポライトネスと配慮表現の原則について

5.4.7 節で述べたように、「非難」の意味公式は、断り手が相手からこのように依頼されるべきではないという前提で用いられる。本研究で設定した依頼場面の中で特に「飲み物の購入依頼」場面で、「非難」が使用されることが分かった。一方、「教材のコピー依頼」という依頼内容では、逆に「関係維持」、「共感」、「積極的代案提示」などのような PPS を表す表現が使用されていた。

断り手が「非難」を用いるということは、相手へ全く配慮を示さない場合と、相手への配慮を最小限にする場合に分けられる。つまり、「非難」を用いたとしても、相手の欲求に応えられず断る際に「非難」を用いるものの、FTA を軽減する働きを持つ配慮表現も使用されることがある。例えば、日本語では程度副詞「ちょっと」が非難表現に前接するのがよく見られる。また、日本語の「非難」表現で見てきたように、「他者への非難を最小限にせよ」の原則に違反する場合もあれば、(共感の原則) (a)「自己と他者との反感を最小限にせよ」、(b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」の原則が働く場合もある。

本節ではアラビア語母語話者の「非難」表現に見られるポライトネスと配慮表現の原則を見ていく。

(57) (飲み物の購入依頼)

親しい友人 : matroħ tgyeb benafsak, āshan ana merawaħa lelmetro.

(自分で買いに行きなさい。私は電車に向かって帰るから)

(「非難」 + 「理由」)

(58) (飲み物の購入依頼)

親しい友人 : matroħ enta tgyeb le nafsak.

(自分で買いに行きなさい)

(「非難」)

例(57)と(58)では、断り手が命令形によって直接的に「非難」を表していることが分かる。依頼者に対してまず「自分で行きなさい」と述べることは、「自分の欲しいものを自分で買いに行くべきだ」ということが含意される発話であり、断り手がこのように頼まれるべきではないという前提で断っていると考えられる。このような「非難」表現では、断り手が(共感の原則)(a)「自己と他者との反感を最小限にせよ」や、気配りの原則(a)「他者の負担を最小限にせよ」の原則ではなく、むしろ「自己の負担を最小限に、他者の負担を最大限に」の原則が用いられていると言える。

(59) (飲み物の購入依頼)

親しい友人 : enty ezay totloby talab zay da!

(あなたは、どうやってそんな頼みごとをするんですか。)

(「非難」)

(60) (飲み物の購入依頼)

親しい友人 : enty betharagy wla eh.

(あなたふざけているでしょう)

(「非難」)

(61) (飲み物の購入依頼)

親しい友人：enta msh ändak reglen troh tgeb wla eh!!

(あなたは歩いて自分で買いに行くのに、足がないの！！)

(「非難」)

例(59)から(61)では、「何で自分で買わないの」のように間接的「非難」が使われた。断り手が、直接的に「いやだ、自分で買いなさい」と言うことを避けて、「冗談」や「皮肉」により間接的に相手の依頼を非難していることが分かる。

例(59)では、先に述べたように、断り手が本来このように依頼されるべきではないという前提で、「そんな頼み事をするなんて」ということを依頼者に伝えることによって、「非難」を表している。つまり、(是認の原則) (a)「他者への非難を最小限にせよ」の原則に違反している。また、例(60)では「ふざけているでしょう」という発話で「あなたの依頼を受け入れない」ことが含意されており、間接的に「非難」を示している。例(61)では、断り手が冗談または皮肉をこめて、「あなたは歩けないわけではないので、自分で買いに行けるでしょう」ということを含意して「あなたには足があるでしょう」と述べたことが分かる。つまり、「自分で買いに行きなさい」ということを間接的に表明しようとしている。これは、(気配りの原則) (a)「他者の負担を最小限にせよ」、(b)「他者の利益を最大限にせよ」に違反していることになる。以上から、アラビア語では「非難」に見られる言語現象を記述するのに「前提」と「含意」が重要な概念であることが分かる。

断り手がどの原則を優先するかを決定する要因は様々であるが、「非難」においては特に相手との人間関係が重要な要因となる。上述の発話例から分かるように、「非難」の意味公式はほぼ「親しい友人」に対して使われるものである。それは、特に「親しい友人」に対しては、気楽に自分の気持ちを正直に伝えられるため、「なぜ自分で行かないの」「自分で行け」などのような表現が使用され、(是認の原則) (a)「他者への非難を最小限にせよ」に違反することが多くなる。一方、本データからは、「先生」に対して、飲み物の購入依頼の場合でも、(共感の原則) (a)「自己と他者との反感を最小限にせよ」、(b)「自己と他者との共感を最大限にせよ」の原則が優先されることが分かった。つまり、通常は力関係にある「先生」と「学生」の断り発話では、先生から学生に「非難」が使われることは可能だが、学生から先生に対し、「非難」は使われない。

以上、アラビア語の断り発話における各意味公式で使用されるポライトネスと配慮表現の原則を見てきたが、それらをまとめると、以下の表のようになる。

表 5-4 アラビア語の断り発話における意味公式とポライトネスの原則の関連性

意味公式の分類	ポライトネスと配慮表現の原則
「謝罪」	新：表現レベル：「自己の申し訳ない気持ちが大きいと述べよ」
「直接的断り」	(B&L 1987) NPS
「理由」	新：表現レベル：「自己の負担が大きいと述べよ」
「代案提示」	(気配りの原則) 行動レベル：(a) 他者の負担を最小限にせよ 行動レベル：(b) 他者の利益を最大限にせよ (寛大性の原則) 行動レベル：(b) 自己の負担を最大限にせよ
「共感」	相手の意向に添いたいという心情の表明。 新：表現レベル：関連性理論：「他者の利益が大きいと述べよ」 行動レベル：(共感の原則) (b) 「自己と他者との共感を最大限にせよ」 新：表現レベル：「他者の行為は自己にとって望ましい行為と述べよ」
「関係維持」	新：行動レベル：《行動》：「他者を気持ちよくさせよ」 新：表現レベル：「他者の行為が自己にとって望ましいと述べよ」
「非難」	下記の原則に違反する 行動レベル：(共感の原則) (a) 「自己と他者との反感を最小限にせよ」 行動レベル：(気配りの原則) (a) 「他者の負担を最小限にせよ」

5.6 本章のまとめ

従来の先行研究では、ポライトネスと配慮表現の原則が先に立てられてから、発話行為に適応されることが多かった。しかし、本章では、先に特定の発話行為を分析対象として、その発話行為に見られるポライトネスと配慮表現の原則を細かく検討した。

本章では、断りの発話行為に焦点を当て、ポライトネスと配慮表現の原則について考察を行った結果、行動と表現に関わる新たな原則を5つ提案することができた。行動に関わる原則として、「他者との距離を最小限にせよ」と「他者を気持ちよくさせよ」の2つの原則が挙げられ、表現に関わる原則として、「他者の行為が自己にとって望ましい行為と述べよ」、「自己の負担が大きいと述べよ」、「他者の利益が大きいと述べよ」の3つの原則が挙げられる。

また、日本語とアラビア語において、ポライトネスが2言語で異なった働きをするものとして、「共感」と「理由」、「代案提示」の意味公式が挙げられる。

アラビア語の「共感」では、「他者の利益が大きいと述べよ」、「理由」では「自己の負担が大きいと述べよ」の2つの独自の原則が挙げられた。一方、日本語の「共感」では「他者の負担が大きいと述べよ」の原則が用いられ、「理由」では「自己の負担が小さいと述べよ」と「中立的な立場」の双方が使用されることが多いことが明らかとなった。また、日本語の特徴である恩恵を受けていない発話者による授受補助動詞の使用による「代案提示」にも両言語で違いが見られた。つまり、「他者との距離を最小限にせよ」の原則が日本語では有効であるが、アラビア語では表明できない現象だということが明らかになった。

さらに、日本語は「直接的断り」表現に和らげ効果のある成分を付加することで、聞き手に結論を委ねるストラテジーが多用されるのに対し、アラビア語では、話し手が断定的に結論を提示することが多い点で、両言語には差異があった。

本章の結果から、両言語にはいくつか類似点があるものの、相違点によって両言語母語話者のコミュニケーションで誤解が生じる危険性があると考えられる。特に、上記で新たに挙げた原則の中では、「自己の負担が大きいと述べよ」、「他者の利益が大きいと述べよ」の原則において、両言語のコミュニケーション様式が非常に異なることが分かった。断り発話のみではなく、アラビア語母語話者が相手から何か依頼され、それに応えるときでも、「自己の負担が大きいと述べよ」と「他者の利益が大きいと述べよ」の原則を満たす発話がよく行われる。例えば、「*enta matatakhaylsh ana täbt ezay*」（あなたは想像できないぐらい苦労したよ）、「*ana ämlt el mytämlsh äshan khatrak*」（普通誰でもできないこと

をあなたのためにやったよ) などのような発話がよく見られる。そして、断る際に、関連性理論と関連する「あなたの依頼を今まで断ったことがないことを知っているよね」、などのような発話を行い、今まで他者にもたらした利益を示すことで「他者の利益が大きい」ことを強調することによって、断りの了解と共感を得ようとする戦略が用いられていた。つまり、他者と共有しているスキーマを活性化することにより、他者との人間関係を保とうとする配慮のメカニズムが働くと言える。

このように、第3章から第5章にかけて、日本語とアラビア語の断り発話において、ポライトネスが両言語でどのように異なった働きをするのか、両言語において好まれるコミュニケーション様式と、それが表現の選択にどのように反映されるかを見てきた。

次章では、課題Ⅲを達成するため、両言語の違いがどのようにアラビア語を母語とする日本語学習者に影響を与えるのか、学習者の断りには、母語干渉が見られるのか、学習者が抱える問題点やその原因を探ることを試みる。

第6章 中間言語語用論の観点から見た断り発話

6.1 本章の目的

第2言語学習者の研究である中間言語語用論とは対象者は異なるが、異文化間語用論で研究されている語用論的特徴は、中間言語語用論における中心的な研究課題でもある。そのため異文化間語用論の知見は、中間言語語用論に対して多くの有益な示唆をもたらしている（清水 2009:61）。

第2言語習得における中間言語語用論の研究は、1970年代に主に統語論や音韻論などにおける学習者の問題点が取り上げられてきた。しかし、統語論や文法論も勿論重要ではあるが、相手との人間関係を考慮する力を身につけ、対人的コミュニケーションにおいて適切な発話を行うことに関わる語用論的能力は、特に重要だと思われる。つまり、いつ、なぜ、どのように、誰に対し、という側面を考慮したコミュニケーションを行う能力を身につけることが人間関係を構築していく上で重要である。実際に目標言語を用いてコミュニケーションを行うためには社会言語学的能力及び、コミュニケーション能力に関わる知識も学習者にとって欠かせないものであり、身につけることの重要性は言うまでもない。

1980年代からはそれらの能力、いわゆる中間言語語用論におけるポライトネスの知識についても研究が行われるようになった。

語用論における中間言語語用論研究は、主にポライトネスと関わる様々な発話行為、「依頼」、「断り」、「謝罪」、「褒め」などにおける学習者の能力を探る分野である。これらの発話行為において、学習者が起こす文法上の誤用ではなく、語用論的誤用、いわゆる発話行為の適切さ、上下関係や親疎関係を考慮した表現形式の選択などにおける適切さ、ポライトネス、配慮などを探り、学習者の問題点や学習者がレベルに相応しい能力に到達しているかどうかの問題について様々な議論が行われてきた。

本章では、課題Ⅲを達成するために、本研究の第3章から第5章で日本語とアラビア語の異なりについて論じてきた結果をふまえながら、アラビア語を母語とする日本語学習者の「断り」発話を取り上げ、学習者の問題点を探る。具体的に述べると、初中級レベルの日本語学習者の断り発話を異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の観点から

分析し、ロールプレイ⁵¹や談話完成テストで得られた学習者のデータに見られるコミュニケーション様式の特徴を検討する。そして、第4章で日本語母語話者を対象に行った意識調査Ⅱと同様の調査Ⅳを、日本語学習者を対象に行い、断りの「理由」における「程度副詞」の分析を通して、学習者と日本語母語話者及び、学習者とアラビア語母語話者のポライトネスと配慮表現の原則の違いを探る。

6.2 語用論的転移とは

先に述べたように、中間言語語用論の分野においては1980年から1990年代にかけて、学習者の目標言語に見られるポライトネスやコミュニケーション能力、状況に相応しい発話を行う能力、社会言語学的能力について、様々な発話行為が分析対象とされ、それらの能力に関する学習者の問題点が取り上げられてきた。具体的には、学習者の母語と目標言語の対照研究や、学習者の目標言語と、その言語母語者との対照研究によって、学習者の語用論的能力の問題点などが検討されてきた。そこで、日本語学習者のデータを分析することにより、母語干渉が見られるかどうか、いわゆる語用論的転移 (pragmatic transfer) と呼ばれる現象が生じているか否かについて様々な研究が行われてきた。

語用論的転移とは、第2言語で発話行為を行う際、母語の社会言語学的能力を転移することを指す(近藤2009:76)。また、語用論的転移は、正の転移と負の転移に大別される。正の転移は「コミュニケーションが成功した結果」(伊藤2002:179)であるため、検証することが難しいとされ、基本的に学習者の母語と目標言語に共通している言語体系や、談話構造、ポライトネスと配慮のストラテジーなどがあると、学習者がそれらの母語の特徴を目標言語に適応させても、誤りを起こさないという現象である。しかし、第2言語学習者が誤りを起こさないのは、母語からの正の転移によるものなのかは証明しがたい。一方、負の転移とは、その逆で学習者の母語と目標言語の間に異なりがあり、母語の特徴が目標言語に現れることである。つまり負の転移は、学習者による目標言語の使用現れる不適切さや、習得の困難性、語用論的誤用、コミュニケーション上の誤解などの原因ともなる。

⁵¹ ロールカードの詳細は、資料Ⅴを参照されたい。

6.3 第2言語学習者の断り発話に見られる転移について

Beebe et al. (1990) は、日本語母語話者と、アメリカ人英語母語話者、日本語を母語とする英語学習者を対象に、断り発話について対照研究を行った。そこで、意味公式の分類単位で断り発話を機能別に細かく分類した結果、両者が用いる「理由」において相違点が観察されたと言う。具体的には、日本語母語話者の断りの「理由」はアメリカ人と比べ具体的でない述べている。また、日本語を母語とする英語学習者の英語の断りについて、談話完成テストを行った結果、学習者の母語である日本語からの転移として、「理由」の曖昧性が挙げられている。つまり、学習者が母語である日本語から影響を受け、アメリカ人の英語と比べて、断りの「理由」が具体的でないという負の転移が生じていると結論づけている。

日本語母語話者が、断り発話において、内容的に曖昧な理由を用いることについて指摘した研究は多くある。例えば、蒙 (2010) は、DCT調査を通して、日本人会社員と中国人会社員の「依頼」に対する「断り」をポライトネス・ストラテジーの観点から分析した結果、両言語母語話者は、「お詫び」⁵²と「理由」の意味公式をもっとも多く使用している点で共通しているが、相違点としては日本人は曖昧な理由を使用し、中国人はより具体的な理由を述べると指摘している。

また、Kondo (2000) は、アメリカ人英語母語話者と、日本語を母語とする英語学習者の「断り」について比較分析を行った結果、日本人英語学習者は特に「謝罪」の意味公式で談話を開始することが多いのに対し、アメリカ人は「共感」で談話を開始する点で異なることを示した。さらに「理由」の意味公式を比較した結果、日本人英語学習者が具体性のない「理由」を用いる点で両者には差異が見られたという。

Nader (2009) は、英語母語話者とエジプト方言アラビア語母語話者、英語を母語とする中上級エジプト方言学習者を対象に、依頼や勧めに対する「断り」についてロールプレイ調査を行った。その結果、中上級学習者に語用論的転移が見られたが、中級学習者より、上級学習者の方が、母語から強い影響を受けていることを指摘した。

⁵² 研究者により、「お詫び」、「謝罪」など用語が異なるが、本研究では「謝罪」とする。

また、リナ（2013a）では、日本語母語話者とアラビア語母語話者の「断り」発話を対照した結果、日本語母語話者にとっては「謝罪」が最も重要であるのに対し、アラビア語母語話者にとっては、具体性のある「理由」の意味公式が最も重要であることを指摘した。そして、「先生」、「親しい友人」、「知り合い」の3つの人間関係に見られる断り発話の差異について考察を行った結果、日本語母語話者は相手との人間関係を問わず、断り発話を「謝罪」で開始することが多いのに対して、アラビア語母語話者が「先生」に対する断り発話は「謝罪」で開始することが多いが、「親しい友人」に対する「断り」発話を「直接的断り」で開始する点で両者が異なることが明らかになった。さらに、エジプト方言アラビア語を母語とするレベルの高い日本語学習者の「断り」には負の転移が観察された。これについては、以下6.4節で詳しく論じる。

このように、日本語母語話者の「断り」発話に見られる「理由」に当たる話者の事情説明が内容的に曖昧であることが多く指摘されてきた。それは、第4章の調査結果で論じたように、日本語母語話者にとっては、理由を具体的に述べることは理由の内容が強調されることになり、依頼者にはそれが言い訳に聞こえたり、不快感を感じる要因となるためである。

6.4 アラビア語母語とする日本語学習者の断り発話

リナ（2013a）では、「断り」の談話構造に着目し、アラビア語母語話者の大学生と日本語母語話者の大学生、アラビア語を母語とする日本語学習者を対象に、「依頼」「勧誘」に対する「断り」についてDCT調査を行い、比較分析をした。被調査者から得られたデータを、意味公式の観点から機能別に分類した結果、中級レベル日本語学習者の「断り」において、負の転移と見られる現象が多く観察された。いわゆる、語用論的転移が生じていることを検証することができた。具体的な転移として、アラビア語母語話者が好む「直線的」コミュニケーション様式における「直接的断り」の多用、「石畳的」コミュニケーション様式に見られる断りの理由の具体性、そして母語話者が用いる配慮表現の原理「自己の負担が大きいと述べよ」の使用に見られる「大げさな事情説明」などが挙げられる。

つまり、意味公式の使用率や、出現順序、表現の選択などから、レベルの高い日本語学習者は自分の母語を日本語に対応させ、発話していることが分かった。例えば、「断り」の「理由」を具体的に示したり、「理由」を明示する際に、程度性の高い副詞と義務性を表すモダリティ「なければならない」系の多用、発話の文頭に拒否を表す「いいえ」を使用したりすることなどが挙げられる。これらは、語用論的転移によるものだと考えられる。以下で、リナ（2013a）のDCT調査で集めたデータにおけるアラビア語を母語とする日本語学習者の調査結果を提示する。

1年生、3年生、4年生ごとに、「勧誘」と「依頼」に対する「断り」の談話構造に使用された意味公式の出現率は、以下の図のとおりである。

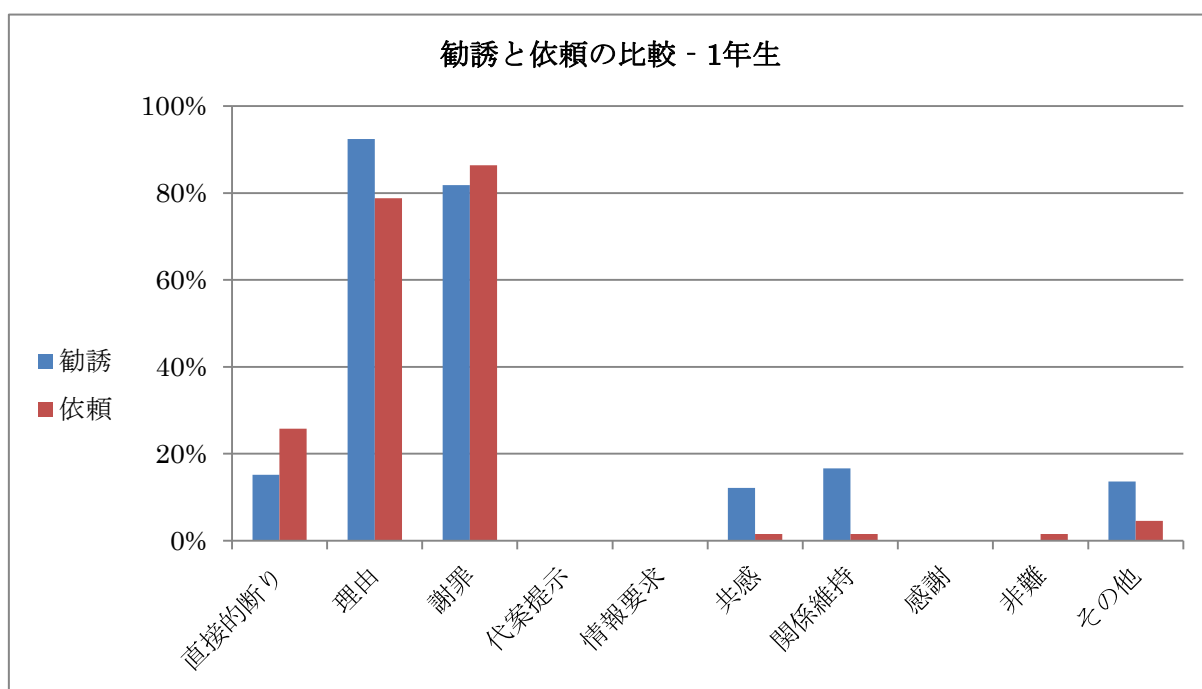


図 6-1 依頼と勧誘に対する「断り」における意味公式の出現率

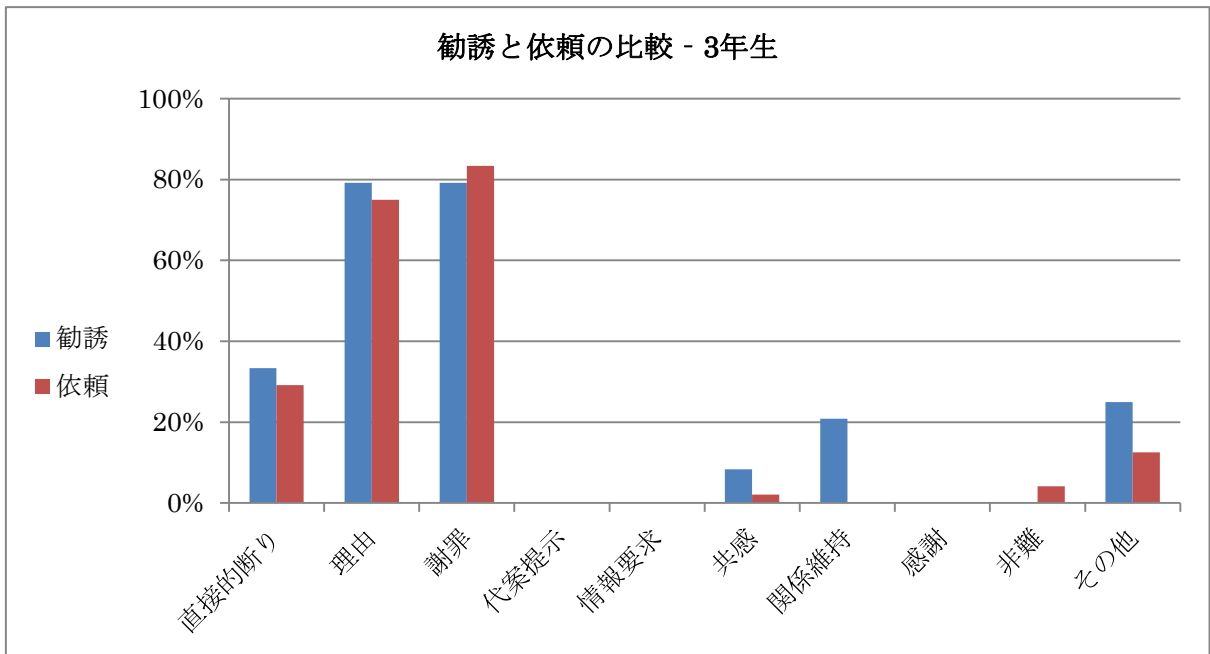


図 6-2 依頼と勧誘に対する「断り」における意味公式の出現率

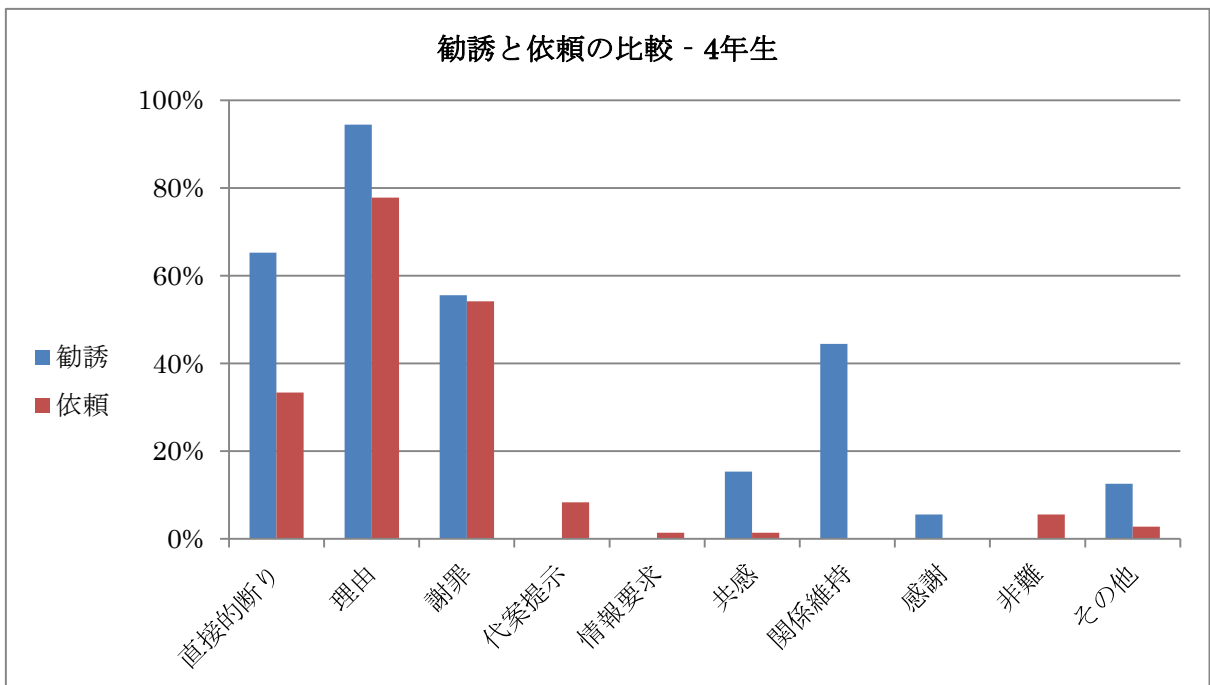


図 6-3 依頼と勧誘に対する「断り」における意味公式の出現率

図6-1の初級レベルである大学1年生の日本語学習者のデータでは、「謝罪」と「理由」の意味公式が最も多く使用され、「直接的断り」の使用率が低い。ただし、レベルが上がった4年生では、「謝罪」の使用率が低下する一方、「直接的断り」の使用率が増加する傾向にあることが分かる。つまり、4年生である最も日本語レベルの高い学習者が「直線的」コミュニケーション様式を用いることが多いということである。

以下で、ロールプレイデータの中から、4年生の学習者が「断り」を示すまでの会話例を取り上げる。この章で挙げるデータは、本研究で集めたロールプレイデータを宇佐美(2007)の基本的な文字化の原則(BTSJ)⁵³に従い、文字化を行ったものである。

次の会話(1)と(2)は、4年生の学習者が上の相手である「先生」⁵⁴の依頼と勧誘に対して「直線的」コミュニケーション様式を用いて断る例である。

(以下、先生をT、学生をSとする)

(1) T 今日授業の後みんなで寿司を食べに行くので、一緒に行きませんか。

S2 いいえ、すみません。用事があります。

(「直接的断り」+「謝罪」+「理由」)

上の「勧誘」に対する「断り」場面では、学習者は目上の相手「先生」に対し、「直接的断り」から談話を展開している。上級レベルの学習者であるにも関わらず、断りの一連の応答を観察すると、文法的に誤用があるとは言えないが、コミュニケーション様式自体が、日本語として不適切であり、聴者に違和感を生じさせるのではないかと考えられる。日本語で断る際には、発話頭に拒否を表す「いいえ」が用いられないことに加え、「先生」に対する断りでは、配慮を示すことが重要であるが、この例では発話頭に「いいえ」が使用されることにより、相手への思いやりに欠けた発話となっている。

⁵³ 宇佐美(2007)の(BTSJ)の文字化の記号は、資料Ⅶを参照されたい。

⁵⁴ ロールプレイ調査において、「先生」役を演じたのは、実際に日本語を教えているカイロ大学日本語学科の教員である。

(2)

T お願いだけど、この教材を20部、来週の水曜日の授業までにコピーをしてもらいたいのですが、大丈夫ですか。

S9 いいえ、先生すみません。ちょっと試験がある。できません。

(「直接的断り」+「謝罪」+「理由」+「直接的断り」)

上の会話例は、「先生」の依頼に対する「断り」場面だが、例(1)と同様に文頭には拒否を表す「いいえ」が用いられている。そして、不可を表す「できません」も断定的に用いられ、和らげ効果のある成分が付加されていないことが分かる。日本語母語話者なら、「できそうにない」、「できないかもしれない」や、発話頭に拒否を表す表現ではなく、「謝罪」表現を用いることが予想される。しかし、上記の例では学習者が「呼称」や「謝罪」など相手への敬意や配慮を示す働きを持つ表現形式も用いているものの、目上の相手に不快な思いをさせる応答なのではないかと考えられる。

山岡・牧原・小野(2010:139)では、「配慮が相手に伝わることによって相手の負担感が相対的に緩和される」とされているが、以上の会話例を観察すると、学習者の回答に「ちょっと」「すみません」などのような配慮表現が用いられているにも関わらず、文頭に拒否を表す「いいえ」と断定的に「直接的断り」を表す表現形式が現れているために、「配慮表現」の使用機能が失われてしまう恐れがあると思われる。このことから、学習者は適切な配慮表現の使用ができていないと考えられる。

初級レベルの学習者より、レベルの高い学習者が不適切な発話を行うことによって、誤解や偏見、コミュニケーションの破たんの原因にもつながる可能性がある。というのも、初級レベルの学習者は言語能力が限られているため、不適切な発話を行っても、ある程度許容されるが、中上級レベルの学習者の場合、不適切な発話を行うことが否定的に評価されると考えられるからである。つまり、目標言語を流暢に話せる学習者には、その言語の背後にある文化や価値観、ポライトネスなどに関わる知識もある程度把握しているという前提が生じ、否定的に評価されてしまうということである。言い換えれば、周囲から一方

的に、母語話者と近いコミュニケーション様式でコミュニケーションを行えると見なされてしまう可能性もあろう。

山田（2009）は、母語話者は学習者の語用論的誤用は、否定的に解釈する傾向があり、学習者が場面や状況に適した言葉の使い分けをしなければ、「母語話者は学習者を傲慢であるとか無礼であると解釈する傾向がある」と指摘している。そして、学習者による語用論的誤用が生じる原因の1つは、語用論的転移であるとしている。つまり、日本語学習者が母語話者とのコミュニケーションにおいて、不適切な「断り」表現の選択や、母語話者と異なるコミュニケーション様式を使用する原因の1つは、学習者の第2言語である日本語が、学習者の第1言語（母語）に影響を受けているということである。

また、上述したように、特に初級レベルの学習者は、教科書の影響を強く受けていると考えられ、早い段階で学習者にコミュニケーション能力に関わる知識を与え、言語運用能力を育成する方針を考えていくことが重要であろう。

6.5 学習者の断り発話に見られるコミュニケーション様式

以下は、中級レベルである4年生、3年生の学習者のデータに見られる「石畳的」コミュニケーション様式の例である。基本的、「石畳的」スタイルでは、言葉を省略しないで、むしろ言葉を尽くして、事情を説明する。よって教科書の影響を受けている初級レベルの日本語学習者のデータには、あまり見られないと予想できる。断り発話において、「理由」の意味公式における事情説明の具体性は、学習者の母語であるアラビア語の「石畳的」スタイルの特徴として挙げられる。以下は、その会話例である。

(3)

T あのうちちょっとお願いがあるんですけど、このお金で飲み物を買ってもらえる？

S12 申し訳ありませんが、今朝バスで行くとき、誰かが私の足を踏んだので、今歩くのが大変。

（「謝罪」＋「理由」）

(以下、Hは「依頼者」「勧誘者」で、Fは「親しい友人」とする)

(4) 3年生

H ねね、今日授業の後お寿司を食べに行くことになっているんだけど、一緒に行ってくれない。

F2 ごめん、私は寿司を食べることができない、だってなんかはしの持ち方が下手だから、恥ずかしい目に合わないように。

H 慣れるから一緒に行こうよ。

F2 ごめん、できない。

(「謝罪」+「理由」+「理由」+「理由」)

例(3)では、「先生」の依頼に対する断りで、誤解を招きかねないと考えるため事情説明が詳しく行われる「石畳的」コミュニケーション様式が使用された。また、例(4)でも、「親しい友人」の誘いを断る学習者が、「石畳的」コミュニケーション様式を用いて、詳しい状況説明を行い、自分の断りを正当化しようとしている。つまり、中級レベルの日本語学習者は、自分の事情をどの程度話すかに関わる「自己開示」の度合いが、初級レベル学習者に比べ高いことが分かる。

日本語とアラビア語母語話者の断りの「理由」説明において、「自己開示」の度合いの違いとコミュニケーション様式の差異は、文化と社会的通念、個人差などにより、決定されるものだが、学習者の場合それらの要因より、教科書の影響と目標言語の運用能力のレベルが大きな要因となっている。しかし、必ずしも目標言語の運用能力のレベルが高いとき、学習者が母語話者と円滑なコミュニケーションを行えるということではなく、言語能力が限られている初級レベルの学習者が、シンプルな断り発話を使用し、「自己開示」の度合いが低い「事情説明」を行うことで、目標言語である日本語として適切な発話となっている。

以下は、「飛び石的」と「螺旋的」のコミュニケーション様式が用いられた会話例である。

(5)

H みんなで授業のあとで寿司を食べない？

F1 ちょっとー。

H どうしたの？

F1 母が反対するかもしれない。

(「理由」)

(6)

T 今日授業の後みんなで寿司を食べに行くので、一緒に行きませんか。

S5 お誘い本当にありがとうございます。でも、ちょっとですね。都合が悪くて。

T そうですか。ちょっと大丈夫ですか？

S5 はい、大丈夫です。

T 本当、じゃ、また今度。

S5 はい、ありがとうございます。

T どういたしまして。

(「感謝」+「理由」)

例(5)では、断り手はまず、必要最低限の言葉で会話を済ます「飛び石的」コミュニケーション様式の代表的な発話例である「ちょっと」で間接的に断ったが、そこで勧誘者が「どうしたの？」と聞くことにより、事情説明を求める姿勢を示したために、断り手は具体的な内容を提示し、「石畳的」コミュニケーション様式を用いている。つまり、1つの談話の中で、相手の反応に応じて、いくつかのコミュニケーション様式を組み合わせ、発話を行うことがある。一方、例(6)では、学生が「螺旋的」コミュニケーション様式で「都合が悪くて」と理由を説明して断る意志を相手に察してもらうことを期待する表現方法を用いたが、それに対して先生が「大丈夫ですか」と聞くことで、なぜ「都合が悪いのか」具体的な「理由」を求めている。このような発話は、DCT調査では見られず、ロールプレイの特徴の1つと言える。

以下は、日本語学習者が用いる「直線的」コミュニケーション様式の例である。

(7) 3年生

T 今日の授業の後みんなで寿司を食べに行くので、一緒に行きませんか。

S3 いいえ、出来ませんね。用事があります。

T ああ、そうですか。じゃ、また今度。

S3 はい、お願いします。

(「直接的断り」+「直接的断り」+「理由」)

(8) 4年生

T 今日授業の後みんなで寿司を食べに行くので、一緒に行きませんか。

S6 ごめん、今日は無理だし。

T ええー無理ですか。なんでですか。大丈夫??

S6 ちょっと頭が痛い、一日中。

T ええー、本当大丈夫ですか。

S6 大丈夫です。

T ちょっと医者に行ってください。

S6 行きたい。

T じゃ、また今度大丈夫。

(「謝罪」+「直接的断り」)

上の例から分かるように、日本語学習者でも「直線的」コミュニケーション様式を用いる例が見られる。そして、「先生」に対しても使用されている。生駒・志村（1993）では、日本語母語話者は文を途中で切ることによって、直接的な断りを避ける傾向があり、自分より特に地位の高い人への断りに多く使われるとしている。つまり、上記の学習者の断り発話は、地位の高い相手である「先生」に対し、不適切であろう。

例(7)の断りの発話例は、日本語として、相手に対する配慮が欠けている発話となり、例(8)では、学習者が「先生」に対し、「直線的」コミュニケーション様式で断り発話を行い、ある程度の日本語能力があるにも関わらず、和らげ効果のある成分を付加しないことで、相手のフェイスを脅かす度合いがさらに増やしている。そのため、「先生」の応答「ええ

「無理ですか。なんでですか。大丈夫？」から分かるように、具体的な理由説明が求められている。

このように、上位の高い日本語学習者でも母語の影響で不適切な発話を産出することがあり、母語において好まれるコミュニケーション様式を目標言語にも適応させることがよく見られる。

しかし、先に述べたように、1年生の学習者は中級レベルの学習者と比べ「直接的断り」表現の使用が低い点で異なっている。つまり、「直線的」コミュニケーション様式が使用される例が少ない。以下は、初級レベル（1年生）の学習者の断り発話の会話例である。

(9)

H Bちゃん、授業のあと、まー、寿司を食べにいかない？

F4 きょー。すみません、Aちゃん。疲れたー。

H きみはいつも疲れている。どうしようかなー。

H <笑い>じゃ、また今度。

F4 はい。

(「謝罪」+「理由」)

例(9)では、学習者が「螺旋的」コミュニケーション様式を用いて、シンプルな発話で断っている。つまり、「謝罪」+「理由」の組み合わせで断り発話を済ませ、結論を相手に委ねる間接的コミュニケーション様式が使用されている。

(10)

H Bちゃん、一緒寿司を食べに行きませんか？

F5 すみません、Aさん。漢字の試験がありますから。

H あー、(勉強したいです)じゃ、頑張ってください。

F5 頑張ります。

(「謝罪」+「理由」)

(以下、Hは「依頼者」「勧誘者」で、Mは「知り合い」とする)

(11)

H じぎょうのあとーは、一緒すしー、寿司、寿司をた、食べに行きましようか?

M1 えーっと、授業のあとはー、ちょっとー、用事がありますから、すみません。
ごめんなさい。

(「理由」+「謝罪」+「謝罪」)

(12)

H Bちゃん、今日はー、お寿司を食べにいかがですか?

M5 あー、Aさん、妹の誕生日ですからー、すみませーん。

H おめでとうございます。残念ですね。(はい)また今度お願いします。

M5 はい。

(「理由」+「謝罪」)

例(10)と(11)も、日本語母語話者と同様に「謝罪」で展開され、「直接的断り」表現が使用されていない点で、中級レベルの学習者の例とは異なる。また、例(12)も(「理由」+「謝罪」)の組み合わせで、結論を述べるのが避けられている。1年生である学習者は、6ヶ月程度日本語を学習しており、「直接的断り」表現、いわゆる動詞の否定形や、可能表現の否定形を学習したものの、教科書に示されているような間接的コミュニケーション様式を用いる例が多かった。つまり、日本語レベルが低い学習者の方が「できない」「行けない」に当たる結論を相手に推察してもらう表現方法を多用している。また、「先生」に対する断りでも、初級レベルの学習者の方が、先に見てきた中級レベルの学習者より、適切な発話を用いる様子が見られる。以下で、会話例を提示する。

(13)

T あのう、授業のあとでー、みんなでー、お寿司を食べに行きますよ。一緒に行きませんか?

S1 えーっとー、授業のあとはー、すみません。え、母と約束がありますから。

T 分かりました。残念です。また今度ね。

(「謝罪」+「理由」)

(14)

T あのう、授業のあとで、みんなで一、お寿司を食べに行きますよ。一緒に行きませんか？

S2 すみませーん。友達と会いますからー。(はい)今度お願いします。

T 分かりました。じゃ、また今度ね。

(「謝罪」+「理由」+「関係維持」)

上記例(13)と例(14)では、学習者が母語話者と同様に、「螺旋的」コミュニケーション様式を用いて、間接的に断っていることが分かる。例(13)は、「謝罪」+「理由」で、例(14)は、「謝罪」+「理由」+「関係維持」表現の組み合わせで、相手に状況を説明し、気持ちを伝えながら、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法が用いられている。このような最後まで結論を言わない「螺旋的」コミュニケーション様式により、間接的断りが行われた。このような断り発話は、1年生の学習者データによく現れることが分かった。以下のような会話例も挙げられる。

(15)

T あのう、じゅぎゅうのあとで一、みんなで一、お寿司を食べに行きますから、一緒に行きませんか？

S5 えーと、すみません。約束があります。

T あ、はい。分かりました。じゃ、また今度ね。

(「謝罪」+「理由」)

(16)

T あのう、授業のあとで一、みんなで一、お寿司を食べに行きますから、一緒に行きませんか？

S7 すみません。約束がありますから。

T はい、分かりました。じゃ、また今度ね。

(「謝罪」+「理由」)

(17)

T あのう、授業のあとで、みんなで一、お寿司を食べに行きますから、一緒に行きませんか？

S10 すみません、先生。用事がありますから。

T はい、分かりました。また今度ね。

(「謝罪」+「理由」)

(18)

H えーっと、B くん。来週の金曜日は、私の誕生日です。アズハルパークで、私の誕生日のびのぱーとをします。ぜひ来てください。

F1 あー、／沈黙 2 秒／A さん、えー、すみません。私は一、／沈黙 2 秒／カイロ大学へ行きます。

H ダメですかー？

F1 え？

H ダメですか？

F1 ああ、残念ですね。

(「謝罪」+「理由」)

上記の例(15)から(18)では、間接的コミュニケーション様式が使用され、日本語教材で提示されるような(「謝罪」+「理由」)の組み合わせが多いことが分かる。例(15)と(17)では、日本語学習者も、母語であるアラビア語のように上の相手に対し呼称を用いる。呼称は、先行研究において、ポライトネス・ストラテジーの1つとして捉えられ、相手の上位に立てることにより、相手への敬意を表すと考えられている。以上の会話例から、初級レベルの学習者が教科書から強く影響を受けていることが明らかである。ただし、以下のような「直接的断り」表現が使用される例もあったが、比較的少なかった(15%)。

(19)

T あのう、授業のあとで、みんなで一、お寿司を食べに行きますよ。一緒に行きませんか？

S3 あー、すみません。時間があり一、ありません。

T はい、分かりました。じゃ、また今度ね。

(「謝罪」+「理由」)

(20)

T あのうね、授業のあとで、みんなで一、お寿司を食べに行きますから、一緒に行きませんか？

S11 すみません。今日は時間がありませんから一。

T はい、分かりました。また今度。

S11 はい。

(「謝罪」+「理由」)

6.6 インタビュー調査

ロールプレイ調査を行った日本語学習者のうち、当時1年生だった日本語学習者の中から5名の学習者を対象にインタビュー調査を行った。調査目的は、初級レベルの学習者がどのような学習ストラテジーで自分の会話能力を育成するのか、なぜロールプレイ調査と談話完成テストでは中級レベルの学習者より初級レベル学習者の方が母語話者に近い間接的断りを行うのか、筆者が主張するように、それは教科書の影響によるものなのかについて、検証し客観的な結論を導くためである。インタビュー調査の項目は以下のとおりである。

- ①クラス中では、会話の授業を担当する教師は、どのように指導していたのか。
- ②クラス以外では、会話能力を育成するには、何か特別な学習ストラテジーを用いたのか。

インタビューの結果、5名の学習者とも、1年生のとき会話の授業を指導してくれた日本語の先生に教科書の会話を丸暗記させられ、ロールプレイや、『みんなの日本語』教材の会話例を繰り返し反復練習するように勧められていたことが分かった。つまり、1年生の学習者が受けていたクラス中での会話練習は、ほぼ教科書に沿うもので、学習者が自分で

目標言語母語話者の友達を作るように努力し、できるだけクラス内で覚えた会話などの練習をするようにしていたと言う。このことから、早い段階で学習者の語用論的能力を育成するためには日本語教材が大きな役割を果たしていることが分かる。よって、日本語教材では、母語話者が用いるコミュニケーション様式と、ポライトネス・ストラテジー、発話行為ごとに適切とされる表現形式、相手との人間関係を考慮した会話例などが場面別に提示されることが必要である。そのような教材を使用することができれば、学習者の問題点を解決することができ、教科書の力を活用することが可能になると考えられる。例えば、日本語母語話者が用いるコミュニケーション様式に沿った断り発話を提示したり、日本語母語話者が好む配慮表現の原則に従い、会話を作成する練習したりするのも有効ではないだろうか。

以上、初級レベルの学習者が間接的断り発話を多用することを見てきたが、それらの断り発話を緩和する働きを持つ文末表現の習得は困難であると思われる。なぜなら、間接的断りとは言っても、「すみません、授業があります」より「すみません、授業があるので...。」の方が違和感なく聞こえる。また先生に対して日本語母語話者が用いる「共感」と「関係維持」、「代案提示」表現も人間関係を良好に保つものであるにも関わらず、初級レベルの学習者の発話にも、教科書にもあまり見られない。よって、「また今度ご一緒させてください」、「誘っていただいたのに」、「他の人に頼んでもらっていい」などのような表現も日本語教材で紹介されることが必要であろう。

6.7 日本語教材における断り発話の問題点

学習者は日本語レベルが高くなるにつれ、日本語母語話者と同様の発話ができるようになるという仮説を立てていたが、調査結果は仮説とは異なり、レベルが高い学習者の方が母語から強い影響を受けていることが明らかとなった。その理由は、初級レベルの日本語学習者は、教科書に沿って発話をしようとするが、学習者のレベルが高くなるにつれ言いたいことが発話できるようになり、母語干渉が現れやすくなるからであると考えられる。インタビュー調査結果からも得られたように、初級レベルの段階では、学習者が教科書に沿ったやりとり、つまり母語話者同士の場合と同じようなやりとりをするが、レベルが高

くなるにつれ、言いたいことを自分で工夫して発話できるようになるため、母語からの影響が現れるのであろう。これを裏付ける根拠として、金(2011)が挙げられる。金(2011)は、日本語教科書は、学習者にとって欠かせないものであり、その影響力は大変大きいと指摘している。そこで、日本語教材の中で「依頼」に対する「断り」の種類にはどのような談話が見られるのかについて教材分析を行った。以下は、分析対象とした教材である。

- 『Situational Functional Japanese』 Vol. 1.2.3 (以下 SFJ)
- 筑波ランゲージグループ著 凡人社発行
 - SFJ1 1991 年初版第1刷発行
 - SFJ2 1992 年初版第1刷発行 1997 年第 2 版第 3 刷発行
 - SFJ3 1993 年初版第 1 刷発行 1997 年第 2 版第 2 刷発行
- 『現代日本語 初級総合口座』(以下 初級総合) 水谷信子著 アルク
 - 1992年初版 1997 年第 3 刷発行
- 『現代日本語 中級総合講座』(以下 中級総合) 水谷信子著 アルク
 - 1998 年初版
- 『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』(以下 コース)
 - 名古屋大学総合言語センター日本語科著 名古屋大学出版
 - コースⅠ 1988 年初版第 1 刷発行 1996 年初版第 9 刷発行
 - コースⅡ 1988 年初版第 1 刷発行 1995 年初版第 5 刷発行
- 『コミュニケーションに強くなる日本語会話』(以下 コミュニ)
 - 目黒 真実・浜川 祐紀代・勝間 祐美子・栗原 毅
- 『新文化 初級Ⅰ・Ⅱ』(以下 新文化)
 - 文化外国語専門学校 日本語課程著・編 凡人社発行
 - 新文化Ⅰ 2000 年初版
 - 新文化Ⅱ 2000 年初版
- 『文化 中級Ⅰ』(以下 文化)
 - 1994 年初版 1999 年 6 刷発行
- 『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』(以下 みんな) スリーエーネットワーク編・出版
 - みんなⅠ 1998 年初版 第 1 刷発行 1999 年第 5 刷発行
 - みんなⅡ 1998 年初版 1999 年第 4 刷発行

上記の教材の分析結果を表 6-1 に示す。

表 6-1 金 (2011) による日本語教材の分析結果

—	直接的な 断り	間接的な断り									
		理由	疑問	謝り	ちよつ と	行為 要求	条件 提示	罪の 意識	一部の繰 り返し	延 期	言葉を 濁す
SFJ3	1	2	3	2	1		1				1
初級総 合	1	1									
中級総 合		1									
コース I		1			1						
コミュ ニ		3	1	5		2		2	1	1	3
新文化 II		2		1							
文化 I					1						
みんな I		1									
みんな II		2	1	1							
合計	2	13	5	9	3	2	1	2	1	1	4

表で示されているように、「直接的断り」に比べ、「間接的断り」談話が多く、その中でも「理由」が最も多用されていると金 (2011) は指摘している。日本語を勉強し始めた初級段階では、大きな影響を与えるという教科書にそのまま沿って断り発話をしようとする結果、間接的な断りストラテジーを多用し、「(理由)」と「(謝罪) + (理由)」の組み合わせ

せが最も多く現れると考えられる。つまり、初級段階では教科書に倣った「飛び石的」「螺旋的」コミュニケーション様式を用いる可能性が高いと言えよう。第3章で論じたように、日本語の断りでは、「間接的」コミュニケーション様式が多用されるが、その中では「理由」における「ちょっと...」、「金曜日はちょっと」のような発話だけでなく様々な意味公式も用いられることが分かった。また、第4章の「程度副詞」の調査結果で明らかになったように、日本語母語話者にとっては「副詞なし」の談話が最も納得の度合いが高いとされる。このことから、教材に提示される「間接的断り」発話が限られていることも明らかである。また、6.6節で述べたように、日本語母語話者が用いる間接的断り発話には「共感」と「関係維持」、「代案提示」表現も見られるが、日本語教材にはあまり見られない。例えば、以下は日本語教材で見られる断りの会話例である。

『みんなの日本語初級 I』

(同僚の電話会話)

A: 小沢征爾のコンサート、一緒にいかがですか。

B: いいですね。いつですか。

A: 来週の金曜日の晩です。

B: 金曜日ですか。金曜日はちょっと.....。

A: だめですか。

B: ええ、友達と約束がありますから、....。

A: そうですか。残念ですね。

B: ええ。また今度お願いします。

上記の会話から分かるように、日本語母語話者が用いる「謝罪」や「共感」の意味公式が提示されていないことに加え、「理由」説明文により自然だと感じられる「~のだ」が用いられていない。これらの形式を加えるだけで、「断り」会話の印象が大きく改善できると考える。また、『Situational Functional Japanese Vol. 3』では、「先生」と「先輩」に対して、丁寧に断る方法として、以下のように説明されている。

『SFJ Vol. 3 Drills』：「Refusing a request politely」

A: 先生/先輩

A: (翻訳のチェックを頼む。)

B: あのうそれ急ぎますか。

A: うん、土曜日までなんだけど。

B: 実は、[Giving a reason for refusing the request]

A: そう。じゃ、ちょっと無理かな。

B: ええ、すみません。お役に立てなくて。

以上から分かるように、ここでは丁寧に断るには「理由」を提示するという指示に限定されており、実際の日本語母語話者の断り発話には多く見られる「謝罪」の意味公式や、相手と良好な人間関係を築くために用いられる「共感」や「関係維持」、「代案提示」の重要性に関する説明が不足している。この会話の例として、『SFJ Vol 3 Notes』には、以下のような例が挙げられている。

『SFJ Vol. 3 Notes』：「how to refuse a request politely」

—研究室で—

A: Bさん、いる。

B: はい。

A: あ、よかった。いま、ちょっといいかな。

B: はい。何でしょうら。

A: 実は、いまうちの研究室で、

B: ええ。

A: センターの方からソフト頼まれてるんだけど。

B: ええ。

A: Bさん、BASIC分かるよね。

B: ええ、だいたい分かると思いますけど。

A: じゃ、すまないけど、ちょっと手伝ってもらえないかな。

B: あの、それ、急ぎますか。

A: うん。今週中にセンターの方に渡すことになってるから。

B: あの、実は、今週中に書かなくちゃならないレポートがあるんです。

A: そうか。じゃ、ちょっと無理だな。

B: ええ。来週なら時間があるんですけど。

A: じゃ、Cさんにでも頼んでみるかな。

B: すみません、お役にたてなくて。

A: いや、いいんだよ。じゃ、また。

B: どうもすみませんでした。

以上の会話では、依頼者に不利益をもたらした断り手ではなく、依頼者自身が「代案提示」を用いている（「じゃ、Cさんにでも頼んでみるかな。」）。また、「共感」が使用されず、「謝罪」も最後に提示されていることで、依頼者に不快感を与える可能性のある発話だと考えられる。また、以下は「理由」のみで断る例として挙げられる。

『SFJ Vol. 3 Notes』：「how to refuse a request politely」

—ろうかで—

A: お、Cさん。

C: あ、どうも。

A: レポート、もう終わった。

C: ええ、いま出してきたところなんですけど。

A: あ、ちょうどよかった。

C: あの、何か。

A: いや、あの、例のソフトなんだけどさ。

C: あ、あれ。たしか、今週中でしたね。

A: そうなんだよ。悪いんだけど、ちょっと手伝ってくれないかな。

C: 今からですか。

A: うん。

C: きのう、レポートで徹夜だったんですよ。

A: そこを何とか頼むよ。

C: ちょっと.....。

このように、日本語教材に見られる断り発話はあまり現実に即していないことが分かる。日本語母語話者が実際に用いる断りの談話構造を日本語教材に導入することが必要なのではないかと考える。

6.8 日本語学習者が用いる配慮表現の原理について

第4章における日本語とアラビア語の調査結果から、考えられる問題点として、学習者は日本人とのコミュニケーションで頻繁に直面する「誘い」「依頼」場面において、日本人が相手への配慮として派生した対人機能を持つ「ちょっと」と「少し」を使用する際、言葉が本来持つ意味で解釈してしまう恐れがあり、お互いに摩擦や誤解が起こるという点が挙げられる。そこで、学習者が断り発話の「理由」に当たる事情説明を行う際、日本語母語話者と同様の表現選択を行うのか、母語であるアラビア語母語話者のアラビア語の調査結果のように、程度性の高い副詞を好むのかについて、調査を行うことにした。カイロ大学日本語日本文学部の日本語学習者（4年生、3年生、2年生）各学年から12名ずつ（36名）を対象に、日本語母語話者に行った調査と同様に、「ちょっと」の副詞が含まれる談話を1つの選択肢として導入し、2014年11月に調査を行った。4年生の学習者12名のうち6名が一年間留学経験者である。調査内容は改めて、以下で提示する。

6.8.1 意識調査Ⅳ

被調査者に親しい友人を誘う場面と何か依頼する場面それぞれ2場面を設定した。親しい友人に断られたときには、4つの選択肢の中から最も納得しやすい回答を選んでもらい⁵⁵、そして納得する理由を書くよう指示した。選択肢は、配慮表現の原理を元にして、作成した。つまり、(寛大性の原則) 2の(b)の「自己の負担が小さいと述べよ」に当たる程度性の低い（「ちょっと」と「少し」）と、筆者が提案した「自己の負担が大きいと述べよ」の原則に当たる程度性の高い「とても」、そしてどちらでもない中立的な立場に当たる「副詞なし」を含む4つの談話を設定した。事前に被調査者に選択肢の中で納得できる回答がなければ、選択せずに納得できない理由を書くよう指示した。

⁵⁵ 調査内容は資料Ⅵを参照されたい。

6.8.2 調査対象者情報

表 6-2 調査協力者情報

学年	調査協力者	日本語学習歴
2nd Year	12名（女性11名、男性1名）	1年半
3rd Year	12名（女性12名）	2年半
4nd Year	12名（女性7名、男性5名）	3年半

6.8.3 意識調査Ⅳの結果と考察

意識調査Ⅳの結果を以下の図で示す。

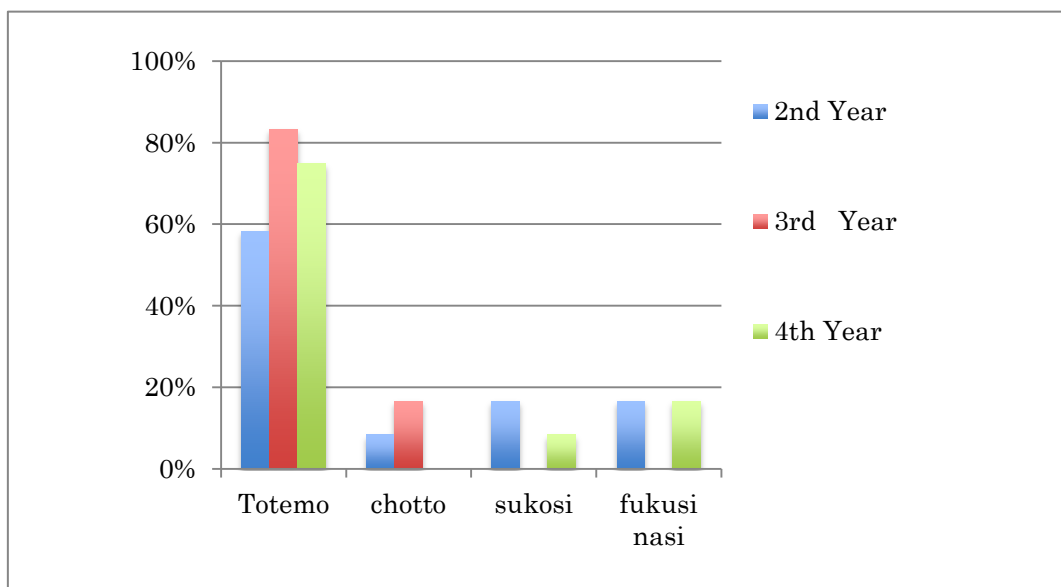


図 6-4 食事の誘い場面

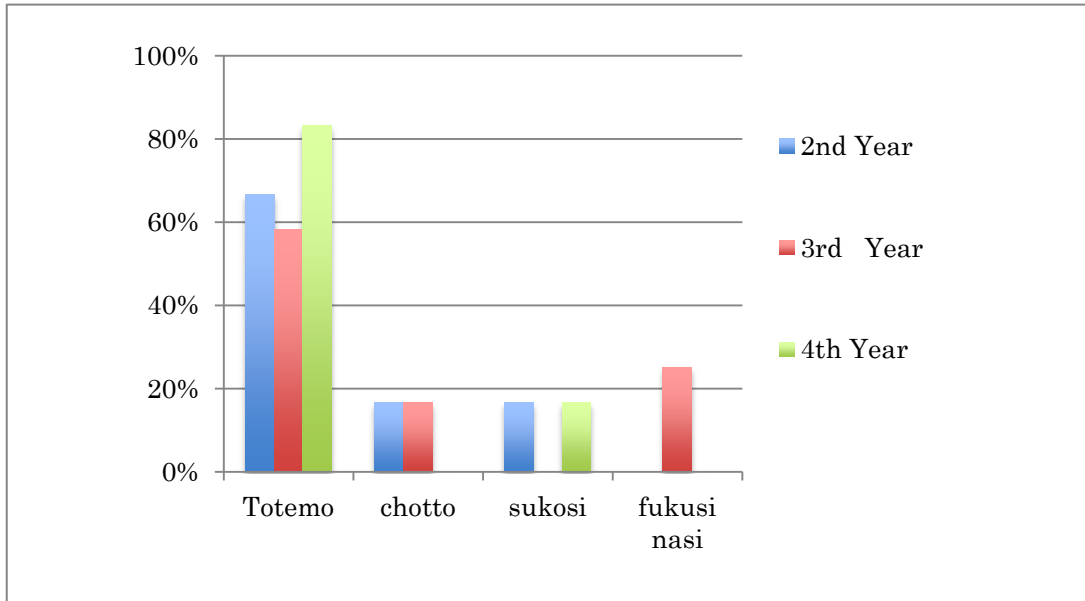


図 6-5 教材のコピー依頼

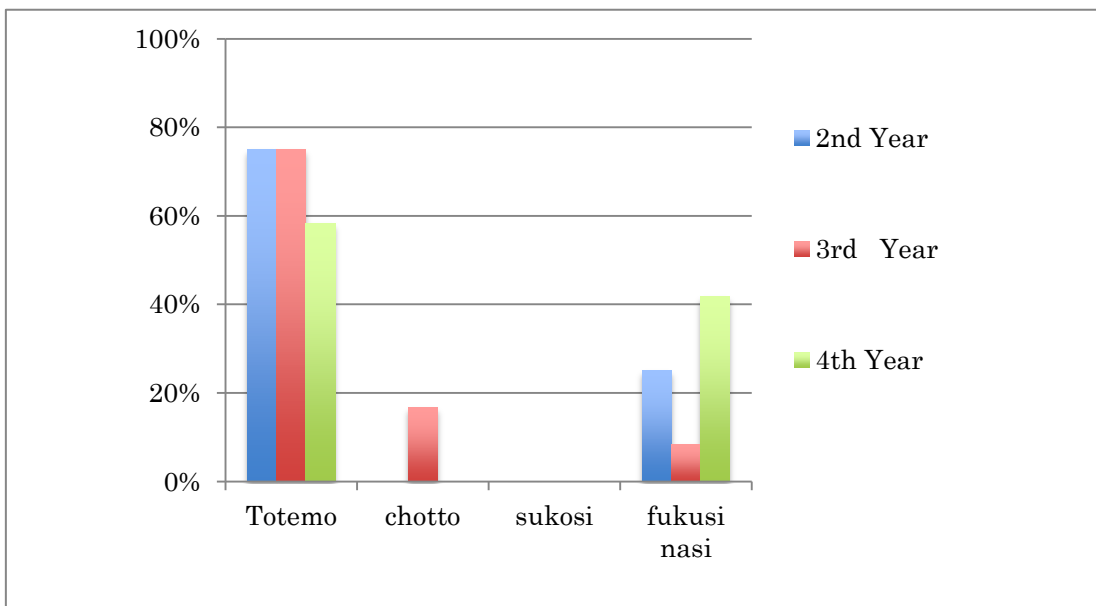


図 6-6 誕生パーティーの誘い

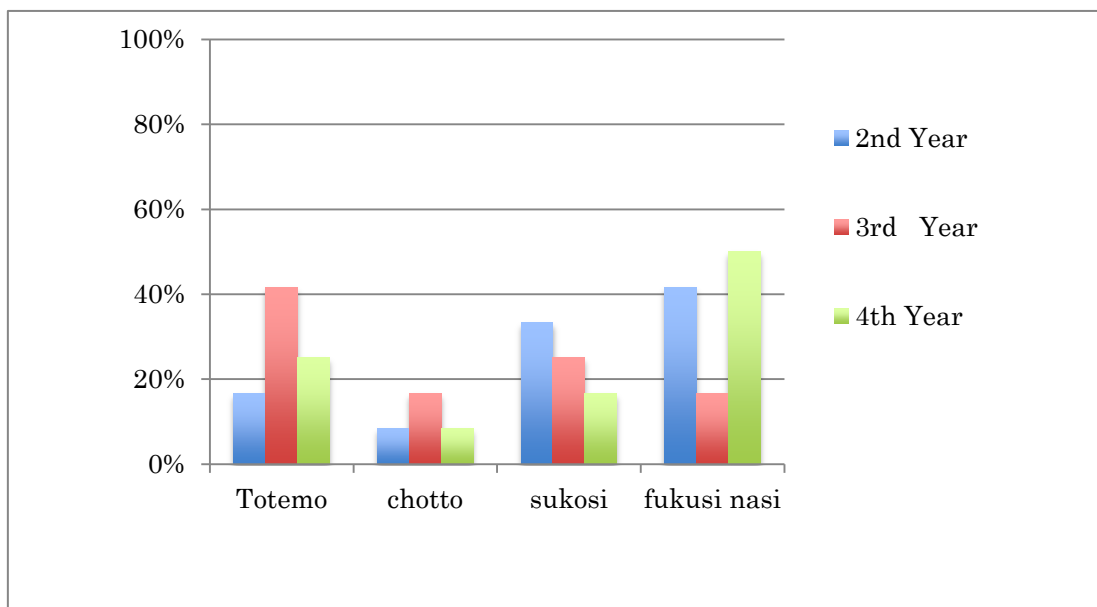


図 6-7 飲み物の購入依頼

図から分かるように、日本語学習者でも「飲み物の購入依頼」場面以外、全ての場面に共通して程度性の高い「とても」を最も納得しやすい応答として選択している。つまり、日本語学習者も目標言語における「断り」発話を正当化できるメカニズムとして、筆者が提案した「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮の原則が働いていると考えることができる。このことから、学習者が母語であるアラビア語から強い影響を受けていることが分かる。具体的に、配慮の原理「自己の負担が大きいと述べよ」に当たる「とても」の使用率が最も高く、ポライトと見なされていることも選択肢の理由から確認できた。また、学習者の日本語レベルの違いや、留学経験の有無を問わず、母語におけるポライトネスと配慮のメカニズムを目標言語に適応させていることが明らかになった。

また、程度性の低い「ちょっと」と「少し」の選択率は比較的少ない傾向にあり、本来の用法に加え、対人的機能も備えているという知識不足の可能性が考えられる。特に4年生の学習者は副詞「ちょっと」を使用しない傾向があった。先に述べた仮説のとおり、日本人が相手への配慮として派生した対人機能を持つ「ちょっと」と「少し」を使用すると、学習者は「ちょっと」や「少し」を言葉が本来持つ意味で解釈してしまう恐れがあり、お互いに摩擦や誤解が起こる可能性が高いと考えられる。

場面内容の違いに関しては、学習者も日本語母語話者とアラビア語母語話者と同様に、問4に異なる傾向が現れた。特に依頼Ⅱ「飲み物の購入」場面では、最も納得しやすい「と

でも」の使用率が下がる一方、納得の度合いが低いと判断された「少し」「ちょっと」「副詞なし」の3つの談話の使用率が増加する傾向が見られた。このことから、第4章で述べたように、依頼場面の場合、断られたら困るか困らないかが普遍的な要因となって、期待する配慮の度合いが異なると言って良いのではないかと考えられる。

学習者は「自己の負担が大きいと述べよ」の原則によって相手に配慮を示すことが可能だと考えていることが分かった。ここで、学習者の実際のロールプレイデータから程度性の高い「とても」が含まれる発話例、つまり「自己の負担が大きいと述べよ」の原則を満たした発話を以下で提示する。

(20)

T あのうね、その教材を、来週の水曜日の授業までに、20部をコピーしてください。

S9 あの、すみませんー。今とっても忙しいーですから。

T はい、分かりました。

(「謝罪」+「理由」)

(21)

T あのうね、その、その教材をあのう、来週の水曜日の授業までに、20部をコピーしてください。

S11 あの、すみません。今週はとっても忙しいです。

T はい、分かりました。

(「謝罪」+「理由」)

(22)

T あの、え、のみの、<笑い>飲み物を買ってきてください。お金を渡しますから。

S10 先生、すみません。私はー、ほんとーに、とっても遅い。

T <はい、分かりました>。

(「謝罪」+「理由」)

(23)

T あのう、授業のあとで、みんなで一、お寿司を食べに行きますから、一緒に行きませんか？

S9 すみません。今日は勉強がたくさんありますから一。

T あ、はい、分かりました。じゃ、また今度ね。

S9 はい。

(「謝罪」+「理由」)

(24) 1年生

T あのう、その教材を来週の水曜日の授業までに、20部をコピーしてください。

S7 すみませんが、宿題がたくさんあります。

T 宿題ですか。大変ですね。

S7 はい。

T 分かりました。

(「謝罪」+「理由」)

上記の会話例のように、学習者が最も配慮を示す必要のある相手「先生」に対して、「とても」、「たくさん」の副詞で事情を大きくし、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則を満たした発話を行う様子が見られた。また、「親しい友人」に対する断り会話でも、同様の傾向が現れた。

(25) 3年生

H Bくん(はい)らい、らい、来週の金曜日にアズハルパークで一、自分のたんじょう、たんじょうパーティー／沈黙 2 秒／をするので、あのう、出席しても一、よろしいですか？

F1 ん一、おめでとうございます。ま一(ありがとうございます)、行きたいけど、アズハルパークはとっても遠い、私のところから。<すみません>{<}。

H <残念ですね>{>}。

H 大丈夫です。また、また今度(はい)お願いします。

(「関係維持」+「共感」「理由」+「謝罪」)

このように、事情説明に当たる「理由」の意味公式で自分が大変な状況にあることを表明して、相手から断りの了解を得ようとする母語でのポライトネスと配慮のストラテジーを目標言語に適應させていることが分かる。これを、語用論的転移が生じていると考えている。

6.9 本章のまとめ

本章では、学習者のロールプレイデータに見られるコミュニケーション様式を考察した。その結果、レベルの高い学習者が母語に近いコミュニケーション様式を用いており、特に、「直線的」コミュニケーション様式と、「石畳的」コミュニケーション様式を多用することが明らかとなった。一方、初級レベルの日本語学習者には、ほぼ日本語教材『みんなの日本語』と同様に「螺旋的」「飛び石的」コミュニケーション様式を用いる発話が多く観察された。そして、初級レベルの学習者が教材に頼る度合いが比較的高いことがインタビュー調査結果から証明することができた。従って、日本語教育では、教材の影響力を活用し、学習者に語用論的能力を育成するための情報を提示することが重要であり、日本語母語話者が用いるコミュニケーション様式に沿った会話例を導入する必要がある。言い換えると、初級レベルの学習者が日本語母語話者と同様に「螺旋的」コミュニケーション様式を用いるからと言って、必ずしも同じように断り発話を軽減する働きを持つ文末表現や前置き表現の使用が適切なわけではないため、表現形式を提示するのみでなく、その仕組みについても紹介していくことが重要だろう。

本章では、特にロールプレイデータに着目して、学習者による断りの会話例に見られるコミュニケーション様式を探ってきたが、ターンの交替の中で断り手は相手の反応に従い、異なるコミュニケーション様式を重ねて断ることもあるということが分かった。また、アラビア語を母語とする日本語の先生役を演じたカイロ大学日本語学科の教員も、母語から影響を受け、「石畳的」コミュニケーション様式を求めている可能性も考えられる。つまり、日本語教師だからと言って、学習者のように母語から負の転移が生じないわけではなく、言語の背後にある文化的差異によって、非母語話者の日本語教師は母語から影響を受ける可能性が高いと言える。

また、本章で行った意識調査Ⅳの結果から、日本語学習者もアラビア語母語話者と同様に、自分の事情を説明する際、「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮表現の原理が相手

への配慮を示すのに最も有効だと考えていることが明らかとなった。発話行為の中でも特に、「断り」発話は相手の意に添えないことで、人間関係を損なう恐れが比較的高いため、配慮表現の使用が不可欠であり、学習者が相手との人間関係を上手く保つためのストラテジーを用いる必要がある。しかし、目標言語と異なる文化背景を持つ学習者による語用論的転移や、不適切な「断り」表現の使用により、母語話者とのコミュニケーションでは誤解や摩擦が生じる可能性が高い。これに対処するためには、早い段階で学習者の問題点を探り、効果的な指導法を検討する必要がある。また、学習者のレベルが高くなるにつれ、目標言語母語話者から厳しく評価されることは、学習者自身も知っておくべきだろう。そして先行研究でもしばしば指摘されるように、初級レベルの学習者より、中上級レベルの学習者の問題点を探り、解決することが重要だと考えられる。

第7章 本論文のまとめと今後の課題

7.1 本論文のまとめ

本研究では、日本語とアラビア語の断り発話に焦点を当て、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式と、ポライトネスと配慮表現の観点から両言語を比較分析した。その結果、日本語の断り発話では、「高コンテキスト言語」の特徴が多く見られるが、アラビア語の断りでは「低コンテキスト言語」の特徴が見られることが明らかとなった。言い換えると、コンテキストが完成されるメカニズムが異なり、低コンテキスト言語では、話し手が提供する情報でコンテキストが完成されるのに対して、高コンテキスト言語では、話し手が提供する情報に加え、聞き手がその情報が含意されている内容（言語外の意味）を読み取ることにより、コンテキストが完成される。従って、本調査の結果では、両言語母語話者が納得する表現形式や、納得できるメカニズムが異なることが明らかとなった。

日本語の断りでは、聞き手の能力が求められる表現方法、いわゆる「螺旋的」コミュニケーション様式、「飛び石的」コミュニケーション様式が好まれるのに対して、アラビア語では、話し手の能力、説得力が求められる表現方法が好まれるため、言葉を端折らないで、むしろ言葉を尽くして論理的に状況を説明する「石畳的」コミュニケーション様式と、「直線的」コミュニケーション様式が多用されることが分かった。よって、このようなコミュニケーション様式に対する嗜好性が要因となって、両言語母語話者が他者に断られたとき、納得する表現形式や、納得できる配慮表現のメカニズムが異なるという示唆が得られた。

アラビア語では、程度性の高い表現形式によって、「自己の負担が大きいと述べよ」の配慮の原則に従い、自分の断りを正当化することができ、ポライトネス効果がより発揮されるため、相手への配慮を示すのに最も有効となる。一方、日本語ではシンプルな発話の方がより説得力が高く、納得しやすいため「飛び石的」スタイルのように、必要最低限の言葉で発話を済ませ、相手に結論を委ねる表現方法が用いられる。つまり日本語は、断り手が自分の事情をどの程度話すかに関わる伝達内容において、「自己開示」の度合いが低い傾向となる。日本語母語話者は、事情がどの程度で重要なのかという情報が必要とせず、むしろ相手との人間関係を重視する。従って、「とても」を用いるとかえって、依頼者に不快な思いをさせ、言い訳だと捉えられてしまうことになる。それに対して、アラビア語

では、断りの「理由」における話者の事情がどの程度重要なのかに関する情報が重要視され、その情報を通して相手との人間関係を維持しようとする。言い換えると、アラビア語では、「理由説明」のストラテジーは誤解回避の目的で使用される PPS に当たる。従って、断り発話の中では、程度に関わる表現形式（程度性の高い「gdan」、義務性を表す助動詞「lazem」）が多用される。これらのことから、両言語における対人配慮が発生するメカニズムには差異があることが検証された。

ポライトネスと配慮表現の原理の観点から述べると、日本語では、Lakoff(1973)の「ポライトに述べよ」、Grice(1975)の会話の強調の公理の中の「量の公理」と「短くまとめよ」、B&L(1987)のほのめかしのストラテジー、山岡・牧原・小野(2010)の寛大性の原則(b)「自己の負担が小さいと述べよ」などの原則を用いることにより、ポライトネス効果がより発揮され、相手への配慮を示すことができる。これに対して、アラビア語では、正確かつ論理的に考え、相手の推察力に頼らずに言葉で人間関係を維持しようとするため、Lakoff(1973)の「明確に述べよ」、Grice(1975)の会話の強調の公理の中の「様態の公理」、B&L(1987)の明示的ストラテジー、筆者が新たに提案した配慮の原理「自己の負担が大きいと述べよ」などの原則で、ポライトネス効果がより発揮されることで相手への配慮を示すことが可能になる。このことから、アラビア語は「他者への働きかけを重んじる」のに対して、日本語では「気配りや他者との人間関係を重んじる」であるという文化の大きな違いが存在することが分かる。

このように、個別言語の中ではコミュニケーション様式の差異が、その言語や文化で好まれるポライトネスと配慮表現の原則に大きな影響を与えることが明らかとなった。従って、発話行為ごとに個別言語で見られるポライトネスと配慮表現の原理を探るときには、まずその言語の背後にある文化的背景を探ることが重要だと考えられる。そうすることにより、異なる体系を持つ2つの言語にはどのような異なりがあるかのみではなく、なぜこのように異なるのかも明らかにすることができる。

本研究では、コミュニケーション様式について考察した上で、両言語では納得の度合いが高いとされる配慮表現形式の調査を行った。そして特に断り発話における程度副詞の用法に着目し、語用論やポライトネスの観点から考察を行った結果、アラビア語では相手の要求を断る摩擦を緩和する手段の1つとして、程度性の高い副詞的役割を果たす形容詞を使用し、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則が有効に働くことが示唆された。このことから、アラビア語の程度性の高い副詞の働きを持つ形容詞「gdan」「ktyr」は程度を限

定・修飾するという本来の用法から派生して、配慮表現として機能することが明らかとなった。一方、日本語では短く、シンプルな断り発話の方が好まれるため、エジプト人が用いるストラテジーは、日本人にとってはかえって、言い訳に聞こえたり、不快感を与えてしまうと推測できる。また、アラビア語の断りにおいては、程度性の高い副詞的役割を持つ形容詞が使用されることにより、ポライトネス効果がより発揮される。そして、程度性の低い「shwya」（少し）は日本語の「ちょっと」のように、本来持つ機能に加え、断ることによる FTA を軽減する二次的用法を備えていないことが分かった。また、アラビア語では断りの理由である話者の事情説明で摩擦や誤解が生じる可能性が高いため、話者が説得力、説明力などを持っていることが重要であり、聴者に誤解されないよう、事情を説明する責任が大きいことが分かった。伊藤（2005）は、「理由」の意味公式について次のように述べている。「相手にそれ以上立入れられたくない気持ちが表れている意味内容なので、どちらかと言えば「ネガティブ・ポライトネス」である。しかし、本研究の結果から、エジプト人が「理由説明」のストラテジーを好むのは、誤解回避のストラテジーの1つであり、話者は聴者に誤解されたくない、自分が悪く思われたくない、他者に好かれたいなどの様なポジティブ・フェイスに働きかける PPS に当たるものだと考えられる。

また、配慮の度合いが高い表現選択の判断要因の結果から、言語は非常に複雑なメカニズムの中で働き、様々な要因が表現選択に影響を与えることが明らかとなった。特に日本語では、アラビア語と異なり、場面内容の違いや被調査者が感じる断りにくさの違いに加えて、表現形式の多様性によって解釈の幅が広がるため、選択肢自体の解釈も納得の度合いに影響を与えることが分かった。そのため、「少し」が「ちょっと」のように様々な解釈ができる表現形式の場合、使用率が上がり、様々な解釈できない場合は使用率が下がる。また両言語の類似点として、依頼場面の内容の違いが選択肢の結果に影響を与えていることが挙げられる。両言語に通じる普遍的な要因とも言え、4.8節の図4-20で示したように、依頼者が断られたら困るか困らないかが選択肢の判断要因となって、相手に期待する配慮の度合いが異なる。しかし、判断要因のうち「断りにくさ」の調査結果から、日本語母語話者は断りにくいと感じるときには、納得の度合いが高い「副詞なし」の選択肢を用いるのを好むのに対し、断りやすいと感じるときには、納得の度合いが低い表現でも相手から納得が得られると考えることが明らかになった。一方、アラビア語では、依頼Ⅱを除き、断りやすいときでも、断りにくいときでも、納得の度合いが高い表現「gdan」で断られる方が丁寧であることが示唆された。

本研究では、両言語母語話者の「断り」を談話レベルの観点から分析した上で、アラビア語を母語とする日本語学習者の「断り」発話を分析した。その結果、日本語レベルが高いとされる学習者が母語から強い影響を受け、日本語の「断り」の中に母語の特徴が現れることが分かった。いわゆる、語用論的転移が生じていると言える。具体的には、大学1年生の学習者は、「謝罪」+「理由」の組み合わせであるシンプルな断り発話を用いることが多く、現地で使用されている日本語教材のように具体的な「理由」内容のもほとんど発話されないことが分かった。しかし、学習者の日本語レベルが上達し、話す能力が上がるにつれ、母語のポライトネスと配慮表現の原理を目標言語に適応させている様子が見られた。具体的には、大学4年生と3年生の学習者が、多くの場合「直線的」コミュニケーション様式と「石畳的」コミュニケーション様式を用いていた。しかし、先に述べたように1年生の学習者は、「螺旋的」コミュニケーション様式と「飛び石的」コミュニケーション様式を用いることが多かった。このことから、初級学習者に対する日本語教材の影響力が非常に強いことが分かる。従って、その影響力を活用するためにも、目標言語母語話者の実際のコミュニケーション様式を学習段階の早いうちから学習者に提示することが重要であろう。

また、納得の度合いに関わる意識調査IVで見たきたように、学習者も自分の母語のように、相手への配慮を示すのに、「自己の負担が大きいと述べよ」の原則が最も効果的であると考えることも確認できた。このように、文法論、音韻論、統語論より、語用論における対人的コミュニケーションに関わるポライトネスと配慮表現の習得はより困難であり、レベルの高い日本語学習者の語用論的誤用を探り、解決することが重要であろう。

7.2 今後の課題

これまでに多くの先行研究（目黒 1994、朴 2012、金 2011）において、日本語学習者は「間接的断り」発話の理解度が低く、学習者に有効な指導法を提示することが重要だと指摘されてきた。例えば、目黒（1994）は、「日本語学習者が日本人なら当然断りと分かるような間接的断りが理解できず、その結果誤解を生ずる可能性がある」と述べ、そのために間接的断りの理解の指導が必要であることを指摘している。しかし、「間接的断り」発話とは言っても、必ずしも日本語教材に提示されるように、「謝罪」+「理由」または、「理由」の談話のみが適切な間接的断りなのではなく、日本語母語話者は「代案提示」、「共感」、「関係維持」などの意味公式も使用しており、それらも「間接的断り」談話の要

素として分類される。従って、学習者にとって、「今日はちょっと」のような「間接的断り」発話と、「今日はちょっと... また今度一緒に行こうね」のような間接的断り発話の理解度は同様でないと考えられる。つまり、「代案提示」、「共感」、「関係維持」の意味公式を付加することにより、「間接的断り」発話に対する理解が進むとも考えられる。よって、日本語学習者にとって「間接的断り」の習得が難しいとは一概には言えない。よって、学習者にとってどのような組み合わせが習得しにくいかをより具体的に検証することが重要だと思われる。従って、日本語母語話者が用いる「間接的断り」発話を学習者に提示し、「代案提示」、「共感」、「関係維持」が付加されることで、どのように「間接的断り」発話の理解度が変化するかを検討することを今後の課題の一つとしたい。

本研究では、アラビア語と日本語及びアラビア語を母語とする日本語学習者の「断り手」と「断られる側」の双方の特徴を探ることにより、従来の先行研究とは異なる結果を生み出すことができた。断り手と断られる側の間に生じる解釈のずれは非常に興味深く、本研究でも被調査者に行ったフォローアップインタビュー調査や、表現選択の理由も収集することによって、以下のように解釈のずれが生じている場合もあることが分かった。

日本語母語話者には、断られた時に相手から「どの程度忙しいかは分からなくていいんだけど、本当はなぜ勉強しなければいけないのか」、「断られるにはどんな用事があるのか」、「何で忙しいかなど気になるので本当に知りたくなる」という回答があった。筆者も調査を行う以前に、日本語母語話者は断るときに具体的に理由を述べないのだが、実際に依頼者や勧誘者(断られる側)は理由を具体的に知りたいのか否か疑問を持っていた。しかし、上述のように、断られる側も理由を気になるという意見があることから、日本語母語話者同士でも「断り手」と「断られる側」の間に解釈のずれが生じているのではないかと予想できる。また談話完成テストでも、断り手は具体的でない理由で相手の要求を断ることが多かったにも関わらず、断られる側はなぜこのように断れるかを具体的に知りたいと思う被調査者が多かった。そのため、筆者は筑波大学大学院生の日本人にインタビューを行った。インタビューでは、友人を誘ったときに、または何か依頼したときに、「用事があるので」「忙しいので」と言われたら、相手が「なぜ忙しいのかを知りたいと思いますか」と訪ねた。その返事は、「断れる際に具体的になぜ断るのかを知りたくなる」というものだった。また、「そこで、具体的説明を求めますでしょうか」と質問すると、そこで、「理由を具体的に聞くと、相手のプライバシーを侵害してしまうため、我慢して聞かないのは、日本人の気持ちだと思う」、また「相手から押し付けがましいと思われぬように聞かぬ

い」と答え、「しかし、本当は自分の中でせっかく誘ったのにとあって、理由を教えてください、優しいかな」とのことだった。このように、日本語母語者は遠慮して相手を察するパターンを好むことが分かる。一方、アラビア語母語話者は調査結果から分かるように、断り手は断りやすい場面でも、程度性の高い表現を用いて「自己の負担が大きいと述べよ」の原則に従う。断れる側もこのように言われた方が納得の度合いが高く、相手に配慮されていると感じる。つまり、断り手と断られる側の間にずれがないことが分かる。それは、「低コンテキスト言語」と「高コンテキスト言語」の特徴で説明ができると思われる。つまり、「高コンテキスト言語」では、話し手より聞き手の能力が求められるため、断り手が一生懸命自分の事情を説明しなくても、相手から理解が得られる仕組みになっているが、「低コンテキスト言語」では、話し手が事情を説明し、誤解されないことは自分の責任だと感じるため、積極的に言葉を尽くして、相手の理解と同調を求める表現方法を用いる。従って、断り手と断られる側の間生じる解釈のずれについて、客観化をはかり、意識調査を行うことも今後の課題としたい。さらに、日本語学習者の母語におけるポライトネスと配慮表現のメカニズムが、目標言語と大きく異なるため、日本語母語話者とのやり取りでは、誤解や摩擦が起こる可能性が高いと考えられるため、学習者の断り発話に対する母語話者の評価を問う調査も考えたい。

また、日本語とアラビア語の断りに関する先行研究は筆者が行ったもの以外、管見の限りないため、本研究では大量のデータを収集し、結論を強化するため談話完成テスト調査を行った。しかし、今後の課題としては、実際に両言語母語話者の自然談話を集め、実証性を高めていきたい。

第4章の意識調査では、アラビア語の断りに関して「shwya」（少し）は、日本語の「ちょっと」のように派生した機能を持たないため、日本語母語話者を対象に行った調査では「ちょっと」の選択肢を導入しなかったが、今後の調査では「ちょっと」も副詞の選択肢の1つとして取り入れ、追加調査も考えたい。

本研究では、異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の観点から、断り発話を分析したことにより、新たな分類方法を提案し、断り発話の研究に新たな視点を加えることができた。しかし、これがどのように日本語学習者の日本語教育に活用し、学習者の問題点を減らすのかについて検討することも重要である。

本研究では、アラビア語を母語とする日本語学習者のコミュニケーション様式を探ることにより、レベルの高い学習者に語用論的転移が生じていることがうかがえた。しかし、

学習者の問題点は、母語からの影響に加え、日本語教材に提示されている断り発話は限定的であり、実際の日本語母語話者の発話に見られる談話とも一致していないという問題もあることが分かった。つまり、学習者の問題点として、母語干渉に加え、教材による知識不足の問題が挙げられる。

本研究の成果は、日本語教育に有益な示唆をもたらすものであると考えられるが、教育的実証までには至っていない。今後は、本研究の成果をどのように日本語教育の現場に活かしていくことができるか、どのように有効的な指導法につなげていけるかを考えていくことを課題とし、本研究を礎として日本語教育に携わっていきたい。

謝辞

終りになりましたが、ここで、本博士論文を執筆するに当たってお世話になった方々、ご支援いただいた方々に、心より感謝申し上げます。

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり多くのご支援とご指導、そして常に身をもって学問のきびしさもよろこびも教えてくださった、筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻主指導教授小野正樹先生には、心よりの感謝と共に、一層のご壮健とご健筆をお祈り申し上げます。小野正樹先生には学問上のみならず、人生のあらゆる面で、大変お世話になったことで、日本で過ごした6年間でとても豊かなものになりました。

また、副指導教員として多くのご助言ご指摘をいただいた筑波大学人文社会科学研究所文芸・言語専攻教授池田潤先生、人文社会科学研究所国際日本研究専攻准教授関崎博紀先生、同系准教授ブシュネル・ケード先生にも深く感謝いたします。

そして、研究に対してご支援やご指摘をいただいた創価大学の山岡政紀先生にも心から感謝申し上げます。

本研究の遂行にあたり、日頃からご指導、ご指摘をいただいた小野研究室の皆様、多忙のなかを調査協力の依頼に快く応じてくださった方々、原稿のネイティブチェックをしてくださった赤羽優子さん、君村千尋さん、山下悠貴乃さん、常にご協力、ご支援くださった、先輩の李国玲さん、同研究室の小野塚若菜さんに心から感謝申し上げます。

そして、亡き父、また、これまで自分の思う道を歩むことに対して温かく見守り、常に励まし続けてくれた母に心から感謝します。私の愛する国エジプトに、また、奨学金を賜った日本政府にも心から感謝いたします。

最後に、勤務校であるカイロ大学文学部と、所属する日本語日本文学科にも感謝の言葉を述べさせていただきます。

リナ アリ

筑波大学キャンパスにて

2015年12月3日

参考文献

- 東照二(1995)『丁寧な英語・失礼な英語—英語のポライトネス・ストラテジー—』 研究社
- 荒巻朋子 (1999)「アメリカと日本人の断り表現の比較」『長崎大学留学生センター紀要』
7: 105-137.
- 生駒知子・志村明彦 (1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』 79: 41-52.
- 石井敬子・北山忍 (2004)「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係—文化的視点による実証研究のレビュー—」『社会心理学研究』 19: 241-254.
- 井出祥子 (1986)『日本人とアメリカ人の言語行動』 南雲堂
- 井出祥子 (2006)『わきまへの語用論』 大修館書店
- 伊藤恵美子 (2002)「マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴—断り表現における普遍性と特殊性—」『ことばの科学』 15: 179-197.
- 伊藤恵美子 (2005)「マレー文化圏における断り表現の比較—ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して—」『国際開発研究フォーラム』 29: 15-27.
- 伊藤恵美子 (2006)「日本人は断り表現において丁寧さをどう表現しているか—長さや適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』 18: 145-160.
- 宇佐美まゆみ (1999)「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』 ひつじ書房 241-268.
- 宇佐美まゆみ (2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』 54 (3): 117-132.
- 宇佐美まゆみ (2007)「改訂版—基本的な文字化の原則 2007年3月31日改訂版—」 1-20.
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>
- 岡田英夫 (2006)『日本語教育能力検定試験に合格するための基礎知識 50』 アルク
- 岡田安代・杉本和子 (2001)「外国人の断り行動と日本人の評価」『愛知教育大学研究報告 (教育科学編)』 50: 153-160.
- 岡本佐智子・斎藤シゲミ (2004)「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北海道文教大学論集』 5: 65-74.
- 岡本真一郎 (2007)『ことばのコミュニケーション—対人関係のレトリック—』 ナカニシヤ出版

- 柏崎秀子 (1995)「談話レベルで捉える丁寧さ—談話展開が丁寧度評定に与える影響—」『日本文化研究所紀要』1: 61-75.
- カノックワン ラオハブラナキット (1995)「日本語における『断り』—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』87: 25-39.
- カノックワン ラオハブラナキット (1997)「日本語学習者に見られる「断り」表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7: 97-112.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1993)「依頼表現方略の分析と記述—待遇表現への応用に向けて—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5: 52-69.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1999)『敬語表現』大修館書店
- 川端元子 (2012)「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』47: 115-124.
- 金楨憲 (2011)「「断り表現」における「察し」—韓国語母語話者を中心に—」『日本近代学研究』32: 7-27.
- 黒滝真理子 (2005)『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対象研究—』くろしお出版
- 近藤佐智子 (2009)「中間言語語用論と英語教育」『上智短期大学紀要』29: 73-89.
- 近藤安月子・小森和子 (2012)『日本語教育辞典』研究社
- 権英秀 (2007)「「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現—大学生と高校生を対象に—」『現代社会文化研究』40: 343-357.
- 権英秀 (2008)「「断り」表現の分析方法—フェイス複合現象の紹介—」『現代社会文化研究』43: 225-242.
- 佐藤慎司・熊谷由理 (編) (2013)『異文化コミュニケーション能力を問う—超文化コミュニケーション能力をめざして—』ココ出版
- 施信余 (2005)「依頼に対する「断る」の言語行動について—日本人と台湾人の大学生の比較—」『早稲田大学日本語教育研究』6: 45-61.
- 施信余 (2006)「日本語における「依頼・断り」のコミュニケーションについて—日本人女子大学生同士の電話会話を分析対象に—」『早稲田大学日本語教育研究』8: 51-62.
- 清水崇文 (2009)『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』スリーエーネットワーク
- 清水勇吉・石田基広・岸江信介 (2011)「依頼に対する断り表現について」『徳島大学総合

- 科学部言語文化研究』19: 147-162.
- 清水勇吉・趙塔娜・ブロイヤール ビクトリア (2011)「誘いに対する断り表現について」『徳島大学国語国文学』24: 76-56.
- 白川博之 (2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 高木美嘉 (2003a)「依頼に対する「受諾」と「断り」の方法」『早稲田大学日本語教育研究』2: 137-149.
- 高木美嘉 (2003b)「会話における被依頼者の「調整」の方法」『国語学研究と資料』26: 24-36.
- 谷口龍子・榮谷温子 (2011)「アラビア語のエジプト方言における詫びおよび感謝表現の語用論的機能」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』19: 29-38.
- 谷口一美 (2006)『学びのエクササイズ認知言語学』ひつじ書房
- 田和真紀子 (2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』61: 25-36.
- 元智恩 (1999)「日韓の「中途終了文」の丁寧さについて—断る場面を中心に—」『筑波応用言語学研究』6: 133-144.
- 元智恩 (2002)「日本語と韓国語の断り表現の構造—指導教官の依頼を断る場面を中心に—」『言語学論業』21: 21-37.
- ジェハード アル オマリ・森和義(2008)『アラブの文化とビジネス成功の極意』スピークマン書店
- 玉地瑞穂 (2008)「応用認知言語学の観点から見たモダリティの意味変化の類型論的研究」『高松大学紀要』49:59-77.
- 津田早苗 (1999)『談話分析と文化比較』リーベル出版
- 角田太作 (2009)『世界の言語と日本語 改訂版—言語類型からみた日本語—』くろしお出版
- 新妻仁一 (2009)『アラビア語文法ハンドブック』白水社
- 西田ひろ子 (2000)『異文化間コミュニケーション—人間の行動原理に基づいた—』創元社
- 西田司・グディカンスト、W. B. (2002)『異文化間コミュニケーション入門』丸善
- 西村史子 (2005)「勧誘談話における断りの日英対照分析—言い訳に注目して—」『社会言語学会第16回大会発表論文集』16-19.
- 西村史子 (2007)「断りに用いられる言い訳の日英対象分析」『世界の日本語教育』17: 93-112.
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 仁田義雄・益岡隆志 (1989) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版
- 野田尚史・高山善行・小林隆 (2014) 『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』 くろしお出版
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店
- 野村美穂子 (1992) 「断りの表現—コミュニケーションと合意—」 『言語学論叢』 10-11: 15-28.
- 早川知江 (2012) 「日本語のモダリティ: 「主観的」表現と「客観的」表現」 『名古屋芸術大学研究紀要』 33: 285-301.
- 藤野郁子・渡辺富美雄 (1998) 「「よね」のコミュニケーション機能」 『東京家政学院大学紀要』 38: 71-81.
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断り』行為の場合—」 『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 1: 1-19.
- 福田伸枝 (2011) 「談話における副詞「けっこう」の機能について—配慮表現としての機能を中心に—」 『日本語コミュニケーション研究会論集』 2: 61-70.
- 堀田智子・堀江薫 (2012) 「日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの考察—中間言語語用論分析を通じて—」 『語用論研究』 14: 1-19.
- 本田孝一 (1993) 『アラビア語の入門』 白水社
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 くろしお出版
- 牧原功 (2005) 「談話における『ちょっと』の機能」 『群馬大学留学生センター論集』 5: 1-11.
- 牧原功 (2012) 「日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー」 『群馬大学国際教育・研究センター論集』 11: 1-14.
- 南不二男 (1977) 『敬語』 岩波書店
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』 くろしお出版
- 三宅和子 (1994) 「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」 『筑波大学留学

- 生センター日本語教育論集』9: 29-39.
- 三宅和宏 (1999) 「モダリティとポライトネス」『月刊 言語』28 (6): 64-69.
- 村井卷子 (1998) 「断り行為の日独比較：お詫び表現、共感表現を中心に」『筑波大学地域研究』16: 199-226.
- 村井卷子 (2009) 「断り」行為において好感と不快感を決定する要因は何か—『スピーチ・レベル』と『方略』の二つの方策から—『筑波大学地域研究』30: 17-29.
- 目黒秋子 (1994) 「謙遜型」断りのストラテジー『東北大学文学部日本語学科論集』4: 99-110.
- 目黒秋子 (1996) 「日本語の談話における間接的断り理解の過程—母語話者の認知の視点から—」『東北大学文学部日本語学科論集』6: 105-116.
- 蒙韞 (2010) 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察—日本人会社員と中国人会社員の比較を通して—」『異文化コミュニケーション研究』22: 1-28.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店
- 八島智子・久保田真弓 (2012) 『異文化コミュニケーション論—グローバル・マインドとローカル・アフェクト—』松柏社
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子 (2009) 『異文化トレーニングポータレス社会を生きる』三修社
- 八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 (2001) 『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社
- 山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ—中級から上級への日本語会話—』東京：アルク
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀 (2004) 「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』創価大学日本語日文学会 14:17-39.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』明治書院
- 山川史 (2011) 「学習者のヘッジ使用—OPIにおけるレベル別会話分析—」『日本語教育研究』57: 124-142.
- 山田恵美子 (2009) 「断るといふ行為の認識の仕方が断り表現の選択に与える影響」『NEAR conference proceedings working papers』9: 1-13.

- 山田和代 (1997) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因—中国人および台湾人留学生を対象にして—」 『日本語教育』 93: 38-48.
- 山田小枝 (1990) 『モダリティ』 同学社
- 横山杉子 (1993) 「日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較—社会言語学のレベルのフォーリナートーク—」 『日本語教育』 81: 141-151.
- リナ アリ (2013a) 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—ポライトネスと意味公式ストラテジーの観点から—」 筑波大学人文社会科学国際地域研究専攻修士論文
- リナ アリ (2013b) 「日本語とカイロ方言のアラビア語の断り談話の対照研究—意味公式のストラテジーの観点から—」 日本語教育学会秋大会 口頭³⁶ 【予稿集】
- リナ アリ (2015a) 「断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—」 日本語用論学会 第 17 回『大会発表論文集』 (Proceedings) 10: 1-8.
- リナ アリ (2015b) 「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」 『カイロ大学日本語日本文学科紀要』 96-112.
- Al-Eryani, Ab. A. (2007) Refusal Strategies by Yemeni EFL Learners. *The Asian EFL Journal* 9 (2): 19-34.
- Al-Issa, A. (1998) Sociopragmatic transfer in the performance of refusals by Jordanian EFL learners: *Evidence and motivating factors*. Unpublished Doctoral Dissertation. Indiana University of Pennsylvania, Indiana, PA.
- Almany, A., and Alwan, A. (1982) *Communicating with Arabs*. Prospect Heights, IL: Waveland Press.
- Beebe, Leslie M., T. Takahashi (1989) Sociolinguistic variation in face-threatening speech acts. In M. R. Eisenstein (Ed.), *The dynamic interlanguage: Empirical studies in second language acquisition*. New York: Plenum Press. 199-218.
- Beebe, Leslie M., T. Takahashi and R. Uliss-Weltz (1990) Pragmatic transfer in ESL Refusals. In R. Scarcella, E. Anderson and S. Krashen (eds.) *Developing communicative competence in a second language*. New York: Newbury House. 55-73.
- Blum-Kulka, S., and Olshtain, E. (1986) Too many words: Length of utterance and pragmatic failure. *Journal of Pragmatics*, 8: 47-61.

- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University.
- Cohen, R. (1987) Problems in intercultural communication in Egyptian-American diplomatic relations. *International Journal of Intercultural Relations*, 11: 29-47.
- Feghali, E. (1997) Arab culture communication patterns. *International Journal of Intercultural Relations*, 21: 345-378.
- Ghawi, M. (1993) Pragmatic transfer in Arabic learners of English. *El Two Talk*1(1): 39-52.
- Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: Essays on Face to Face Behavior*. Garden City: Doubleday.
- Grice, H. P. (1975) *Logic and conversation*. University of California Berkeley.
- Hall, E. T. (1958) *The hidden dimension*. New York: Anchor.
- Hall, E. T. (1966) *The silent language*. New York: Anchor.
- Hall, E. T. (1976) *Beyond culture*. New York: Doubleday.
- Ishii, K. (2013) Culture and the mode of thought: A review. *Asian Journal of Social Psychology* 16: 123-132.
- Ishii, K., T. Tsukasaki and S. Kitayama (2009) Culture and visual perception: Does perceptual inference depend on culture? *Japanese Psychological Research* 51: 103-109.
- Ishii, S. (1984) Enryo-sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations. *Cross currents*, 11(1): 49-58.
- Ishii, S. (1985) Thought patterns as modes of rhetoric: The United States and Japan. In L. A. Samovar and R. E. Porter (eds.) *Intercultural communication: A reader*. Belmont, CA: Wadsworth 97-102.
- Ishii, S. and T. Bruneau (1988) Silence and silence in cross-culture perspective: Japan and the United States. In Larry A. S. and R. E. Porter. (eds.) *Interculture communication: A reader*. 246-251
- Kaplan, R. B. (1966) Culture Thought Patterns in Intercultural Education, *Language Learning* 16: 1-20.
- Kasper, G. (1996) Introduction: Interlanguage Pragmatics in SLA. *Studies in second Language Acquisition* 18: 145-148.
- Kitayama, S., and K. Ishii (2002) Word and voice: Spontaneous attention to emotional utterances in two languages. *Cognition & Emotion* 16: 29-59.
- Kondo, S. (2000). Interlanguage refusals: Facework by Japanese EFL learners and Americans. 『明

- の星女子短期大学紀要』, 18: 47-62.
- Lakoff, G. (1973) Hedges: A Study in the Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts. *Journal of Philosophical Logic* 2: 4, 458-508.
- Lakoff, R. (1972) Language in context. *Language* 48: 907-927.
- Lakoff, R. (1973) The logic of politeness; or, minding our P's and q's. In Paper from the ninth regional meeting of the Chicago linguistic society. Chicago: Chicago Linguistic Society. 292-305.
- Lauwereyns, S. (2002) Hedges in Japanese Conversation: The Influence of Age, Sex, and Formality. *Language Variation and Change* 14: 239-259.
- Leech, G. (1983) *Principles of pragmatics*. Longman
- Nader, M. (2009) The realization of the speech act of refusal in Egyptian Arabic by American learners of Arabic as a foreign language. Unpublished Doctoral Dissertation. University of South Florida.
- Nelson, G., M. Al Batal, and W. El Bakary (1993) Egyptian and American compliments: A cross-culture study. *International Journal of Intercultural Relations* 17(3): 293-313.
- Nelson, G., M. Al Batal and W. El Bakary (2002) Directness vs. Indirectness: Egyptian Arabic and US English Communication Style. *International Journal of Intercultural Relations* 26: 39-57.
- Nelson, G., M. Al Batal, and E. Ecchols (1996) Arabic and English compliment responses: Potential for pragmatic failure. *Applied Linguistics* 17(4): 411-432.
- Nelson, G., J. Carson, , M. Al Batal and W. El Bakary (2002) Cross-culture pragmatics: Strategy use in Egyptian Arabic and American English Refusals. *Applied Linguistics* 23 (2):163-189.
- Saad, A. W. and Al Kahtany (2005) Refusals realizations in three different cultures: A speech act theoretically-based cross-culture study. *Journal of King Saud University* 18: 35-57.
- Zahrana, R. S. (1995) Understanding Culture Preferences of Arab Communication Patterns. *Public Relations Review*, 21(3): 241-255

参考教科書

スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 I』 スリーエーネットワーク

筑波ランゲージグループ (1994) 『Situational Functional Japanese Volume 3 :Notes』 凡人社

筑波ランゲージグループ (1994) 『Situational Functional Japanese Volume 3 :Drills』 凡人社

用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 オンライン検索システム 『NINJAL-LWP for BCCWJ』

<http://nlb.ninjal.ac.jp>

TBS (2015 年) 「こちら本池上署」 TBS テレビドラマ

引用サイト

https://www.google.co.jp/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0CAcQjRxqFQoTCPHMq-TH08gCFcMYlAodwXoPOg&url=http%3A%2F%2Fwww.energeticforum.com%2Frenewable-energy%2F8761-golden-tractate-hermes-trismegistus-applied-electromagnetism-74.html&psig=AFQjCNH4_KhsKlDAXRwAXFu8-hUWAWxSYQ&ust=1445516106203228

(2015 年 11 月 16 日参照)

資料 I 談話完成テスト（日本語）

談話完成テストは、アラビア語母語話者にはアラビア語で行い、日本語母語話者と日本語学習者には日本語で行った。以下に、日本語版、アラビア語版の順に示す。

● 日本語版

調査へのご協力をお願い

私は現在、修士論文で「アラビア語母語話者と日本語母語話者の「断り」の特徴について研究しています。この研究に使用するデータとして、大学生を対象に、アンケートを実施させていただくことになりました。皆さんからいただいたご回答については、個人情報として厳重に取扱い、目的以外に使用することはありません。ご協力のほどよろしくお願いします。

名前：リナ アリ

所属：筑波大学人文社会科学研究科、国際地域研究専攻

日本語教育コース 2 年

E.mail:linaali59@hotmail.com

回答者ご自身についてお聞きします。

・年齢：(才) ・性別：(男・女) ・国：

専攻（学類など）：

* 問 1 から問 12 の状況で、みなさんはどのように言いますか。状況をイメージして、言い方をそのままお書き下さい。

問 1：あなたは先生に、お寿司を食べに行こうと誘われたが、先生の誘いに応えられません。先生の誘いを最後まで断ことわってってください。

1 - 先生：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒にきませんか。

2 - あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問2:あなたは、親しい友達にお寿司を食べに行こうと誘われたが、親しい友達の誘いに応えられません。親しい友達の誘いを最後まで断ってください。

1. 親しい友達：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問3:あなたは、知り合いにお寿司を食べに行こうと誘われたが、知り合いの誘いに応えられません。知り合いの誘いを最後まで断ってください。

1. 知り合い：今日の授業が終わったら、みんなで寿司を食べに行くけど、よかったら、一緒に行かない。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 4：あなたは大学生です。先生に誕生パーティーに誘われますが、先生の誘いに応えられません。先生の誘いを最後まで断ってください。

1. 先生：来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てください。
2. あなた：

☛この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 5：あなたは、親しい友達に、誕生パーティーに誘われますが、親しい友達の誘いに応えられません。親しい友達の誘いを最後まで断ってください。

1. 親しい友達：来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てくれない。
2. あなた：

☛この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 6：あなたは、知り合いに、誕生パーティーに誘われますが、知り合いの誘いに応えられません。知り合いの誘いを最後まで断ってください。

1. 知り合い：来週の金曜日にアズハルパークで誕生パーティーをするけど、よかったら、ぜひ来てくれない。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問7: あなたは大学の先生に、教材をコピーするように頼られます。でもあなたは、先生の依頼に応えられません。先生の依頼を最後まで断^{ことわって}ってください。

1. 先生：来週の水曜日の授業までに、この教材を20部コピーしておいて下さい。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問8: あなたは、親しい友達に、教材をコピーするように頼られますが、あなたは、親しい友達の依頼に応えられません。親しい友達の依頼を最後まで断^{ことわって}ってください。

1. 親しい友達：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問9: あなたは、知り合いに、教材をコピーするように頼られますが、あなたは、知り合いの依頼に応えられません。知り合いの依頼を最後まで断^{ことわって}ってください。

1. 知り合い：ごめん、お願いしてもいい。きのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーしてくれる。

2. あなた :

☛この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる 2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる 3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 10 : あなたは大学の先生に飲み物を買ってくるように依頼されますが、先生の依頼に応えられません。先生の依頼を最後まで断ってください。

1. 先生 : なんでもいいから、飲み物買ってきて下さい。お金渡すから。

2. あなた :

☛この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる 2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる 3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 11 : あなたは親しい友達に飲み物を買ってくるように依頼されますが、親しい友達の依頼に応えられません。親しい友達の依頼を最後まで断ってください。

1. 親しい友達 : なんでもいいから、物買ってきてくれない。お金渡すから。

2. あなた :

☛この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる 2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる 3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

問 12：あなたは知り合いに飲み物を買ってくるように依頼されますが、知り合いの依頼に応えられません。知り合いの依頼を最後まで断ってください。

1. 知り合い：なんでもいいから、飲み物買ってきてくれない。お金渡すから。
2. あなた：

●この場面を断るとき、どのように感じますか。1~4の中から答えをチェックしてください。

1. 簡単に断れる
2. 相手に少し気を遣うが、断ることができる
3. 慎重に言葉を選んで断る
4. 断ることができない

♥ ご協力ありがとうございます

資料Ⅱ 談話完成テスト（アラビア語）

● アラビア語版

استبيان

برجاء التفضل بالمشاركة بإبداء آرائكم في هذا الاستطلاع ، والذي تم إعداده خصيصاً لعمل دراسة تطبيقية وميدانية تستهدف دارسي اللغة اليابانية بقسم اللغة اليابانية وآدابها بكلية الآداب – جامعة القاهرة مع التفضل بالإحاطة بأن هذا الاستبيان لن يتم استخدامه إلا في أغراض الدراسة فقط مع التعامل بسرية تامة مع بيانات المشاركين .

معدة الاستطلاع: لينا علي (أدرس بجامعة تسوكوبا باليابان وأنهيت الدراسة بالعام الأول بالبرنامج الدراسي الخاص بتدريس اللغة اليابانية بقسم الدراسات الإقليمية باليابان- كلية الدراسات الإنسانية والاجتماعية)

البريد الإلكتروني:

e.mail:linaali59@hotmail.com

من فضلك اكتب اسمك والفرقة الدراسية التي تنتمي إليها ثم اقرأ المواقع التالية الذكر (وكذا الإرشادات المكتوبة ما بين القوسين) بعناية وتخيل وأنت تقرأ كل موقف من هذه المواقع أنك الطرف المتلقى وكتب بالعامية – وليس الفصحى- ماذا كنت ستفعل ...وكأنك في محادثة حية ومباشرة مع الطرف الآخر.

الفرقة الدراسية:

الاسم:

الموقف الأول: الدكتور في الجامعة يعرض عليك تخرجوا تاكلوا أكلة كشري(مثلاً) برة الجامعة وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

الدكتور: بعد ما المحاضرة تخلص هنخرج ناكل كشري مع بعض كلنا إيه رأيك لو جيت معنا؟

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلاً احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محر جش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

الموقف الثاني:صاحبك الأنتيم في الجامعة بيعرض عليك تخرجوا تاكلوا أكلة كشري(مثلاً)برة الجامعة وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

صاحبك الأنتيم:بعد ما المحاضرة تخلص هنخرج ناكل كشري مع بعض كلنا إيه رأيك لو جيت معانا؟
انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلاً احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة
2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محرّجش اللي قدامي
3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض
4. مش هقدر أرفض

الموقف الثالث:زميل عادي من الجامعة بيعرض عليك تخرجوا تاكلوا أكلة كشري(مثلاً)برة الجامعة وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

زميلك:بعد ما المحاضرة تخلص هنخرج ناكل كشري مع بعض كلنا إيه رأيك لو جيت معانا؟
انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلاً احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة
2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محرّجش اللي قدامي
3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض
4. مش هقدر أرفض

الموقف الرابع:الدكتور في الجامعة بيعرض عليك تروح معاه حفلة عيد ميلاد وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)
الدكتور:يوم الجمعة الجاية عاملين حفلة عيد ميلادى في الأزهر بارك -إيه رأيك ما تيجي...

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلاً احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

الموقف الخامس:صاحبك الأنتم في الجامعة بيعرض عليك تروح معاه حفلة عيد ميلاد وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

صاحبك الأنتم: يوم الجمعة الجاية عاملين حفلة عيد ميلادى في الأزهر بارك -ايه رأيك ما تيجي...

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

الموقف السادس:زميل عادي من الجامعة بيعرض عليك تروح معاه حفلة عيد ميلاد وانت مش هتقدر تروح فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

زميلك: يوم الجمعة الجاية عاملين حفلة عيد ميلادى في الأزهر بارك -ايه رأيك ما تيجي...

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

الموقف السابع: الدكتور في الجامعة بيبطلب منك تصور ورق محاضرات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

الدكتور:من فضلك صور 20 نسخة من الورق ده وجهزهم لحد محاضرة يوم الأربعاء الجاي.

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاى ...اختار إجابة من الإجابات الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محرّجش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض
4. مش هقدر أرفض

الموقف الثامن:صاحبك الأنتيم في الجامعة بيطلب منك تصور ورق محاضرات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)
صاحبك الأنتيم:معلش ممكن أطلب منك طلب ممكن تصوري الورق بتاع محاضرة امبارح اللي غبت فيها
انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاي ...اختار إجابة من الإجابات
الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محرّجش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض
4. مش هقدر أرفض

الموقف التاسع: زميل عادي في الجامعة بيطلب منك تصور ورق محاضرات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)
زميلك:معلش ممكن أطلب منك طلب ممكن تصوري الورق بتاع محاضرة امبارح اللي غبت فيها
انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاي ...اختار إجابة من الإجابات
الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محرّجش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض
4. مش هقدر أرفض

الموقف العاشر: الدكتور في الجامعة بيطلب منك تشتري مشروبات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)
الدكتور:من فضلك اشترى حاجة تشربها ... بص أي حاجة..... وهديك الفلوس
انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاي ...اختار إجابة من الإجابات

الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض 4. مش هقدر أرفض

الموقف الحادي عشر:صاحبك الأنتيم في الجامعة بيطلب منك تشتري مشروبات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

صاحبك الأنتيم: متجبلنا حاجة نشريها ... بص أي حاجة..... وهديك الفلوس

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاي ...اختار إجابة من الإجابات

الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

الموقف الثاني عشر:ميل عادي من الجامعة بيطلب منك تشتري مشروبات وانت مش هتقدر فهتضطر ترفض (تمسك برفضك للنهاية)

زميلك: متجبلنا حاجة نشريها ... بص أي حاجة..... وهديك الفلوس

انت:

طيب دلوقتي بعيد عن السؤال اللي فات ، حاول تفكر من أول وجديد انت ساعتها أصلا احساسك هيكون عامل ازاي ...اختار إجابة من الإجابات

الأربعة اللي جاية

1. هرفض بسهولة 2. أقدر أرفض بس أخذ بالي محررش اللي قدامي 3. هدقق في اختيار الكلمات وأنا برفض

4. مش هقدر أرفض

♥ شكراً لحسن تعاونكم ♥

資料Ⅲ 意識調査ⅠとⅡ

● (意識調査Ⅰ:アラビア語)

● استبيان

- برجاء التفضل بالمشاركة بإبداء آرائكم في هذا الاستطلاع ، والذي تم إعداده خصيصاً لعمل دراسة تطبيقية وميدانية تستهدف ناطقي اللغة العربية مع التفضل بالإحاطة بأن هذا الاستبيان لن يتم استخدامه إلا في أغراض الدراسة فقط مع التعامل بسرية تامة مع بيانات المشاركين .
- **معدة الاستطلاع: لينا عبد الحميد ابراهيم علي** (مدرس مساعد بكلية الآداب قسم اللغة اليابانية)
- البريد الإلكتروني:

● e.mail:linaali59@hotmail.com

- من فضلك اكتب اسمك والفرقة الدراسية التي تنتمي إليها ثم اقرأ المواقف التالية الذكر (وكذا الإرشادات المكتوبة ما بين القوسين) بعناية وتخيل وأنت تقرأ كل موقف من هذه المواقف أنك الطرف المتلقى وكتب بالعامية – وليس الفصحى- ماذا ستشعر...وكانك في محادثة حية ومباشرة مع الطرف الآخر.

● الاسم: الفرقة الدراسية:

● السؤال الاول

انت عزمت صديق مقرب ليك جداً عشان تخرجوا تتغدوا مع بعض يوم الأربعاء اللي جاي بس هو رفض و قالك رد من الأجوبة التالية...أى أجابه منهم هتحس أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه للعزومه..وليه؟! (علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها مع كتابة السبب)

● ١-معلش انا مشغول شويه يوم الأربعاء

● ٢-معلش انا مشغول يوم الأربعاء

● ٣-معلش انا مشغول جداً يوم الأربعاء

● اكتب سبب اختيارك باللغة العامية:

● السؤال الثاني

● انت طلبت من صديق مقرب ليك جداً انه يروح يصور لك محاضره أخذوها و انت كنت غايب بس هو رفض لسبب من الأسباب التالية..أى

أجابه منهم هتحس أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه لطلبك..وليه؟(علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها مع كتابة السبب)

● ١-مش هينفع اناماشي دلوقتي عندي مشوار مهم شويه

● ٢-مش هينفع انا ماشي دلوقتي عندي مشوار مهم جداً

● ٣-مش هينفع انا ماشي دلوقتي عندي مشوار

● اكتب سبب اختيارك باللغة العاميه:

● السؤال الثالث

● انت عزمت صاحبك الانتيم علي حفلة عيد ميلادك يوم الجمعة الجايه بس هو رفض و قالك أجابه من الإجابات التاليه..أي أجابه منهم هتحس أنها

مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه للعزومه و ليه؟(علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها مع كتابة السبب)

● ١-يوم الجمعة عندي شوية مذاكرة فمش هقدر أجي معلش

● ٢-يوم الجمعة عندي مذاكرة كثير جداً فمش هقدر اجي معلش

● ٣- يوم الجمعة عندي مذاكرة فمش هقدر اجي معلش

● اكتب سبب اختيارك باللغة العاميه:

● السؤال الرابع

● انت طلبت من صاحبك فى الجامعة يشتري لك حاجه من الكافيتريا تشربها بس هو رفض و قالك أجابه من الإجابات التاليه... أى أجابه هتحس

أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه لطلبك و ليه؟(علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها مع كتابة السبب)

● ١-انا تعبان شويه مش هقدر

● ٢-انا تعبان مش هقدر

● ٣-انا تعبان جداً مش هقدر

● اكتب سبب اختيارك باللغة العاميه:

شكراً لحسن تعاونكم

● (意識調査Ⅱ:日本語)

調査へのご協力をお願い

私の博士論文の研究に使用するデータとして、日本語とアラビア語に関して、アンケートを実施させていただくことになりました。皆さんからいただいたご回答・コメント等については、個人情報として厳重に取扱い、異文化コミュニケーション及び、日本語教育を改善する目的以外に使用することはありません。ご協力のほどよろしく申し上げます。

名前：リナ アリ

所属：筑波大学国際日本研究専攻日本語教育領域 博士後期課程2年次。

e.mail: linaali59@hotmail.com

◎回答者ご自身についてお聞きします。

・性別：(男・女) 任意：年齢：(才) 専門(学類など)：

問1：あなたは親しい友達を来週の水曜日に一緒に食事しようと誘ってみました。以下の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、水曜日は少し忙しいんだ。
2. ごめん、水曜日は忙しいんだ。
3. ごめん、水曜日はとても忙しいんだ。

理由：

問 2: あなたは、親しい友達に自分が欠席したとき授業でもらった教材をコピーしてくれるように依頼しましたが、断られました。以下の選択肢の中で最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、今少し大事な用事があるから帰るところなんだ。
2. ごめん、今大事な用事があるから帰るところなんだ。
3. ごめん、今とても大事な用事があるから帰るところなんだ。

理由：

問 3: あなたは親しい友達を来週の金曜日に、自分の誕生パーティーに誘っていましたが、断られました。以下の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめんなさい。金曜日は少し勉強しなければならないから、行けないんだ。
2. ごめんなさい。金曜日は勉強しなければならないから、行けないんだ。
3. ごめんなさい。金曜日はとてもたくさん勉強しなければならないから、行けないんだ。

理由：

問 4: あなたは、親しい友達に何か飲物を買ってきてくれるように依頼しましたが、断られました。以下の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、今少し疲れているんだ。
2. ごめん、今疲れているんだ。
3. ごめん、今とても疲れているんだ。

理由：

資料IV 意識調査Ⅲ

● استبيان

- برجاء التفضل بالمشاركة بابداء أرائكم في هذا الاستطلاع ، والذي تم إعداده خصيصاً لعمل دراسة تطبيقية وميدانية تستهدف ناطقي اللغة العربية مع التفضل بالإحاطة بأن هذا الاستبيان لن يتم استخدامه إلا في أغراض الدراسة فقط مع التعامل بسرية تامة مع بيانات المشاركين .
- **معدة الاستطلاع: لينا عبد الحميد ابراهيم علي** (مدرس مساعد بكلية الاداب قسم اللغة اليابانية)
- البريد الالكتروني:

● e.mail:linaali59@hotmail.com

- من فضلك اكتب اسمك والفرقة الدراسية التي تنتمي إليها ثم اقرأ المواقف تالية الذكر (وكذا الإرشادات المكتوبة ما بين القوسين) بعناية وتخيل وأنت تقرأ كل موقف من هذه المواقف أنك الطرف المتلقى و اكتب بالعامية – وليس الفصحى- ماذا ستشعر...وكانك في محادثة حية ومباشرة مع الطرف الآخر.

● الفرقة الدراسية:

الاسم:

- **السؤال الاول**
- انت عزمت صاحب مقرب ليك جداً بعد ما خلصت المحاضرات و قولتلوا متيجي نروح ناكل حاجه بس هو رفض و قالك رد من الأجوبة التالية... أى أجابه منهم هتحس أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه .وليه؟! علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها

● ١-معلش انا لازم أروح دلوقتي

● ٢-معلش انا هروح دلوقتي

● ٣-معلش انا عايز أروح دلوقتي

● اكتب سبب اختيارك باللغة العامية:

● السؤال الثاني

● انت طلبت من صاحبك المقرب ليك يشرحلك حاجه مش فاهمها فى محاضره اخدوها و انت غايب بس هو رفض و قالك رد من الأجوبة التآليه... أى أجابه منهم هتحس أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه .وليه؟! علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها

● ١-مش هقدر عشان عندى محاضره دلوقتي ولازم أحضرها

● ٢-مش هقدر عشان عندى محاضره دلوقتي

● ٣-مش هقدر عشان عندى محاضره دلوقتي عايز أحضرها

● اكتب سبب اختيارك باللغة العاميه:

● السؤال الثالث

● انت طلبت من صديق مقرب ليك جداً انه ينزل معاك بعد بكره وانت بتشتري حاجات بس هو رفض و قالك رد من الأجوبة التآليه... أى أجابه منهم هتحس أنها مقنعه اكثر بالنسبه لك لرفضه .وليه؟! (علم علامة صح علي الإجابة اللي هتختارها)

● ١-بعد بكره ورايا حاجات كتير لازم اعملها

● ٢-بعد بكره ورايا حاجات كتير

● ٣-بعد بكره ورايا حاجات كتير عايز اعملها

● اكتب سبب اختيارك باللغة العاميه:

شكراً لحسن تعاونكم

調査へのご協力をお願い

私の博士論文の研究に使用するデータとして、日本語とアラビア語に関して、アンケートを実施させていただくことになりました。皆さんからいただいたご回答・コメント等については、個人情報として厳重に取扱い、異文化コミュニケーション及び、日本語教育を改善する目的以外に使用することはありません。ご協力のほどよろしく申し上げます。

名前：リナ アリ

所属：筑波大学国際日本研究専攻日本語教育領域 博士後期課程2年次。

e.mail: linaali59@hotmail.com

◎回答者ご自身についてお聞きします。

・性別：(男・女) 任意：年齢：(才) 専門(学類など)：

問1 あなたは親しい友達に授業が終わったら、ご飯食べに行こうと誘ってみました。友達が以下の選択肢の中から1つの応答を使ってあなたの誘いを断ったとします。以下の選択肢の中から、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、今帰らなければならないんだ。
2. ごめん、今帰るんだ。
3. ごめん、今帰りたいんだ。

理由：

問2 あなたはある授業を欠席してしまったが、親しい友達に欠席した授業の内容を説明してくれるように依頼したが、友達が以下の選択肢の中から1つの応答を使ってあなたの依頼を断ったとします。以下の選択肢の中から、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん無理、今授業があつて、出席しなかなければならないから
2. ごめん無理、今授業があるから。
3. ごめん無理、今授業があつて、出席したいんだ。

理由：

問3 あなたは明後日買い物しに行く予定ですが、親しい友達と一緒にいこうと依頼したが、友達が以下の選択肢の中から1つの応答を使ってあなたの依頼を断ったとします。以下の選択肢の中から、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. 明後日はやらなければならないことがたくさんあるんだ
2. 明後日はやることがたくさんあるんだ。
3. 明後日はやりたいことがたくさんあるんだ。

理由：

♥ ご協力ありがとうございます ♥

資料V ロールプレイカード

<勧誘場面 I >

i (先生と学生)

ロールカードA

あなたは、大学の先生です。授業の後学生とみんなでお寿司を食べに行きます。1人の大学生と一緒に寿司を食べに行こうと誘います。

ロールカードB

あなたは大学生です。大学の先生に、お寿司を食べに行こうと誘われます。しかし、あなたは、先生の誘いに応えられません。先生の誘いを最後まで断ってください。

ii (知り合い同士)

ロールカードA

あなたは相手の知り合いです。今日の授業の後、みんなでお寿司を食べに行きます。

相手に一緒に寿司を食べに行こうと誘います。

ロールカードB

あなたは、知り合いにお寿司を食べに行こうと誘われます。しかし、知り合いの誘いに応えられません。あなたの知り合いの誘いを最後まで断ってください。

iii (親しい友人同士)

ロールカードA

あなたは相手の親しい友達です。今日の授業の後、みんなでお寿司を食べに行きます。

相手に一緒に寿司を食べに行こうと誘います。

ロールカードB

あなたは、親しい友達にお寿司を食べに行こうと誘われます。しかし、親しい友達の誘いに応えられません。あなたの親しい友達の誘いを最後まで断ってください。

<場面Ⅱ>

i (先生と学生)

ロールカードA

あなたは大学の先生です。来週金曜日にアズハルパークで自分の誕生パーティーをします。1人の大
学生を誕生パーティーに誘います。

ロールカードB

あなたは大学生です。先生に誕生パーティーに誘われます。しかし、先生の誘いに応えられません。
先生の誘いを最後まで断ってください。

ii (知り合い同士)

ロールカードA

あなたは相手の知り合いです。来週金曜日にアズハルパークで自分の誕生パーティーをします。知り
合いを誕生パーティーに誘います。

ロールカードB

あなたは、知り合いに、誕生パーティーに誘われます。しかし、知り合いの誘いに応えられません。
あなたの知り合いの誘いを最後まで断ってください。

iii (親しい友人同士)

ロールカードA

あなたは相手の親しい友達です。来週金曜日にアズハルパークで自分の誕生パーティーをします。親
しい友達を誕生パーティーに誘います。

ロールカードB

あなたは、親しい友達に、誕生パーティーに誘われます。しかし、この親しい友達の誘いに応えられ
ません。あなたの親しい友達の誘いを最後まで断ってください。

<場面Ⅲ>

i (先生と学生)

ロールカードA

あなたは大学の先生です。大学生の1人に、教材を20部来週の水曜日の授業までに、コピーするように頼みます。

ロールカードB

あなたは大学の先生に何かを依頼されます。でもあなたは、先生の依頼に応えられません。先生の依頼を最後まで断ってください

ii (知り合い同士)

ロールカードA

あなたは相手の知り合いです。相手にきのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーするように頼みます。

ロールカードB

あなたは、知り合いに、何かを依頼されます。でもあなたは、知り合いの依頼に応えられません。あなたの知り合いの依頼を最後まで断ってください

iii (親しい友人同士)

ロールカードA

あなたは相手の親しい友達です。相手にきのう欠席したとき、授業でもらった教材をコピーするように頼みます。

ロールカードB

あなたは、親しい友達に、何かを依頼されます。でもあなたは、この親しい友達の依頼に応えられません。あなたの親しい友達の依頼を最後まで断ってください

<場面Ⅳ>

i (先生と学生)

ロールカードA

あなたは大学の先生です。大学生の1人に、お金を渡して、飲み物を買ってくるように頼みます。

ロールカードB

あなたは大学の先生に何かを依頼されます。でもあなたは、先生の依頼に応えられません。先生の依頼を最後まで断ってください

ii (知り合い同士)

ロールカードA

あなたは相手の知り合いです。相手にお金を渡して、飲み物を買ってくるように頼みます。

ロールカードB

あなたは、知り合いに、何かを依頼されます。でもあなたは、知り合いの依頼に応えられません。あなたの知り合いの依頼を最後まで断ってください。

iii (親しい友人同士)

ロールカードA

あなたは相手の親しい友達です。相手にお金を渡して、飲み物を買ってくるように頼みます。

ロールカードB

あなたは、親しい友達に、何かを依頼されます。でもあなたは、この親しい友達の依頼に応えられません。あなたの親しい友達の依頼を最後まで断ってください。

資料VI 意識調査IV

調査へのご協力をお願い

私の博士論文の研究に使用するデータとして、日本語とアラビア語に関して、アンケートを実施させていただくことになりました。皆さんからいただいたご回答・コメント等については、個人情報として厳重に取扱い、異文化コミュニケーション及び、日本語教育を改善する目的以外に使用することはありません。ご協力のほどよろしく申し上げます。

名前：リナ アリ

所属：筑波大学国際日本研究専攻日本語教育領域 博士後期課程2年次。

e.mail: linaali59@hotmail.com

◎回答者ご自身についてお聞きします。

・性別：(男・女) 任意：年齢：(才) 専門(学類など)：

問1：あなたは親しい友達を来週の水曜日に一緒に食事しようと誘ってみました。以下の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、水曜日は少し忙しいんだ。
2. ごめん、水曜日は忙しいんだ。
3. ごめん、水曜日はとても忙しいんだ。
4. ごめん、水曜日はちょっと忙しいんだ。

理由：

問2：あなたは、親しい友達に自分が欠席したとき授業でもらった教材をコピーしてくれるように依頼しましたが、断られました。以下の選択肢の中で最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、今少し大事な用事があるから帰るところなんだ。
2. ごめん、今大事な用事があるから帰るところなんだ。
3. ごめん、今とても大事な用事があるから帰るところなんだ。

4. ごめん、今ちょっと大事な用事があるから帰るところなんだ。

理由：

問 3：あなたは親しい友達を来週の金曜日に、自分の誕生パーティーに誘っていましたが、断られました。

以下の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめんなさい。金曜日は少し勉強しなければならないから、行けないんだ。
2. ごめんなさい。金曜日は勉強しなければならないから、行けないんだ。
3. ごめんなさい。金曜日はとてもたくさん勉強しなければならないから、行けないんだ。
4. ごめんなさい。金曜日はちょっと勉強しなければならないから、行けないんだ。

理由：

問 4：あなたは、親しい友達に何か飲物を買ってきてくれるように依頼しましたが、断られました。以下

の選択肢の中で、最も納得しやすい応答はどれでしょうか。そして、その理由も書いてください。

1. ごめん、今少し疲れているんだ。
2. ごめん、今疲れているんだ。
3. ごめん、今とても疲れているんだ。
4. ごめん、今ちょっと疲れているんだ。

理由：

資料Ⅶ (BTSJ)の文字化記号

- 。 [全角] 1 発話分の終わりに付ける。
- ， ①[全角] 1 発話分及び1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ? 疑問文に付ける。疑問文の終助詞が付いた質問形式になっていなくても、語毛を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末（発話文末）なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?、」をつける。
- ?? 確認などのために、語毛を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の方略として、[↑][→][↓]を用いる。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際に付ける。
- /沈黙 秒数/ 1秒以上の間は、沈黙として、その秒数左記のように記す。沈黙自体は何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインを冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間（ま）が、該当の会話の平均的な（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話（文）について改行していても、音声的につながっていることを示すためである。その場合最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから句点「。」、または、英語式コンマ2つ「,,」をつける。
- 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
- < > {<} 同時発話されたものは、重なった部分双方は< >でくくり、重なられた発話は、< > {>} < >の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に()にくくって入れる。

資料Ⅷ 意識調査Ⅰの結果（アラビア語）

	場面Ⅰ	場面Ⅱ	場面Ⅲ	場面Ⅳ
gdan(とても)	76.86% (93)	70.00% (84)	78.95% (90)	47.06% (56)
shwya(少し)	10.74% (13)	7.5% (9)	8.77% (10)	26.05% (31)
副詞なし	12.40% (15)	22.5% (27)	12.28% (14)	26.89% (32)
合計	(121)	(120)	(114)	(119)

資料Ⅸ 意識調査Ⅱの結果（日本語）

	場面Ⅰ	場面Ⅱ	場面Ⅲ	場面Ⅳ
とても	26% (10)	26% (10)	21% (8)	38% (14)
少し	28% (11)	5% (2)	5% (2)	38% (14)
副詞なし	46% (18)	68% (26)	74% (28)	24% (9)
合計	(39)	(38)	(38)	(37)

資料Ⅹ 意識調査Ⅲの結果（アラビア語）

	場面 1	場面 2	場面 3
Nakerebanaranai (lazem)	71% (84)	70% (82)	71% (84)
Tai (āayez)	14% (17)	13% (15)	13% (16)
Danteiteki	14% (17)	17% (20)	16% (19)
合計	(118)	(117)	(119)

資料XI アラビア語文字表記

●表① アラビア語文字

IPA	Latin	Name	Final	Medial	Initial	Isolated	IPA	Latin	Name	Final	Medial	Initial	Isolated
[ʔ]	t̤	tā'	طاء	ط	ط	ط	[ʔ]	'(a)	'alif	ا	—	—	ا
[z]	z	zā'	ظاء	ظ	ظ	ظ	[b]	b	bā'	باء	ب	ب	ب
[ʕ]	'	'ayn	عين	ع	ع	ع	[t]	t	tā'	تاء	ت	ت	ت
[ɣ]	ġ	ġayn	غين	غ	غ	غ	[θ]	t̤	tā'	ثاء	ث	ث	ث
[f]	f	fā'	فاء	ف	ف	ف	[dʒ]	ġ	ġīm	جيم	ج	ج	ج
[q]	q	qāf	قاف	ق	ق	ق	[ħ]	h	hā'	حاء	ح	ح	ح
[k]	k	kāf	كاف	ك	ك	ك	[x]	h	hā'	خاء	خ	خ	خ
[l]	l	lām	لام	ل	ل	ل	[d]	d	dāl	دال	د	—	—
[m]	m	mīm	ميم	م	م	م	[ð]	ḡ	ḡāl	ذال	ذ	—	—
[n]	n	nūn	نون	ن	ن	ن	[r]	r	rā'	راء	ر	—	—
[h]	h	hā'	هاء	ه	ه	ه	[z]	z	zāy	زاي	ز	—	—
[w]	w	wāw	واو	و	—	و	[s]	s	sīn	سين	س	س	س
[j]	y	yā'	ياء	ي	ي	ي	[ʃ]	š	šīn	شين	ش	ش	ش
		hamza	همزة	ء	—	—	[s]	ṣ	ṣād	صاد	ص	ص	ص
							[d]	ḍ	ḍād	ضاد	ض	ض	ض

●表② 本研究で変更するアラビア語文字

アラビア語文字	ローマ字	アラビア語文字	ローマ字
أ	a	ع	ă
ج	g	غ	gh
ح	h	ق	a`
خ	kh	و [final]	o
ذ	z	[medial]	e
ش	sh	ي [medial]	

--	--	--	--

資料Ⅷ 既刊論文及び学会発表との関連

第1章

- 1) リナ アリ (2013) 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—in sha alah を中心に—」国際学術会議第10回『文明のクロスロード—言語・文化・社会の諸相—』カザフ国立大学 『予稿集』
- 2) リナ アリ (2013) 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—ポライトネスと意味公式ストラテジーの観点から—」筑波大学人文社会科学国際地域研究専攻修士論文
- 3) リナ アリ (2013) 「日本語とカイロ方言のアラビア語の断り談話の対照研究—意味公式のストラテジーの観点から」日本語教育学会秋大会 口頭³⁶『予稿集』
- 4) リナ アリ (2013) 「日本語とアラビア語カイロ方言の断りの対照分析—親しい友達同士の会話を対象として—」第4回日本語コミュニケーション研究会筑波大学 研究発表 口頭

第2章、第4章

- 5) リナ アリ (2014) 「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」『アラブ世界における日本研究の現状』国際学会(カイロ大学) 研究発表
- 6) リナ アリ (2014) 「断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—」2014年度日本語用論学会 第17回大会(京都ノートルダム女子大学) 研究発表 『予稿集』
- 7) リナ アリ (2015a) 「断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—」日本語用論学会 第17回『大会発表論文集』(Proceedings) 10: 1-8.
- 8) リナ アリ (2015b) 「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」『アラブ世界における日本研究の現状』カイロ大学日本語日本文学科

紀要 96-112.

第3章、第5章

- 9) リナ アリ (2015) 「断り発話におけるポライトネスと配慮表現について—日本語とアラビア語を対象に—」『中東における日本語教育セミナー』(在エジプト日本国際交流基金) 研究発表 口頭

第6章

- 10) リナ アリ (2014) 「エジプト人日本語学習者の断り発話について—中間言語語用論の観点から—」『中東における日本語教育セミナー』(在エジプト日本国際交流基金) 研究発表 口頭